

第四編

現代の霧島町

第一章 政治

第一節 霧島村の誕生

霧島町が現在の行政区画になるまでには、多くの変遷を経ている（三〇六ページ「東襲山村のはじまり」参照）。明治二十二年（一八八九）に、これまでの襲山郷が東襲山村と西襲山村とに分かれ、重久（永水を含む）・松永・大窪・田口・川北は東襲山村となった。

昭和九年（一九三四）、霧島山が、わが国初めての国立公園として指定されたのを機会に、村名改称のことが論議され、翌十年七月、東襲山村を霧島村と改称した。この時は単に名称が変わっただけであったが、その後、昭和二十五年（一九五〇）四月一日、大字松永地区は日当山村（現在の隼人町）に編入し、大字重久のうち止上・

重久・妻屋・道場口・岩戸・剣之字都・春山の一部は東襲山村をつくり（のち国分市に合併）、大字田口・大窪・川北と、重久の一部（永水と春山）をもって新しい霧島村が誕生した。これが現在の霧島町である。

第二節 霧島町三〇年のあゆみ

昭和三十三年（一九五八）の町制施行から、昭和終期までのミニ町史を、年表ふうりに列記すると次のようである。また、太平洋戦争終結直後から町制施行までの一二年間についても収録した。この一二年間については、東襲山村を改名しただけの霧島村と、昭和二十五年（一九五〇）四月一日、現在の行政区となった霧島村とに大別されるが、便宜上、終戦から町制施行までにまとめた。

一 終戦から町制施行まで

昭和二十年 霧島村健康保健組合設立（十月）。田口に診療所を設置。猪子石開拓始まる

昭和二十一年 農地改革。民生委員発足

昭和二十二年 新学制実施のため霧島中学校を新設、霧島・

永水小学校区域に分校を置く。市町村長公選、新村親志氏東襲山村長に当選。木原を清水村に編入。消防団発足

昭和二十三年

青年学校廃止。健康保健組合を村営に移管。重久にあった役場焼失のため待世公会堂に移転

昭和二十四年

大窪診療所開設

昭和二十五年

大字田口・大窪・川北・永水・春山の一部をもって霧島村となる。役場庁舎竣工・霧島中学校一期工事竣工

昭和二十六年

霧島中学校校舎竣工。霧島伝染病棟組合発足

昭和二十七年

健康保健組合発足。教育委員会発足

昭和二十八年

合同七草祝・成人式・敬老会始める

昭和三十年

統一地方選挙内村義幸氏村長に当選

昭和三十一年

町水道事業開始。町営横岳放牧場開始

昭和三十二年

町観光協会・商工会・福祉協議会・農業委員会発足。大田小鉄筋校舎一部竣工。霧島有料道路（神宮―高千穂河原間）開通

二 霧島町三〇年のあゆみ

町制施行から三〇年間の本町は、施設面での充実に重きが置かれてきた。学校や公民館の建設はもとより、橋の架け替え、観光案内所の設置など、観光立町としての整備にも力がそがれた。

政治 第一章

昭和三十三年
昭和三十四年
昭和三十五年

町制施行(十一月)。町営上水道完成(十一月)
新燃岳噴火(二月)
大田小給食始まる(五月)。国民健康保険始まる(十月)。国民宿舍みやま荘落成(十二月)

昭和三十六年
昭和三十七年

湯之野泉源試掘に成功(七月)
皇太子御夫妻来町―高千穂河原に内村町長ご先導―(五月)。労災病院落成

昭和三十八年

神宮前―一帯に温泉給湯(八月)
母子健康センター落成(七月)

昭和三十九年

町章制定(五月)。大窪団地完成

昭和四十年

町郷土誌発刊。駅前一帯まで温泉給湯

昭和四十二年

永水中学校が霧中と統合合併(三月)。町民歌・町民憲章を制定(十一月)

昭和四十三年

歌・町民憲章を制定(十一月)

昭和四十四年

牧園町・小浜町と姉妹盟約(九月)
中央公民館完成(四月)。川野正雄氏第三代町長に就任(五月)。老人いこいの家完成(十一月)。

昭和四十六年

農村地域集団電話が開通(十二月)
消防分遣所開設(四月)。町立大田幼稚園開園(四月)。給食センター開所(四月)。太陽国体開催(炬火を高千穂河原で採火)(十月)

昭和四十七年

町内の電話が自動ダイヤル化(八月)
町営グラウンド完成(八月)

昭和四十八年

「広報きりしま」タブロイド判からB5判へコンパクト化(一月)

昭和四十九年

「広報きりしま」タブロイド判からB5判へコンパクト化(一月)

昭和五十一年
昭和五十二年

霧島東中の屋体完成(三月)
霧中の新校舎完成(三月)。みやま荘が民営化(四月)。広域農道(牧園―霧島Ⅱ期)工事始まる(五月)

昭和五十三年

町観光案内所オープン(四月)

昭和五十四年

永水地区公民館完成(四月)。第一回ミスコンテスト開催(七月)。霧島川増水はん濫(七月)。日豊本線電化(十月)。歴史民俗資料館完成(十一月)

昭和五十五年

田口地域公民館完成(三月)。基幹集落センター完成(三月)。第一回霧島国際音楽祭開催(八月)。役場新庁舎での業務開始(十月)

昭和五十六年

自然環境活用センター(緑の村)完成。霧島郵便局現在地へ移転(三月)。美化管理センター(高千穂河原)完成

昭和五十七年

商工会館完成(二月)。霧中新体育館完成(三月)。地籍調査始まる(四月)。霧島大橋完成(七月)

昭和五十八年

町民音頭(霧島音頭)決まる(一月)。木野田貞則氏第四代町長に就任(五月)

昭和五十九年

高千穂河原ビジターセンター完成(四月)。天皇陛下ご来町(役場へお立ち寄り)。全国レクリエーション大会開催

昭和六十年

霧島中学校と霧島東中学校が統合(四月)

昭和六十二年

永水小体育館完成(三月)。近藤好夫氏第五代

昭和六十三年

町長に就任(五月)

大鳥居完成(二月)。多目的集会施設オーブン(七月)。電算システム本格スタート(十月)

三 役場庁舎



旧霧島町役場

昭和十七年、梅北の県道沿いにあった木炭倉庫の一隅

に旧霧島村役場

支所を設け、大

窪出身の山口勘

助氏が吏員とし

て勤務してい

た。翌十八年、

現在の霧島郵便

局の位置にあっ

た民家を買収し

てここに移っ

た。当時吏員は

三名で、主とし

て税金の徴収、

食糧配給、役場(当時重久にあった)からの通達事項の

取り次ぎなどの事務を扱っていた。同二十年の終戦後

は、支所の事務量も吏員の数も増え、支所新築のことが

議会で話し合われた。しかし同二十三年一月旧霧島村役

場(重久)は火災のため焼失したので、とりあえず仮庁

舎を建て執務に当たった。村役場のあった重久は、村の

南端にあたり、大窪、田口、永水方面からの連絡が不便

であったので、村の中央にあたる役場支所付近に役場を

移すべきだとの意見が強く、昭和二十四年七月、庁舎移

転が議会で議決された。待世公会堂(上村そは屋付近)

を借りて仮庁舎とし、翌二十五年四月一日庁舎落成を待

って現在の霧島郵便局の地へ移転、期を同じくして東襲

山村と霧島村に分村した。同五十五年三月完成した基幹

集落センターの隣に庁舎完成(十月)、業務を開始し、

現在に至っている。

旧庁舎——木造五一八・一平方坪(一五七坪)

現在の庁舎——鉄筋コンクリート三階建て

延べ面積一九四四平方坪

第三節 行政

一 行政機構

昭和二十五年（一九五〇）に、現在の行政区画となった霧島村は、総務課のもとで戸籍・厚生・衛生など広く扱っていた。同二十七年、教育委員会発足とともに教育長と二人の係を置き、学校教育と社会教育を担当した。同三十年には、農政課で扱っていた土木を独立させ土木課を新設、その他の土地関係は財務課に移された。

町制施行（昭和三十三年）後、同三十四年には民生課新設、これまで総務課に置かれていた厚生・衛生・戸籍・住民登録のほか、国民年金業務と同三十六年度から始められる国民健康保険の準備を行うこととなった。農林商工課の新設や財務課を税務課に、土木課を建設課とするなど、大きな改革がなされた年でもある。同五十二年社会教育課が新設され、一応の行政機構も整ったが、社会の変遷に伴い、課名の改称や職務内容の統合分離を繰

り返しながら現在に至っている。以上のほか、各種の公共施設については関連の各章に記述した。

図 1 行政機構（昭和二十八年七月）

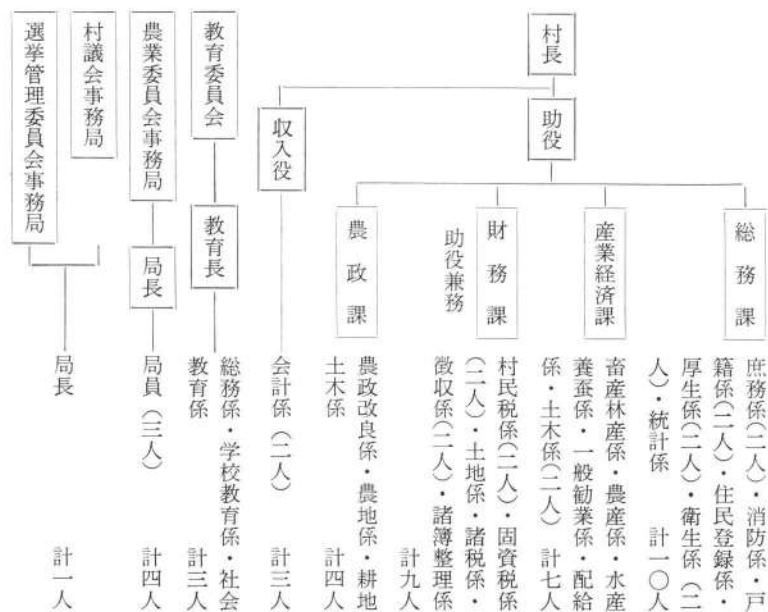


図 2 行政機構 (昭和三十年八月一日)

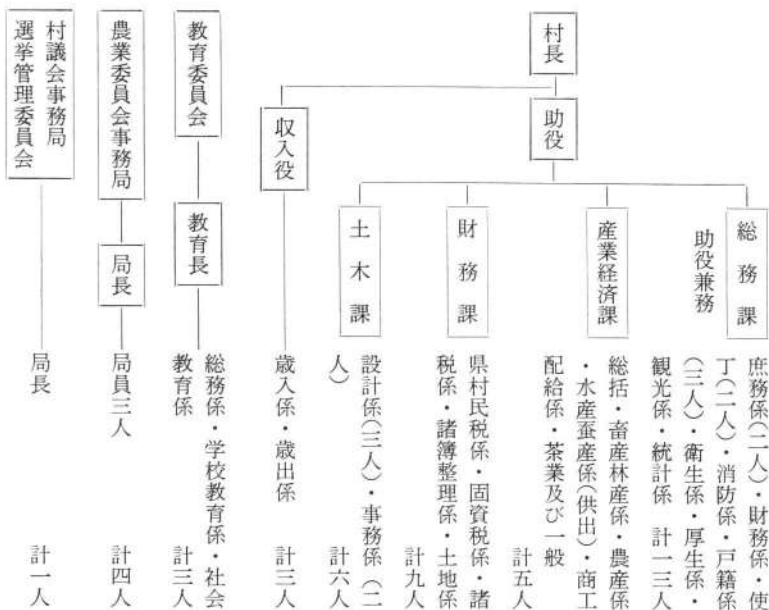
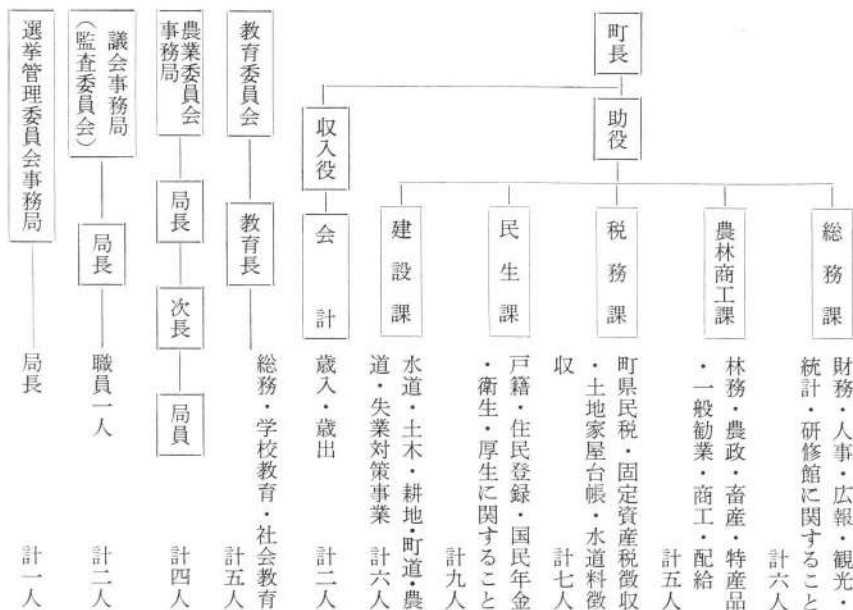


図 3 行政機構 (昭和三十四年九月)



第一章 政 治

図—4
行政機構（昭和四十二年五月）

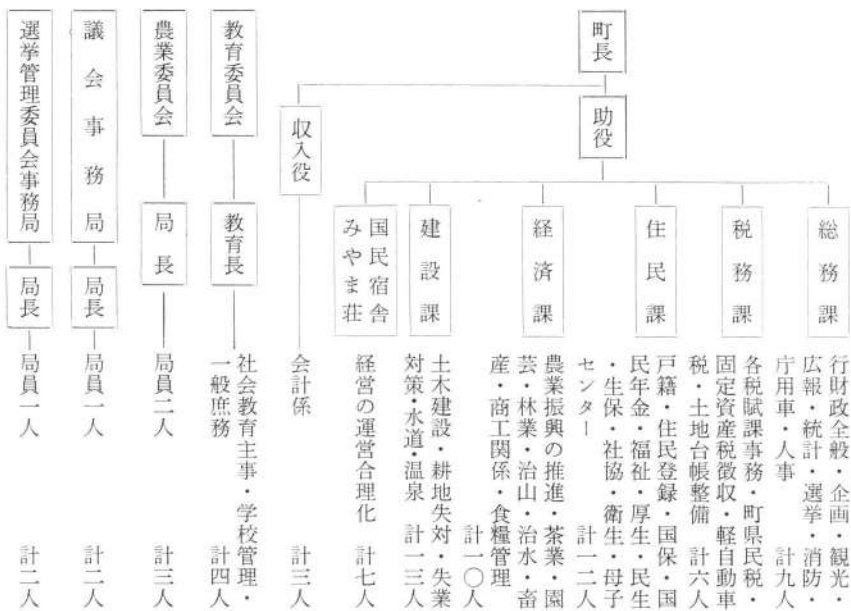


図 5 行政機構（昭和四十四年十月）

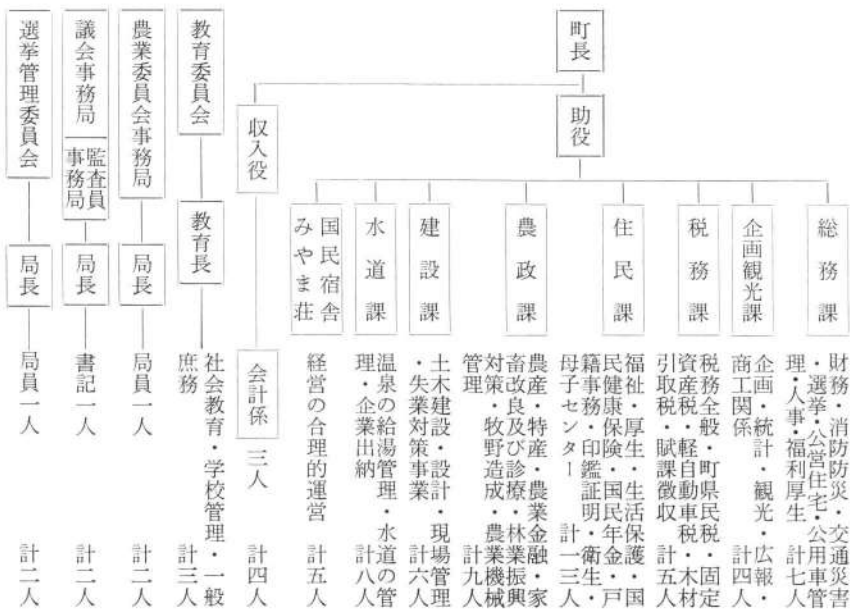
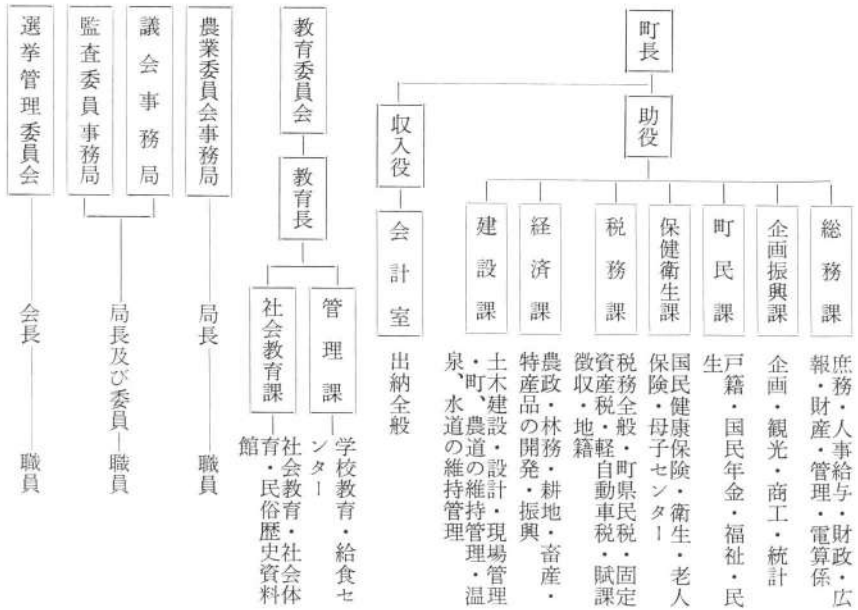


図 6 行政機構 (平成二年)



二 歴代三役

明治二十二年（一八八九）以来の村長・町長、助役、収入役、いわゆる三役の代、氏名、就・退任年月と在任期間を表示すると次のとおりである。

霧島町村長一覽表

町村長	代	氏 名	就任年月	退任年月	在任期間
村長	一	島田 親恵	明治二二・五	明治二六・五	四年
"	二	川越 実治	二六・五	三〇・五	四年
"	三	島田 親恵	三〇・五	三四・五	四年
"	四	島田嘉右衛門	三四・五	大六・五	一六年
"	五	川越 武助	大六・五	一〇・五	四年
"	六	塩川 弥九郎	一〇・五	昭六・五	一〇年
"	七	岩城 盛蔵	昭六・八	一七・一	一〇年
"	八	細山田 重	一七・一	二一・七	四月
"	九	永瀬 直志	二一・八	二二・三	七月
町長	初代	新村 親志	二二・四	三〇・四	八年
"	二	内村 義幸	三〇・五	四六・四	一六年
"	三	川野 正雄	四六・五	五八・四	一二年
"	四	木野田 貞則	五八・五	六二・四	四年
"	五	近藤 好夫	六二・五	現在	

霧島町村助役一覽表

代	氏 名	就任年月	退任年月	在任期間
一	川越 実治	明二二・五	明二六・五	四年
二	高橋 玄平	二六・五	三〇・五	四年
三	川越 武助	三〇・五	三四・五	四年
四	細山田 源助	三四・五	四四・五	一〇年
五	川越 武助	四四・五	五六・五	六年
六	塩川 弥九郎	四六・五	五五・五	四年
七	荒田 虎一	一〇・五	昭一〇・五	八年
八	岩城 盛蔵	四・五	六・五	二年四月
九	島田 親樹	六・八		
一〇	永瀬 直志			
一一	細山田 良信			
一二	上脇田 操			
一三	岡元 兼志	昭二五・四	昭二六・四	一年
一四	川野 竜之進	二六・四	三〇・四	四年
一五	帖佐 軍吉	三〇・五	三四・四	四年
一六	川野 正雄	三四・五	四六・二	十二年
一七	中神 俊夫	四二・五	五〇・五	八年
一八	東芦谷 政美	五〇・一	五八・五	八年
一九	竹下 正美	五八・五	六二・五	四年
二〇	東芦谷 政美	六二・五	平成三・	四年
二一	加藤 憲一	平三・一〇	現	四年四月

霧島町村収入役一覽表

代	氏 名	就任年月	退任年月	在任期間
一	池田 休左衛門	明二二・五	明二六・五	四年
二	島田 嘉右衛門	二六・六	三〇・五	四年
三	塩川 徹志	三〇・五	三四・五	四年
四	塩川 弥九郎	三四・五	三八・五	四年
五	淵脇 常次郎	三八・五	四二・五	四年
六	塩川 弥九郎	四二・五	四四・二	二年八月
七	細山田 八郎太	四四・二	四八・八	四年二月
八	小川 武熊	四八・四	九一・一〇	一年六月
九	岩城 誠造	九一・一〇	九四・四	三年七月
一〇	島田 親樹	昭四・五	二一・六	二年四月
一一	吉永 喜之助	二一・六	二五・一	四年八月
一二	本田 豊連	二一・五	二五・四	四年
一三	七夕 豊志	二五・四	二六・二	一年
一四	中村 辰治	二六・五	三〇・四	四年
一五	川野 正雄	三〇・五	三四・四	四年
一六	中神 俊夫	三四・五	四六・四	十二年
一七	東芦谷 政美	四六・五	五〇・四	四年
一八	竹下 正美	五〇・一	五八・五	八年
一九	諏訪田 晃	五八・五	現	四年四月

三 霧島町総合振興計画審議会

昭和四十五年（一九七〇）二月、霧島町条例一〇四号

により、町長の諮問機関として設置された。主として町の十か年総合振興計画について、必要な調査および審議をする。委員は一九人以内をもって組織し、委員は町長が委嘱、その任期は二年とする。総合振興計画審議会は議会と両輪の立場にあり、その果たす役割と責任は重い。平成元年度の委員は次のとおりである。

第一小委員会 会長 和田義満 委員 吉永辰雄

本仮屋実 東芦谷政美 小久保光雄

第二小委員会 会長 宮田揮彦 委員 入来岩男

新村久子 川畑寛高 中神俊夫

第三小委員会 会長 新村 俊 委員 浜崎辰夫

木野田貞則 森武忠義

四 駐在員制度

従前の部落長（現在の自治公民館長）を行政の末端連絡員として町が委嘱する。昭和三十年ごろ駐在員連絡協議会が自主的に組織され、年に数回の会合をもっていたが、数年で自然消滅した。現在は年二回町で招集している。

五 町章・町民憲章・町木・町花

町には、町を表徴する町章はじめ、町民の総意を集約した町民憲章があり、町木・町花もある。さらに全町民が声を和することのできる町民歌と霧島音頭もあり、だれでも踊れる振り付けもなされている。それは次のようである。

・町章 霧島町の象徴である高千穂峯をかたどったもので、両側の円は和合を、内部の白面は鳥の翼を意味し、飛躍を表現している。昭和四十五年五月二十七日に制定された（本扉参照）。

・町民憲章・町民歌 人々のくらしが安定しはじめた昭和四十年ごろから、町民の指針となるべき憲章が求められるようになった。町民憲章および町民歌の選定委員会が設置され検討を重ねた。町民歌は広く公募して選定した。町制施行十周年を記念して昭和四十三年十一月三日に、霧島町民憲章・霧島町民歌が制定された（町民憲章・町民歌はグラビア参照）。

・町木 霧島神宮を中心にして、国立公園域内の標高

霧島町民歌

作詞 正木 喬二
作曲 武田恵喜秀

一、 明けゆく空の 雲晴れて
仰ぐ高千穂 さわやかに

そびゆる峰を 陽がのぼる
あゝ霧島は 意気高く

希望に燃えて 進む町

二、 霧島川の せせらぎは
みのる大地を うるおして

みどりの牧場 牛が呼ぶ
あゝ霧島は 照る汗に

豊かな幸を ひらく町

三、 朱ぬりの宮は 麗わしく
神話ゆかしく かおる里

小鳥の声も おうらかに
あゝ霧島は 自治うたい

新たな文化 きずく町

四、 赤松林 風光り
ミヤマキリシマ 咲くところ

いで湯の煙 ほのぼのと
あゝ霧島は 人和して

栄えのあすへ のびる町

1 あげ ゆく そら の 雲 晴 れ て
2 き り し ま が わ

ち は れ て あお り た い は さう ら おし にて
は ゐ る あお り

ゆ り め ね ち ひー が の はー ああ きりしま は いて
り の ま きー は うー し が よー

きー た か せ に き は な な ち て
さー あ せ に き は な な ち て

霧島音頭

高城俊男 作詞
白石十四男 作曲

一、みやま霧島 朝日に映えて
湯の香花の香 ほのぼのと
伝えゆかしい 神話と歴史
ほんに霧島 ゆめのまち

二、宮は霧島 お田植祭り
くぼる早苗に 光る風
まねくつつじの 高千穂河原
歌もたのしい ハイキング

三、あがる花火が 夜空にはねて
浴衣涼しい 盆踊り
天の逆鉾 昔をしのぶ
神楽太鼓の 勇み肌

四、旅のお方に まごころ添えて
あつい情けを かけだすき
さあさ総出で 豊かなまちを
築く笑顔の そろい踏み

五、さあさ踊ろよ 霧島音頭
ホンニここから サッサ日本の夜が明ける
ヨイトナ

六、さあさ踊ろよ 霧島音頭
ホンニここから サッサ日本の夜が明ける
ヨイトナ

七、さあさ踊ろよ 霧島音頭
ホンニここから サッサ日本の夜が明ける
ヨイトナ

八、さあさ踊ろよ 霧島音頭
ホンニここから サッサ日本の夜が明ける
ヨイトナ

九、さあさ踊ろよ 霧島音頭
ホンニここから サッサ日本の夜が明ける
ヨイトナ



五〇〇以上のところに群生している赤松は、美しい自然林を形成し、霧島町を代表するにふさわしい木である。朱色の幹を並べた景観は、国立公園霧島の森林美の象徴でもある。昭和四十六年二月、町木として制定された。

・町花 ミヤマキリシマは、高千穂河原、新燃岳、中岳一帯に群生する高山植物である。五月から六月上旬にかけて開花し、この季節になると登山者や花を觀賞する人々が全国から訪れる。霧島連山を代表するミヤマキリシマを町花と制定し、町民一人一人が自然保護に努力して行くことを願いとしている。昭和四十八年三月制定（町木・町花はグラビア参照）。

・町民音頭 昭和五十八年一月に公募による町民音頭が制定され、いろいろの集いの中に、ふるさとの未来に

夢を托した、楽しい歌と踊りが繰り広げられるようになった。

六 地籍調査

土地の国勢調査ともいえるべき国土地調査の一つであるが、昭和五十七年（一九八二）から調査を始め、平成元年（一九八九）現在、町の五七割が終わり、平成八年（一九九四）の終了予定である。これまでの土地台帳や字絵図は、明治初めのもので、測量技術の幼稚さもあった。かなり不備な台帳で、境界争いの原因にもなっていた。この地籍調査により、土地の正しい地番・地目・面積を明らかにし、今後の地域開発などに役立つ生きた資料となる。

国土調査（地籍）事業年次実施状況及び計画表

市町村 全体面積 八・三 km	国有林 野面積 二五・六 km	その他 除外面積 〇・三 km	地籍調査 計画面積 五・七 km	実 施 状 況 (km)					計 画 面 積 (km)				
				昭和五	五	五	六	六	二	三	四	五	六
			（千円）	五、五五	四、七六	二五、八六	一九、五四	三、八四	四、三五	一六、三六	六、六四	一八、〇〇	
			進 ち よ く 率 (%)	四	一三	二〇	三〇	三六	四二	四九	五	六〇	六六
													七三
													七六
													八八
													八九
													一〇〇

第四節 選挙

現在の選挙は、昭和二十五年四月に公布された公職選挙法に基づいて実施されている。選挙事務を公正・円滑に遂行するために、地方自治法一八一条・一八二条の規定により選挙管理委員会が設置されている。

一 選挙管理委員会

選挙管理委員は、議会が選任し、委員長を含めて四名で構成、また同数の補充員を置くように定められている。選挙の管理をはじめ、住民投票や、リコールなどによるすべての選挙事務を選挙管理委員会が行うことになっている。

二 町長・町議会議員選挙

昭和二十五年四月に分村、霧島村となってから村長・

村会議員選挙二回を実施、また、町制施行後は、町長選挙九回（内無投票六回）、町議会議員選挙九回実施している。

霧島町の村・町長、村・町議選挙の投票率の推移は次のとおりである。途中不明の箇所もあるが、九〇％以上に達している。

町内の投票所は、第一投票所から第七投票所まである。

第一投票所 中央公民館

第二投票所 田口地域公民館

第三投票所 戸田自治公民館

第四投票所 旧町観光案内所（平成元年まで霧島小学校）

第五投票所 永水地域公民館

第六投票所 市野々自治公民館

第七投票所 多目的集会センター（平成元年まで大窪保育園）

△歴代選挙管理委員長名▽

選挙管理委員長は四名の委員の互選で決める。

潤脇 清香 昭和二十六年から同二十九年

篠島町の町長、町議選挙の投票率の推移

	執行年月日	選挙当日有権者数			投票者数			投票率(%)		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
村 長 選 挙 村議会議員選挙	昭和26. 4. 26. 4.	?								
村 長 選 挙 村議会議員選挙	30. 4. 30	2,081	2,261	4,342	1,913	2,037	3,950	91.93	90.09	90.97
	30. 4. 30	2,081	2,261	4,342	1,913	2,037	3,950	91.93	90.09	90.97
町 長 選 挙 町議会議員選挙	34. 4. 30	〔無投票〕 2,016	2,242	4,258	1,904	2,064	3,968	94.44	92.06	93.19
	34. 4. 30	〔無投票〕 2,016	2,242	4,258	1,904	2,064	3,968	94.44	92.06	93.19
町 長 選 挙 町議会議員選挙	38. 4. 30	〔無投票〕		不	明					
	38. 4. 30	〔無投票〕		不	明					
町 長 選 挙 町議会議員選挙	42. 4. 28	〔無投票〕 1,913	2,307	4,220	1,737	2,127	3,864	90.80	92.20	91.56
	42. 4. 28	〔無投票〕 1,913	2,307	4,220	1,737	2,127	3,864	90.80	92.20	91.56
町 長 選 挙 町議会議員選挙	46. 4. 25	1,919	2,340	4,259	1,769	2,223	3,992	92.18	95.00	93.73
	46. 4. 25	1,919	2,340	4,259	1,769	2,223	3,992	92.18	95.00	93.73
町 長 選 挙 町議会議員選挙	50. 4. 27	〔無投票〕 1,977	2,371	4,348	1,831	2,247	4,078	92.62	94.77	93.79
	50. 4. 27	〔無投票〕 1,977	2,371	4,348	1,831	2,247	4,078	92.62	94.77	93.79
町 長 選 挙 町議会議員選挙	54. 4. 22	〔無投票〕 2,037	2,394	4,431	1,898	2,283	4,181	93.18	95.36	94.36
	54. 4. 22	〔無投票〕 2,037	2,394	4,431	1,898	2,283	4,181	93.18	95.36	94.36
町 長 選 挙 町議会議員選挙	58. 4. 24	〔無投票〕 2,023	2,428	4,460	1,929	2,317	4,246	94.93	95.43	95.20
	58. 4. 24	〔無投票〕 2,023	2,428	4,460	1,929	2,317	4,246	94.93	95.43	95.20
町 長 選 挙 町議会議員選挙	62. 4. 26	2,074	2,445	4,519	1,936	2,313	4,249	93.35	94.60	94.03
	62. 4. 26	2,074	2,445	4,519	1,936	2,313	4,249	93.35	94.60	94.03
町 長 選 挙 町議会議員選挙	平成 3. 4. 21	2,093	2,505	4,598	1,914	2,335	4,249	91.45	93.21	92.41
	平成 3. 4. 21	2,093	2,505	4,598	1,914	2,335	4,248	91.45	93.17	92.39

帖佐 軍吉 昭和三十年から 同三十三年
 川野 正雄 昭和三十四年から同四十五年
 田代 重次 昭和四十六年から同四十九年
 松永 浅吉 昭和五十年から 平成三年

三 県議会議員・国会議員

昭和二十二年（一九四七）の新憲法の発布により、国会も衆議院・参議院の二院制となり、衆議院定数四六六人・参議院定数二五〇人である。主権在民がはっきりと打ち出され、婦人が初めて選挙権を行使するようになった。

県議会議員 小里貞利氏（霧島町梅北）が鹿児島県二区選出として、昭和三十四年から同五十四年まで連続六回当選している。

国会議員 小里貞利氏、昭和五十四年の衆議院議員選挙に出馬して霧島町から初めての国会議員が誕生した。以来平成三年現在、五回連続当選している（第四編第八章「郷土を興した人々」参照）。

第五節 議会

一 議会の沿革

東襲山村時代の明治十二年（一八七九）に、二か所の戸長役場が設置された。道場口の戸長役場は、重久村・松永村を、田口戸長役場は田口村・大窪村・川北村の諸事務を扱っていた。戸長には戸長一人、用掛り三人の職員が勤務していた。戸長役場の柱には「時計」というものが掛けられたというので、珍しがられ、半時（現在の一時間）あまりも眺めていたとか、ランプを購入したというので仕事をやめて見に行ったら、戸長さまがランプに火をともして見せてくれたなどと、今では想像もつかないような時代であった。

明治二十二年（一八八九）、市町村制の施行により、第一回の村議会議員の選挙が行われ、同年二月五日、第一回の村議会が開かれて、村長・助役の選挙が行われた。同年五月二十六日、第二回の村議会で、役場吏員および



隣町との研修会

名誉職の給料並びに報酬、収入役以下の吏員の推薦、議事細則、助役の事務分掌を決議した。以来幾多の変遷を経て昭和二十二年（一九四七）、地方自治法の施行によって新時代を迎えた。

二 霧島町議会

町議会は、憲法および地方自治法などに基づいて設置

された行政の最高の意志決定機関である。議員は、住民の直接選挙によって選出し、任期は四年である。本町の定数は現在一六人で、決議する事項は地方自治法その他の法令により、予算

および決算の認定をはじめ条例の制定など、一四項目にわたり定められている。このほかに町条例に基づく他の議決事項を定めることができる。

町政は、町長以下職員の行政執行機関と意志決定機関の議会があり、町政を推進するための両輪の役割を果たしている。歴代議長・副議長・議員は次のとおり。

三 歴代議長・副議長

（昭和二十五年四月、分離村後）

歴代 区分	議長		副議長	
	氏名	任期	氏名	任期
1	増山 武盛	自二五・四・一 至二六・四・三〇	山元 市助	自二五・四・一 至二六・四・三〇
2	竹田 岳夫	自二六・五・一 至三九・四・三〇	小川 善幸	自二六・五・一 至三〇・四・三〇
			淵脇 定雄	自三〇・五・一 至三三・四・三〇
			岡元 兼志	自三三・四・三〇 至三八・四・三〇
			高林 義雄	自三八・五・一 至三九・四・三〇

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
宮田 揮彦	宮田 揮彦	児玉 親吉	新村 俊	木野田貞則	新村 俊	新村 正	中馬 親盛	高林 義雄	岡元 兼志	竹田 岳夫	岡元 兼志
至 自三・五・一	平成 至三・四・三〇	自六二・四・三〇 自六二・五・八	自五八・三・一〇 至五八・四・三〇 自五八・五・六	自五二・五・七 至五八・三・一〇	自五〇・五・七 至五二・五・七	自四八・五・四 至五〇・四・三〇	自四六・五・七 至四八・五・四	自四四・五・九 至四六・四・三〇	自四一・五・一 至四四・五・八	自四〇・五・一 至四一・四・三〇	自三九・四・一 至四〇・四・三〇
窪田 直	和田 義満	近藤 好夫	永山 実	新村 俊	浜崎 辰夫	池田 馨	木野田貞則	厚地 英輔	中馬 親盛	高林 義雄	中馬 親盛
至 自三・五・一	平成 至三・四・三〇	自六二・四・九 自六二・五・八	自五八・三・一〇 至五八・四・三〇 自五八・五・六	自五四・五・八 至五二・五・七	自五〇・五・七 至五二・五・七	自四八・五・四 至五〇・四・三〇	自四六・五・七 至四八・五・四	自四四・五・九 至四六・四・三〇	自四一・五・一 至四四・五・八	自四〇・五・一 至四一・四・三〇	自三九・五・一 至四〇・四・三〇

四 歴代議員と定数の変遷

明治二十二年

後藤良左衛門

島田 親恵

川越 実治

細山田孝左衛門

池田休右衛門

高橋 玄平

川畑 甚次郎

山崎助右衛門

細山田重雄

窪田 助次郎

岩城 半太夫

吉永仲左衛門

今村源左衛門

明治二十三年二月

島田 親恵

細山田 重雄

山崎助右衛門

岩崎 半太夫

川越 実治

川畑 甚次郎

今村源佐衛門

荒田 藤五郎

塩川 八郎

浅谷 直太郎

吉永仲左衛門

福留 彦五郎

児玉 甚吉

小川 八郎次

細山田正左衛門

入来 嘉兵衛

後藤良左衛門

椎原 喜之丞

明治二十五年三月

島田 親恵

椎原 喜之丞

細山田嘉平太

小川 八郎次

内村 十助

窪田助次郎

細山田正 稲留

彦五郎 高橋

玄平左衛門

第一章 政治

本田 十九郎
永崎 仁次郎
前田 佐市
淵脇 助五郎
川畑 甚次郎
児玉 甚吉

入来嘉兵衛
細山田重雄
荒田藤五郎

池田 嘉十
鶴ヶ野三太郎
前田 佐市
鶴留 伝助
細山田嘉平太
岩崎 八郎
修行次郎右衛門

淵脇助五郎
細山田諸太郎
下脇庄右衛門

明治三十年三月
川畑 茂一郎
前田 佐市

椎原 喜之丞

明治三十七年五月
新村 与次郎

岡元 蔵助
鶴ヶ野三太郎

細山田嘉平太
窪田助次郎

島田 親恵

淵脇 助五郎

前田 佐市
鶴留 伝助

福留 彦五郎
淵脇助五郎

鶴ヶ野三太郎

細山田諸太郎

細山田嘉平太
岩崎 八郎

内村 十助
入来嘉兵衛

細山田八郎太

下脇庄右衛門

細山田八郎太
修行次郎右衛門

小川 与太郎
荒田 虎一

本田 十九郎

狩川 金助

池田 嘉十

永崎 仁次郎

明治三十年六月

小川与太郎

明治四十年五月

入来 嘉兵衛

岩崎 八郎

鳥田 親恵

新村 権次郎

狩川 金助
馬場半五左衛門

細山田嘉平太

淵脇助五郎

上田嘉太郎

小鹿野伝太郎

岩崎 静兵衛
上村 武助

細山田諸太郎

鶴ヶ野三太郎

下脇庄右衛門

塩川 弥九郎

吉元助右衛門
新村 与次郎

山下 慶助

宮田 彦作

石原 熊助

本田 雄熊

修行 三四郎
細山田十太郎

川畑茂一郎

川越 実治

荒田 虎一

川畑 茂一郎

荒田 虎一
黒崎藤右衛門

桑原 武熊

石原 熊助

岡元 竜助

細山田八郎太

岡元 竜助
石黒 熊助

明治三十四年五月

明治四十三年四月

吉永 直太郎

後藤 新次

高橋 玄平

川畑 茂一郎

狩集 金助
小里 平兵衛

六與新左衛門

入来 嘉兵衛

宮田 彦作

川野十右衛門

黒崎 藤兵衛
本田 雄熊

岩崎 静兵衛	吉元助右衛門	新村 与次郎	細山田諸太郎	上村 善太郎	福留 藤助
高橋 玄平	入来 嘉兵衛	細山田十太郎	本田 親吉	木野田孫右衛門	窪田 甚太郎
新村 権之丞	石黒 熊助	修行 三四郎	荒田 虎一	後藤 一応	牧之瀬 雄一
細山田八郎太	馬場半五左衛門	富元 惣吉	石踊 源助	吉松 武志	児玉 実治
大正六年			中園 権四郎	小川 善幸	新村 権之丞
新村 権之丞	荒田 虎一	窪田 甚太郎	昭和四年三月		
木野田長太郎	岩崎 団兵衛	宮田 彦一	荒田 虎一	本田 親吉	牧之瀬 雄一
修行 三四郎	細山田諸太郎	鶴ヶ野助一	木野田孫右衛門	永野 直志	児玉 実雄
本田 雄熊	小川叶右衛門	黒崎藤左衛門	永谷 雄熊	上脇田七太郎	馬場 源寿
細山田十太郎	吉松 武志	津曲袈裟太郎	修行 熊吉	吉松 武志	上松瀬 栄次
御供田三太郎	竹下 叶十	吉永鉄左衛門	川畑 虎熊	竹田 美雄	石原 金次郎
大正十年			桐原 喜之助	川野 竜之進	真田 左太郎
新村 権之丞	荒田 虎一	窪田 甚太郎	昭和八年三月		
吉松 武志	福留 藤助	馬場 源寿	荒田 虎一	本田 親吉	木野田孫右衛門
細山田諸太郎	御供田三太郎	岩崎 団兵衛	吉松 武志	上松瀬 栄次	川畑 虎熊
本田 雄熊	上田 清太	宮田 彦市	石原 金次郎	桐原 善之助	場集田次郎助
小里 平兵衛	徳重金左衛門	萩原 嘉太郎	真田 信幸	新村 親志	木野田善右衛門
細山田十太郎	浜崎 熊次郎		馬場 重盛	日高 吉次	細山田 良行
大正十四年四月			津曲袈裟八	上脇田七太郎	富元 三四郎
福元 熊太郎	川畑 虎熊	西丸 伝四郎	昭和十二年四月（現在町内分）		

第一章 政治

吉松 武志	新村 親志	岡元 貞盛	竹田 岳夫	宮田 四男	池之上慶次
上村 武熊	桑木野 盛蔵	真田 信雄	永山 実	高橋 辰意	後藤 正光
椎原 誠治	西田 茂彦	本田 栄之助	佐久間春国	村川 啓蔵	厚地 英輔
永山 貞義	場集田次郎助	木野田喜右衛門	田代 重志		
後藤 実	増山 武盛		昭和三十年四月		
昭和二十二年七月（地方自治法による統一選挙）					
鶴ヶ野祐助	中牧 岩吉	吉永嘉十郎	藤山 藤夫	佐田 豊	淵脇 定雄
鶴丸 兼清	日高 恒安	田中 彦衛	竹下 忍	高林 義雄	椎原 誠治
細山田重作	島田 親富	山元 市助	池田 馨	中馬 親盛	竹田 岳夫
淵脇 定雄	竹下 忍	岡元 兼志	宮田 四男	池之上慶次	高橋 辰意
窪田 栄次	福留吉左衛門	徳田 宇市	厚地 英輔	迫田 慶次	野崎 良吉
外園 満吉	崎山金次郎	鶴木 幸蔵	中村 才吉		
岩城 重樹	六与次郎助	溝口次郎右衛門	昭和三十四年四月		
佐藤 栄吉	大津 良信	増山 武盛	淵脇 定雄	竹下 忍	高林 義雄
狩川 嘉吉	帖佐 軍治		池田 馨	中馬 親盛	竹田 岳夫
昭和二十六年四月			厚地 英輔	小川 良雄	中村 辰治
岡元 兼志	淵脇 定雄	竹下 忍	新村 正	津曲 岳夫	岡元 兼志
増山 弘満	高林 義雄	窪田 正	浜崎 辰夫	馬場 政盛	木野田貞則
小川 善幸	山崎 盛高	鎌田 耿吉	佐田 豊	新村 俊	鎌田清五郎
津曲 良吉	鳥丸正兵衛	中馬 親盛	昭和三十八年四月		
			福元吉之助	木野田貞則	厚地 英輔

昭和三十二年四月

後庵 純	新村 俊	鎌田清五郎
中馬 親盛	竹田 岳夫	高林 義雄
新村 正	竹下 忍	津曲 岳夫
和田 義満	浜崎 辰夫	吉松 行道
馬場 政盛	帖佐 軍吉	岡元 兼志

昭和三十六年四月

岡元 兼志	高林 義雄	中馬 親盛
竹田 岳夫	厚地 英輔	池田 馨
新村 正	浜崎 辰夫	木野田貞則
新村 俊	鎌田清五郎	帖佐 軍吉
湯ノ迫清香	淵脇 清香	南田 政吉
瀬戸口貞良	津曲 博美	野崎 重吉

昭和四十六年四月

岡元 兼志	中馬 親盛	竹田 岳夫
新村 正	木野田貞盛	新村 俊
後庵 純	和田 義満	湯ノ迫清香
淵脇 清香	南田 政吉	瀬戸口貞良
津曲 博美	後藤 正治	宮田 安彦
上松瀬 募		

昭和五十年五月

昭和五十四年五月

岡山 兼志	永山 実	池田 馨
浜崎 辰夫	木野田貞則	新村 俊
湯ノ迫清香	上松瀬 募	児玉 親吉
宮田 安彦	大塔 良雄	窪田 直
入来 岩男	柿木原重雄	中村 実憲
近藤 好夫	下登 千吉	

昭和五十八年五月

岡山 兼志	永山 実	池田 馨
浜崎 辰夫	木野田貞則	新村 俊
湯ノ迫清香	上松瀬 募	児玉 親吉
宮田 安彦	大塔 良雄	窪田 直
入来 岩男	近藤 好夫	宮田 揮彦

昭和六十二年五月

岡山 兼志	永山 実	池田 馨
浜崎 辰夫	木野田貞則	新村 俊
湯ノ迫清香	上松瀬 募	児玉 親吉
宮田 安彦	大塔 良雄	窪田 直
入来 岩男	近藤 好夫	宮田 揮彦

和田 義満	大塔 良雄	窪田 直
宮田 揮彦	下登 千吉	勝目 二雄
岩崎 義光	細山田正夫	修行 利徳
田辺 五優	木野田 正	木野田光雄
入来 孝行	杉山 広次	阿部 純徳
藤田 フミ		
平成三年五月		
勝目 二雄	阿部 純徳	大塔 良雄
下登 千吉	窪田 直	岩崎 義光
杉山 広次	川畑 繁	窪田 悟
鎌田 光男	木野田 正	入来 孝行
木野田光雄	狩川 早苗	深町 四男
宮田 揮彦		
議員定数の変遷		
昭和二十五年四月ゝ	二二人	
昭和三十年四月ゝ	一六人	
昭和三十四年四月ゝ	一八人	
昭和四十六年四月ゝ	一六人	
現在に至る		

五 常任委員会の構成

町村議会は法によって四以内の常任委員会を置くことができる。現在、本町の委員会構成は次のとおりで、任期は条例によって二年となっている。◎印 委員長（議員一人欠員中）。

総務委員会 ◎窪田 直 大塔 良雄

和田 義満 杉山 廣次

入来 孝行

建設農林委員会 ◎木野田 正 修行 利徳

下登 千吉 細山田正夫

岩崎 義光

文教厚生委員会 ◎勝目 二雄 田辺 五優

木野田光雄 阿部 純徳

宮田 揮彦

六 平成二年度町議会議案

陳情 第一号 平成二年度畜産政策・価格に関する陳情書

二 食糧と環境を守り、日本農林業の再建のためにコメ

の市場開放、農産物・木材の輸入拡大に反対する陳情書

三 わが国農業・農村の将来展望と米穀政策・価格対策

の確立に関する陳情

五 「ゆとり宣言」の採択を求める陳情

六 通学路の安全に係る陳情書

七(継)義務教育費国庫負担制度を堅持するための陳情書

八(〃)国民的教育機関の高等教育を保障するため、高校の

募集定員の削減や学科の再編「統・廃合」等をせ

ず、父母・子供たちに開かれた後期中等教育の万全

の策を要求する陳情書

九 林ヶ塚く知良久線及び年の神く竹下線の改良促進に

ついて

一〇 被爆者援護対策の充実に関する陳情書

請願一 米市場開放阻止に関する請願書

※陳情第七、八号は継続審査、そのほかは採択

(議案番号) (件) (名)

議案 一 工事請負契約の締結について(神話館新築工事)

二 工事請負契約の締結について(イベント広場造成工

事)

三 工事請負契約の締結について

四 〃

五 〃

六 工事請負契約の変更について

七 平成元年度霧島町一般会計補正予算(第五回)

八 〃 温泉供給事業特別会計補正予算

(第四回)

九 報酬及び費用弁償等に関する条例の一部を改正する

条例制定

一〇 町長等の給与に関する条例の一部を改正する条例の

制定

一一 教育長の給与等に関する条例の一部を改正する条例

の制定

一二 霧島町消防団条例の一部を改正する条例制定

一三 職員等の旅費に関する条例の一部を改正する条例制

定

一四 社会教育指導員に対する報酬等の支給に関する条例

の一部を改正する条例制定

一五 霧島町立学校体育施設等の使用に関する条例の一部

を改正する条例制定

一六 霧島町家庭奉仕員の派遣に関する条例の一部を改正

する条例制定

一七 霧島町ねたきり老人等介護手当支給条例の制定

一八 霧島町水田農業確立推進基金の設置管理及び処分に

関する条例の制定について

一九 平成元年度霧島町一般会計補正予算(第六回)

二〇 〃

国民健康保険事業特別会計補正予

		算(第四回)	四	
二一	"	水道事業特別会計補正予算(第三回)	"	(平成元年度霧島町国民健康保険事業特別会計補正予算(第五回))
二二	平成二年度霧島町一般会計当初予算		五	"
二三	"	国民健康保険事業特別会計当初予算		(平成元年度霧島町老人保健特別会計補正予算(第三回))
二四	"	老人保健特別会計当初予算	議案三三	霧島町国民健康保険条例の一部を改正する条例
二五	"	温泉供給事業特別会計当初予算	三四	温泉給湯分担金条例の一部を改正する条例
二六	"	水道事業特別会計当初予算	三五	町道認定について(大島居線)
二七	工事請負契約の変更について		三六	" (永池・戸崎線)
二八	鹿児島県町村職員退職手当組合規約の一部を変更する規約		三七	" (笹之段線)
			三八	" (笹之段・鬼ヶ迫線)
追加議案	工事請負契約の締結について		三九	平成二年度霧島町一般会計補正予算(第一回)
二九	工事請負契約の締結について		四〇	" 老人保健特別会計補正予算(第一回)
三〇	国有財産売買契約の締結について		四一	" 温泉供給事業特別会計補正予算(第一回)
三二	第三次霧島町総合振興計画基本構想の策定について		四二	" 水道事業特別会計補正予算(第一回)
発議	霧島町議会会議規則の一部を改正する規則について		四三	工事請負契約の変更について(神話館関係)
承認	平成二年度畜産政策・価格に関する意見書(案)		四四	" (展示関係)
一	専決処分の承認を求めることについて		四五	" (草スキー関係)
二	(霧島町税条例の一部を改正する条例)		四六	" (スライダー関係)
三	(霧島町地域振興基金条例の制定)		四七	" (電気関係)
	(平成元年度霧島町一般会計補正予算(第七回))			

- 発議 三 米市場開放阻止に関する意見書(案)
 推薦 一 霧島町農業委員会委員の推薦について
 議案四八 平成二年度霧島町一般会計補正予算(第二回)
 四九 工事請負契約の締結について(永池湯之野線)
 五〇 " (国際交流村イベント
 広場)
 五一 " (神話館外溝)
 五二 工事請負契約の変更について(スーパースライダー)
 五三 神話館レストコーナー設置工事請負契約の締結につ
 いて
 五四 霧島小学校屋内運動場新築工事請負契約の締結につ
 いて
 同意 一 霧島町固定資産評価審査委員会委員の選任について
 (本田行)
 二 " (狩川早苗)
 三 霧島町教育委員会委員の任命について
 議案五五 霧島町神話の里公園の設置及び管理に関する条例の
 制定について
 五六 過疎地域活性化計画の策定について
 五七 土地改良事業の実施について
 五八 平成二年度霧島町一般会計補正予算(第三回)
 五九 " 国民健康保険特別会計補正予算
 (第一回)
 認定 一 平成元年度霧島町各会計歳入歳出決算認定について
 議案六〇 工事請負契約の締結について
 (平成二年度遠見塚団地一号棟新築工事)
 六一 " (二号棟 ")
 六二 " (三号棟 ")
 承認 一 専決処分承認を求めることについて(一般会計補
 正予算第四回)
 議案六三 工事請負契約の変更について(国際交流村イベント
 広場)
 六四 " (遠見塚一号棟)
 六五 " (遠見塚二号棟)
 六六 " (霧小屋内運動場)
 六七 平成二年度霧島町一般会計補正予算(第五回)
 六八 " 国民健康保険特別会計補正予算
 (第二回)
 六九 " 温泉供給事業特別会計補正予算
 (第二回)
 七〇 " 水道事業特別会計補正予算(第二
 回)
 発議 四 北方領土の早期返還に関する要望決議(案)
 五 飲酒運転の追放に関する決議(案)
 六 被爆者援護対策の充実に関する意見書(案)
 追加議案 報酬及び費用弁償等に関する条例の一部を改正する
 七一 条例制定
 七十二 町長等の給与に関する条例の一部を改正する条例制

	定
七三	教育長の給与等に関する条例の一部を改正する条例 制定
七四	職員の給与に関する条例の一部を改正する条例制定
七五	平成二年度霧島町一般会計補正予算（第六回）
七六	国民健康保険事業特別会計補正予 算（第三回）
七七	老人保険特別会計補正予算（第二 回）
七八	温泉供給事業特別会計補正予算 （第三回）
七九	水道事業特別会計補正予算（第三 回）

第二章 経 済

第一節 財 政

一 町税の沿革と推移

明治二十一年（一八八八）市町村制が施行され、法律第一号として市町村税が法制化された。以来、わが国の社会・経済の発展につれて地方税制度も改廃整備されたが、昭和十五年（一九四〇）になると、国家の戦時体制に即応して地方税の国税附加税強化が図られ、地方税の意義は失われた。

昭和二十年（一九四五）八月の終戦により、わが国のあらゆる面において、急速に民主化への改革が打ち出された。新しい憲法に基づき、地方自治法が施行され、市

町村においても自治権が拡大された。永年、国の管轄下にあった財政・警察・消防・教育などが地方自治法の施行に伴い、自治警察署や教育委員会などが設置され独立機関となった。

昭和二十二年（一九四七）のシャウプ氏を長とする連合軍の税制調査団の勧告により、地方公共団体の民主的自治を進める裏付けとして、自主財源を強化するための地方税が施行された。

昭和二十三年（一九四八）、地方財政法が公布されたが、終戦後のインフレの中で、地方公共団体の財政運営は苦しく、国は地方財政強化のため毎年のように地方税法を改正し、地方税の増収に努めた。

昭和二十五年（一九五〇）になると、地方財政平衡交付金制度が創設された。この制度は、地方公共団体相互間の財源調整を図るために設けられたものである。また

地方公共団体の財源確保のため、国は市町村合併を推進した。同年、霧島村（現在の霧島町）が発足すると同時に、本町もシャッフル勧告に基づく地方税法によって、次のとおり定めた。

町民税 固定資産税（土地・家屋・償却資産税） 自転車税・荷馬車税（子供用を除く自転車） 電気ガス税（使用者） 木材引取税（引取者） 広告税 接客人税 入湯税（入湯者）・鉦産税

昭和二十九年には次のとおり改正された。

町民税 固定資産税（土地・家屋・償却資産） 自転車・荷馬車税（子供用を除く） たばこ消費税 電気ガス税（使用者） 木材引取税（引取者） 入湯税（入湯客） 鉦産税

その後、さらに改正されて現在は次のとおりとなっている。

町民税 固定資産税 軽自動車税 たばこ消費税 鉦産税

町税の推移は下表のとおりになっている。

単位（千円）

町税の推移

年 度	収 入 額	年 度	収 入 額
昭和25	5,851	昭和55	269,580
30	10,283	60	352,265
35	13,614	63	469,566
40	22,604	平成 1	470,128
45	35,110	2	511,444
50	133,110		

町税の徴収率の推移

年 度	昭和25	30	35	40	45
徴収率	81.0	84.2	97.9	97.2	90.9
年 度	昭和50	55	60	平成 2	
徴収率	96.6	98.0	95.5	95.3	

二 平成元年度・同二年度の決算状況

平成元年度の歳入は、地方交付税が一〇億七六〇四万九〇〇〇円（三三・七割）と大きな割合を占めている。これは、竹下内閣による「ふるさと創生資金」八〇〇〇万円が含まれているためである。地方債は、七億一八一万七〇〇〇円（二二割）で、「神話の里公園」の本格着工による三億三一〇〇万円の借入れが含まれている。財産収入は、二億五一七二万五〇〇〇円と例年にない大

昭和25年度より平成2年度までの歳入決算額

(単位：千円)

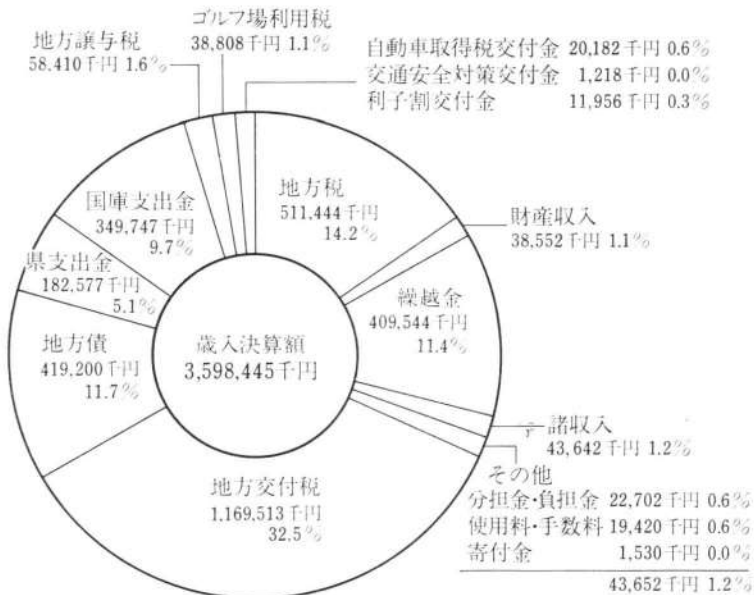
上掲表のとおり 課税関係

区 分	昭和25年度		30年度		40年度		50年度		55年度		60年度		平成元年度		2年度	
	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比
地方譲与税	5,851	21.8	10,283	24.8	22,604	17.9	133,110	15.7	269,580	14.4	352,265	20.8	470,128	14.7	511,444	14.2
地方市場利用税交付金							9,731	1.2	30,031	1.6	29,323	1.7	52,259	1.6	58,410	1.6
自動車取得税交付金							8,827	1.1	8,852	0.5	17,831	1.1	33,893	1.1	38,808	1.1
地方交付税	5,233	19.5	6,557	16.1	52,313	41.4	344,488	40.4	573,907	30.7	763,744	45.1	1,076,049	33.7	1,169,513	32.5
交通安全対策交付金							815	0.1	502	0.0	885	0.1	1,162	0.0	1,218	0.0
分担金・負担金	623	2.3	437	1.1	5,943	4.7	14,346	1.7	13,759	0.7	21,358	1.3	28,244	0.9	22,702	0.6
使用料			4	0.0	5,049	4.0	4,674	0.5	6,712	0.3	9,772	0.6	11,698	0.4	14,473	0.4
手数料	149	0.6	266	0.6	321	0.3	1,116	0.1	1,665	0.1	1,967	0.1	4,666	0.1	4,947	0.2
国庫支出金	9,432	35.2	7,965	19.2	16,298	12.9	119,216	14.0	144,718	7.7	132,706	7.8	185,734	5.8	349,747	9.7
県支出入金	598	2.2	646	1.6	7,235	5.7	57,152	6.7	179,150	9.6	139,416	8.2	199,217	6.2	182,577	5.1
財産収入	10	0.0	1,556	3.6	1,931	1.5	5,890	0.7	11,485	0.6	14,683	0.9	251,725	7.9	38,552	1.1
寄附金	2,740	10.2	45	0.1	2,491	2.0			315	0.0			35,876	1.1	1,530	0.0
繰入金									141,250	7.6	5,828	0.3			300,000	8.3
繰越収入金	50	0.2	3	0.0	702	0.6	35,985	4.2	40,555	2.2	33,099	2.0	76,334	2.4	409,544	11.4
諸地方債	244	0.9	300	0.8	6,878	5.4	38,569	4.5	14,700	0.8	17,921	1.1	39,232	1.3	43,642	1.2
地方交付金	1,900	7.1	12,500	30.2	4,600	3.6	77,900	9.1	420,200	22.5	139,700	8.2	701,817	22.0	419,200	11.7
臨時地方財政特別交付金			240	0.6									5,103	0.2	11,956	0.3
夫役及現品			506	1.3												
合 計	26,830	100.0	41,408	100.0	126,365	100.0	851,822	100.0	1,870,538	100.0	1,694,007	100.0	3,192,117	100.0	3,598,445	100.0

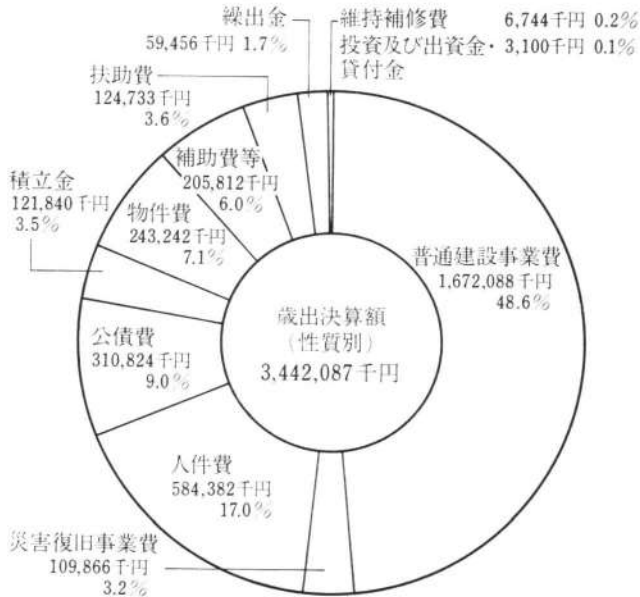
昭和25年度より平成2年度までの歳出決算額

(単位：千円)

区 分	昭和25年度		30年度		40年度		50年度		55年度		60年度		平成元年度		2年度	
	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比	決算額	構成比
議 会 費	553	2.0	617	1.8	5,354	4.3	24,308	3.0	44,812	2.5	52,005	3.2	63,673	2.3	69,031	2.0
総 務 費	6,373	24.0	7,791	22.2	20,649	16.5	118,397	14.4	513,315	28.2	233,245	14.2	613,569	22.0	499,602	14.5
民 生 費	1,247	4.7	810	2.3	7,037	5.6	96,347	11.8	175,171	9.6	177,499	10.8	221,914	8.0	220,271	6.4
衛 生 費	175	0.6	3,307	9.4	5,075	4.0	33,508	4.1	51,781	2.8	53,903	3.3	103,038	3.7	108,966	3.2
勞 働 費					11,543	9.2	33,731	4.1	55,253	3.0	36,659	2.2				
農 林 水 産 業 費	1,275	4.8	3,730	10.6	14,923	11.9	141,818	17.3	330,982	18.2	224,041	13.6	201,997	7.2	216,539	6.3
商 工 費	12	0.0	22	0.1	10,344	8.2	15,408	1.9	21,087	1.2	38,917	2.4	459,234	16.5	821,861	23.9
土 木 費	1,024	3.9	323	0.9	18,789	15.0	105,959	12.9	204,813	11.2	186,199	11.3	391,436	14.1	638,620	18.6
消 防 費	391	1.5	726	2.1	1,665	1.3	46,331	5.7	64,582	3.5	81,530	5.0	98,899	3.6	97,558	2.8
教 育 費	9,666	36.4	11,585	33.0	19,840	15.8	144,446	17.6	155,746	8.6	190,480	11.6	214,112	7.7	348,949	10.1
災 害 復 旧 費	5,101	19.2	3,206	9.1	2,295	1.8	7,643	0.9	45,942	2.5	58,588	3.6	142,201	5.1	109,866	3.2
公 債 費	153	0.6	1,657	4.8	7,997	6.4	51,618	6.3	157,520	8.7	309,397	18.8	272,500	9.8	310,824	9.0
諸 支 出 金	612	2.3	1,294	3.7												
合 計	26,582	100.0	35,068	100.0	125,511	100.0	819,514	100.0	1,821,004	100.0	1,642,463	100.0	2,782,573	100.0	3,442,087	100.0



平成2年度歳入決算状況



平成2年度歳出決算状況〔性質別〕

大きな額となっているが、これは、露島東中学校校跡地および体育館、町有林の売却によるものである。

歳出は、性質別にみると投資的経費が三九・三割で、そのうち普通建設事業費がほとんどを占めている。神話の里公園の整備によるところが大きい。

義務的経費では、人件費が大きな割合を占め一九・七割である。



平成2年度歳出決算状況〔目的別〕

平成二年度の特色は、国庫支出金の増加で三億四九七四万七〇〇〇円となっている。これは、公営住宅の「サンビレッジ」「遠見松」の建設によるものと、霧島小学校屋内運動場の建設とが含まれる。前表や円グラフは、歳入歳出の決算額をまとめたものである。

納税組合

終戦後五年を経た国の経済は、インフレと生産低下を克服して復興の道を歩み出したが、税収の確保のために、法律により納税組合の制度を定めた。本町も昭和三十四年（一九五九）に希望者だけの納税組合が発足した。当時の任意組合数一五・組合員数四七八人、納税額二二万二〇〇〇円であったが、未加入者の納税成績が悪いため翌年、町内全域に集落単位の組合が組織された。組合数四一・組合員数一八〇〇人、納税額一三六〇万円であったが、納税成績は年ごとに向上して、税務職員も一人から六人に減らした。その後、各自治公民館ごとに納税組合ができて現在も継続されている。

第二節 産業

一 戦後の農政

終戦前後の食糧事情 昭和十六年（一九四一）太平洋戦争に突入すると、戦争遂行と国民への食糧の供給安定を目的に、昭和十七年に食糧管理法が施行され食糧は国の統制下におかれた。農家は供出制度となり、割り当てられた量は強制的に供出させられ、一般家庭は配給制となった。戦争がながびくにつれて、食糧は軍優先となり、特に砂糖などの甘味料などは一般家庭からは姿を消した。昭和二十年終戦により食糧事情は最悪の事態を迎えた。とくに同年の大型ルース台風の来襲により、

鹿児島県下の農産物は壊滅的打撃を受けた。昭和二十年から同二十二年ごろは復員兵や海外からの引き揚げ者などの増加が続いた。食糧の配給も遅配・欠配が続き、人々は農家を回り、米やいも、野菜など買出しにかけまわった。また、いもの苗の床いもまで買いあさった。一

日中走り回っても南瓜一つも手に入らない日もあった。米粒がわずかに入ったお粥が食べられればよい方であった。かつぎ屋と呼ばれる闇商人が横行したのもこのころである。警察は食糧統制違反として駅やバス停留所などで、折角手に入れた食糧を没収した。いま考えると悪夢のような食糧難時代であった。

農地改革 終戦後の農地改革は、農地調整法と自作農維持創設特別措置法の二つをもって実施された。これらの法制措置が執られ、実現するまでのわが

国の農地政策の経過をたどってみよう。

明治維新の農地改革は、主として明治六年（一八七三）の地租改正令で実施され、同三十一年（一八九八）の民法施行によってようやく整備されたが、民法の土地所有規定は契約自由の公平の原則を欠き、小作契約による分配の不合理により、小作人の地位を隷属化させた。そのために小作争議が起り、社会経済上の不安が増大した。大正九年（一九二〇）小作制度調査会が設けられ、その答申に基づく小作調停法が、同十三年（一九二四）に公布されたが、当時の農村は自作農も転落しかけていた。政府は大正十五年、農林省令をもって自作農維持創

設補助規則を公布した。この計画は二五年間に一万一三〇〇戸を目標とする小規模のものであった。わが国の農

地政策はこれを機会に小作法案や自作農維持創設案などを国会に提出したが、二回とも審議未了で流れた。昭和六年（一九三二）の満州事変にはじまる戦時態勢で、農業生産力の増大は、最も緊急を要することとなった。そのために、同十三年農地調整法、翌年小作料統制法、同十六年臨時農地価格統制令、同年臨時農地管理令を公布した。このような経過の中で、戦時食糧政策として生産者価格と地主価格の二重価格制度を採用した。そのため小作料は金納制となり、小作料は実質的に低下した。終戦を迎え、連合国軍総司令部（GHQ）の覚書により、第一次農地改革の農地調整法が公布された。この内容は、小作料の金納制、自作農創設事業の拡大強化、農地委員会構成員の公正化、農地の開発を国・地方公共団体で行う、などである。同二十一年の農地解放指令に基づき全国の農地改革が遂行された。この解放指令の内容は次のとおりである。

(一) 二〇〇万戸以上ある全国の小作地につき、二〇か年以内に自作農を創設すること。国が地主から強制買収

し、それを小作人に売り渡し、地主と小作人の間の相対売買は認めない。

(二) 買収の対象となる農地は、①一切の不在地主の全貸付地および在村地主の貸付地で保有限度（一戸、ただし北海道では四戸）を超える部分を国が強制買収して小作農に売り渡す、②自作農の農地最高保有限度を原則として平均三戸（北海道は一二戸）とする、③小作料は金納とし最高小作料を設ける。

(三) 地主に対する買収地代は、一部は現金（四〇〇〇円まで）他は農地証券（二四年間均等償還）で行う。

(四) 農地の買収および売り渡しは、市町村農地委員会が計画し、県農地委員会の承認を経て発効、知事が買収、売り渡しの手続きを行う。

(五) 未墾地の解放を行い既墾地に準じて強制買収する。

(六) 地主の土地取り上げの制限を強化して、耕作権の移動は当分知事の許可制とする。

農地の買収と 近年における農業経営の中で自然野草売り渡し状況 地として利用される採草放牧地の役割

が一般的に低下してきている。昭和四十五年の農地法の改正に際し、小作採草放牧地の所有制限が廃止された。

この小作地の所有制限の規定は農地改革の中心であった自作農創設特別措置法に基づく農地の解放とその趣旨を同じくするものであるが、農地改革によってわが国の農地の三分の一以上もの農地が小作農に解放されて、小作地は極めて例外的にしか存在せず、しかも不耕作目的又は具体的な転用目的のない農地の権利取得は認められないことになっている。

所有制限に該当するような正規の小作地は離農地がその住所を移転したり、不在村者が小作地を相続する場合などしか発生しない。その意味では、現在では小作地の所有制限は以前のような重要な意味はもっていないが、農地制度の中で、その趣旨を端的に表現している規定として、また不耕作者の投機・投資目的での農地の取得の歯止めや、相続による農地の細分化防止の機能を果たすなど、なお大きな意義をもつ制限であるといえる。

農地の買収および売り渡しは、市町村の農地委員会が計画し、県農地委員会の承認を経て発効し、知事が買収、売り渡しの手続きを行うことになっている。これによって農地の買収、売り渡しは昭和二十二年三月からはじまり、二十七年九月までには終わった。

農地改革法によって買収、売り渡した本町の実情は次のとおりである。なおこの統計は旧霧島村のものである。この中から現在の霧島町の分だけ抜き出して集計することは困難であり、そのまま掲げる。

買収農地面積	五九四・五畝	件数にして七六五
売り渡し農地面積	五九三・八畝	件数にして二九九

六件

農地法改正

農地法は昭和二十七年（一九五二）、農地改革が一段落した時点で、その成果を維持するため、自作農創設特別措置法、農地調整法および譲渡令を一本化して制定されたものである。法の目的は、耕作者の農地の取得を促進し、農地の効率的な利用を図り、耕作者の経営基盤の安定を目指している。この目的達成のために、さらに農地利用増進法、特定農地貸付に関する農地法の特例に関する法律が制定され、農業委員会の機能は一層強化された。また農地銀行の体制整備による活動も本法の目的達成に欠かせないものであった。耕作者の農地の有効利用義務と権利保護は農業会の使命であった。

農業委員会

農業委員会の制度は、昭和二十六年（一九五一）にこれまでの農地委員会と、農業調整委員会および農業改良委員会の三つの行政委員会を統合して発足した。その当時は、一町村一委員会の割合で約一万一〇〇〇程あったが、その後町村合併が急速に進み、現在では全国で三二八〇委員会である。

農業委員会は、戦後の国政の中で最も重要な政策であった農地改革事業の完遂と、食糧供出の割り当てという二つの大きな農政を担当して、農政の民主化という点で果たした役割は大きなものがあった。

その後、独立農政によって農業の振興を図り、経済自立の基盤を確立するための農業団体を設立すべきだという声が大きくなり、賛否両論の激しい論議が続いた。農業団体再編成といわれたのがこれである。結果として、昭和二十九年（一九五四）農業委員会法が改正され、農業委員会の系統組織として、国と県に全国農業会議所と都道府県農業会議が設けられた。その後、農村をとりまく環境は食糧需給制度や、町村合併など農家経済政策も農民にとって好ましく方向をたどってきたため、再度法律の改正が必要となり、昭和三十二年（一九五七）

に、改正法が成立、農業委員会法、農地法に基づいて、農業と農家の利益代表機関として、新しい農業委員会が発足した。農業委員会は、農地の有効利用、農業経営の近代化、自立経営農家の育成など幅広い活動を続けてきた。

また、終戦直後の混乱と食糧難の中で、占領政策による農地改革と食糧確保のための供出の割り当てという至難な業務を遂行した農業委員の歴代会長は次のとおりである。

〔会長名〕

新村 親志	（昭和二十六年）同	三十一年まで
宮田 四男	（同 三十二年）同	三十四年まで
新村 正	（同 三十五年）同	三十七年まで
後藤 実	（同 三十八年）同	四十年まで
新村 正	（同 四十一年）同	四十六年まで
後庵 純	（同 四十七年）同	五十二年まで
中馬 親盛	（同 五十三年）同	五十八年まで
田代 正	（同 五十九年）同	平成元年まで
海老原貞雄	（平成二年七月）現在	

〔現在の農業委員（平成二年七月）現在〕

公選委員 鎌田 光男 小川 光男

上村 明夫 冷水 光盛

深町 四雄 上村 孝夫

今村 芳廣 本田 行

海老原貞雄 園田 義昭

議会代表 木野田 正 修行 利徳

農協代表 折田 勇

共済組合代表 森原 光雄

食糧供出制 昭和二十年（一九四五）終戦後の農地改革によって、農業全般にわたり戦前とは

様相が一変した。終戦当時を含め、その後も数年間は食糧不足が続いた。この状態に対応するために食糧供出制度が決められ、米・麦・甘藷・雑穀などは、耕作面積に対して供出割り当てがなされ、割当量だけは必ず供出しなければならなかった。耕作者間の紛争が生ずることも度々あった。当時は、青壮年層に農業で自立しようとする者も多かった。本町でも七つの自主的な生産グループが結成され、主食・蔬菜の増産研究に取り組んだ。なお、食糧増産体制を確立するために、霧島農業協同組合が組織され、食糧増産が強力に推し進められた。この

結果、食糧増産は軌道にのって国民の食生活も安定し、食糧の統制も次第に緩和された。米については、昭和四十年代初めに完全自給の目標が達成された。その後、国民の食生活の変化による米の消費の減少により、米の過剰が問題になり、減反政策の必要に迫られてきた。

農業基本 昭和三十六年（一九六一）に農業基本法が制定された。これは、農業の進むべき方向

と、政策の目標を明示した法律である。わが国の農業は永い歴史の試練を経て、国民の食糧の供給、資源の有効利用、国土保全、国内市場の拡大など国民生活の安定に寄与してきた。農業従事者は、幾多の困苦に堪えつつ地域社会の重要な形成者としての使命を全うしてきたが、経済の著しい発展に伴い、農業従事者その他の産業従事者との生活水準の格差が拡大しつつある一方、農産物の消費構造にも変化が起り、他の産業への労働力の移動現象がみられるようになった。このような事態に対処するために、経済的・社会的制約による不利を補正し、農業の近代化と合理化を図り、農業従事者が他の国民各層と均衡する健康で文化的な生活を営むことを理念とするものである。農業基本法施行以後も、農村をとりまく諸情

勢はきびしい環境の中で国際化の進展、農産物の過剰基調、高齢化、過疎化・消費者ニーズの多様化など、これまでにない変化の中で霧島町の農業も模索と努力が続けられている。

農村三作運動

昭和三十八年（一九六三）、農村三作運動が県の提唱により始まった。この運動は、農家が明るい豊かな楽しい生活を築き上げることとを最終目標として、「仲間づくり」、質の良い「物づくり」、住みよい働きよい「環境づくり」の三つを内容としている。

仲間づくり 一人ひとりの学習や活動だけでは新しい安定した農業経営を確立することには限界があるので、共同学習と実践活動をおして新しい農業者としての技術や意識を高め合い、主産地形成にない手となる。

物づくり 単なる換金作物ではなく、商品作物として売れる条件を備えた農産物の生産を目標に、大量生産、大量取引の流通体制を確立する。

環境づくり 生活の基盤である家庭で、一人ひとりの意見や立場が尊重され、また農村の人間関係が明るい雰囲気包まれ、健康で楽しい文化的な生活が営めるよう

な環境を、総合的にすすめてゆく。

本町ではこの趣旨に沿って、昭和四十年（一九六五）からグループをつくり、従来の総合共進会を「三作運動推進大会」に切り替え、この運動に功労のあった人たちを表彰したり、講演会を開催するなど、この運動を推進した。昭和四十一年（一九六六）の三作運動の推進方針は次のとおりであった。

農業者の自立意欲の向上、後継者の育成、機能集団の活動強化、経営の父子関係の近代化、農業者の主体性の確立と推進体制の強化、これを基軸にして、仲間・物・環境づくりに取り組み、生産基盤の整備や規模拡大の推進を図り、地域の特性を生かした、市場競争力のある農業の確立に取り組んだ。

農業構造改善 農業構造改善事業は昭和三十一年（一九五六）年度から発足した。本町において、昭和三十二（一九五七）年度を基本年度として、

農山漁村振興特別助成事業に取り組んだ。これは適地適産を基調とした農山漁村の振興に関する計画の樹立および事業の実施を総合的に推進することにより、農林業の経営の安定と農山村の生活向上を図るねらいで昭和三十

六年度の五か年継続事業で実施している。

昭和三十六（一九六一）年度から同四十六（一九七一）年度が完了年度である第一次農業構造改善事業を、鹿児島県下延べ八六地区で実施している。本町においても四十二（一九六七）年度計画予備地域として、水田の大型圃場整備（前田地区）事業を推進する計画策定作業に取り組んだ経緯もあるが、受益者の理解と協力が得られずに途中で断念せざるを得なかった。

昭和四十四（一九六九）年度から同五十六（一九八一）年度を完了年度とする第二次農業構造改善事業が鹿児島県下延べ四六地区で実施されている。しかし本町は未実施である。

昭和五十三（一九七八）年度から同五十八（一九八三）年度にかけて新農業構造改善事業が前期対策として実施され、この対策の中で本町では、農村地域農業構造改善事業、自然活用型緑の村整備事業を五十四（一九七九）年度から五十六（一九八一）年度の三か年継続事業をもつて緑の村野外運動緑地広場、自然環境活用センター、農用地造成（柿園）育苗ハウス等を整備した。新農構の前期対策には、地区再編、広域農業、特定地区農業構造

改善事業がある。

昭和五十八（一九八三）年度から新農業構造改善事業の後期対策として、それぞれの農業構造改善事業が実施されているが、農林水産省では新農業構造改善事業の（後期対策）次期対策として、平成二（一九九〇）年度から農業農村活性化農業構造改善事業を発足させることになっている。これは地域の立地条件に即した方向で農村の活性化を図るため、地域リーダー・プロ農業者などの人づくりや、地域リーダーを核とした組織づくりの推進、土地基盤整備および農業近代化施設等農業生産条件の整備、集落環境条件の改善などを総合的に実施する事業である。本町においても近い将来、この農業農村活性化農業構造改善事業の計画策定および実施に向けて、推進体制を整備する必要性に迫られている。

米の生産調整（水田の生産調整） 水田はわが国農業

田農業確立対策） 生産の基幹的な生産基盤であり、

高い生産力を有しているとともに、連作障害を回避するうえでも有効な農業である。また水田は、治山治水等の国土保全の上からも、森林と並んで重要な役割を果たしている。わが国の農業は二〇〇〇年来、この水田による

稲作を中心に展開されてきており、稲作経営の安定と米自給の確保が日本民族にとって最大の課題であった。

〔米の需給〕 米は昭和四十（一九六五）年代初めに完全自給という目標がようやく達成され、さらに生産力が需要を上回ることになった。そして、消費の減少などにより米の過剰が問題とされ、米の消費拡大のための努力がなされてきたものの、消費は引き続き減少の傾向にある。また稲作生産技術の向上や基盤整備の進展などにより潜在生産力が一層高くなったため、米の潜在的な需給ギャップは引き続き拡大しているのが実情である。つまり、今後は、従来以上に米の需給調整が必要となっている。そこで米の生産調整の実施経過をたどってみる。

○昭和四十六年（一九七二）から、米の生産調整が実施された。これは、同五十（一九七五）年度までを稲作転換対策として、転作に重点を置いたが、同四十八（一九七三）年度までは休耕田も対象にした。同五十年度に全国で実施された転作面積は二六万四〇〇〇^〇haであり、本町は四〇^〇haの転作、生産調整が行われた。

○昭和五十一（一九七六）年度から同五十二年度においては、食用農産物の自給力向上のための水田の生産調整

が実施された。五十二（一九七七）年度の本町の転作による生産調整は四六^〇haであった。

水田利用再編対策として昭和五十三年から同六十一年度の九年間、一期三か年を数期に分けて長期的、構造的な視点から生産構造の再編を目的に転作が実施され、昭和六十一年度本町では六六^〇haという転作を行った。

昭和六十二（一九八七）年度から、水田農業確立対策として、水田作物の生産性の向上と地域輪作農法の確立および米の計画生産を行政と生産者団体とが一体になって推進。これは前期三か年（昭和六十二年から平成元年度まで）、後期三か年（平成二年度から平成四年度まで）に分けて、転作面積が固定されて割り当てられ、本町では、前期に六六^〇haの転作が実施された。そして、引き続き平成二年度からの後期対策で転作割当面積は強化される一方、その面積は固定された。それは、七二^〇haで、この割当目標面積を行政と生産者団体とが一体となって達成しなければならぬ現状であり、長期的な観点から農業の将来を見通して生産構造を転換していく対策である。

○水田農業確立対策による転作の助成補助金は次の表のとおり。

助成補助金の体系と水準（平成2～4年度）

区 分	単 価 （千円/10a）		
	基本額	加 算 額	
		生産性向上加算	地域営農加算
一 般 作 物 そば・飼料作物・大豆・花き等	13	26（スーパー加算） 20 10（県の特認）	10
永 年 性 作 物 等 果樹・転換畑・林地等	19	26（スーパー加算） 20 10（県の特認）	10
特 例 作 物 野菜・タバコ等	4	5 5（県の特認）	10
水 田 預 託	4	—	—
土 地 改 良 通 年 施 行	4	—	—
自 己 保 全 管 理	4	—	—

注）永年性作物等については助成金の交付期間が定められている。

農業振興地域の 整備に関する法律

農業振興地域に関する法律（昭和四十四年（一九六九）法律第五十

八号。以下「法」という。）が第六十一回国会において成立し、九月二十七日付で施行された。

近年における国民経済の高度成長により地域の社会経済情勢は著しい変ほうを遂げつつあり、とくに都市への人口集中と工業開発および交通網の整備の進展に伴って、農地の無秩序なかい廃、土地利用度の低下、農業経営の粗放化などの事態が、都市周辺だけでなく、次第に農村地域にも波及していく傾向がみられる。国は、従来から地域の実態に応じた農業施策の推進に努めてきたが、農政の基本目標である需要の動向に即応した農産物の安定供給および生産性の高い農業経営の育成を実現するために、農業の振興を図るべき地域を明らかにし、土地の有効利用と農業の近代化のための措置を計画的に推進する必要がある。つまり、各地域の実情に応じ、国土の合理的利用の観点から土地の計画的利用、農業生産基盤の整備および開発、農地保有の合理化など、農業の健全な発展を図るため総合的な計画を推進することになっている。市町村はこの法律に基づき、整備計画を策定す

るようになっていゝるが、こゝで霧島町の農業振興地域整備計画策定経緯をたどつてみよう。

市町村整備計画は、農業振興地域における農業振興の方向を明らかにし、これに即して次の計画事項で策定したものである。すなわち、①農用地利用計画、②農業生産基盤の整備開発計画、③農地等の権利取得の円滑化計画、④農業近代化施設の整備計画等の内容をふまえて、昭和四十五（一九七〇）年度に一般管理地域指定を受け、同年度に整備計画の策定をする。整備計画策定後、六か年経過してゐたが、この間、経済事情の変動、その他情勢の推移により、市町村整備計画の再検討をする必要に迫られ、この変更計画のため昭和五十一（一九七六）年度特別管理地域として指定を受け、同年度に整備計画策定見直しをする。その後における経済的社会的情勢は急速に変化しつつあり、都市機能の地方への分散、余暇時間の増大などを背景とした、宅地、レジャー施設用地などの多様な非農業的土地需要が生じてゐる。このため地域の实情に応じた農村地域活性化のため土地利用調整の一層の円滑化を図る必要があつた。昭和六十二（一九八七）年度から新たに実施することになった農業

農村振興総合対策（地域活性化型）の地域指定を受け、同年度に農業振興地域整備計画の実効性を確保する観点から、この計画を総合的に再検討することになった。平成二（一九九〇）年度に新たな市町村整備計画を策定し、農業および農村の総合的な振興並びに整備の方向を明らかにした。

二 農業生産の実状

（一）立地条件

本町の農業は標高二四〇～五〇〇呎のところに耕地が分布し、北部の山ろく丘陵地帯と南部の畑地帯に二分され、町の中央を貫流する霧島川水系を利用する流域に水田が展開してゐる。

（二）気象条件

気象は年間平均気温一五・二度、年間降雨量一九六三呎で、山間部は降雨量が比較的多い、初霜は十月中旬で降霜期間も一七〇日と長期間である。冬季の木枯らしも作物に寒害を与え、また春先の晩霜も、茶・桑・葉タバ

コ等に被害を与えている。

(三) 土壌、水利状況

耕地面積は六二四^{ヘクタール}。このうち水田二五四^{ヘクタール}、畑二一九^{ヘクタール}、樹園地九六^{ヘクタール}、草地四五^{ヘクタール}で、霧島火山系の生産性が極めて低い火山灰土壌が分布し、地質はかなり複雑である。一方、水田の水系河川は霧島川を主流に永池川・狭名田川・手籠川・郡田川の四つの支流からの水利により水稲作が行われている。

(四) 産業経済の動向

産業構成からみると、農家戸数は昭和五十五（一九八〇）年度の一〇〇〇戸から、同六十（一九八五）年度には九〇八戸（九〇・八^{パーセント}）に減少している。また平成元年度においても若干の減少がみられる。農林業が地域の基幹産業として位置づけられているが、就業構造は第二・三次産業への移行が強くになっている。専業農家、第一種兼業農家ともに、近年減少しつつあり、反面第二種兼業農家が増加して、階層分化が進行している現状である。一農家当たりの経営面積は平均六一・八^{ヘクタール}で、経

営規模は極めて零細であるが、土地利用の高度化と有効利用による農業の生産向上を図っている。一方、農家戸数の減少に伴い、農業就業者も減少の傾向にあり、高齢化や農業後継者の不足などにより担い手農家の質的低下が問題となっている。今後、高齢者や、主婦農業者の組織活動の育成を図りながら農業の振興を図る必要がある。

(五) 農畜産物の市場条件

農畜産物の集出荷販売主要品目は、米・甘藷と露地野菜（キャベツ・大根・白菜）、施設野菜（イチゴ・スイカ・トマト・大根）、それに蒔、茶、果樹類、花卉類、肉用牛（子牛）・肥育牛、子豚・肥育豚、牛乳などが集出荷、販売されている。農産物では始良東部公設地方卸売市場（国分市）、加治木・鹿児島市場へ、県外では都城市場へそれぞれの農産物が出荷される。畜産物では肉用牛が中央家畜市場（隼人町日当山）へ、豚などが南九州畜産興業（末吉町）へ、牛乳が明治乳業加治木工場へと出荷されている。

水 稲

昭和十四年（一九三九）ころ主要食糧管理制が定められて、地主の保有米を認め小作料が金納制になった。同十六年（一九四一）、太平洋戦争の拡大により、若い働き盛りの男性たちはほとんど戦場に召集され、農業は働き手の不足、肥料・農機具・生産資材の不足などの悪条件が重なり、生産量は著しく低下し、米も例外ではなかった。いきおい食糧はきびしい統制のもとにおかれ、国民は食糧不足に苦しんだ。こうした苦難の渦中を、たくましい努力と生産意欲の向上、生産技術の開発（優良品種の導入、高度化学肥料の使用、農業の進歩、栽培技術の改善）などにより、単収向上が図られた。

昭和三十年ころから、水稲早期栽培が導入され、栽培面積も一五〇〇前後をピークに減少した。また水稲早期栽培から、水稲直まき栽培が、同三十六年（一九六一）ころから始められ、栽培技術の研究、優良品種の導入、除草剤の適期使用などによって、栽培が省力化された。直まきでもあったが、栽培面積一五〇〇程度の栽培で終わり、栽培の普及はみられなかった。水稲作は栽培技術の進歩、優良品種の普及など改善が図られた結果、生産性

向上がみられるようになり、同四十（一九六五）年代になると完全自給となり、そして、生産が必要を上回るようになった。米の消費減少とともに生産過剰が問題になってきたのであった。

その後、消費はますます減少傾向をたどり、米の需給調整を図る必要に迫られ、四十年代後半から、稲作転換対策が実施されるようになった。経過は前述のとおりである。ともかく、水稲作の減反が強化され、平成元年になっても、その生産調整は継続されている状況である。

本町の同二年度の水稲作付面積は二二五〇〇であり、品種別栽培面積ではコガネマサリが一〇〇〇を占める。また平成二年度から導入したヒノヒカリは六五〇、そのほかコシヒカリ・ミナミヒカリ・水稲モチなどが五〇〇で栽培されている。

水稲作も水田農業確立対策（転作）の強化により、ここ数年作付面積も減少の傾向が続いている。近年、良質・良食味に対する関心が高まり、品種転換や栽培技術の向上などによる良質米生産の促進などを柱としたうまい米、売れる米づくり運動が展開されて、自主流通米比率が年々向上して、うまい米づくりの成果はあがって

る。こうした中で、山間地、高冷地などを中心に米の減農薬栽培に対する関心が高まりつつある。

麦

麦作は畑作を中心に栽培が多く、これも昭和三十一年代前半の三〇〇畝余りの作付けをピークにして同四十（一九六五）年代の高度経済成長期になってから、他産業への就業、労働力の流出もあって、作付面積は年を追うごとに目立って減少し続けてきた。同五十（一九七五）年代になると一七畝から、四五畝に減少している。さらに同六十年から、平成元年度にかけては一畝未満の作付け、つまり、麦作も見られるといった程度である。

甘 藷

甘藷は畑作の輪作体系上、重要な作物として、また特殊土壌、台風など特殊な条件下でも栽培可能な作物であり、南九州を中心とした畑作農業の基幹作物であり定着している。しかし、これも本町では昭和三十（一九五五）年代の前半をピークにして栽培面積が減少している。原料用甘藷は農産物価格安定法に基づく価格支持措置がとられているにもかかわらず、昭和五十（一九七五）年代になってでん粉情勢の悪化で、甘藷の生産調整がなされるようになり、栽培面積

は極端に減少、でん粉原料用甘藷、あるいは粗飼料対策、また防災畑作営農作物としてここ数年二〇〇畝内外という横ばいに推移している現状である。

大 豆

大豆は夏大豆を主体に栽培され、夏季の収穫作業は大変な労力を要しながらも、雑穀類の中でも栄養価値の高い作物として農家に重宝視されて自給自足を中心にして栽培された。国産大豆は輸入大豆に比べ、味、歩留まり、成分（タンパク質含量）の面で需要者の評価が高く、豆腐、油揚げ、味噌、納豆などが主な用途。これも昭和三十（一九五五）年代の最盛期から農業情勢の変化などにより急激な減少を続け、安定的生産を図ることは畑作状況からみても望めず、最近の栽培面積は二畝内外にすぎないのが現状である。

粟

粟は雑穀類の中でも作付面積は少ない作物である。昭和二十（一九四五）～三十（一九五五）年代前半には五畝から六畝自家用として作付けされ、食用に供されていた。その後社会経済情勢が安定するに従い、労力の配分、収益性など経済的な作物としては有望視されておらず、次第に減少してきた。そして近年は貴重な作物としてみられるようになっていく。

町内には古くから今日まで、粟の栽培に取り組んでいる者もおり、幸いにして、一〇〇年に一回巡り合うともいわれている新嘗祭^{にいなるまつり}献穀（天皇が十一月二十三日にその新穀を神に供えてはじめて食べる祭り）の献穀粟の受託をし、精粟〇・九^{トリツ}（約五合）を平成元年（一九八九）十月二十五日、皇居（賢所参集所）の献穀献納式に献納者・加治木満男夫妻が持参した。この粟の品種名はサルノテアワといい献穀者へ継承されている。

そ ば

畑作農業では、甘藷作に次いで作付けが多くみられ、雑穀のなかでは労力的にも省力化されて栽培が容易な作物とあって、ほとんどの農家が自家食用として作付けしている。余剰生産分は庭先販売、あるいは農協への一元集荷・販売の取引もある。

昭和四十六年（一九七一）から、国の施策で実施されるようになった、米の生産調整による稲作転作物としても多くのそばが転作されている。これも転作制度を有効に利用推進できる有望作物でもある。平成元年産の作付面積は二〇^〇程度。そばは健康食品志向の時代に合った農産物として、今後いつまでも、農家に受け入れられる作物ではなからうか。

そさい園芸

野菜類は畑作の露地野菜（キャベツ・レタス・白菜・大根・ニンジンなど）は畑作主体に栽培なされているが、レタス類だけは水田に多く栽培して、土地利用の高度化が図られている。畑作を主体とする露地野菜は南部の畑台地を中心にして生産の団地化が図られ、地域農業振興の原動力となっている。昭和三十（一九五五）年代は八〇^〇以上の露地野菜類が作付けされ、そさい園芸の産地形成と名柄の確立により、鹿児島・加治木・隼人の青果市場へ出荷され、霧島の高原野菜として県内外に広く名声を博し販路拡大につながっていた。

その後、昭和四十（一九六五）年代の経済高度成長期に入ると農業情勢の流動化とともに農業も若年労働力の農外流出とさまざまな変化がみられるようになり、園芸も産地間競争がますます激しくなった。このようななかで不安定な価格変動とともに露地野菜も生産団地化へと移行した。町内の野菜農家もこのころから減少する傾向がみられるようになったが、昭和四十五（一九七〇）年度は園芸生産流通安定対策事業に伴う産地指定として、スイカの産地指定を受けた。



レタス栽培（榎田）

昭和五十三年（一九七八）年にはキャベツの計画的な生産出荷ができる産地として、夏秋キャベツが国の産地指定を受けるまでの生産量を確保できる産地化を形成した時期でもあった。

んでいる農家もある。これは桜島降灰対策事業（降灰防止降灰除去施設等整備事業）の導入によるもので、一グループ、三〇〇〇平方メートル以上の施設を整備することになっている。この施設野菜でイチゴ・トマト・スイカ・大根などが集約栽培されるようになり、施設園芸の規模拡大が図られつつある。

施設化の有効利用によるイチゴのもぎとり観光農園も開設し、ふれあい農業にチャレンジする農家もみられるようになってきた。昭和から平成に移り変わり、さまざまな新しい品目の栽培を推進し、消費者のニーズに対応した計画的な作付体系を確立し、高品質野菜の安定野菜の生産に向けた取り組みが今後のそさい園芸振興を図るうえでの課題である。

茶業

△沿革▽ 古くから霧島町は優良茶の産地として名高い所である。明治二十八年

また昭和五十（一九七五）年代後半から六十年（一九八五）にかけては漬物用大根の契約栽培も盛んに行われた。近年農業従事者の高齢化、兼業化、農業後継者不足などの深刻な情勢のなかで、露地野菜産地も、産地化として機能がようやくすれつつある状況である。現在、露地野菜の主力はキャベツ・レタス・大根などであるが、数年前から鉄骨ビニールハウスの施設野菜に取り組

ごろから茶園改植の方法等について研究され、なかでも川畑森次氏は熱心で、静岡県から茶の種子を導入して、川北馬揃原（まぜんはい）に約二畝の茶園を栽培していた。同四十年（一九〇七）ころから大正初期（一九一二



茶園風景

年）にかけて、村内各所に製茶伝習所が設置され、製茶技術の改善を図るとともに栽培を普及奨励した。

大正七年（一九一八）、上松瀬栄次氏が田口に製茶工場を設置して、茶園の経営、製茶の品質改善など生産性向上に努力した。また、昭和二年（一九二七）、椎原虎吉氏が待世に製茶工場を設立して、製茶業が軌道にのり本業発展に努力中、製茶工場が火事のため焼失し、惜しくも廃業された。

昭和三年（一九二八）ころから永野田地区に約三分の茶園が栽培され、成園化とともに同七年（一九三二）、北永野田駅前に共同製茶工場が設立されたが、共同経営の不振

により、十二年（一九三七）ころ木野田八郎左衛門氏がこれを買収して製茶業の経営改善に取り組んで茶業の発展に努力した。こうしたなか、昭和三年（一九二八）、玉利豊吉氏（市後柄）が短期茶業指導員として雇い入れられた。

戦後は昭和二十五年（一九五〇）、小里貞利氏が梅之木に製茶工場を設置したが、同四十五年（一九七〇）三月に廃止し、その後木野田貞則氏に経営移譲した。地域に製茶工場を設立するとともに、永野田地区の人たちは同二十五年度に永野田地区茶業振興会を結成し、茶園共進会等を毎年実施して茶業振興発展に努力している。

一方、昭和二十六年（一九五一）、駅前に有川喜典氏が製茶工場を設立、同三十四年（一九五九）に新農山村建設事業により、霧島農業協同組合の製茶工場が桂内に設置された。

昭和三十（一九五五）年代になって、初めて茶優良品種のやまとみどり・系統番号〇二七八などが導入された。同四十（一九六五）年代から、やぶきた種を主とした優良品種の導入を積極的に推進し、平成元年になって同種で全栽培面積の七割を占めるようになり、優良品種

の導入による品質改善に努力が重ねられている。

△現状▽ 高原地帯で冷涼な地には良質の緑茶が生産されるといわれ、本町の茶は品質が良いことで古くから知られている。別表に示す緑茶の生産状況は、荒廃茶園、在来茶園などの更新から優良品種園造成と規模拡大が図られ、これに伴い製茶工場も増設されて現在八か所の工場が操業している。

平成元年産の製茶生産量は五〇^トで生産額にして六九三〇万円である。茶は商品性が高く、しかも換金度も高い作物であり、現在の単位当たり生葉の生産量は六五〇銚内外、平均反収（生産額）は一八万円程度である。近年、茶園の生産装置化が進んでいる。いわゆる桜島降灰除去施設、晩霜害防止施設（スプリンクラー、防霜ファン）、被覆施設などの整備により茶業経営技術の改善が行われている。また経営規模拡大が図られ、安定作物として茶業経営農家に定着している。近年、し好に対する消費者のニーズも多様化して、上級茶への志向が強くなっている現状においては、茶業経営農家の意識の高揚を図り、優良茶生産に一層の努力をし、地域茶業振興発展を図る必要がある。

果樹園芸

果樹類は、その立地が自然的条件に制約されるため、種類ごとに特定の地域で生産地形成が進んでいる。

果樹園芸が永年性作物であるという特性から、新植の増加はすぐに生産の増加に結びつかず、栽培面積が先行し生産の伸びは結果樹齢に達してから生じている。本町の代表的な果樹栽培は栗・柿である。栗は昭和四十九年

（一九七四）、林

業構造改善事業

計画に基づいて

一〇^ヘの栗園造

成に取り組み、

平成二年現在で

は二十数^ヘが栽

培されている。

柿は昔から自家

用として、家の

周囲や畑の隅な

どに、在来の渋

柿・甘柿が植え



観光柿園（入水）

られていたが、昭和二十五年（一九五〇）に入水集落の木野田国盛氏が、富有柿を一畝栽培して成園化した。その後、市場出荷・販売も軌道にのり、昭和五十六年から柿狩り観光農園を開設するなど果樹園芸の一角を占めるようになった。多い日は三〇〇〜四〇〇人もの入園者がある。さらに昭和六十年（一九八五）、泉水柿生産組合で富有柿を中心に二畝の観光農園を開園、また床浪集落でも観光農園を始めた。その他の果樹として、昭和五十九年から「ゆず」二畝の栽培にも取り組んでいる。ブルーベリーもわずかではあるが植栽され、今後生食用、加工原料として規模拡大を目指している。リング栽培も、

昭和六十二年から数戸の農家が観光農園の確立を目指して生産性の向上に取り組み、果樹農業の活性化を模索している。

葉たばこ

△たばこの由来▽ 「花は霧島煙草は国分、燃えて上がるは桜島」とおはら節に

あるように、国分地方は葉たばこの産地として広く世に知られていた。わが国にたばこが伝来したのは天正年間説によると、「然るときは天正のころ（一五七二〜九一年）たばこ島より渡りて、大隅贈於郡国府村に植え」（烟

草百首摘薫）とある。鹿児島へは文禄四年（一五七九）にポルトガル船が、たばこ種子をもってきて指宿に植えられたという説があり、次いで国分に栽培された記録がある（葉たばこ研究第二六号、大熊規矩男）。

慶長年間説では薩摩大隅地方で慶長十一年（一六〇六）国分たばこの先覚者と伝えられる薩摩藩士服部左近衛門宗重が大隅の国分地方でたばこの試作を行っている。たばこの種子がどこから輸入されたかは、指宿にはポルトガル説、長崎にはオランダ説があり、いずれも口碑伝承のたぐいであって判然としない。

△戦後のたばこ耕作▽ 終戦前から食糧をはじめ、たばこも配給制となっていたが、戦後はさらに食糧事情が悪化し、食糧増産が国を挙げての最大急務になってきた。このようななかで、たばこ耕作の拡大を図ることは、食糧作物との競合、資材、肥料の入手難により、耕作面積、生産数量は減少した。

戦後のたばこ割当配給制度の下で、葉たばこの供給不足は極度に悪化して、耕作面積の拡大が急務となり、昭和二十三年（一九四八）まで関係機関と共同で増反運動を展開、片田舎まで根気強く巡回し、ひさを交えて懸命

の努力が続けられた。この結果、次第に耕作意欲も盛り上がり、曾於・伊佐郡もたばこ生産地として仲間入りをした。

本町も昭和二十一年（一九四六）は耕作面積五〇〇畧が、同二十八年（一九五三）には一〇〇畧となり、一〇〇〇当たり三万三〇〇〇円でかなりの農業収益につながった。しかし、葉たばこ供給不足は依然として改善されず、葉たばこの供給不足による横流し、耕作者の自家消費なども問題化してきた。国としても、改善策として①現況の耕作面積四万〇〇〇畧から五万〇〇〇畧に拡大する、②横流しを徹底的に防止する、の方策を打ち出し、同三十二年には全国の耕作面積は五万〇〇〇畧を突破した。この結果、同三十年以降になると生産量が使用量を上回り、需給の均衡を欠くに至った。これは耕作技術の向上、農薬の普及など、技術革新の効果によるものであるが、在庫数量は増大の傾向にあったため同三十二年（一九五七）から四か年にわたり減反措置を講じ、生産を縮小せざるを得なくなった。

昭和三十六年（一九六一）になると、岩戸景気と呼ばれる高度経済成長期に入り、原料葉たばこは適正在庫を下回ることで、翌三十七年（一九六二）から再び増

反に転じた。しかし、経済の好況に伴い、手間のかかるたばこ耕作を嫌悪する風潮もみられる時代を迎えた。昭和四十年代の高度経済成長は離農の促進につながり、このような状況に対応するために、経営規模拡大による省力耕作の近代化、耐病性品種の導入などが図られ、原料葉たばこの増産確保に努めた。同四十九年度の一人当たり耕作面積は八〇〇〇畧に拡大され、単作で一〇〇〇万円台の所得者も現れるようになった。

昭和五十年代になると、日本経済は低成長時代に入り、雇用の減退と農村へのＵターン現象が起こり、農業の見直し傾向が始めた。このような状況のなかで、鹿児島地方局では、国内原料供給基地として、産地の安定化を図り、鹿児島県は、四〇〇〇〇畧を大きく上回り、宮崎県も史上最高の三三八〇畧となった。なお、本町の耕作面積は、一二・四〇〇畧だった。

一方、国際化に伴う外国たばこの市場開放の要求も年ごとに強まってきた。国内産葉たばこの価格は外国産に比べると割高で、きびしい国際競争にさらされる時代になった。このために品質の向上を重点に、良質葉の確保、生産性の向上、ほ地の選定、良質堆肥の確保、適熟

葉の収穫、乾燥管理など、耕作全般にわたって改善指導の結果、品質改善の効果が結びついている。引き続き生産性向上を図る方策として、品質改善、高能率生産施設整備事業、生産性の向上と品質改善に努めている。なお、霧島町の昭和五十四年（一九七九）以降の耕作面積の推移は下表のとおりである。

昭和54～63年度の葉たばこ耕作推移表（霧島町葉たばこ総代区）

区分	年度	昭和54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
耕作人員		人 10	10	9	9	9	9	7	7	7	7
耕作面積		a 1,420	1,400	1,360	1,310	1,310	1,290	1,080	1,102	1,065	1,065
1人当たり面積		a 142	140	151	146	146	143	155	157	152	152
総量目		kg 32,946	32,165	38,195	32,267	33,874	30,452	26,907	30,544	23,473	24,463
生産額		千円 53,026	61,460	59,079	53,428	55,883	49,354	47,502	48,019	38,623	42,487

養 蚕

△沿 革▽ 安永、明治のころ島津重家は士民に大いに奨励した。文化のころ島津斉彬は各郷に奨励し、藩に養蚕係や織物係を置いて、苗の配布や飼育法の指導をした。西郷南洲先生は吉野に桑園を開き、優良蚕種の導入をした。

明治十六年（一八八二）、県に製糸組合が設けられ、また蚕糸講習所を設けて技術者を養成した。同二十二年（一八八九）旧重久村出身の小川与太郎・荒田虎一郎氏は自費をもって二年間福島県に滞在して研究し、帰ってからは自ら経営しながら他にも指導したので本業がますます発展した。同三十二年（一八九九）、村農会に技術員を雇い入れて指導させた。同三十八年（一九〇五）、初めて、繭と桑園の品評会を開いた。また翌三十九年（一九〇六）から専任技術員も雇い入れ、同年、蚕糸業組合を設け、組合長は農会長が兼任した。この年に模範桑園を創設した。

明治四十一年（一九〇八）、桑苗一〇万本を無償配布して植栽を奨励した。翌年には県・郡・村の補助により、桑苗九万本を無償で配布し前年に継続し植栽の奨励と経営規模拡大に努めた。この年の飼育戸数は一四四戸、掃

き立て枚数五九枚半、売り上げ価格一七九三円二〇銭と
なっている。

大正三年（一九一四）、桜島噴火により、壊滅的打撃を
受けたが、その後回復に非常な努力をした。同十四年
（一九二五）、売り上げ三四〇〇円、桑園三〇〇畝。翌十五
年（一九二六）の売り上げは一万七一九円。この年四
月三十日、郡養蚕、蚕業組合村支部が置かれ会長に塩川
弥九郎村長、副会長には荒田虎一助役が就任した。

昭和二年（一九二七）の繭代金一万四〇〇〇円、桑園
三三畝。翌三年（一九二八）の桑園面積は三四畝、飼育
戸数二七〇戸、繭代二万二九六九円であった。同九年
（一九三四）五月、養蚕実行組合長島田栄之助、技術員
徳永武次氏である。翌十年（一九三五）ころを最高とし
て、漸次減少し、戦時色濃厚となるに従って主要食糧増
産の必要に迫られ、さらに敗戦により本業は全く顧みら
れないようになり、戦後二十二年には戸数二五戸、生産
量六〇四錠となった。

昭和二十五、六年ころから社会情勢が安定し、食糧事
情もよくなるに従って回復の兆しがみえ始め、農業経営
上からも商品作物の導入の必要が認められ養蚕業は改め

て重視されることとなった。町においても、本業指導に
努力し、増殖対策として桑苗補助を行って奨励したた
め、その後は増加の一途をたどってきた。昭和三十二
（一九五七）年度に新農山村振興事業の一部、霧島農協
の事業として、大窪に稚蚕飼育所を設置し効率的な配蚕
に努めた。

△現 状△ 昭和三十年代から四十年代にかけては養蚕
業の安定的発展がみられたが、五十年代から生糸在庫の
累積、生糸価格の低迷などにより、小規模養蚕農家を中
心として減少している。後半になっても、さらに蚕糸業
情勢はきびしさを反映して、生産量は停滞気味に推移し
ている。最近では世界的なシルクブームを反映し洋装分野
を中心に絹需要が伸び消費は堅調さを取り戻しつつある
が、繭生産はここ数年大幅な減少が続いており、海外産
地の生糸供給の不安などが加わって、需要に見合った、
安定供給という面から、まだまだ問題が残っている。こ
のような情勢下、町内の養蚕農家も後継者難の傾向にあ
るにもかかわらず、桑園の基盤整備、肥培管理、優良品
種の安定供給、壮蚕の飼育環境整備による蚕作の安定向
上を図り、養蚕業の振興発展に努めている。

畜 産

△治 革▽ 明治三年（一八七〇）、津島家の牧馬が廃せられてからは、畜産業は

やや衰えたが、その後川北・田口方面に熱心な人がいて、ふたたび畜産熱が高まった。宮内三次郎氏は、一六

〇頭から一七〇頭、椎原八郎右衛門・川畑茂一郎両氏は六〇頭から七〇頭の牝馬を飼育していた。同十七年（一八八四）清水村東襲山村連合種馬組合が設置された。

明治二十年（一八八七）、小川十郎次氏は種馬を飼育していた。また同二十九年には増山二兵衛・永崎二次郎・永野田組合・石踊源太郎・川畑茂一郎・本田雄熊・荒田与兵衛・岡元助太郎・川越吉五郎・椎原喜之丞の諸氏がそれぞれ優良な種馬を飼育し、村内に一六頭の種馬がいた。この年、鹿児島県知事の訓令に基づき、東襲山産馬組合が組織された。

明治三十一年（一八九八）七月には、細山重安・川畑茂一郎・新村権之丞の三氏が関東・奥羽地方に出張して、詳しく調査研究し、おのおの私費をもって優良種馬のワシントン号・第十エスブ号・クジャク号・日光号を購入して帰郷した。その後優良子馬の生産が多くなり、本村生産馬の声価が高まった。

明治三十四年（一九〇一）から本田親吉氏も種馬を飼育した。そして、この年から子馬の品評会とせり市を始め、年々一万数千円の売り上げがみられた。その間、馬の飼育同好者は、牧馬組合を組織して、講話会を開催したり、集落で品評会を実施し、馬の共同運動場を造るなどした。同三十八年（一九〇五）の日露戦争の際、満州から濠州産の洋馬を郡内に二九三頭導入したが、その内の七頭が本町に売られた。売買価格は六〇〇円から二〇〇円で五か年賦で取り引きされ、七戸の農家で飼養された。翌三十九年十月に九州種馬牧場からも二頭を導入しこれを二戸の農家で飼養した。

明治四十一年（一九〇八）八月、本田雄熊氏は単身奥羽地方に出張し、優良種馬サラブレッド種第三フラミン号・アングロアラブ種エレガン号の二頭を購入、先に導入した濠州牝馬および他の優良牝馬に交配したので、すぐれた子馬が多く生産された。また同年、鹿児島県種馬所から一頭導入しこれを吉永休助氏が飼養した。

大正四年（一九一五）から本町にも専任の畜産技術員を設置した。翌五年（一九一六）、岩手県から牝馬を購入したが、始良郡に一頭配当され、これを本町の西田仲左

衛門氏が飼養した。同七年（一九一八）四月から国有種馬種付所を大窪に設置し、産馬のため非常に有利になった。これを基盤にして畜産はますます盛んになり、本町畜産振興のため大きな功績を残している。

畜産は古くから、有畜農業として、ほとんどの農家で飼養し、役畜として繁栄に大きな役割を果たしてきたが、近年、農業は機械化農業へと移行して、大中型農業機械は各層の農家に普及、導入されて、役畜の存在価値すらうすれてきている。これに伴って畜産の飼養形態も変化して、近年、子牛生産、肥育を重視した一貫生産の普及定着を進めるようになってきている。

本町でも肉用牛の生産をはじめとし、肥育牛の生産、養豚の生産と肥育、また乳牛の生産など経営種目によって畜産の振興を図っているが、畜産経営は肉牛の自由化（平成三年四月から）による輸入牛肉類の増大、それに伴う価格の低迷も予測される。一方、飼養農家の減少、農業従事者の高齢化など、生産構造も変化している。このようなきびしい畜産情勢をふまえて、今後はコスト低減、経営の合理化を基本にして、経営規模拡大を進めながら、需給動向に対応した安定的な供給に努め、消費拡

大を図ることが必要である。昭和から平成にかけての畜産の推移は次ページ表のとおりである。

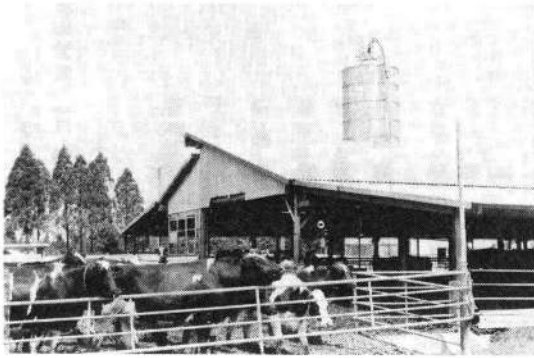
1 肉用牛 肉用牛は古くから使役も兼ねて、かなりの頭数が飼養されていたと思われるが、積極的に奨励したことはないようである。昭和年代になって飼育頭数は漸次増加、特に昭和二十（一九四五）年代になってからは著しく増頭している。このころ、町としても肉用牛に対する奨励・保護の方策を積極的に講じてきた。

本町は山村原野面積が広くて優良な野草資源が豊富であり、自給粗飼料の確保からも畜産には適した立地条件にあることから、優良牛の導入に取り組み、昭和三十五年度から農協と協力して優良牛導入について、補助金を交付、町内保留牛として、定められた期間内は町外に売り渡しなど、移動しないよう制限措置を講じている。これらの優良牛導入事業については、現在も継続事業として実施している。そのほか、農協有家畜導入事業等による肉用牛の増頭拡大策も図っている。肉用牛の価格は常に変動が激しく、流動的な相場のため、技術・経営指導奨励がむずかしい。しかも畜産経営基盤が浅く確立されていない。昭和四十年代が繁殖雌牛、肥育牛ともに飼養

家畜飼養戸数、総頭数、生産量調べ

単位：戸
数：頭、羽
総数：頭、羽
生産量：t, 羽

種別	年度		昭 37	40	45	50	55	61	平成 2
	内訳								
和牛	飼養戸数 総数 生産量	772 (881) 1,047 250	655 (703) 874 213	689 (888) 1,077 498	420 (763) 1,253 537	365 (861) 1,330 300	274 (830) 1,140 489	236 (780) 1,090 527	
乳牛	飼養戸数 総数 生産量	25 91 60	15 83 70	13 103 83	9 71 59	5 80 80	4 140 80	3 100 60	
馬	飼養戸数 総数 生産量	125 141 5	94 95 0	42 48 2	6 6 2	4 4 1	2 2 1	1 1 1	
豚	飼養戸数 総数 生産量	214 (生)171 744 (肉)573 1,200	141 (生)77 (肉)1,137 950	113 (生)204 994 (肉)790 2,150	42 (生)268 1,093 (肉)825 2,228	51 6,290 7,240	28 2,290 4,642	28 3,680 3,955	
山羊	飼養戸数 総数 生産量	38 38 10	8 8 0	4 4 2	1 1 0	— — —	— — —	— — —	
にわとり	飼養戸数 総数 生産量	850 4,900 卵 39 t	825 10,096 卵 80 t	516 5,673 卵 68 t	559 70,000 卵 130 t	536 87,000 卵 1,148 t	561 161,000 卵 1,840 t	469 157,000 卵 1,884 t	



乳牛農家

頭数のピーク時である。その後飼養頭数も年々減少している。近年子牛価格の好況により飼養頭数は横ばい、つまり現状維持の状態が続いているが、町においても経営規模拡大、年間五〇頭の系統優良牛の増頭確保対策を実施しているところである。

2 酪農 酪農は昭和三十五年（一九六〇）、町と農協が協力して、酪農奨励に乗り出し、初年度に四〇頭の乳牛を導入したのを

はじめ、同四十年（一九六五）

には一〇〇頭を

導入した。日産

九〇〇〇リットルで明治乳業と出荷契約している。当初は五〇戸の人

たちが飼育し生産に励んだが、

いろいろな事情から次から次へ

と酪農家は減少した。町では、酪農組合を設置し、相互の連絡・協力・共同研究など酪農振興に取り組んだ。また酪農青少年研究会（デリーリクラブ）を結成し、酪農に従事する青少年の育成を図った。

酪農情勢は、国民の食生活の変化とともに牛乳の需要は増大し、特に学校給食用も粉乳から飲用牛乳に切り替えたこともあって飲用牛乳の需要の好調につながった。その反面、乳量の生産調整などの影響もあって、乳牛生産農家は著しく減少している。現在三戸の酪農家で牛乳生産に取り組んでいるところである。

最近、酪農経営の収益は安定し、一頭当たりの泌乳量の増加もみられている。今後の酪農経営は国際化に対応した低コスト生産が極めて重要となっている。

3 養豚 養豚も古くから家庭の残菜処理や、農家の副収入を得る程度で一、二頭の飼育農家が多かった。多頭飼育を専業とすることは、価格の変動が激しいために困難であった。昭和三十七年（一九六二）の価格暴落を契機に、価格の安定保証制度が設けられ、価格も安定して飼養頭数も次第に増加してきた。昭和三十九（一九六四）年度には、五戸で養豚協業経営による霧島養豚舎が設立

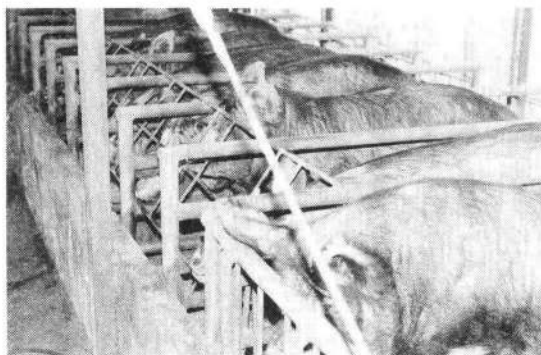
され、常時三〇〇頭を飼育し出荷されるようになった。なお、同業者の連絡協調のため町の養豚生産組合が結成され、農協の支援により年産出荷六〇〇〇頭を目標に努力している。

昭和二十一年（一九四六）ごろ種牡豚が初めて導入され、昭和四十（一九六五）年度には二頭の種牡豚が飼育された。近年の養豚の形態は、一貫経営と肥育專業経営

の形態であり、

生産豚は主にランドレース種またはパークシャ一種である。本町は県下でも有数の黒豚生産団地としての名声を高め、銘柄豚として出荷販売が向上している。

今後の養豚経



黒豚生産

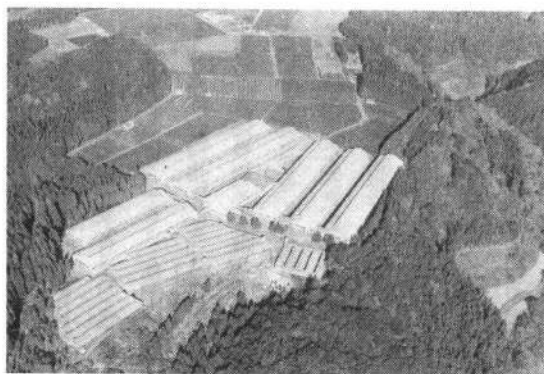
営は、牛肉輸入枠の撤廃の影響も懸念されることから、豚肉の消費拡大を図りながら需給動向に対応した安定的な豚肉の供給に努めるとともに、加工品需要にもこたえるため、より一層の斉一性と肉質の向上に配慮して生産コストの引き下げに努める必要がある。

4 養鶏

昭和二十年代後半に入り貴重な蛋白資源としての産卵養鶏が普及しはじめた。しかし、ほとんどが

副業的な小規模経営であった。

昭和三十年代に入ると企業の経営系列化が進み、市場占有率が拡大して小規模経営はなりたたなくなり、昭和三十年代と比べると現在は養鶏農家も半減している。本町で



竹下養鶏場

も竹下養鶏場が全体の九五割を占めている。このように多頭飼育が進む中で、新たに畜産公害の対応が迫られている。

表には産卵養鶏を主にして計上したが、昭和五十年代になると食肉用としてのブロイラー養鶏も盛んになり、本町にも南九州食品株式会社が進出し、年間六万羽が出荷されている。

三 農業技術の移り変わり

農林行政の変遷の資料によってみていく。農業生産が、昭和三十年（一九五五）以降高水準を維持しながら、安定的発展をみせている背景には、社会経済的要因のほかに農業技術の進歩に負うところが極めて大きい。戦後の農業技術の発展は農地改革を基盤に、農家の投資力の増大、国および地方公共団体による投融資の増大、土地改良の進展、試験研究の進歩、技術普及などによって推進された。

また農業技術の進歩には農業内部の条件のほかに、農業に諸資材を供給する他産業、とりわけ機械、化学工業

の技術水準の向上と生産力の発展にも負うところが大きいと考えられ、今後もこの重要性はますます加わってくるものとみられているが、戦後の農業技術が大きな進歩をみせたといっても、部門別には必ずしも均衡のとれたものとはいえない。

日本人の食糧消費構造からも、農業生産における米の位置からみても、農業技術が稲作を中心に進歩してきたことは当然と考えられるが、耕地の半ば近くを占める畑作技術の立ち遅れ、特に作物が多様であることもあって、地域差が水稻作に比べ著しい点は注目される。

毎年着実に発展している農業生産を支えてきたのは、なんといっても農業機械の導入を中心としたおう盛な農業投資と、これに対応した農業技術の進歩であったことはいうまでもない。ところで農業技術の進歩には二つの側面がある。一つは品種、栽培法の改良や肥料、農薬等、流動資本の増加が集約される栽培技術の進歩である。もう一つは、農業機械の導入や、農業施設の改良などにみられる労働手段高度化の側面である。従来の農業技術の進歩は主として流動資本財の増投に依存してきた。

昭和四十年代の国民経済の高度成長に伴う、農業労働力の減少、農繁期労働力の不足という現象が顕著となるにつれて、農家は必然的に労働生産性の向上を直接の目的とする営農の仕方や新技術を重視するようになってきた。これは技術面では労働節約栽培法や飼育法および機械化の活発な導入となって現れ、営農面では水田裏作の縮小、労働交換、共同作業や協業化の進展となって現れている。

作物別にみた主要技術の変化をみると、まず、稲作では田植え労力のひっ迫に対応して、田植え期間を拡大するための幾多の技術が導入され普及した。その主体は早・中・晩品種の組み合わせと、早期、早植え栽培の導入などである。

また田植え労力の節減のために全国的に直まき栽培を試みる農家が増加した。本町でも、昭和三十六年（一九六一）ころ導入し一五〇が栽培された。全国では八〇〇〇がほどの実施とみられている。直まき栽培は、日が浅く品種、栽培などの面で研究すべき点が多く、これが普及するにはまだかなりの時が必要で、昭和四十年（一九六五）前後からは普及していない。

次に注目されるのは化成肥料および除草剤使用の増加である。昭和三十六年（一九六一）ころの水稲の反当施肥量をみると、単肥並びに配合肥料が減少し、化成肥料が増加している。これは三要素を含有し、かつ粒状であるため施肥が簡便であることや、肥効が持続的で、分施肥する手間が省けることなどによるものである。また除草剤の使用も増加した。このほか、水稲の病害虫防除については、ヘリコプターによる薬剤散布が行われ始めた。同年の散布面積は全国で約一〇万haと推定されている。本町は立地条件あるいは水田分布状況からみて、ヘリコプターによる散布防除は実施されていない。今後は散布可能な地域を調査し実施することでも必要であろう。

麦作では、ドリル播、多播穴播、全層播など省力栽培が主要麦作地帯で逐次増加した。町内でも昭和三十年代の後半前後はドリル播、全層播栽培の麦作省力化が普及していた。昭和五十年代以降になると、麦作は減少し続けている。

野菜では需要の拡大に伴って、商品取引の大量化・規格化が要請され、各地に新しい野菜の特産地が形成され栽培技術も進歩している。戦後野菜の生理・生態の研究

が進むにつれ、育苗技術、施肥法などの栽培技術が進歩した。また新品種、新農薬の出現により、一〇^ア当たりの収量も高まっている。特に農業用ビニール、トンネル・ビニールハウスを用いた促成・半促成栽培、早熟栽培、抑制栽培によって栽培時期の変更を容易にし、周年供給力を増すとともに作柄を安定させる、画期的な技術の導入が図られている。

養蚕は、労働集約的技術体系のもとに営まれていた。

一方、生糸需要者の品質改善の要請を背景として、繭の品質向上と蚕作の安定に技術改善の主眼がおかれ、労働生産性の向上を期待できるような技術は少なく、あまり普及されなかった。

栽桑技術では、もっぱら一〇^ア当たりの収量増大を主とし、桑品種の改良、仕立法の改善が行われてきた。四十年代後半ころから、新植・改植による桑園改良、集団化が進み、拔根、植え付け、耕運除草、病虫害防除などの作業が機械化されている。

育蚕技術は、蚕品種の改良による繭の品質向上が主体をなしていた。繭が製糸工業の原料であるという性格が、生糸の社会的需要の変化に対応して絶えず品質改良

を促してきた。最近では積極的に飼育労働の節減を図り、蚕作を安定させる技術が普及している。

稚蚕飼育については、戦前から共同飼育が普及していたが、多湿環境における省力的飼育法が確立し、飼育法の標準化と施設の簡易化の工夫がなされ、一段と普及をみた。その後稚蚕共同飼育は二齢まで行われるのが普通であったが、壮蚕期の屋外条桑育と結合した三齢以後までの共同飼育が春蚕を中心に普及している。

育蚕労働の大部分を占める壮蚕期については、従来、かき芽、または摘み葉という多労的な採桑法による棚飼いが主体だったが、桑を枝のままで給与する、条桑育が、主な産地を中心に普及している。条桑育も、春蚕期については古くから行われていた飼育法であるが、品種仕立法、採桑方式などの改善により、年間を通じて実施されるようになっていた。年間条桑育は、従来の棚飼いの労働力の八割を占めていた採桑・給桑の労働力を著しく軽減するばかりでなく、各蚕期における飼育量の比率を変更にして他の農作業との労働配分を調整し、蚕作の安定に大きな成果をあげてきている。

そのほか、蚕病では、繭減収量の七割を占めている軟

化病に対する防除法の確立により、死蚕の防止による蚕作の安定はもちろん、飼育規模の拡大を可能にし、産地形成がなされている。養蚕技術も飛躍的に進歩し近代的な養蚕経営に取り組んでいる。

畜産技術では、零細な耕種農業の副業として導入された零細飼養が主体となっていた。経営的にみても、合理的発展はみられなかった。これは畜産価格が不安定であったことにより、農家の資本装備、技術導入への意欲が低調であったためとみられる。家畜の改良、飼育管理技術、保健衛生面における技術には、かなりの進歩がみられたが、他の農業部門に比べ技術の普及体制が十分でないため、これらの技術進歩も十分農家に普及浸透されていない。しかし、昭和四十年代から畜産物需要の増大に対応して、畜産経営の規模は次第に拡大される傾向にあり、協業化や企業的経営による多頭羽飼育も各地にみられるに従い、低位にあった技術水準も次第に高められるようになってきている。多頭化飼育の経営においては、畜舎の整備、施設、機具の充実など、資本装備化が進み、衛生管理技術も進歩している。

飼料作物については、多頭飼育の普及とともに作付面

積が増加している。夏作、青刈り用として家畜のし好性も高く、かつ耐干、耐倒伏性の強いニュー・ソルゴーがとうもろこしにかわる青刈りまたはエンシレージ用飼料作物として育成され、栽培が農家に普及している。またテオシントなどの南方型牧草が導入され良好な飼料作物として栽培されている。

養豚部門では、多頭飼養に適合した新しい形成の豚舎として、デンマーク式豚舎が大規模養豚に普及している。この形式の豚舎では、群飼が可能であるため、一人の管理頭数は従来の四、五倍になって作業能率が著しく向上し、排糞尿場所と居住区を区別してあるため、環境条件がよく家畜の衛生面にも大きな効果をもたらしている。

豚肉の加工需要の増大に対応するため、ベーコン型の豚といわれるランドレースを輸入して養豚の規模拡大がみられる。本町においてもランドレース種とパークシャー種の導入をし養豚経営が行われている。

鹿児島県では、平成元年度から年一回農業試験研究成果普及発表会を開催して、農業関係各試験場において達成された主要研究成果を提示し、生産現場へ農業新技術

の移転を速やかに行えるようになっていた。近年における農業技術の進歩は、農業生産力の向上発展に大きな役割を果たしているのである。

四 農業団体

産業組合

農村は、昭和二年（一九二七）から同一年（一九三六）までは、経済恐慌と農

業恐慌にゆさぶられ、政府は、農村救済や小作農問題対策に迫られた。自作農民の中には、労働者として都会へ出たり、小作農に転落するなど没落するものが相次いだので、地主富農中心に発足した産業組合も、救済対策に混乱する状態であった。政府は各種の経済的対策を行い、農業保護政策をとりながら、自力農村経済更生運動を展開した。これは、全国の農村に産業組合をつくること、農民は全部組合員とすること、信用・購買・販売利用の各事業を全組合が営むことなどであった。同八年（一九三三）から、産業組合拡充五年計画も実施された。

農業会

昭和六年（一九三一）に勃発した満州事変は、同十二年（一九三七）には日中戦

争に発展し、さらに同十六年（一九四一）、太平洋戦争へ突入後は、食糧統制のきびしい時代を迎えた。

産業組合は、本来の役割を失って国家代行機関としての性格を強め、米の一元集荷、肥料の一元配給、国債の消化機関として存在するようになった。昭和十八年（一九四三）産業組合と農会を合併して農業会となり、農家は強制加入させられ、農業会は農民に対して完全に国家統制を行う機関となった。

農業協同組合

終戦後、占領軍により農地改革が行われ、多くの農民が自作農となった。農協は、この農地改革の成果をまもる農民の経済組織として設立が進められた。これは、農業会に代わる農村の経済機関が必要であったことや、農民自らの必要に基づくものであったが、農民の協同意識が成長しないまま上部から設立が進められてきたきらいがあった。その推移を見てみる。

△草創期▽ 昭和二十三年（一九四八）五月、霧島村（現在の国分市の重久、隼人町の松永地区を含む）では一村一農協で霧島農業協同組合として設立されたが、設立当初から波乱の繰り返しであった。第一回の通常総会で



霧島町農業協同組合

は、開催時刻になっても定数に達せず、数時間かけて組合員を招集し、ようやく開催にこぎつけるありさまであったと議事録に記されている。農協経営は資金繰りをはじめとし、すべてが苦渋の連続であった。特に借入依存の体質は、貯貸率一〇〇％以上、購買未収金の延滞、貸出金の固定化など、悪い条件がそろいすぎていた。また炭団事業は設立二年目で経営の悪化により移譲問題が提案された。

昭和二十五年

(一九五〇)に

は行政区の変更に伴い、桂内支所を設置して業務の拡大を図った。翌二十六年(一九五二)九月には臨時総会で再建整備計画を決定してから、固定化債権

の回収に役職員が日夜努力するという苦難の毎日が続いたが、同三十一年(一九五六)に再建整備優秀賞を受賞してから経営が安定し、事業量が増大していった。

昭和三十年の共済事業をはじめとし、購買販売取り扱い中心から、総合事業への転換期を迎え、同三十三(一九五八)年度の稚蚕飼育所および製茶工場建設、同三十六年(一九六一)、澱粉工場の誘致、三十八年(一九六三)にはプロパンガスの取り扱いなど、数多くの事業活動を展開していった。

△建設期▽ 昭和四十年代中ごろになると、水田農業の減反政策のもとで水田の荒廃が進んでいった。また兼業化・高齢化・婦女子化が進み、農業労働力が大幅に減少し、農村の環境は大きく変ぼうしていった。そこで、組合員の多様な生活ニーズに対応するため、昭和四十四年(一九六九)には第一回農協運動会を開始、翌四十五年(一九七〇)には本所事務所の新築、四十七年(一九七二)にはAコープ店舗の新築、四十八年(一九七三)には給油所設置、五十二年(一九七七)には農業機械センターの設置など、多様化する組合員生活に対応するため施設整備の強化などを図り、地域住民の生活の拠点とし

ての機能を強化して、業務の多角化を行い、農業の拡大を図ってきた。

昭和五十（一九七五）年代になると、組織基盤の強化、組合員の営農・生活の安定を図るため、集団検診の実施、農政連支部の発足、作目別組織の発足、婦人部活動の展開などに取り組んだ。同六十（一九八五）年代になると、第一回の農協まつりを実施するなど、地域住民を含んだ農協活動へ変わりつつある。経営の近代化および時代の流れに乗り遅れることのないように、昭和五十五年（一九八〇）の青果物精算の電算化をはじめとして、貯金業務のオンライン化、各種業務のOA化が図られてきた。

△発展期▽ 農畜産物需給の不均衡と消費者ニーズの多様化がいつそう進むなかで、農協経営は低成長期へと向かい、営農面では、高冷地野菜と畜産を組み合わせた複合経営が進められて、ある程度その効果をあげてきたが、今後の発展が望めない状態となってきた。

平成元年度、Aコープ店舗を改築するに当たり、地域住民の生活文化活動を強化するため、施設の整備を図り趣味、教養の文化教室や、各種イベント、手づくり加工

活動など、多様な生活文化活動を計画的・継続的に実施し、生活事業は着実な前進を続けている。なお、当組合の地域性を生かした農協経営を行うため、行政が目指す農業と観光の町づくりを目標にして、今後当組合は、組合員、地域住民のためにをなすべきかを十分に検討する大きな転換期に差しかかっている。

△組合の概況▽ 組合員数は一三三三人（正一〇四一人、准二八二人）、組合員組織としては、集落組織のほか、和牛二八〇人、園芸二四人、養蚕一三人、養豚二八人、茶業二七人、シイタケ三五人、葉たばこ七人、農協婦人部五五〇人、高原クラブ一〇人、経営者クラブ九人、稲

主要勘定と事業量の推移

（単位：万円）

年 度	出 資 金 立 積	貯 金	貸 出 金	販 売 品 販 高	購 買 品 給 高	期 共 済 長 保 有
昭和34年度	564	3,653	3,087	4,199	3,449	—
44年度	1,534	23,040	21,467	18,066	10,631	97,956
54年度	12,283	193,592	85,325	56,773	69,869	1,104,440
63年度	24,034	329,991	68,559	63,282	82,217	2,831,956

作一八人が活動している。役職員は理事九人（うち常勤一）、監事三人、職員五八人（うち男三二、女二六）、職員のうち営農指導員五人、生活指導員一人である。

主要施設として、本所事務所のほか、支所二、Aコープ二、給油所一、農業機械センター一、肉用牛肥育センター一、購買店舗二、集出荷場一を有する。

歴代組合長

増山 武盛 昭和二十四年五月～二十六年四月
内村 義幸 昭和二十六年五月～三十年四月
竹下 忍 昭和三十年五月～五十八年四月
新村 俊 昭和五十八年五月～現在

常務理事

入米 岩男 昭和二十四年五月～二十六年四月

農業共済組合

農業共済組合は、組合員が不慮の災厄によって受けることのある損失を補て

んして、経営の安定を図るため、昭和二十二年（一九四七）十二月十五日に公布、施行された農業災害補償法によるものである。水稻、麦、養蚕、家畜の各共済事業の発足とともに、同二十三年二月二十三日に組合が設立された。組合員の資格は霧島町に住所を有し、水陸稲、麦、養蚕、牛馬、種豚を所有、または管理する者、建物

を所有し、農業を営む者である。

農業共済事業の種類

- | | |
|------------|-------------------------|
| 一 農作物共済事業 | 水稻、陸稲、麦 |
| 二 蚕繭共済事業 | 春蚕、初秋蚕、晚秋蚕 |
| 三 家畜共済事業 | 牛、馬、種豚、肉豚 |
| 四 果樹共済事業 | みかん類、びわ、すもも |
| 五 畑作物共済事業 | ばいしよ、大豆、一番茶 |
| 六 園芸施設共済事業 | 温室、プラスチックハウス、施設園芸用の付帯施設 |
| 七 任意共済事業 | 建物 |

歴代組合長

増山 武盛（昭和二十三年～二十六年五月）
石踊 清次（同 二十六年六月～三十年五月）
中馬 親盛（同 三十年六月～四十九年三月）
昭和四十九年四月一日から始良地区農業共済組合（始良郡一か町統合）として発足する。

始良地区農業共済組合の概要（平成二年四月一日現在）
一 組合合併

第一次 昭和四十九年四月一日（一か町）
第二次 昭和五十三年十二月一日（一市吸収）

- 二 総農家戸数 二五、一六三戸
- 三 組合員戸数 二三、五七一戸
- 四 総代数 二一四人
- 五 共済委員（共済連絡員）数 一、〇三六八
- 六 損害評価委員数 三一八八
- 七 損害評価会委員数 七一人
- 八 役員数 三一人（理事二八人、監事三人）
- 九 現組合長理事 竹ノ上篤規
- 十 職員数 六三人（業務四八人、獣医一五人）

五 関係施設

緑の村

所在地は、始良郡霧島町田口二六〇八一
五。緑の村は昭和五十四年度から同五十六年度に三か年計画継続事業により、農村地域農業構造改善事業（緑の村整備事業）の実施によって施設を整備した（六六一ページ第四編第五章「観光」参照）。

基幹集落

昭和三十九年に山村振興法が制定され、昭和四十年から山村振興の第一期対策がスタートし、さらに同四十七年度から第二期対策が開始



基幹集落センター

業により設置したものである。

この施設は産業の振興と住民の福祉向上に資するため、拠点となるセンターとして広範囲に利用している。施設の内容は建築延べ面積六五・五六平方メートル、鉄筋コンクリート造り三階建てで、一階は管理室・図書室・和室・機械室、二階が視聴覚室・保健相談室・会議室、三階が娯楽室、それに屋上となっている。今後においても

されている。本町も四十六年度に山村振興地域指定を受け、第一期対策、第二期対策に取り組んで施策を講じてきた。基幹集落センターは、山村振興第二期対策の五十四年度に、基幹集落センター設置事

話し合いの拠点施設として、また研修の場として、より多くの地域住民が利用するであろう。総事業費は九四五万七〇〇〇円。

多目的集会センター 所在地、霧島町川北。山村振興三期対策で昭和六十年度に地域指定を受け、当年

度で計画樹立、同六十二年度から事業実施に取り組んだ。第三期山村振興農林漁業対策事業の集落環境整備事業により、多目的集会施設として整備したセンターである。この集会センターの施設は地域住民の活動および資質の向上を図るための研修会、講習会、展示会、各種会合の開催、農産加工調理実習、共

同洗濯などを通じ技術の習得や、婦人の連帯意識の醸成を図るようになっている。

施設の内容は、建築面積二九九・九四平方メートルの鉄筋コンクリート造り平屋建てで、大会議室・婦人研修室・調理加工室・洗濯室からなっている。昭和六十三年七月二十日のオープン以来、調理加工実習をはじめ、洗濯（毛布、コタツぶとん）講習会、研修会などと大変多くの人たちが積極的に活用し、連帯感を深めているだけでなく、生活改善の波及効果をももたらしめている。総事業費は五八〇万三〇〇〇円。

六 林 業

林業の概況

本町の森林面積は六五二一畧で、土地面積八二三一畧の約八〇畧を占め、さらに人工林は二七〇〇畧で、人工林率六五・八畧となっている。所有形態別は民有林四一〇二畧、国有林二四一九畧で民有林の内訳は私有林四〇四六畧、公有林五六畧。齢級別割合は一〇三畧級三四畧、四〇五畧級三六畧、六畧級以上が三〇畧となっている。



多目的集会センター

保有山林規模別林家

(単位：林家数＝戸、面積＝ha)

総数		0.1～1.0ha未満		1～5ha未満		5～10ha未満		10～20ha未満		20～30ha未満		30ha以上	
林家数	面積	林家数	面積	林家数	面積	林家数	面積	林家数	面積	林家数	面積	林家数	面積
163	1,150	470	178	245	447	29	175	14	176	2	43	3	131

資料：農林業センサス

樹種別面積

(単位：面積＝ha、蓄積＝千 m^3)

区分	針葉樹				小計	広葉樹	竹林	その他	計	人工林面積	人工林率
	スギ	ヒノキ	マツ	その他							
面積	1,354	987	374	28	2,743	1,070	76	213	4,102	2,700	65.8
蓄積	273	139	88	3	503	84	(千束)28	—	587	444	

資料：地域森林計画

人工材の除伐、間伐対象森林面積

(単位：ha)

樹種	区分	除伐対象森林 (Ⅱ～Ⅲ齢級)	間伐対象森林 (Ⅳ～Ⅶ齢級)	人工林面積
スギ		308.81	708.72	1,354.31
ヒノキ		181.84	660.71	987.15
計		490.65	1,369.43	2,341.46

資料：地域森林計画

間伐実施面積

(単位：面積＝ha、材積＝ m^3)

区分	昭和59年度	60	61	62	63	備考
面積	118	154	60	96	81	
材積	2,125	1,920	2,840	1,670	2,930	

資料：農林事務所

また樹種別内訳はスギ一三五四^{ヘクタール}で三三^{パーセント}、ヒノキ九八七^{ヘクタール}で二四・一^{パーセント}、マツ三七四^{ヘクタール}で九・一^{パーセント}となっている。造林は二〇〇年前ころから、人工造林が一部の所有者（島津藩家老桂氏、その他大地主）により、すでに始められており、その名残が確認されている。戦中・戦後は乱伐により、森林資源は荒廃していたが、森林組合などによる、スギ・ヒノキを中心とした拡大造林と、松くい虫跡地などの積極的な造林により、現在（平成元年）では人工林率も六五・八^{パーセント}になっている。しかしながら、現在においては造林対象の奥地化や、材価の低迷、労働力不足等により林業を取りまく情勢はきびしく、造林面積も減少している。

保育では森林組合の作業班と林家の自家労働により順調に実施されている。間伐では、スギ・ヒノキの人工林が戦後植栽された林分がほとんどで、健全な森林資源を造成するため除間伐の実施を急ぐ必要がある。本町は各種補助事業を活用し、また自力でこの除間伐を実施している。伐採では立木の伐採状況をみると、最近三か年（昭和六十―六十二年）の伐採面積の平均は三三^{ヘクタール}であり、材積は五〇四八立方^{メートル}となっている。

△林道等整備状況▽ 生産基盤の林道については、林道密度が一畝当たり二・八畧と低く、町道・農道などを含めた林内道路密度においても、ヘクタール当たり一三・八畧と低い。今後林業生産基盤を整備することにより、合理的・集約的な林業経営を進めるため、林内における林道・作業路などの開設促進が地域の重要課題となっている。

△林家数および林業就業人口の現状▽ 本町の林家数は七六三戸で、所有規模別では〇・一・五・〇ハル未満が七一五戸で、総林家数の九四％を占めている。林業就業人口は年々減少して、作業能率も低下の傾向にあるのが現状である。

町有林

町有林は、大字田口・永水地区の字六区
域に林地があり、総面積二九・七^〇であ
る。小規模な経営面積ではあるが、町の基本財産づくり
はもとより、町民の模範林として下刈り、枝打ち、つる
切り、施肥、除間伐の施業を公有林計画に基づき計画的
に実施し、健全な森林の造成に努めている。

国有林

国有林については、本町の森林面積の約三分の一（二四・一九％）を占めており、

町の重要な資源となっている。国有林の持つ多面的機能は、農林業の中心である水源のかん養を果たし、国有林内に水源を発する霧島川が、本町の中心部を蛇行しながら流れ、農業用水としてあらゆる農作物へ安定した供給を行っており、地域農林業振興上欠くことのできない資源である。また国有林は町木であるアカマツの保全と、町花であるミヤマキリシマの育成保護や各種鳥獣の生息地など多くの機能を有して、本町の観光振興上にも多大な恵みを与えている。

森林組合

霧島町に森林組合が発足したのは、昭和十六年（一九四一）十月十五日で、理事

九人、監事五人、組合員一一三人で組合運営を開始した。同二十五年に分村したが、しばらくそのまま運営しており、同二十七年五月二十二日、理事七人、監事三人の役員で新しい霧島町森林組合として発足した。この組合の目的については、組合総則に次のように示されている。「この組合は組合員が協同して、森林施業の合理化と、森林生産の増進を図り、経済状態を改善し、社会的地位を高めることを目的とする」。民有林の野放しの経営をこのような目標のもとに統一し、合理的な林業経営

をし、協同の力によって、増産を図ることに森林組合存在の意義がある。

昭和四十六年に始良東部一市三町（国分市・隼人町・福山町・霧島町）の森林組合が合併し発足した。常勤理事一人、非常勤理事一人、監事三人、職員二人。また正組合員七六八四人、准組合員二七人で、組合員の要請にこたえ組合としての経営改善の必要に応じて新しい課題に向けて努力している。森林組合の活動は利用事業中心から、除間伐事業および造林事業の推進、森林地域活性化緊急対策事業、さらに森林総合整備事業の計画と実施推進並びに新林業構造改善事業などの促進その他各種事業を導入し、活力ある健全な森林づくりに努めている。

八沿革

設立 昭和十六年十月十五日

移行総会 同 二十七年一月三十一日

組織変更認可 同 二十七年三月十三日

（霧島町森林組合発足）

定款変更認可 同 三十四年六月二日

（霧島町森林組合）

森林組合合併 同 四十六年九月（始良東部森林組合）

第二章 経 済

森林組合の現状 (単位：人，ha，千円)

区 分		数 量
組 合 員 数		7,711
組合員所有森林面積		14,117
払 込 済 出 資 金		72,497
役 員	常 勤	1
	非 常 勤	16
職 員 数		12
作 業 班 員 数		25班 88人
作 業 班 延 人 数		11,439

資料：始良東部森林組合

川 野 正 雄		同 五十九年九月～現在	歴代組合長
川 畑 純 雄		同 五十六年九月～同五十九年八月	
五 領 和 男		昭和四十六年九月～五十六年八月	
始良東部森林組合合併発足後の歴代組合長			
内 村 義 幸		同 四十二年五月～四十六年八月	
竹 田 岳 夫		同 三十九年六月～四十二年四月	
新 村 親 志		同 三十五年五月～三十九年四月	
上松瀬栄次		同 二十七年五月～三十五年四月	
新 村 親 志		同 二十四年五月～二十七年四月	
厚 地 藤 蔵		同 二十二年五月～二十四年四月	
岩 城 盛 蔵		昭和十六年十月～十七年二月	

森林組合の活動状況

(単位：数量＝m³，金額＝千円，苗木＝本，肥料＝袋)

区分 年度	販 売				購 買		利 用			
	販 数	売 量	金 額	生産 数量	金 額	販 売 数 量	金 額	利 用 量	金 額	その他
昭和 61	11,358	230,164	—	—	苗 木 225千本 肥料外 5,689袋	13,671 21,304	1,314ha	135,783		
62	11,700	290,355	—	—	苗 木 252千本 肥料外 6,627袋	14,933 20,676	1,530ha	202,113		
63	10,377	232,957	—	—	苗 木 179千本 肥料外 6,597袋	10,965 21,463	1,472ha	200,481		

資料：森林組合

しいたけ産業

特用林産物では、しいたけが主体をなしており、霧島山ろく地帯は県内でも

っとも大きなしいたけ産地である。最近までは多品種による生産量の増大を主に、指導推進を行ってきたが、近年は消費者のニーズに対応して商品性の高い、厚肉系のしいたけ生産への転換を図っている。厚肉系の品種の導入や、ほた場環境管理技術の改善を推進しながら、しいたけ産



しいたけ栽培

地づくりに取り組んでいるが、しいたけ産業も

外国産の輸入増と国内供給減、品質格差などときびしい環境のなかにおかれている。

霧島町のしいたけ栽培農家戸数は二二戸で、

乾燥しいたけの生産量は一八^ト、生しいたけは六四^ト、ほた木の保有本数一五〇万本（昭和六十一〜六十三年）となっている。本町のしいたけは、良質生産地の名声が高められ、銘柄が確立されて、今後の需要増大が期待されている。

狩 猟

太古は食糧を得るためや、衣服の原料を得るために狩猟が行われ、それが人間生活の重要な部分を占めた。その後、農耕生活が進むにつれて、狩猟に遊びの要素が加わってきた。そして、タカ狩りなどは支配階級のレクリエーションとして栄えた時代があり、明治維新を迎え、それに続いて散弾銃が普及したため狩猟は大衆化し、狩猟者も増大した。

わが国の狩猟制度は明治六年（一八七三）に制定された。「鳥獣猟規則」によるものがその始まりであるが、当初はどの鳥獣をとってもよいというものであったため、江戸時代に厳重に保護されていたツル・コウノトリ・トキ・シカなどの大型の鳥獣が減少してしまった。これに対処するため狩猟法規の改正はしばしば行われた。昭和三十八年に狩猟法の一部を改正し、法律名も「鳥獣保護及狩猟に関する法律」と改め、新しく都道府県ごと

に鳥獣保護事業計画を樹立した。

一方、狩猟免許制度にも大幅な改革が行われてきた。

昭和五十三年には鳥獣保護の充実、狩猟者資質の向上と

秩序ある狩猟の確保とを主眼として鳥獣法が一部改正さ

れ、狩猟免許試験制度の導入、登録制度の新設など、制度

が大きく変わった。今後の狩猟は、最近の自然保護の時

代的要請を受けて、ただ自然にふえたものを捕ることか

ら、ふやして捕る狩猟に変わり、また近代的な鳥獣管理は

鳥獣の生息状況に応じて、狩猟期間や一日の捕獲数を定

めて鳥獣保護の概念から狩猟が逸脱しないようにしてい

るものがあるが、狩猟者が進んで法令を守らなければ、狩

猟資源を維持することができず、やがては狩猟そのものが

資源の激減によって成り立たなくなるかもしれない。

また狩猟に伴う危険防止には特に配慮し、少なくとも

事故に起因する事由によって、狩猟が国民の理解と協力

を得られなくなるようなことのないようにすることが狩

猟者の責務である。なお、現代は野生鳥獣の食糧として

の依存度は低い、鳥獣肉は狩猟者ならではの嗜好し得な

い天与の資源であるので、捕獲物は最高度に利用する術

をもつことも大変必要である。

七 水 産 業

現 況

本町の水産業は河川に生息する魚類を水産資源とした河川漁業で、漁獲種類、漁獲数量は多い方ではない。年間を通じての漁獲専門者はなく、夏季に霧島川水系を中心に生息する代表的な魚類であるアユ・コイ・フナ・ヤマメ（霧島川上流に生息）類の釣魚を楽しむ釣り師たちが多く見られる、といった

放 流 数 量 (単位：匹)

年度 種別	昭和63	平成1	2	水 系
ア ユ	23,000	23,000	25,000	霧 島 川
コ イ	2,500	3,000	3,000	同 同
ウナギ	1,500	1,500	1,600	同 同
ヤマメ	6,000	7,000	7,000	同 同

町統計資料

漁 獲 数 量 (単位：kg)

年度 種別	昭和63	平成1	2	水 系
ア ユ	250	150	250	霧 島 川
コ イ	20	30	50	同 同
ウナギ	20	10	15	同 同
フ ナ	2	2	2	同 同
その他魚類	38	50	50	同 同

町統計資料

のが現状である。霧島川には毎年、隼人町の松永漁協の協力を得ながら、アユを主として放流している。また松永漁業協同組合の河川管理区域は天降川本流と霧島川との分岐点から上流の霧島川全水系となっている。

振興方向

天降川を本流とする霧島川全水系は、早くからアユの生息河川として、地域住民のレクリエーションや観光地としての重要な役割を果たしている。近年



霧島川の清流

地域開発、生活・産業排水によって水質汚濁が進み、魚の生息環境が著しく悪化してきている。これらの要因を防止し、各河川の美化、愛護運動を展開し、自然環境保全に努め、魚族の繁殖

を図らなければならない。またアユ・コイ・フナ・ウナギ・ヤマメなどの稚魚を放流し、乱獲を防止して、地域住民が楽しめる内水面漁業の振興に努める必要がある。

採捕禁止期間は、水産動植物の繁殖保護を図るため、漁業者も遊漁者も守るべきこととして定められている。

これに違反して採捕した漁獲物の所持、販売も禁止されている。県内水面漁業調整規則第二五条による期間は次のように定められている。

河川湖沼	水域	禁 止 期 間
	水産動植物	
アユ	一月一日から五月九日まで	
ヤマメ	十月一日から十二月三十一日まで	

天降川水系のアユ漁 解禁日 毎年六月一日
霧島川水系のアユ漁 解禁日 毎年七月一日

八 商 工 業

商工業の概況

明治二十九年（一八九六）に建設された浜之市・霧島線の県道開通は、商工業に大きな影響を及ぼした。一日何便もの馬車が、国分

―霧島間を往復し、商店街も活気づいていた。大窪と田口は、オッポ茶屋・タグツの馬場と呼ばれて村内でもにぎやかな商店街であった（二六ページ「昔からの主な集落」参照）。

霧島神宮駅が開設されると、それまでの湿田地帯であった狩川地域（現在の駅付近）が、にわかに脚光を浴び、村内の多くの商店が移転し、なかには町外から転入



霧島神宮門前町商店街

してくる商店もあった。したがって新しい店舗が集まり、経済・文化の中心は駅付近へと移っていった。また商品の流通は大きく変わり、これまで生鮮食品は、国分隼人方面の行商人の手に頼っていた

が、その日の内に鹿児島市場から仕入れができるようになった。現在では冷凍庫などの普及により、いつでも、どこでも入手できるようになっている。

霧島神宮一帯では、神宮境内の社務所近くまで、土産品店、うどん・そば屋、旅館が軒を接していたが、大正末期から昭和初期にかけて参道が開通した時に、現在地に移転した（六二ページ「参道」参照）。

昭和四十年代以後になると、急速な車の普及に伴い、ガソリンスタンドや自動車修理工場などサービス業の増加がめだっている。この時代は、高度経済成長政策や所得増進計画が打ち出されたところで、所得の増加は消費生活を豊かなものとして、商店街も活発となった。なかでも、スナックや喫茶店・食堂が増え、同六十年代には、セルフサービス方式の大型規模の総合小売店（スーパーマーケット）が四店舗となり、生活環境は、都市と地方との差が無くなってきている。

現況は、町北部にある霧島神宮を中心とした旅館・ホテル、食堂、土産品販売など観光サービス業の門前町商店街と、町中央部のJR霧島神宮駅周辺に食料品、日用雑貨、衣料品、飲食店など小売店を中心とした駅前通り

会商店街とに代表される。

霧島町の工業は、明治中期から、ほとんどが手工業で、桶職人、大工、下駄職、竹細工業、豆腐加工業、飴つくり業などが村内一円に散在していた。特殊なものとして霧島神宮周辺に、足踏式の「ろくろ」による木工細工の土産もの製造業者が五、六軒あった。昭和の初期に武藤重信氏の父（故人）が樟脳工場を経営していた（現在の西工務店隣の中央橋になっている場所）。樟脳は当時の霧島では有望であつたらしく、大窪の河原にも樟脳製造場があつた。

また農家の副収入として、麻を栽培して麻綱の原料として出荷していた。大窪では畑に麻を栽培し、集落共同で大きな蒸し釜^{がま}を築いて、持ち寄った麻を蒸し、皮をはいて、水にさらしながら不純物を取り除く、といった作業で麻綱の原料を作っていた（蒸し釜は現在の霧島石油の下を左に入った所にあつた）。これは大正十三年ごろまで続けられていた。農家の家内工業ともいうべき、機織りもあり、家族の着物や作業衣は手織りものが多かった。大正末期から昭和初期にかけて、霧島には、製材工場、製茶工場、線香工場（田口）、骨粉工場（伊田）など

があつたが、その動力は、すべて水車を利用していた。特に霧島は六五^{ろご}が山林で製材工場は各所に見られた。また豊富な山林資源を背景に、柄木^{えぎ}の製材製作所も四か所があり、登山杖・木刀・農具の柄などの出荷販売も盛んであつた。昭和三十六年（一九六一）には、都城市の首藤製糸の経営による霧島澗粉^{めん}工場が誘致され（現在の駅前^{駅前}の農協住宅団地）、町内の甘諸作付けの意欲につながつた。

昭和四十年（一九六五）の主な工業は次のとおりであつた。

- | | | | | | | |
|--------------------|---|------|---|--------|---|-------|
| 醸造業 | 一 | 澱粉業 | 一 | 鉄工業 | 一 | 柄木製材業 |
| 製菓業 | 二 | 製茶業 | 五 | 建築家具業 | 四 | |
| セメント・セメント瓦・井筒など製造業 | 一 | | | | | |
| 平木工場 | 一 | 薄板工場 | 一 | 粘土瓦製造業 | 一 | |
| 豆腐製造業 | 三 | 弓製造業 | 一 | | | |

現在では、観光土産品の製造業と他に衣類縫製工場、木工業、電子部品の下請工業があげられる。観光土産品関係は陶器製造業が五社と、漬物、食肉加工、自然食品製造業合わせて四社とがあり、観光土産品としての工業生産が本町の特徴といえる。

輸送体系

商工業の活動に必要な物資の輸送手段果たしてきた。本町の商工業の動態も日豊線の開通を契機に大きく様変わりした。それまでは、明治二十九年（一八九六）に、浜之市―霧島間の県道が開通した。県道開通以前は、馬の背による輸送か人力による輸送手段しかなく、行人の役割も大きかった。県道が開通したことにより、荷馬車が輸送の主役になったが、霧島の農林生産物を積み込んで、夜明けに出発して、国分・浜之市まで運搬し、その帰り便で、霧島で消費する日用品、雑貨を運んだ。しかし、日豊線の開通による鉄道輸送は画期的な変革をもたらした。特に林産物、杭木、木炭などの大量輸送を可能にし、製材所や澱粉工場などの進出など商工業の振興に大きな役割を果たした。

昭和三十年代後半から同四十年代前半になると、トラックが鉄道に代わって主役になってきた。トラック輸送は日本全国への長距離時代を迎え、流通体系は大きく変わった。本町においても、山之上運送が昭和五十一年に、また後藤運送が同五十三年にトラックによる運送業を始めた。一方、これまで鉄道による小荷物運送、郵便

小包による配送も、各家まで届ける宅配便または宅急便と呼ばれる全国組織の会社が、昭和五十年代前半から台頭しはじめた。町内くまなく取扱店ができ、激しい輸送合戦を繰り広げている。

霧島町商工会

商工会の前身として霧島村商業協同組合があげられる。日中戦争を契機に、戦時体制に移行しつつあった国の指示に基づいてつくられた団体である。太平洋戦争へと拡大していく中で、物資は軍需に回され、民間には苦しい配給制度が実施された。乏しい物資を公平に分配することを主な業務としていたもので、事務局を駅前の地主園伝次郎宅におき、理事者は物資の配給に、なみなみならぬ苦勞をしたものである。当時の会長は真田信雄、副会長は鳥丸正兵衛の両氏であった。

終戦後の昭和二十四年（一九四九）に解散。その後、同三十二年、現在の商工会の発足まで、商工業のグループの空白状態が続いた。昭和三十年代に入り、旅行ブームによる観光事業の発展に伴って、商工業者も増えてきたが、本町はいずれも零細企業であり、その経営基盤も弱く、決して満足できるものではなかった。そこで、こ

れらを整備充実するためには、銀行その他政府貸付資金活用の必要に迫られた。そのためには、共同担保制の組織が必要となり、昭和三十二年（一九五七）九月四日、霧島村商工会の設立総会を開催、一二五人の会員による商工会が生まれた。

商工会が結成されると、が然商工業者は活気づいてきた。盆と正月には制度金融を利用して、仕入れは豊富になり、抽選つき大売り出しなどが、商工会の音頭とりでにぎやかに行われるようになった。また同年から霧島神宮の豊饒祭に、町内各小学校児童による「タルミコシかつぎ行事」（四十年から中止）や奉納相撲を開催して、郷土行事を盛り上げた。日本経済の成長に伴って、商工業界もあの手の手の新商法を考えつき、いわゆる商戦と呼ばれるようになった。

税対策、店舗改装、販売方法など、業者も経営努力が要求される時代を迎えた。商工会の果たす役割は、ますます大きくなってきた。昭和三十五年に商工会の組織等に関する法律が施行されたのに伴い、県知事の認可を受け公益法人として設立された。その後スーパーマーケットの大型店の進出は、この業界にも脅威を与えはじめ

た。そこで専門的な指導者が必要になり、商工会は、適任者を町に依頼して同三十七年（一九六二）に鹿児島市出身の山本安雄氏を迎えた。現在の経営指導員のはじまりである。これにより町商工業の総合的な改善発展を図り、商工業者の経営の安定化と健全な育成を目的とした大売り出し実施や、特産品市（霧島おじゃんせ市、霧島高原朝市）などを企画し、商工業の振興を図った。また小



霧島町商工会館

規模事業所（従業員二〇人以下の事業所）に対する経営指導、相談および講習会の開催など、経営改善普及に努めている。

昭和五十七年三月三十一日、霧島神宮駅横に商工会館が完成。平成二年現

第二章 経 済

業種別店舗数と所在地区（平成2年現在）

小 売 業

業 種 \ 地 区	駅前	大窪	永水	田口	栢田	霧島	計
総合スーパー形式	1			1	2		4
食料品、日用雑貨、 一般商店	4	4	2	4	1	2	17
菓子製造販売	2						2
酒類販売	1	2	2	2	1	4	12
履物販売	2						2
金物、建材販売	2			1	1		4
家電品販売	1	1			1		3
土産品販売						7	7
衣料品販売	3						3
薬品販売	1			1			2
計	17	7	4	9	6	13	56

サービス業

業 種 \ 地 区	駅前	大窪	永水	田口	栢田	霧島	計
旅館、ホテル	3					11	14
民宿						7	7
理容院	3				1	1	5
美容院	1			2	1	1	5
食堂	6		1	2		10	19
喫茶店	1					4	5
写真館	1					2	3
ガソリンスタンド	1	3		2		1	7
自動車修理		2		2	3	1	8
印刷所		1					1
パソコン	2						2
クリーニング	1						1
スナック	2	1				1	4
銀行（金融関係）	3						3
計	24	7	1	8	5	39	84

在の会員数は一八四人。役員二〇人（会長一、副会長二、理事一五、監事二）が選任され、商工会の運営に当たっている。その他専門部として、青年部（部員二三人）・

婦人部（部員四三人）、観光部会・商業部会・工業部会が組織され、商工会活動の効果的推進が図られている。産業分類別にみた業種別現況は表のとおりである。

建設業

地 区				駅 前	大 窪	永 水	田 口	栢 田	霧 島	計
業 種										
土 木 工 事 業				4	1	2	2	2	2	13
建 築 同 業				1	7	2	9		4	23
左 官 同 業					1	1	4	1	2	9
塗 装 同 業					3					3
水 道 同 業						1	2		1	4
たたみ 同 業				1	1				2	4
鉄 筋 同 業									1	1
板 金 同 業							1		1	2
内 装 同 業					2		1	1	1	5
電 気 同 業				2	3		2			7
計				8	18	6	21	4	14	71

製造業

地 区				駅 前	大 窪	永 水	田 口	栢 田	霧 島	計
業 種										
食 肉 加 工					1			1		2
漬 物 製 造							1			1
自 然 食 品							1			1
豆 腐 製 造				1			1			2
窯 業					1		1		3	5
竹 材 加 工								1		1
木 工 業							1			1
衣 類 縫 製					1		1			2
電 子 部 加							1			1
木 材 加 工					1					1
鍛 冶 工 屋				1						1
計				2	4		7	2	3	18

金融業

鹿児島銀行霧島代理店

開 設 日 昭和42年12月10日 (現在地の隣)

新事務所 同 57年12月25日

第二章 経 済

米価百年の価格表（米1升，1.5kg）

年	価 格	年	価 格	年	価 格	年	価 格	年	価 格
明治 元年	錢 毛 4.23	25	錢 毛 5.70	4	錢 毛 12.80	13	錢 毛 33.08	37	円 錢 121.77
2	7.878	26	6.60	5	13.00	14	39.32	38	132.04
3	4.67	27	6.66	6	21.00	15	42.37	39	150.01
4	2.79	28	7.30	7	36.50	16	44.02	40	163.75
5	2.00	29	10.00	8	50.00	17	43.90	41	178.77
6	3.00	30	14.30	9	25.00	18	46.70	42	195.21
7	4.63	31	8.20	10	35.50	19	46.70	43	206.72
8	5.13	32	10.00	11	25.50	20	円 錢 1.50	44	206.40
9	2.94	33	9.40	12	31.00	21	5.50	45	203.20
10	3.36	34	9.50	13	38.30	22	17.50	46	209.36
11	4.480	35	12.40	14	29.80	23	37.50	47	220.13
12	6.60	36	10.90	15 昭和 1年		24	44.00	48	253.52
13	10.20	37	10.80		34.93	25	55.29	49	338.27
14	8.20	38	13.20	2	33.85	26	70.30	50	384.12
15	5.20	39	13.20	3	27.00	27	75.00	51	387.00
16	3.12	40	14.30	4	25.00	28	82.00	52	425.47
17	4.60	41	12.30	5	20.00	29	92.00	53	430.40
18	4.33	42	10.00	6	16.30	30	101.60	54	431.99
19	3.88	43	13.40	7	27.17	31	100.70	55	441.84
20	3.70	44	15.40	8	20.99	32	103.22	56	493.50
21	3.55	45 大正 1年		9	28.62	33	103.23	57	506.25
22	5.00		20.80	10	31.95	34	103.33		
23	5.10	2	18.20	11	29.25	35	104.05	平成 2年	600.00
24	6.60	3	10.80	12	37.75	36	110.52		

物価はその時代を反映して変動を繰り返している。生活に身近なものを取りあげてみた。

(注) 食糧管理法施行 昭和17年2月21日

焼酎価格

(単位：1.8ℓ)

年次	価 格	年次	価 格
明治40年	36銭	昭和25 (12月)	330円
大正3年	44	26 (3月)	360
6~7	68	(12月)	371
8	90	27	420
昭和1年	81	28 (3月)	340
5	70	(12月)	350
9~11	1円 2銭	29	360
14	1円68	31	350
15	2円25	33 (9月)	345
19 (4月)	5	36	355
(12月)	5円40	37 (4月)	315
20	8	(11月)	345
21 (1月)	10円50	41	360
(3月)	16	43	390
(9月)	30	48	520
22 (2月)	33	49	660
(4月)	89	51	720
(8月)	102	54	850
(12月)	505	55	940
23 (7月)	700	57	950
(12月)	728円50	58	1030
25	450	59~63	1050

註 昭和54年に「焼酎天国」開店

砂糖価格

(単位：kg)

年	価 格	年	価 格
明治30年	14銭	昭和30年	165円
40	26	31	121
大正元年	34	33	140
7	44	38	167
10	50	41	128
昭和3年	42	44	130
6	35	46	144
9	38	50	290
11	40	51	267
昭和16年から27年まで統制品		54	223
28	120円	平成元年	250

第二章 経 済

新聞購読料（朝日新聞）

年	購 読 料	年	購 読 料
明 治 12 年	18銭	昭 和 26 年	100円
24	28	同 10月	220
39	45	27	280
大 正 9 年	1円20銭	29	330
昭 和 19 年	1円30	40	580
20	2円70	43	660
21	5～8円	44	750
22	12円50銭	46	900
同 10月	20円	49	1,700
23	44円75銭	53	2,000
25	55円	平 成 2 年	2,360

註 昭和22, 26両年はいずれも10月に再値上げされたほか、21年にも同一年内に値上げされている。

郵便料金

年	料 金	年	料 金
明 治 4 年 (12月)	4 匁 (150 g) まで 25里 (79.5km) 100文 50里～100里まで300文 200里以上 500文		
16 年	2 匁まで 2銭	昭 和 22 年	1円20銭
22	4 匁まで 3	23	5
昭 和 6 年	15 g まで 3	24	8
12	20 g まで 4	26	10
17	5	41	25 g まで 15
19	7	47	20
20	10	51	50
21	30	平 成 元 年	62

電話料金（基本料金）

年	価 格	年	価 格
明 治 23 年	40円	昭 和 26 年	380円
25	35	28	900
30	66	29	700
大 正 9 年	40	38	770
昭 和 5 年	45	43	840
17	60	44	900
19	60	51	1,350
21	124	52	1,800

（注）明治23年から昭和21年まで年額基本料金，昭和22年以降は月額基本料金

ビール（大瓶）価格

年	価 格	年	価 格
明 治 10 年	16銭	昭 和 21 年	6円
25	14	22	（配給は） 59円61銭 （19円60銭）
34	19	22(12月)	100円
大 正 9 年	48	23	（配給は） 162 （75円70銭）
12	39	26	127
15	42	37	115
昭 和 6 年	35	40	120
8	33	45	140
16	57	48	160
18	90	53	215
19	1円30銭	55	240
20	2円	平 成 3 年	320

サッポロビール・キリンビール資料による

大工手間賃

年	料 金	年	料 金
明 治 元 年	50銭	昭 和 27 年	530円
12	50	36	1,000
40	1円	39	1,800
大 正 4 年	1円80銭	45	3,500
7	1円50	48	4,925
9	2円91	49	6,016
昭 和 3 年	3円10	50	7,022
8	2円	51	8,205
15	3円36銭	52	8,760
20	35円	53	9,350
23	120円	平 成 2 年	10,000

霧島町は、国立公園霧島連山のふもとにあり、古くから登山客が多く、登山用の杖・登山記念の木刀の製作が行われていた。なかでも、農具に使用する「柄木」の製作も手がけている岩崎氏の製品は、工芸品の域に達している。また、霧島は地形的に山岳が多く、産業の発展の阻害要因となっていたが、きれいな水に恵れていたため、自家用焼酎の製造が行っていた。大正時代になり本町に初の焼酎製造の株式会社が設立されたので特に取り上げてみた。

木工・工芸品

霧島町田口の岩崎木工所は、柄木専門の工場であるが、工場主の岩崎直さんは一四歳の時に、町内の柄木工場に就職し柄木専門の木工職人として腕を磨き、二六歳で独立し現在一〇人を使用する県内唯一の柄木専門工場である。本来、柄木は金属製の農・工具を固定する柄として使用するもので、農具、土木工具なども大量生産の規格化に伴い、柄木の規格も統一され寸分の誤差も許されない技量が要求される工芸品ともいえる。現在年間二〇万本を出荷（県内二〇％、県外八〇％）している。なお岩崎氏は三〇年間にわたり、敬老の日に軽くて丈夫な椎の木で作った杖を町内

の老人に贈り続けている。

田口酒造
株式会社

明治年間は何人かの協同による自家用焼酎の製造は許可されていたが、明治末年にこれが廃止されたので、各地に焼酎工場が設立された、その中の一つである。

設立 大正元年八月五日

名称 田口酒類製造株式会社

株主 大正二年五月末 一二五人 一株以上七株まで

大部分は一株 ほとんど町内

社長の変遷 大正元年〜七年 竹田 伝矢

大正八年〜九年 吉松 武志

大正十年〜十一年 川畑 虎熊

給料を支給された者(年俸) 大正二年三月二十八日

吉松 武志 三七円五〇銭 川野十衛門 三六円

椎原 虎吉 三〇円 高山 茂 三七円

児玉小一郎 五八円五九銭

大正四年八月一日 社 長 竹田 伝矢

専務取締役 椎原 虎吉

大正六年 水車使用料 一三円

明治四十五年七月〜大正元年七月 損益計算書

当期総損金 二二三一、〇二〇円

当期総益金 二〇一〇、七〇一円

差引後期繰越損金 三二〇、三一九円

大正四年十月 負債

一七二円四〇銭 竹田 伝矢

三五〇円 椎原喜之丞

四〇〇円 椎原 虎吉

五〇〇円 吉井 直吉(清水村)

大正四年十二月二十三日 取締役改選

竹田 伝矢 三〇票 川畑茂一郎 二七票

吉松 武志 二五票 椎原 虎吉 二五票

柚木 兼彦 一八票(末吉町)

大正元年十二月〜二年五月

甘諸買入代 五五七、三三〇円 六五、四〇五斤

玄米同 七六二、八二〇円 四〇、一一六合

薪同 二九六、七五五円

この記事は次の文書から抜粋、現代表記にしたものである。

重要記事録 大正二年 起 田口酒類製造株式会社

株券売買記録 同 同

第三章 社 会

第一節 交 通

一 道 路

明治九年（一八七六）、道路の等級が、国道・県道・里

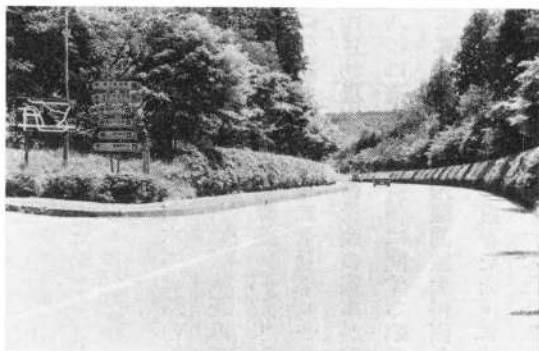
道の三種に分類された。大正八年（一九一九）、道路法が公布され国道・府県道・郡道・市道および町村道の五種に分類され、昭和二十七年（一九五二）道路法の改正がなされ現在の道路行政の基本が確立された。また同二十八年に道路整備費等に関する臨時措置法が制定され、ここに道路事業の飛躍的拡大が図られることとなった。このような法制度の変革とともに交通機関の普及発達に伴い、先人の永年にわたるたゆみない努力により道路は時

代に即応した整備がなされ我々は日常その恩恵に浴しているのである。道路は、地域の活性化、発展の根幹をなすものであり、交通量の増加、交通事故防止などに対処するためにもその整備がますます必要となっている。町内の道路の沿革と現状は次のとおりである。

（一）国 道

一般国道二三号小林・隼人線（宮崎県境から永池・泉水・横岳を経て丸尾に通ずる道路）。大正十五年（一九二六）、霧島・都城線の県道として認定され、昭和六年（一九三一）に完工した。この道路の開通以前は霧島―丸尾間は、霧島神宮裏から湯野々・新湯を経て行く道しがなく、険しい山道を荷物を背に徒歩で行かなくてはならなかった。

昭和三十三年（一九五八）に国道に昇格したが交通量



高千穂河原入口付近

南に桜島・錦江湾・開聞岳まで一望できる観光道路として、霧島町の観光振興に大きな役割を果たしている。また同六十二年には、日本の道百選に選ばれ顕彰碑が建てられた。

(二) 県道

国分―霧島線開通以前は、国分から霧島に通ずる道路

の増加、車両の大型化に伴い、

同四十八年宮崎

県境から泉水ま

でのバイパス工

事に着工、同五

十七年完工。橋

長一二〇メートルの霧

島大橋(九面橋)

の新設橋梁や新

設道路などによ

り、横岳付近か

ら、霧島連山、

は関之坂を経由する道路、松永から春山原を経由する道路、松永から小鹿野を経て向田に通ずる道路があった。

町内に入ると、霧島川西岸の道、すなわち、川北・待

世・田口・野上・祓谷・霧島神宮に至る道路と、霧島川

東岸を、豊後迫・大窪・待世を経て現在の霧島中学校東

方の丘の上を通り、霧島神宮・西岳に至る道路があっ

た。現在は旧道の形跡だけ残しているところもある(第

三編第四章第五節「霧島町の旧道とその周辺の歴史」を

参照)。

主要地方道国分・霧島線 国分市から関之坂を経て王

子原・大窪・田口・伊田を通り霧島神宮に至る道路。

『鹿児島県史 土木編』によると明治二十五年(一八九

二)から明治二十九年(一八九六)の第二期道路開設区

間に、西国分・宮崎県境が選ばれ、町を縦貫する道路が

開通した。これによって牛車・馬車・客馬車・人力車な

どの通行が頻繁となり農林産物の町外への搬出、諸資材

の町内への搬入など、輸送の便が開け産業・文化の発達

に大きな役割を果たすこととなった。

大正九年(一九二〇)この道路が県道浜之市・東襲山

線として認定され、十二年(一九二三)、隼人駅―国分―



田 口 橋

霧島間の定期自動車の運行も開始された。昭和十年（一九三五）陸軍大演習が行われ、天皇陛下が霧島神宮にご親拝された際、霧島神宮駅から霧島神宮までの拡幅改修工事が行われた。昭和三十三年（一九五八）路線名が、一般県道国分・霧島線に変更され同時に大窪から霧島神宮まで舗装工事に着工、同三十六年（一九六一）に完成。大窪―豊後迫―王子原方面の舗装工事も同四十三年

（一九六八）に

完成、現在の道路となった。その後交通量の増加に伴い同五十七年（一九八二）に主要地方道に昇格し、翌年には田口橋（霧島中学校付近）の架け替え工事を含む改良工事に着工、霧島にふ

さわしい橋梁が平成元年（一九八九）に完成した。

主要地方道都城・隼人線 財部町境から北永野田・梅ノ木・牧神を経て国分市入戸に通ずる道路。入戸・都城線として当時の東襲山村から、村費一万余円、重久道路組合から二万円を支出し、東襲山村、財部村の共同事業として大正七年（一九一八）着工、大正十三年（一九二四）に完成した。大正十五年（一九二六）に県に寄付して県道となり、鹿児島空港の開設に伴い昭和四十六年に主要地方道に昇格、路線名も都城・隼人線となった。

一般県道犬飼・霧島神宮停車場線 牧園町犬飼から持松・尾谷・大窪を経て霧島神宮駅に至る道路。昭和五年（一九三〇）、霧島神宮駅の開設に伴い、村費二〇〇〇円を投じて改修し県に寄付した。同二十二年（一九四七）、宿窪田―霧島神宮駅を結ぶ県道となった。

一般県道北永野田・小浜線 都城・隼人線から北永野田駅・国分市木原を経て隼人町小浜に至る道路。都城・隼人線から北永野田駅まで同六年（一九三一）開設され、県道北永野田停車場線となる。同二十四年（一九四九）北永野田・国分停車場線となり、同四十三年（一九六八）北永野田・小浜線となり隼人町小浜と結ぶ県道と

なった。

一般県道霧島公園・小林線 高千穂河原から湯野々を経てえびの高原・小林に至る道路。『鹿児島県史 土木編』によると、昭和十五年（一九四〇）、紀元二千六百年事業として、二年の歳月を費やし、学生の勤労奉仕により霧島神宮参道として、硫黄谷付近^一、湯野々付近^一・五結が開設された。昭和二十八年（一九五三）県が林田温泉裏から高千穂河原まで一六・四結の有料道路建設に着手、昭和三十一年（一九五六）日本道路公団に引き継がれ同三十二年開通、霧島有料道路として営業開始、同六十一年から一般県道となり、高千穂河原・えびの高原方面と結ぶ観光道路として重要な役割を果たしている。

一般県道豊後迫・隼人線 国分・霧島線豊後迫から牧園町白崎を経て、隼人町に至る道路。昭和二十四年（一九四九）豊後迫・隼人停車場線として県道に認定され、昭和四十三年（一九六七）、豊後迫・隼人線となる。難工事のため全線開通していないが、鹿児島空港と本町を結ぶ最短距離幹線として期待されている。

一般県道霧島公園線 霧島神宮から緑の村広場を経て

高千穂河原に至る道路。昭和三十一年（一九五六）林田産交社長林田熊一氏の要請により霧島町が測量設計をして工事に着手、昭和三十三年（一九五八）完工、林田有料道路として通行料を徴収していたが、昭和三十八年（一九六三）に県に移管された。霧島連山の登山口、高千穂河原を結ぶ重要道路である。

(三) 町 道

町道は住民の生活に密着したものであるとともに、農林業の生産活動に欠かせないものであるが、現在の道路は、ほとんど関係者の労力奉仕によって開設されたものである。昭和四十年（一九六五）までは、主に失業対策事業によって開設、改良工事などが行われ、同四十年以降は、建設省・農林水産省の補助事業および町の起債事業により改良、舗装工事などが行われ現在に至っている。

田口・市後柄線 国分・霧島線田口から堀之内を経て、市後柄に至る線。国の匡救事業（昭和初期の世界経済恐慌により疲弊した農村の救済策のこと）として昭和九年（一九三四）に開通し霧島・牧園町の産業道路として果たした役割は大きい。

大窪・笹之段線 国分・霧島線の大窪から永水小学校に至る道路。昭和九年、田口・市後柄線と同様に国の匡救事業として開設、同四十五年（一九七〇）―同四十七年（一九七二）にかけて起債事業で舗装工事。町の重要な幹線道路の一つである。

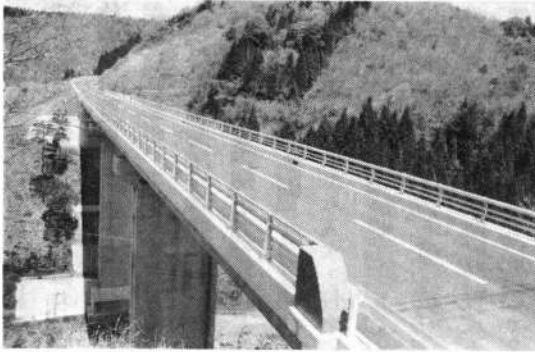
宮迫・梅ノ木線 国分・霧島線の宮迫から入水公民館―永水小学校―七郎ヶ谷を経て梅ノ木・都城・隼人線に至る道路。宮迫から入水・笹之段を経て市野々に通ずる林道（入水・市野々線五三三〇^ノ）として重久森林組合が補助を受けて、地区民の労力奉仕により昭和八年（一九三三）に開通したものである。その後、笹之段―梅木までを農免農道事業で、宮迫から笹之段までを建設省の補助事業で改良工事が行われ、昭和五十二年（一九七七）に全線完工した。さらに昭和六十年（一九八五）永水小学校付近の二二五^ノの歩道（建設省補助）が設置され現在に至っている。

永池・狩川線 国道二二三号、永池からロイヤルホテル・虎ヶ丘を経て霧島神宮駅に至る道路。元陸軍演習場跡地を同二十二年（一九四七）、国営開拓建設事業として二七六^ノの農地開発に着工、これに伴う一号幹線道路

（七二〇〇^ノ）として同三十年に開通した。同四十九年（一九七四）にこの土地を大和ハウスが買収し、ゴルフ場、別荘分譲地の造成に着工し、開発に伴う交通量の増加に対処するため同五十九年から起債事業で改良工事に着手、平成元年までに一五〇〇^ノが完成、引き続き工事を進めている。この道路は景観に恵まれ将来の観光道路として期待されている。

泉水・市後柄線 町道泉水・永池線。泉水から野上公民館・横岳を経て市後柄に至る道路。昭和二年（一九四七）、国営開拓建設事業として、農地開発に着工、これに伴う七号幹線道路（五二〇〇^ノ）として昭和三十年（一九五五）に開通した。その改良工事で全線舗装、現在に至っているが、民間企業の別荘地開発が進み、狭隘^隘になっている。

永池・湯野々線 霧島公園線から霧島ハイツを経て湯野々霧島公園小林線に至る道路。昭和三十年（一九五五）ころ、国有林の管理、木材搬出の専用林道であったが、昭和三十六年―三十七年にかけて、国民宿舎みやま荘、霧島労災病院の開設に伴い、その後は町道と併用する林道となった。昭和四十六年（一九七二）霧島ハイツ



平成橋（広域農道）

の誘致により、労働省の補助で霧島公園線から一〇〇〇
畝の改良工事が行われたが、一般車両の増加に伴い、建
設省補助による市町村改良事業で昭和六十二年（一九八
七）から延長三〇〇〇畝の改良工事に着手している。

広域農道 牧園二期地区 牧園町小谷、国道二二三号
から市後柄・後谷養魚場を経て梅北・国分霧島線まで
と霧島神宮駅から湯之宮を経て梅ノ木・都城隼人線に至

る道路。曾於郡

志布港と九州縦

貫道栗野インタ

ーチェンジを結

ぶ構想で広域営

農団地農道整備

事業として昭和

四十六年（一九

七二）に着工、

昭和五十年（一

九七五）、栗野―

牧園町小谷間完

成、小谷―梅北・

国分霧島線までを二期工事として昭和五十一年（一九七
六）から昭和五十七年（一九八二）に完成、さらに霧島
神宮駅から梅ノ木までを昭和六十年（一九八五）着工平
成二年（一九九〇）に全線開通した。

その他の町道中原・法ヶ崎線（梅ノ木から中原台地を
経て牧神に至る道路）。牧神地区シラス対策事業関連農道
として昭和五十年（一九七五）完成。

鳥越・内窪線

入水地区シラス対策事業関連農道とし
て同五十八年から同六十二年に完成。

笹之段・中原線

永水小学校から牧神に至る道路。
牧神地区農免農道整備事業として昭和六十三年（一九八
八）に完成。

八）に完成。

臼木原線

堀之内から野上に至る道路。堀之内からエ
メラルド観光開発地まで六〇〇畝を町起債で、さらに臼
木原地区農免農道整備事業として平成五年（一九九三）

の完成を目指す。

内窪・湯之迫線

（二百原台地道路） 農林水産省補
助・二百原地区広域関連農道整備事業。平成元年（一九
八九）着工、平成五年（一九九三）完成を目指す。

伊田・遠見塚線

（伊田地区プールから白土橋）伊田

橋（三〇・五^分）は昭和三十九年（一九六四）架設、白土地区の改良工事は昭和五十四年（一九七九）、白土橋は昭和五十六年（一九八一）に完成した。

堀之内・後谷線（馬捌原台地の道路）

県費補助の県単基幹農道整備事業として昭和五十八年（一九八三）に完成。

高千穂・泉水線

（霧島小学校―旧霧島東中学校間）昭和五十三年（一九七八）町起債事業で改良工事。

楠元・宮前線

（皆越から尾谷間）同五十六年から五十八年において町起債事業で皆越地区の改良工事に、さらに平成元年から尾谷地区の改良工事に着手している。

川原田・本池線

（川北―向田間）同五十九年から同六十二年に、川北地区（五〇〇^分）町起債で改良工事。

下脇線

（多目的集会施設横の道路）豊後迫地区県単農道整備事業で、同五十

町内の国・県道の整備状況

平成元年（1989）現在

道路種別	路 線 名	延 長 (m)	改 良 済		舗 装 済	
			延 長	率	延 長	率
一般国道	223号	5,967	3,047	51	5,967	100
主要地方道	都城・隼人線	4,532	4,532	69	5,612	86
	国分・霧島線	11,387	11,387	100	11,387	100
一般県道	霧島公園・小林線	6,246	6,246	100	6,246	100
	犬飼・霧島神宮停車場線	2,101	899	43	1,754	83
	北永野田・小浜線	705	544	77	584	83
	豊後迫・隼人線	1,336	1,336	100	1,336	100
	霧島公園線	6,931	3,717	54	6,931	100
計	8 路 線	41,206	31,708	77	39,817	97

町道の整備状況

平成元年（1989）現在

道路種別	路線数	延 長 (m)	改 良 済		舗 装 済	
			延 長	率	延 長	率
一 級	4	15,486	7,869	51	15,486	100
二 級	7	16,207	200	1	16,207	100
そ の 他	137	134,196	25,145	19	111,757	83
計	148	165,889	33,214	20	143,450	86

二年に新設され、同五十四年に豊後追橋（三七・四頁）が完成した。



灰床橋（長さ9.2m，幅3.3m）
昭和15年（1940）建設



小瀬戸橋（長さ6.6m，幅3.6m）
大正10年（1921）建設

本町の石橋

は、現在の次の二か所が残っている。

二 鉄 道

日本鉄道の起源 明治五年（一八七二）に、新橋―横浜間（二九頁）に鉄道が建設されたのが、日本の鉄道の始まりである。同二十三年（一八九〇）には、東海道線が開通して日本国有鉄道となった。

九州の鉄道は、同二十二年（一八八九）九州鉄道会社として発足、福岡―博多間に汽車が走ったのが始まりである。その後築豊鉄道、豊州鉄道など鉄道企業が次々に生まれたが、後に九州鉄道会社に合併された。この当時、産業革命を支えた石炭産業の発展と密接な関係にあったことが大きな要因であった。

北九州に鉄道が開設されたところ鹿児島県でも鉄道建設の論議が高まり、鹿児島市鉄道敷設委員会などが結成されて鉄道建設運動が進められ、明治三十四年（一九〇一）隼人駅まで鉄道が敷設されたが、日豊線国分―霧島間に鉄道が敷設されたのは、実に二九年後の昭和五年（一九三〇）であった。待望久しかった気笛を開き小学校ごとに旗行列をしたり、棒踊りなどの郷土芸能を繰り

出して、町民は喜びにわきたった。

国分―霧島間は七か所のトンネルを貫く、当時としては技術的にも難工事であった。昭和二十年代は大雨による災害で不通になったり石炭の火の粉による山火事などもしばしば発生した。昭和三十五年（一九六〇）博多―西鹿児島間にディーゼルが運転されるようになり、日豊線も昭和五十四年（一九七九）に全線電化された。

霧島神宮駅

昭和五年（一九三〇）七月に営業を開始した。さらに昭和四十一年（一九六六）にはこれまでの木造から鉄筋コンクリートの新駅舎に改築され、この年から特急富士号も停車するよう



霧島神宮駅

霧島神宮駅乗車人員の推移 昭和34年以降（単位：人）

種別 年度	普通乗車 人員	定期券 乗車人員	計	1日平均
昭和34	315,214	89,060	404,274	11,076
35	301,125	83,402	384,527	1,053.4
36	247,903	83,585	331,493	908.2
37	264,515	97,520	362,035	991.8
38	287,036	107,125	394,161	1,079.8
39	314,849	119,282	434,131	11,894
55	52,461	77,325	129,786	355.5
56	50,697	72,768	123,465	338.2
57	48,710	68,070	116,780	319.9
58	48,303	61,754	110,570	302.9
59	51,354	61,270	112,624	308.5
60	51,225	62,561	113,786	311.7
61	50,270	64,329	114,603	314.0
62	45,985	57,324	107,763	295.2
63	54,656	56,595	111,251	305.0
平成 1	57,776	66,001	123,777	339.1
2	55,267	59,616	114,883	314.7

になった。昭和六十二年四月、国有鉄道からJR（九州鉄道株式会社）の民間会社になるとこれまで一四人いた駅員も三人になり、平成三年には一人となっている。

霧島神宮駅の乗車人員などの推移 昭和五年に開設された霧島神宮駅

観光客も多い。終戦直後は、復員兵をはじめ食糧の買い出しなど乗車率も高く、また、本町の産物である木材や

木炭の出荷に大きな役割を果たしてきた。しかしながら昭和四十年ごろから、産業構造の変革が進み輸送体系は大きく変わった。自家用車の普及、トラックによる貨物輸送の進出、宅配便など、これまで鉄道輸送に頼っていた輸送は民間企業に移りはじめ、乗車率も年ごとに漸減して表に示すとおり、昭和三十年代と比較してみると昭和六十年代は三分の一に落ち込み、現在に至っている。

三 バス

草分け時代

大正元年（一九一二）に鹿児島市の今村大平次が会社を創設し、鹿児島市―川内にフォードを走らせ、旅客を運んだのが県内バス運行のはじまりである。しかし利用客も少なく道路も悪かったため、間もなく会社は倒産した。同七年（一九一八）に林田熊一氏が六人乗りのフォードを購入、川内―宮之城間に路線営業を始めたのが林田バスのはじまりである。その後、川内―阿久根、都城―志布志と路線を広げ、昭和五年（一九三〇）には、鹿児島市内バスの営業も始めた。

昭和初期時代

昭和四年（一九二九）、現在の林田温泉一帯の土地・三九万六〇〇〇平方尺を林田熊一が鹿児島市の川井田半左エ門から買取（当時の金で七万円）し、道路の取り付け工事・温泉旅館の建設を一年で完成、鹿児島市―霧島間のバス運行を始めた。同九年（一九三四）に国立公園に指定され、観光客が増えるにつれて道路も整備され、バス運行の回数も増え事業は軌道にのっていった。

戦時中のバス

昭和十二年（一九三七）、日中戦争が始まり、昭和十四年ころになると、ガソリンが配給切符制になり、木炭を利用した木炭車に変わった。燃料不足からバスの運行も減って、霧島―鹿児島間も一日一往復になってしまった。

戦後のバス

昭和二十二年（一九四七）ごろから戦災が復興するにつれ、ようやく回数も増えてきた。同二十四年（一九四九）になると出水―牧園―霧島間の路線も運行するようになった。また同二十三年、霧島有料道路の完成により、林田―高千穂河原―霧島神宮駅間（一六・八結）の定期運行が開始された。同三十六年、えびの有料道路の開通に伴い、鹿児島市―霧

島—えびの間が結ばれ、小林—宮崎間の路線につながった。

バスは霧島の観光客の主要な足になってきたが、自家用車の普及、レンタカーや貸切バスの時代となり、定期バスも利用客が少なく、地方路線補助事業の適用を受けようになった。こうしたなかで、定期観光バス（霧島神宮駅—高千穂河原—えびの高原間）も一日二回運行され、観光客のコースとなっている。一方、生活路線として、霧島神宮駅—持松—中津川—宿窪田—霧島西口駅間は定期運行している。各交通会社の路線運行は次のとおりである。

林田産業交通

霧島—鹿児島市 一一往復

霧島神宮駅—高千穂河原 二往復

霧島神宮駅—持松—西口 二往復

宮崎交通

霧島—宮崎市 四往復

霧島—都城市 四往復

霧島—小林市 四往復

九州縦貫高速道路の開通によって大型バスの大量輸送時代を迎え、大阪以遠への定期路線も開始されるなど、

交通機関としてバス輸送は新しい時代を迎えている。

四 鹿児島空港と霧島町

鹿児島空港は、昭和四十七年（一九七二）四月開設以来、時代のすう勢に伴い航空便の利用が大衆化し、ますます増加の傾向にある。空港の調査によれば平成元年現在では、国内線は五〇〇万三四六五人（昭和五十四年の一・三倍）、国際線は九万三〇八五人（同五十四年の二・六倍）となり、一日の発着便は一一六回に及ぶ。本町は空港隣接の観光地として特に関心をもつところである。

したがって、本町と空港を結ぶ幹線道路の整備、交通網の整備などが急務である。なお飛行機便は次のとおり。

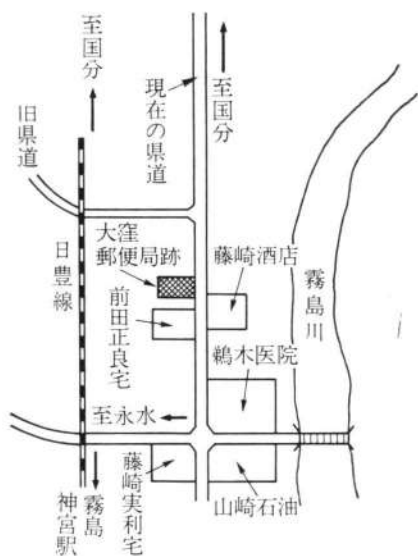
（平成二年六月現在）

東京	一六便	大阪	一二便
名古屋	六便	広島	四便
長崎	八便	沖縄	四便
福岡	二〇便	種子島	一〇便
屋久島	六便	奄美大島	一〇便
徳之島	四便	沖永良部島	四便
与論	二便	岡山	二便
大分	二便	松山	二便

第二節 通信

一 霧島郵便局

明治七年（一八七四）十二月十六日、東襲山村大窪に大窪郵便取扱所として開設された。場所は図に示すところにあり初代の所長は原口弥兵衛氏で、これが霧島町の郵便事業のはじまりである。明治三十二年（一八九九）



旧大窪郵便局位置図（大正7年ころ）

十二月六日、大窪郵便局と改称された。木造瓦葺き平屋の自宅兼用の局舎が新築された。

この年から、小包郵便や貯金業務の取り扱いも開始され、国内、外国の為替業務も始めた。昭和七年（一九三二）和文の電信、電話の通信を開始、新しい時代への通信事業の幕開け時代であった。

初めは、国分郵便局との間に定期の交通便がなかったため、郵便物の送受は人が肩にかついで徒歩で往復していた。明治三十年（一八九七）ごろ、この仕事に従事した人は、徳田喜之助（豊後追Ⅱ当時一六歳）・徳田与太郎（豊後追）・谷山金駈（大窪）の三氏で、この三人は三日に一回出勤し、朝まだ夜の明けない三時ごろ郵便物をかついで出発し、国分で郵便物を届け、また受け取った郵便物の内の重久・松永方面のものは配達をすませて帰った。大窪・田口方面の配達には、藤崎虎熊氏（大窪）が受け持った。大正時代は入来甚兵衛氏（豊後追）も大窪・国分間の配送に従事した。当時の賃金は一日一八銭であった。

大正十年ごろになると、自転車が使われるようになり、さらに昭和初めには、定期の自動車が走るようになった。



霧島郵便局

つて、郵便物もこの定期の自動便を利用するようになった。昭和五年になると日豊線が開通し、列車に連結された郵便車により、本格的な郵政事業の幕開けを迎え、郵便局の仕事も、新しい時代にこたえて、大正五年（一九一六）には簡易保険業務を開始、昭和七年（一九三二）に電信電話業務を開始した。同十年に霧島郵便局と改称するとともに、局舎も田口一〇ノ一に移転した（現役場敷地内）。同十四

年（一九三九）電話交換業務も始めたが、電通合理化により電話交換業務は廃止された。同五十年（一九七六）になると、日曜配達業務を廃止。同五十六年、役場新庁舎の建設に伴い、

現在地に新築移転した。電信取り扱い当時の最終年度における電話加入数は九一七件であった。

霧島郵便局の歴代局長は、就任期間、退任年月の不明のところもあるが次のとおりである。

歴代霧島郵便局長名

氏 名	就 任 日 付	退 任 日 付
原口弥兵衛	明七・一二・一六	不明
小川喜早次	不明	不明
新村 金蔵	不明	明四五・六・一八
山口小太郎	明四五・六・一八	昭三・三・二八死亡
細山田重豊	昭三・一・二四	昭一六・三・二八死亡
細山田 重	昭一六・二・二八 局長心得	昭一六・七・一六解職
川畑 篤徳	昭一六・七・一七	昭三五・一一・一〇死亡
若松 幸保	昭三五・一一・一一 国分清水局長兼務	昭三六・四・一〇解職
有馬 真理	昭三六・四・一一	昭四九・六・三〇
川畑 寛高	昭四九・七・一	現在

二 霧島神宮前郵便局

昭和五年日豊線が開通して、霧島神宮駅が設置されると霧島神宮の参拝客をはじめ、観光客も激増した。それ



霧島神宮前郵便局

十四年には電話交換業務も開始、同三十三年に廃止、昭和四十一年局舎改築、平成二年、現在地に局舎新築。
歴代局長

坂元 重吉 昭和九年八月から昭和三十九年六月
坂元 貢 昭和三十九年六月から平成三年三月
中川原 正 平成三年三月から現在に至る

に伴って神宮門前街も活況を呈し、郵便物の取り扱い量も多く

なり、昭和九年

(一九三四)霧

島神宮前郵便取

扱所として開設

された。同年九

月、霧島神宮前

郵便局と改称

(無集配局)し

発足した。昭和

第三節 電 気

本町における電気の導入は、大正八年(一九一九)である。同九年、同十三年、千里ヶ滝第二発電所(職員五人)、第一発電所(職員八人)ができて稼働し始めた。第二発電所は昭和三十二年(一九五七)、第一発電所は同四十六年に、無人化された(三一八ページを参照)。

電気の普及

本町に初めて電灯がつけられたころは、一戸に一つの電球しかない家庭が大部分であった。送電は夜だけで夕方の五時ごろになると点灯し、朝方には消えた。つまり終夜灯であった。その後、電力供給能力の増大に伴い、農家でも夜間作業(稲落とし・^も糶すりなど)用などに増設されるようになった。それまでの、ランプやロウソクの明かりから電灯の時代を迎え、照明による生活文化の変革期でもあった。昭和十年代に入ると、日中戦争をはじめとする軍需産業への電力供給が主となり、やがて終戦を迎えた。

電化生活時代

終戦後の混乱期から、ようやく立ち直りはじめた昭和二十七年ごろから、本町にも親子ラジオが現れた。親のラジオから家庭のスピーカーを通じてニュースや音楽など流すものであった。これが家庭の電化生活のはじまりであろう。この設置料が一〇〇〇円であった。昭和三十年代になるとラジオは買いやすくなり、テレビ・電気洗濯機も普及しはじめた。特に昭和三十五年の現天皇のご成婚の式典放映を機にテレビは爆発的に普及した。当時は、テレビ・電気洗濯機・冷蔵庫を「三種の神器」と呼び、庶民の電化生活のあこがれであった。さらに扇風機もこのころから家庭に見られるようになった。

池田内閣の所得倍増政策による日本経済は、高度成長期に入り、家庭の電化生活に拍車がかかった。家庭の冷暖房設備も普及しはじめ、テレビ・冷蔵庫・電気洗濯機などほとんど一〇〇％の普及率を示している。さらにワープロをはじめとする事務機器も、いまは各家庭で使われるようになった。このように電力は私たちの生活とは全く切り離せないもの。役場、農協、金融機関などもファックス時代を迎えて、電力の需要は増大の一途をたどっている。

第四節 治安

一 警察

国分警察署 大窪駐在所

明治二十九年（一八九六）六月、第六区
巡査駐在所として東襲山村田口に設けら

れ、初代駐在巡査
として、坂元惣一
郎氏が着任した。

同四十三年（一九

一〇）八月四日、

田口巡査駐在所と

改称。大正十年（一

九二一）大窪公会

堂を駐在所として

移転。大窪巡査駐

在と改称した。

昭和七年（一九



国分警察署大窪駐在所

(三二) 五月、田口八番地に移転。同二十三年(一九四八)二月、東始良地区警察署大窪巡査所となる。同三十九年(一九六四)七月、国分警察官駐在所と改称。同四十三年(一九六八)二月新庁舎新築、大窪駐在所と改称。同五十八年四月、現在地に移転し、庁舎新築。現在の駐在所員、内田正文氏で六〇代目となる。

**国分警察署霧島
神宮前駐在所** 昭和八年(一九三三)当時の霧島神宮前浦辺真一氏が中心となり、駐在所の新設を当局に交渉の結果、同年四月から、霧島神宮前巡査駐在所として、霧島神宮職員の住宅の一角に設置され、初代駐在巡査は、前原利雄氏である。

昭和二十七年(一九五二)五月に現在地に移転した。現在の駐在員は外國正一氏で、第三九代目である。次に



国分警察署霧島神宮前駐在所

大窪駐在所管内犯罪発生と検挙

種別	区分	昭和28		38		39		40		59		60		61		62		63		平成1	
		発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙	発生	検挙
窃盗	盗	15	7	2	0	6	6	1	0	11	1	19	3	30	3	18	3	26	8	27	1
詐欺	欺	23	23																		
殺人	人					1	1														
暴行	傷	3	3																		
強盗	傷							1	1												
特別法犯	犯	7	7					1	1												
計		48	40	2	0	7	7	3	2	11	1	19	3	30	3	18	3	26	8	27	1

(注) 特別法犯とは刑法犯以外の犯罪をいう。ただし、交通法違反を除く。

駐在所管内別の犯罪発生状況と検挙実績を掲げる。

神宮前駐在所管内犯罪発生と検挙

種 別		年 度		昭和31		38		39		40		55		56		57	
		区分		発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙
窃 詐 殺 暴 強 特 行 盗 別	盗 欺 人 害 害 犯 傷 傷 法			37	41			2	2			17	1	6	0	10	5
				3	3					1	1						
				3	2												
				72	72												
計				115	118	0	0	2	2	1	1	17	1	6	0	10	5
種 別		年 度		昭和58		59		60		61		62		63		平成1	
		区分		発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙	発生	検 挙
窃 詐 殺 暴 強 特 行 盗 別	盗 欺 人 害 害 犯 傷 傷 法			20	7	33	12	21	3	26	7	27	3	20	3	13	5
				2	2												
							1							1	1		
計				22	9	34	12	21	3	26	7	27	3	21	4	13	5

二 交通安全対策

車社会の到来により、観光地をもつ本町は交通量も多く、安全対策は重要な課題となっている。これに対応するために次のような取り組みをしている。

(イ)交通安全施設の整備拡充 町道・生活道路・通学路などに、交通標識・カーブミラーなど設置。

(ロ)交通安全ルール、交通道徳、交通関係法令の遵守 県交通安全協力員、母の会、シルバー交通安全協力員などによる街頭指導の徹底、県交通安全協会とタイアップした運転者に対する法令講習会の実施。

(ハ)道路網の整備、広報活動の充実、交通安全共済制度の充実。

本町の交通事故、車の保有台数、免許取得者の推移を全国・全県などと対照しながらみると次表のとおりである。

県内の交通事故概況

(1) 発生件数と死者数

年 次	件 数	指 数	死 者 数	指 数
昭 和 61	8,883	100	122	100
62	8,982	101	129	106
63	9,483	107	137	112
平 成 1	9,910	116	133	109
2 (2/15)	1,053 (-92)	-8.0%	21 (-1)	-4.6%

銭 括弧内は対前年同期比。以下同じ

(2) 交通事故死者の年代別推移

年 代 年 次	子 供 (0～15)	若 者 (16～24)	一 般 (25～64)	高 齢 者 (65以上)	計
昭和61	6	20	57	39	122
62	14	30	42	43	129
63	10	32	50	45	137
平成1	8	20	64	41	133
2 (2/15)	2 (± 0)	6 (+ 1)	8 (- 4)	5 (+ 2)	21 (- 1)

(3) 交通事故死者の形態別推移

形 態 年 次	自 動 車 中 乗 車 中	二輪乗車中	自 転 車 中 乗 車 中	歩 行 中	そ の 他	計
昭和61	36	27	11	48		122
62	35	35	7	49	3	129
63	46	30	14	43	4	137
平成1	39	30	17	45	2	133
2 (2/15)	10 (+ 2)	3 (- 3)	1 (- 1)	7 (+ 1)		21 (- 1)

第三章 社 会

交通事故発生状況

昭和55	発 生	増 減	死 者	増 減	傷 者	増 減	物 損	増 減	人口1万 人当たり
全 国	476,745	+ 8,384	8,760	+ 299	599,118	+ 3,439			
県 下	8,260	+ 784	126	- 13	10,508	+ 994			
管 内	451	+ 26	14	+ 3	669	+ 99			
霧島町	18	- 9	1	± 0	26	- 21			
昭和58	発 生	増 減	死 者	増 減	傷 者	増 減	物 損	増 減	人口1万 人当たり
全 国	526,362	+24,101	9,520	+ 447	654,882	+28,630			
県 下	8,795	+ 212	161	+ 29	10,662	+ 81			
管 内	536	+ 18	18	+ 13	678	+ 10			
霧島町	39	+ 9	0	± 0	45	+ 5	89		77.8
昭和61	発 生	増 減	死 者	増 減	傷 者	増 減	物 損	増 減	人口1万 人当たり
全 国	579,190	+26,402	9,317	+ 56	712,330	+30,984			
県 下	8,883	- 140	122	+ 4	10,526	- 247			
管 内	531	- 30	7	+ 2	649	- 57			
霧島町	36	- 1	1	+ 1	53	- 5	77	-18	88.4
平成1	発 生	増 減	死 者	増 減	傷 者	増 減	物 損	増 減	人口1万 人当たり
全 国	661,363	+46,882	11,086	+ 742	814,832	+61,987			
県 下	9,910	+ 427	133	- 4	11,797	+ 567			
管 内	697	+ 60	8	- 1	816	+ 37			
霧島町	46	+ 10	1	+ 1	55	+ 15	118	+12	92.1

免許人口及び車両台数の推移

	免 許 人 口 の 推 移						車 両 台 数 の 推 移					
	男性	増減	女性	増減	合計	増減	自動車	増減	原付(旧 2種含)	増減	合計	増減
昭和57	人	人	人	人	人	人	2,719	台	1,130	台	3,849	台
58							2,866	+147	1,774	+644	4,640	+791
59							2,984	+118	1,191	-583	4,175	-465
60					3,151		3,051	+ 67	1,199	+ 8	4,250	+ 75
61					3,217	+66	3,243	+192	1,184	- 15	4,427	+177
62	1,881		1,369		3,250	+33	3,279	+ 36	1,092	- 92	4,371	- 56
63	1,896	+15	1,375	+ 6	3,271	+21	3,526	+247	1,071	- 21	4,597	+226
平成1	1,914	+18	1,401	+26	3,315	+44	3,600	+ 74	1,010	- 61	4,610	+ 13
2												
6月30日現在					3,329	+14						

第五節 消防

消防団の沿革

町の消防団の沿革を、年表ふうに示すと次のようである。

大正八年
(一九一九)

東襲山村大窪に私設消防組発足。組頭は鶴木幸藏。

昭和二年
(一九二七)

東襲山村重久に公設消防組発足。このため大窪公設消防組は東襲山村第一部消防組となり、重久は第二消防組となる。

同九年
(一九三四)

田口に私設消防組発足。これはその以前、霧島神宮所有林を守るため警防組合があり、その組合の中の伊田・辻・堀之内三集落の備品を譲り受け、集落民の寄付によってポンプを購入して発足した。人員六五人、組頭は桑木野盛蔵。同年十月公設第三部消防組となる。

同十一年
(一九三七)

全国の消防組を警防団と改称。当時本町では各小学校区ごとに分団を置いた。ただし田口第三部消防組は霧島校区に編入された。大田分団長は鳥丸正兵衛、霧島分団長は田實助治。

同二十二年
(一九四七)

消防法により霧島村消防団と改称。団長は七夕豊治。

同二十五年
(一九五〇)

霧島分団は田口分団と霧島分団に分離して現在に至る。このような経過を経て今日に至っているが昭和二十八年から同四十年までの本町火災発生件数は二九件にのぼり、初期消火および災害出動などを含めて消防団の果たした役割は大きい。しかし団員の充足、装備の整備が急がれる。

同四十年
(一九六五)

永水少年消防クラブ全国表彰。



大窪幼年消防クラブ

同四十二年(一九六七)

東霧島中

少年消防クラブ結

成。

同四十四年(一九六九)

六〇年ぶ

りの大雨で大災害

を受ける。

同四十五年(一九七〇)

七夕豊志

団長、藍綬褒章を

授与される。

同四十六年(一九七一)

広域消防

組合に加入。田口

字前田の一角に常備消防霧島分遣所が設置される。

同 四十七年 新村俊氏団長となる。

同 五十四年 霧島川氾濫、床下浸水、家屋崩壊などの惨事に至る。

同 五十七年 大田小少年消防クラブ、大窪保育園に幼年消防クラブ結成。

同 六十年 新村俊団長藍綬褒章を授与される。

同 六十二年 上村孝夫氏団長となる。

霧島町消防分団の状況 本町の非常勤消防分団は、地域に密着した活動を保ち、年末防犯警戒など常備消防団と連携をとりながら活躍している。現在のところ各

霧島町消防分団の現況

分団名	団員数	装 備	定員充足率
中央分団	二十五人	ポンプ車一台	一〇〇%
田口分団	二十五人	小型ポンプ一台	一〇〇%
霧島分団	二十五人	"	一〇〇%
永水分団	二十五人	"	一〇〇%
幹 部	三人	"	一〇〇%
(副) 団長 一人			



国分地区消防組合霧島分遣所

分団とも定員の充足率も一〇〇%に達しているが、近年の都市化による職住分離が進み、地域連帯感の希薄化・団員の高齢化などのために、新規入団者の確保など、深刻な問題をかかえている。

国分地区消防組合霧島分遣所 昭和四十七年（一九七二）四月一日 広域消防組合に所属する常備消防が

本町にも設置され、所長以下一人で発足する。社会の高度成長とともに、国民の生活様式も大きく変わった。消防行政も時代に対応するため、組合立による常備化が図られた。当所はタンク車一台、救急車一台で発足したが、平成二年現在ではタンク車一

台・消防車二台・救急車一台となっている。救急活動をはじめ、災害出動防火対象物件の立ち入り検査、防火思想の啓発など大きな役割を果たしている。

第六節 厚生

一 保健衛生

保健衛生の推移

保健衛生は、古くから急性伝染病の予防を目的とした環境衛生を重点に、行政の重要部門としていろいろの施策が講じられてきた。以下その推移をみていく。

△衛生組合▽ 明治四十四年（一九一）に重久・松永・大田川の三つの衛生組合が設立され、春、夏、秋、冬の年四回、清潔検査の成績により、優勝旗を授与して村民の衛生意識の高揚に努めた。当時は衛生の監督所管は警察行政に組み込まれ、清潔検査も駐在所の巡査と衛生組合の衛生委員と立ち会いで、厳重な検査が昭和九年まで続けられた。

△伝染病避病舎▽ 重久に一棟、大窪に一棟（現在の大窪団地右手前の山際）設置されていた。当時は、赤痢・疫痢・腸チフスなどの急性伝染病が多く、隔離以外に打

つ手がなかった時代であった。終戦後、広域伝染病棟組合ができて、国立霧島病院の敷地に伝染病棟が建設されたため、避病舎は廃止された。

△種痘▽ 明治四十三年（一九一〇）以来、数え年二歳と一歳の子供に予防のため種痘を接種した。

△トラホーム▽ 大正八年（一九一九）から毎年十二月に一回村民全部に対し、検査を実施し、患者には村費で治療させるための、公設トラホーム治療所を二か所設置、竹田医院（大窪）と日高医院（重久）に委託していた。

△寄生虫予防▽ 昭和二年（一九二七）から、村内小学校児童の検便を実施し、保虫者には村費で駆虫薬を与えて寄生虫予防に努めた。

△保健所の設置▽ 昭和十二年（一九三七）保健所法が施行され、都道府県および政令都市は保健所を設置して、公衆衛生の向上、増進を図ることになった。翌十三年には厚生省が設置され、保健衛生行政は内務省から厚生省に移管された。これまで警察の所管だった衛生行政は、昭和十七年（一九四二）に知事部局に移管されたが、食品衛生と急性伝染病の予防業務は同二十二年まで警察所管であった。本町関係では、昭和十九年（一九四

四）に隼人町内山田に、畳一二枚の民家を借りて隼人保健所が開設された（現在の隼人保健所の前）。終戦直後は、連合国軍総司令部（GHQ）から公衆衛生改善に関する指令が次々に出された。以来、国、地方公共団体も機構整備を図り、二十二年には民生部の衛生課から分離して衛生部を設置し、市町村も衛生担当課ができて戦後の保健衛生・環境衛生向上の基礎づくりの時代を迎えた。

戦後の保健衛生

前述のとおり、総司令部の指令により、まず市町村が取り組んだのは環境衛生の改善整備であった。蚊・はえ・のみ・しらみ・ねずみなどのそ族昆虫駆除および便所の改良による寄生虫の撲滅などであった。各市町ごとに民間の衛生自治団体が結成された。本町でも衛生普及会が結成され、行政と一体になって薬剤散布や発生源対策に取り組んだ。今は、のみ・しらみなどは昔話になっている。

△集団検診▽ 保健所の機構整備に伴い、昭和二十六年（一九五一）結核予防法の施行により、結核の集団検診、また同四十六年（一九七一）からは成人病の集団検診もはじまり、早期発見、早期治療の時代を迎えた。特

に大正から昭和初期にかけて死亡率の一位を占めて不治の病とされた結核は、集団検診による住民意識の高まりと、医学の進歩により、もはや、死因の最下位になってきた。本町の結核登録患者の昭和三十六年から六十年までの推移は下表のとおりである。

これに代わって成人病が死因の上位を占めるようになり、ガン・脳卒中・心臓疾患などがその主なものとなっている。町では保健所、医療機関の協力を得て、ガンをはじめ成人病の早期発見、早期治療を図るとともに、成人病教室などを開き、健康の保持増進に努めている。

△老人保健法▽昭和五十八年（一九八三）老人保健法が施行された。この法律は本格的な高齢化社会の到来を迎え、健康な老後を過ごすために、四〇歳以上を対象に、健康手帳の交付、健康審査・相談・教育、医療を含めた健康管理と、もう一つは年々増加する老人医療費を国民が公平に負担しようとするものである。そのために、国・地方公共団体が一定割合を負担するほか、各医療保険

霧島町の結核登録患者の推移（昭和36～63年）

（単位：人）

年度 区分	昭和36	38	40	53	55	57	59	63
患者数	104	107	80	59	37	15	12	5

結核定期健康診断の状況

（単位：人、％）

年度 区分	昭和36	38	40	53	55	57	59	63
対象人員	4,940	5,722	5,402	3,143	3,250	3,536	3,258	3,505
受診者数	4,812	5,488	5,382	2,940	2,759	2,915	2,759	2,466
受診率	96.5	95.6	99.6	84.9	84.9	82.4	84.7	70.4

三大成人病死亡者

（単位：人、％）

年度 原因	昭和59	60	61	62	63
悪性新生物	12	11	10	9	11
心疾患	10	15	20	8	17
脳血管疾患	11	12	5	23	10
その他の	17	25	18	21	21
計	50	63	53	61	59
三大成人病の割合	66.0	60.3	66.0	65.6	64.4

制度の保険者が共同で財源拠出をする仕組みを導入した。対象者は七〇歳以上、または六五歳以上七〇歳未満の寝たきりの認定を受けたものとなっている。本町もこれに基づき昭和五十八年からこの事業を実施した。なお、昭和五十九年から六十三年までの本町の三大成人病の死因割合は前表のとおりである。

△近年の環境衛生▽ 高度経済成長に伴い、物の豊かさの中で家庭から出る一般廃棄物、危険物の処理、し尿処理など大きな問題として浮かびあがり、これに対応するために、昭和三十九年（一九六四）国分地区衛生管理組合が設立され、霧島町もこれに加入した。また各家庭からの粗大ごみも増えはじめ、町はこの処理場も設置した。一方、散乱ごみ（空き缶・空き瓶類）なども解決困難な環境問題の一つである。地域開発に伴う水質汚染も環境課題として定期的に水質検査を実施している。

△予防接種▽ 幼児期および小中学生の集団感染を予防するために、表（五三七ページ）に示すような、予防接種が実施されてきた。

△伝染病▽ 伝染病の発生は、生活環境の改善や衛生知識の向上により、急性伝染病の発生は皆無に等しくなっ

た。大正十三年以降の発生は次表のとおり。

町内の保健 衛生施設

△母子健康センター▽ 昭和三十年代、本町の乳幼児の死亡率および死産率は、

全死亡の三割に達していたので、妊娠初期から育児など母子保健の万全を期するために、総合保健施設として、昭和三十九年七月に母子健康センターを開設したが、施設の老朽化、利用者の減少により、平成元年四月、助産



霧島町母子センター

施設部門は閉鎖した。その間の利用者は、町内八八七人、町外七六三人、計一六五〇人で、母子保健の向上に大きな役割を果たした。昭和六十三年に内部改修をして、保健施設として、健康相談・健康診

査などに活用されている。

△国分地区衛生管理組合▽ 昭和三十九年（一九六四）に国分市・隼人町し尿処理組合として設立され、昭和四十四年に本町も加入。次いで昭和四十五年に国分地区ごみ処理組合が設立、国分市・隼人・福山・霧島の一市三か町の組合となる。昭和三十八年に国分地区火葬場組合が設立され、これらの三部門の運営を広域行政の中で捉え、国分地区衛生管理組合と呼ぶ。事業所はし尿処理は隼人町、ごみ処理と火葬場は国分市にある。

△霧島伝染病棟▽ 始良郡東部一市三町が昭和二十六年（一九五一）に、霧島国立病院内に伝染病患者の隔離病棟を建設現在に至っている。

△始良伊佐環境保全センター管理組合▽ 昭和四十八年（一九七三）、始良・伊佐郡の二市八町で設立し、生活環境の保全上必要な公害物質の測定分析など公害対策を合理的に行う施設である（横川中ノに管理事務所）。

△町内の医療施設▽ 診療施設は次の五医院である。

竹田医院（梅北Ⅱ内科）、鶴木医院（大窪Ⅱ内科）、椎原歯科医院（待世）、岡元歯科医院（駅前）、松村歯科医院（田口）。病院は霧島温泉労災病院（病床数二二〇床）が、内科・

外科・整形外科・理学診療科・放射線科を診療科目とする病院で、昭和三十七年（一九六二）に労働福祉事業団の経営のもとに開設された。また杉安病院（病床数一六五床）は内科（消化器科・胃腸科）・循環器科・外科・整形外科・理学診療科・放射線科を備える病院で、昭和四十五年（一九七〇）に医療法人、社团兼誠会を経営主体として開設された。共に温泉療法を取り入れている。

伝染病発生状況

年 度	発 生 状 況
大正13	ジフテリヤ1 天然痘2 赤痢1
14	疫痢2
昭和1	疫痢2
2	疫痢1 チフス1
4	疫痢2 チフス2
6	赤痢9 疫痢2 疑似赤痢5
7	赤痢4
8	赤痢1
9	ジフテリヤ1

東襲山郷土誌による

年 度	発 生 状 況
昭和33	日本脳炎2 赤痢1
34	赤痢16 ジフテリヤ1
35	日本脳炎1 ジフテリヤ1 小児麻痺1 赤痢1
36	日本脳炎1 ジフテリヤ2
40	日本脳炎2
42	赤痢1
54	赤痢1

第三章 社 会

各種接種状況

(平成元年度)

種 別	対 象 者
インフルエンザ	3～6歳児（昭和58.4.2～62.4.1生） 小・中学生全員（全員2回接種）
生ワク（急性灰白髄炎）	（春）昭和63.2.16～平成元.2.15生 （秋）昭和63.8.16～平成元.8.15生
三種混合 （破傷風・ジフテリヤ・百日ぜき）	I期 昭和61.4.2～62.4.1生 II期 昭和60.4.2～61.4.1生
ジフテリヤ	小学6年生全員
ツベルクリン	1歳児（昭和62.4.2～63.4.1） 小学校1年及び前年度陰性の2年生 中学校1年及び前年度陰性の2年生
B C G	ツベルクリン判定で陰性の者
日本脳炎	3歳児（昭和61.4.2～62.4.1生） 4歳児（昭和60.4.2～61.4.1生） 小学1年生，4年生 中学1年生，3年生
風疹	中学2年生女子及び中学3年生女子の未受診者
新三種混合 （麻しん・おたふくかぜ・風しん）	昭和62.4.2～63.4.1生

老人保健法に基づく健康審査

(平成元年度)

種 別	内 容	対 象 者
一康 般診 健査	一 般 診 査 身長 体重 血圧 検尿 血液	40歳以上の町民
	精 密 診 査 心電図 眼底 血液	一般診査の結果 必要とみられる人
基 本 診 査	身長 体重 血圧 検尿 血液 心電図 眼底	40歳以上の町民
ガ ン 検 診	胃ガン検診 問診 胃透視	40歳以上の町民
	子宮ガン検診 問診 視診 細胞診	30歳以上の町民
	乳ガン検診 問診 視診 触診	30歳以上の町民
	肺ガン検診 問診 喀痰細胞診	40歳以上の町民
厚生連巡回健診	身長 体重 血圧 検尿 眼底 心電図 血液 （一般健康診査と胃ガン検診を同時実施）	40歳以上の町民

老人保健加入者数

(単位：人)

年 度	70 歳 到 達	65 歳以上 70 歳未満で 障害認定を受けたもの	計
昭 和 59	584	20	604
60	599	31	630
61	613	28	641
62	632	38	669
63	655	54	709

(注) 昭和58年2月，老人保健法制定。昭和62年1月，一部負担金改正

食品衛生対象業者数

(平成元. 3. 31現在)

飲 食 店	菓子製造	魚介類販売	缶詰・瓶詰 食 品 製 品	喫 茶 店	乳 類 販 売
109	5	10	1	2	28
食肉販売	みそ製造	酒 類 製 造	豆 腐 製 造	めん類製造	そうざい製造
23	1	1	3	2	3

環境衛生対象業者数

(平成元. 3. 31現在)

旅 館	公衆浴場	理 容 所	美 容 所	ク リ ー ニ ン グ	水 道
41	7	11	6	2	3
畜 舎	墓地納骨堂	し尿浄化槽	火 葬 場	し尿処理施設	ごみ処理施設
2	84	675	組合 1	組合 1	組合 1

狂犬病予防

年 度		昭和59	60	61	62	63
登 注	別					
	録	453	659	417	423	386
	射	413 389	456	410	421	381

△霧島町衛生普及会△ 終戦当時の日本の環境衛生は、蚊・はえ・のみ・しらみ・ねずみなど、そ族昆虫の中に生活していた、といっても過言ではない。総司令部は、地方公共団体にそ族昆虫の撲滅を強く指示した。保健所を中核にして各市町単位に環境衛生組合が結成され、そ族昆虫撲滅への活動が開始された。発生源対策の除去、薬剤散布、便所の改良、DDT散布による、のみ・しらみの駆除など、行政と一体となって生活環境改善の努力が続けられた。昭和三十年代に入ると、のみ・しらみは完全に撲滅された。蚊・はえの発生もそのころに比べると、うそのように少なくなった。

衛生普及会の前身が環境衛生組合である。日本の経済事情が好転し、やがて高度経済成長期に入ると、経済活動の産物として各種の公害が発生した。また家庭の一般廃棄物の処理、多頭飼育による畜産公害や、ごみの不法投棄など、衛生普及会はこれらの問題に取り組んできた。衛生普及会は、平成元年まで町の委託を受けて、し尿処理と家庭の一般廃棄物の処理に当たってきたが、現在は町の直営になっている。これからも散乱ゴミ、空き缶・瓶対策、家庭や別荘分譲地などの便所の合併処理槽

の普及など、果たさなければならぬ役割は大きい。

二 国民健康保険

昭和三十四年（一九五九）一月、新国民健康保険法が施行された。旧国民健康保険法は、昭和十三年（一九三八）に制定されたが、この制度は市町村を単位に設立された組合を経営主体とするもので、設立および加入も自由で、給付の内容も社会保険としての実質的な内容を十分にそなえたものではなく、時代の推移とともに前後八回にわたって改正された。その主な点は①市町村の実施義務を法律で定めたこと、②保険給付の充実、統一を図ったこと、③療養担当者制度の改善をしたこと、④国庫負担制度の整備を図ったことなど。これらによって、わが国の医療保険制度の中核として重要な意義をもつものになった。

霧島村における健康保険の沿革を年表ふうに示すと次のようである。

昭和二十年 旧霧島村国民健康保険組合開設、同年田口診療（一九四五）

所開設、同二十三年村営移管。

昭和二十四年
(一九四九) 大窪診療所開設。

昭和二十七年
(一九五二) 経営不振と医師確保難のため診療事業閉鎖。

昭和三十五年
(一九六〇) 新国民健康保健法の施行に伴い霧島町健康保健事業開始。

昭和三十六年
(一九六一) 世帯主の結核・精神病疾患に対し七割給付実施、翌年、給付制限全面撤廃。

昭和三十八年
(一九六三) 世帯主に対する七割給付実施。助産・葬祭費を二〇〇〇円に引き上げ支給実施。給付期間を転

婦までとする。保健婦設置。

昭和四十一年
(一九六六) 世帯員に対する七割給付実施。

昭和四十六年
(一九七一) 助産給付費一万円に支給実施。

昭和四十八年
(一九七三) 葬祭給付費四〇〇〇円に支給実施。

昭和四十九年
(一九七四) 助産給付費を二万円に、葬祭給付費を五〇〇〇円に引き上げ支給実施。

昭和五十年
(一九七五) 高額療養費支給制度実施。

昭和五十一年
(一九七六) 助産給付費四万円支給実施。

昭和五十三年
(一九七八) 高額療養資金貸付制度創設。保健婦設置、国保から一般へ設置替え。

昭和五十四年
(一九七九) 助産給付費六万円支給とする。

昭和五十六年
(一九八一) 助産給付費八万円、葬祭給付費八〇〇〇円に引き上げ支給実施。

昭和五十七年
(一九八二) 助産給付費一〇万円、葬祭給付費一万円に引き上げ支給。

昭和五十八年
(一九八三) 老人保健法により七〇歳以上は無料となる。

昭和五十九年
(一九八四) 退職者医療制度創設。

昭和六十三年
(一九八八) 助産給付費一三万円支給実施。

保険基盤安定制度の創設。

以上本町の国民健康保健事業の沿革を述べたが、ある時期には経営不振のため、事業閉鎖するなどの苦い経験もあった。しかし昭和三十五年の新国民健康保険制度は給付の統一、国庫補助など内容的にも整備されていたので、公益、療養担当者、被保険者代表一二人の国民健康保険準備委員会を設け、各集落ごとに説明会を開催するなどして町民の理解を得て、同年十月から開始した。

国民健康保険 この協議会は、被保険者代表四人、国
運営協議会 民健康医または国民健康保険薬剤師代

表四人、公益代表四人、計一二人によって構成され、本町条例に基づき、国民健康保険事業の全般にわたり審議を行い、必要に応じて諮問に答え、本事業の円滑な推進に寄与している。

第三章 社 会

療養諸費件数費用額調べ

年 度	件 数	費 用 額	保険者負担額	一 部 負 担 金
昭和59	14,851件	298,890千円	208,228千円	86,454千円
60	16,318	357,220	251,397	96,442
61	15,709	332,970	234,742	94,394
62	16,311	357,093	255,210	18,939
63	16,148	337,879	239,780	95,927

国民健康保険年報から

助産給付費・葬祭給付費支給状況調べ

年 度	助 産 給 付 費			葬 祭 給 付 費		
	件 数	支 給 額	摘 要	件 数	支 給 額	摘 要
昭和59	41件	4,100千円	1件100千円	33件	330千円	1件10千円
60	42	4,200	同	43	430	同
61	24	2,400	同	25	250	同
62	25	2,500	同	44	440	同
63	20	2,030	平成元年3月より130千円	40	400	同

国民健康保険年報から

保険税収納状況調べ

年 度	調 定 額	収 納 額	収 納 率	摘 要
昭和59	115,548千円	110,535千円	95.7千円	減税 8,224千円
60	98,709	93,766	95.0	〃 14,488
61	120,913	115,982	95.9	〃 11,291
62	133,274	128,282	96.3	〃 14,480
63	137,099	133,710	97.5	〃 16,497

国民健康保険年報から

1世帯、1人当たり保険税調べ

年 度	1世帯当たり税調定額	1人当たり税調定額
昭和59	99,439円	35,228円
60	83,228	30,131
61	101,779	38,191
62	108,530	42,202
63	112,101	44,906

国民健康保険年報から

1人当たり療養諸費調べ

年 度	1人当たり費用額	1件当たり費用額	1人当たり保険者負担額
昭和59	91,125円	20,126円	63,484円
60	109,042	21,891	76,739
61	105,171	21,196	74,145
62	113,076	15,647	80,814
63	110,671	20,924	78,539

国民健康保険年報から

三 社会福祉

戦前の社会福祉

わが国の福祉制度は明治七年（一八七四）太政官達恤救規則に始まり、その対象は身寄りのない独身の障害者や、傷病人・幼児などの極貧窮迫者を救済する制度であった。その後昭和四年（一九二九）に救護法が制定されたが、経済恐慌のあおりで延期され、昭和七年から施行された。救護対象者も大幅に拡大され、救護の種類も生活扶助、医療扶助、助産扶助、生業補助の四種となり、経費負担も国が二分ノ一、県・市町村は四分の一として市町村長が実施機関の長となり、名誉職の委員制度を設けた。

この救護法は昭和二十一年（一九四六）、生活保護法が施行されるまで存続した。

なお、昭和八年には少年救護法、昭和十三年には、母子保護法・社会事業法、昭和十五年には医療保護法など、次々に公布されたが、日中戦争・太平洋戦争のために、現在のように福祉政策として、末端地域にまで浸透しなかった。

戦後の社会福祉

終戦により、国の諸制度は民主化を軸に大幅に改革された。昭和二十一年（一九四六）十月には、生活保護法が施行され、生活困窮者を社会の責任において、国が平等な保護をしようとする福祉の基本理念を貫く画期的な制度であった。昭和二十二年（一九四七）五月、新しい憲法に基づく福祉国家として、次のような諸制度が整備された。

昭和二十一年（一九四六）	十月	生活保護法
昭和二十二年（一九四七）	十二月	児童福祉法
昭和二十三年（一九四八）	七月	民生委員法
昭和二十四年（一九四九）	十二月	身体障害者福祉法
昭和二十六年（一九五一）	三月	社会福祉事業法
昭和二十七年（一九五二）	四月	戦傷病者戦没者遺族等援護法
昭和二十八年（一九五三）	八月	未帰還者留守家族等援護法
昭和三十五年（一九六〇）	三月	精神薄弱者福祉法
昭和三十八年（一九六三）	七月	老人福祉法
昭和三十九年（一九六四）	七月	母子福祉法
昭和四十五年（一九七〇）	五月	心身障害者対策基本法
昭和四十六年（一九七一）	五月	児童手当法
昭和五十七年（一九八二）	八月	老人保健法

民生委員・ 民生委員は民生委員法によって、知事の
児童委員 推薦により厚生大臣の任命する民間の名

誉職であり、同時に児童委員および国民年金委員も兼
ね、任期は三年間となっている。福祉に欠ける住民の適
切な助言、指導、更生に助力し、福祉関係の行政機関、
団体、施設などとの連絡・協力など広範囲の役割を担っ
ている。

民生委員制度の沿革

大正十二年（一九二三）に県社会事業協会が鹿児島市
に補導員を設置、大正十三年県の経営に移し、昭和三年
方面委員規定を公布、補導員を廃止・昭和九年県下の全
市町村に方面委員が設置された。昭和二十一年（一九四
六）生活保護法が制定されると同時に民生委員令も施行
され、民生委員と改められた。昭和二十二年に児童福祉
法の制定により、児童委員も兼ねるようになった。同二
十八年、民生委員協議会が発足、福祉事務所や市町村の
行う福祉業務に協力する団体として、現在に至っている。

生活保護

昭和二十一年（一九四六）九月、生活保
護法が施行され、生活に困窮するすべて
の国民に対し、困窮の程度に応じ必要な保護を行い、最

低限度の生活を保障するとともにその自立を助けるのが
生活保護である。昭和四十五年からの生活保護の推移は
次表のとおりである。

生活保護の推移

(単位：戸、人、千円)

年度	延世帯	延人員	生扶	活助	住宅 扶助	教育 扶助	医扶	療助	生業 扶助	祭葬 扶助	合 計
昭和 37	1,057	—	3,771	44	808	3,248	—	10	8,944		
40	775	—	3,493	43	1,297	4,055	—	19	8,907		
45	743	1,759	4,642	126	636	14,845	60	23	20,334		
50	646	1,234	10,803	266	1,075	31,372	45	29	43,593		
55	732	1,502	24,340	1,156	1,679	58,604	85	461	86,327		
60	513	870	22,149	691	729	35,466	40	38	59,115		
63	300	399	12,705	170	256	18,392	—	—	31,524		

四 国民年金

福祉年金と 拠出年金

国民年金は昭和三十四年（一九五九）十一月から施行された。この制度は既存の被用者年金（厚生年金、各種共済年金、船員保険など）の適用を受けていない六五歳以上の国民一般に対して、また老齢、障害、死亡の場合に年金を給付して生活の安定を図ることを目的にしている。この制度は、次のように拠出年金と福祉年金の二つに分けられている。

拠出年金——一定の期間保険料を掛けて受給できるもの。
福祉年金——拠出年金が発足したとき、すでに高齢に達し、拠出制年金の保障対象に該当しない者や、障害者や母子世帯などであった者に全額を国の負担で支給するもの。

霧島町の国民年金の沿革を年表ふうに記述する。

昭和三十四年（一九五九）四月、国民年金制度の開設。同年四月、福祉年金の裁定開始、年金証書第一号交付、（田口の

竹之内カメさん）。

昭和三十六年（一九六一）

四月、拠出年金保険料納付開始。被保険者数、二二三三人（強制二〇八八・任意二四五）、加入

率八八・七七^七。
昭和四十年（一九六五）加入率は九八・五^五で県平均を上回り定着してきた。

昭和六十一年（一九八六）四月、国民年金法の改正により、すべての国民に共通する基礎年金が導入され、被用者年金制度から基礎年金に上乗せする報酬比例の年金が支給されるように改められた。

次に福祉年金について、この年金は戦前からあったが、一般国民を対象にしたのは、昭和三十六年の国民年金制度が確立されてから充実してきた。現在福祉年金は次の四種類がある。

老齢福祉年金——七〇歳以上の人で年額一万三二〇〇円。
障害福祉年金——一級障害者に年額二万一六〇〇円。

母子福祉年金——母に一万五六〇〇円、子供二人目から一人につき四八〇〇円加算。

準母子福祉年金——準母に一万五六〇〇円。子供に二人目から一人につき四八〇〇円加算。

拠出国民年金保険料の推移（掛け金）

（単位：円）

年度	保 険 料 定 額		年 度	金 額	年 度	金 額
	35歳未満	35歳以上				
昭和36	100	150	昭和52	2,200	昭和60	6,740～7,140
42	200	250	53	2,730	61	7,100～7,500
44	250	300	54	3,300	62	7,400～7,800
45	450		55	3,770	63	7,700～8,100
47	550		56	4,500	平成1	8,000～8,400
49	900		57	5,200	2	8,400～8,800
50	1,100		58	5,830		
51	1,400		59	6,220		

福祉年金受給状況の推移

（単位：件、千円）

年 度	受給総数	年金総額	老 齢		障 害		母 子	
			件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和41	425	7,434	345	5,420	62	1,624	18	390
46	525	15,077	457	12,420	61	2,269	7	258
51	547	89,756	472	72,724	75	1,703	0	0
56	388	114,314	311	84,362	77	29,952	0	0
60	289	102,116	195	62,010	94	40,106	0	0
63	131	43,230	131	43,230				

（注）障害年金は昭和61年から消滅

拠出年金給付状況の推移

（単位：件、千円）

年度		昭和41	46	51	56	61	63
区分							
障 害 年 金	件 数	2	7	27	43	75	68
	金 額	144	672	12,117	26,224	51,505	46,226
母 子 年 金	件 数	18	36	27	21	11	7
	金 額	1,132	3,509	11,086	14,906	9,154	6,083
遺 子 年 金	件 数	4	1	0	1	1	4
	金 額	69	91	0	540	593	2,069
死 亡 一 時 金	件 数	5	6	6	2	6	0
	金 額	69	72	137	46	635	0
計	件 数	29	50	60	67	93	81
	金 額	1,395	4,344	23,400	41,717	61,918	55,106

五 社会福祉協議会

社会福祉協議会は、社会福祉事業の効率的運営と組織的活動を通じ、明るい町づくりを進める目的で、国や県の指導により昭和三十二年（一九五七）に設立された。

当面の活動として、低所得者に対する資金の貸し付け、福祉団体の育成、生活上の諸問題に対する相談などを扱っていたが、時代の流れとともに拡大される福祉ニーズに対応するために、昭和五十五年（一九八〇）法人組織に改め、厚生大臣の認可を受けて、社会福祉法人霧島町社会福祉協議会を設立し、地域における社会福祉関係者、地域住民、ボランティアなど地域ぐるみで「思いやりのある福祉社会」づくりに取り組んでいる。

在宅福祉

△老人給食サービス事業▽ 昭和五十四年（一九七九）、地域福祉活動モデル地区

の指定を受け、三地区で開設した。「手づくりの心のこもった弁当」を目標に、ボランティアグループが中央・田口・永水の公民館施設を利用、毎月一回、民生委員を通じて配食している。給食対象者は、在宅独居老人・重

度障害者・九〇歳以上など九一人。平成元年（一九八九）現在。その他に独居老人の集い、独居老人料理講座などを開催し、孤独感の解消、ふれあい、栄養改善指導などを実施している。

△在宅福祉事業▽ 平成元年、福祉巡回車を購入、在宅寝たきり老人の入浴、オムツの配布、訪問活動、配食、広報活動など大きな役割を果たしている。

児童福祉を高める事業

△福祉文庫の設置▽ 福祉に対する理解を深め「感謝の心」「奉仕活動に参加できる人間育成」を目的に小中学校に昭和五十九年（一九八四）に設置。

△ボランティア育成協力校の指定▽ 小中高生を対象に、社会福祉への理解と関心を高め、助け合いの精神を養い、ボランティアの輪を広げる目的で、小学校三校・中学校（現在指定）に三年間の指定を受けている。

民生援護事業

△世帯更生資金▽ 低所得世帯の自立更生を目的に、昭和三十年（一九五

五）に設けられた制度で、資金の貸し付けと民生委員による助言・指導を行っている。

△小口貸付資金▽ 昭和三十五年（一九六〇）緊急生活

資金の貸し付けを行っている。

心配ごと相談 所開設事業 広く住民の日常生活のあらゆる心配ごとに対し、適切な援助を行うことを目的に福祉協議会に開設。七人の相談員がこれに当たっている（毎週木曜日）。

地域福祉 活動の推進 社会奉仕思想の普及を図るために、地域住民に福祉活動への参加を呼びかけ、次のような活動を推進している。



福祉餅つき大会

△福祉餅つき▽

霧島神宮寄贈の糯米で、婦人会

・青年団・子供

会などが協力し

て紅白の餅をつ

き、各地区の婦

人会員により老

人給食対象者に

贈っている。

△ボランティア

体験講座▽平

成元年から開設して福祉活動への参加を呼びかける。

共同募金・歳末 助け合い運動 戦後四〇年にわたり、毎年十月ゝ十

二月の三か月に展開されている。募

金は次のように分配されている。

△一般募金▽ 福祉施設・福祉団体などに分配され、施設補修、備品などの整備に充て、また老人クラブ・身体

障害者協会・母子協会などの事業費となる。さらに在宅

福祉事業配分は在宅ねたきり老人、敬老の日の見舞金、

低所得者援護費、火災見舞金、ボランティア協力校援助

助成費にも充てられる。

△歳末助け合い募金▽

平成元年の場合民生委員協議会

を通じて、長期療養者は在宅・入院共に一年以上を対象

として七四人に、重度心身障害者四三人、生活困難世帯

二七世帯に配分された。

その他

福祉団体により社会福祉大会、福祉スポーツ大会などを通じて、社会福祉に対する理解と親ほくを図っている。

また住民の積極的な参加を促すために、福祉情報などにより周知を図るための広報活動も行っている。

歴代社会福祉協議会会長は次のとおり。

帖佐 軍吉	昭和	〓三十二年
推原 誠治	同	〓三十六年
桂 久春	同	〓四十年
高林 義雄	同	〓四十二年
七夕 豊志	同	〓四十七年
藤山 藤夫	同	〓四十九年
岡元 兼志	同	〓五十一年
内村 義幸	同	〓平成元年

日本赤十字運動

日本赤十字社は明治十年（一八七七）「西南の役」の活動を契機に、博愛

社として創立され、明治二十年（一八八七）に日本赤十字社と改称された。県支部は明治二十五年（一八九二）に創設、以来今日まで人道・公平・中立・独立・奉仕など、人道博愛の精神で世界平和と人類福祉のため、諸活動を展開し、さらに救急法・家庭看護法・水上安全法・蘇生法などの講習を行い、たゆまぬ努力を続けている。

霧島町分区でも歴代町長が分区長（事務局社会福祉協議会）となり、毎年一定の金額（年五〇〇円以上を自治公民館単位、個人）拠出してもらっている。「一世帯に一人以上は赤十字社員に加入」の運動を進めながら、平成元年度社員数は一五三二人となっている。また霧島町分

区日赤奉仕団（霧島町婦人会）では、災害を受けた世帯に対し、炊き出しや災害救援物資（毛布・シート・日用品など）、死亡の場合は見舞金などを届けている。

霧島町保護司会

保護司の事業は遠く江戸時代の五人組に源を発するといわれる。しかし

近代的組織は大正二年（一九一三）福井県に民間事業として保護委員会を設けたのが最初である。社会奉仕の精神をもち、罪を犯した人の厚生を助けるとともに、犯罪の予防のための世論の啓発と社会の浄化を図り、個人および公共の福祉に寄与することが任務で、本町でも四人の保護司が活動している。保護司は所定の手続きを経て推薦された者に法務大臣が委嘱し、それぞれの保護区に所属する（霧島町は国分保護区）。

六 福祉関係諸団体

遺族会 昭和二十八年（一九五三）設立。会員七五世帯。日清戦争以後の戦没遺家族を会員として、二七六人の戦没者の霊を慰め、町内遺族の連絡協調、慰霊祭の執行、遺族の福祉向上を目的に全国連合会にも加入してい

る。

身体障害者協議会 会員相互の連絡協調、福祉向上を目的として、障害者の職業補導、身上相談、生活改善などに対する協力のほか、身体障害者の生活向上に努めている（会員二八〇人）。

傷痍軍人会 傷痍軍人相互の親和を図り、相互扶助、福祉向上に努めている 会員一六人。

母子寡婦福祉会 母子家庭の相互の親和を図り、相互扶助を目的に、福祉資金の借入れや各種の事業を行い母子（寡婦）家庭の福祉の増進を図っている。

老人クラブ連合会 老人福祉法の制定された昭和三十八年九月十五日に霧島町長寿会連合として発足。町内の老人福祉の向上と各単位老人クラブの連絡協調の役割を果たすとともに、同四十一年から高齢者大学講座の開催や、健康づくりのための、ゲートボールやグラウンドゴルフ大会などのスポーツ活動も行っている。また単位老人クラブごとに健康農園を設け、そば・甘藷などの栽培に取り組んでいる。



高齢者健康づくりスポーツ

歴代会長

後藤 康平	昭和三十八年～同四十年
小久保光雄	昭和四十一年～同四十五年
玉利 豊吉	昭和四十六年～同五十二年
測脇 清香	昭和五十四年～同五十八年
入来 岩男	昭和五十九年～同六十二年
木野田貞則	平成元年より 現在

地区老人クラブ会員数（平成二年度現在）

中央地区老人クラブ（大窪 駅前 梅北）

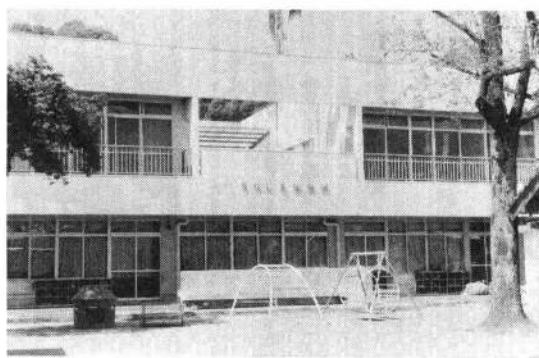
九八人

七 社会福祉施設

町内には三保育園と老人憩の家などの諸施設があり、国のために生命をささげた人たちを慰める慰霊塔もある。それらを紹介しながら、祭られている人たちの氏名も収録する（三三四ページ参照）。

霧島保育園 昭和二十八年（一九五三）六月、農繁（定員六〇人）期の季節託児所として竜泉寺本堂に開設、地区民の要望により、同年十一月保育園として認可を受け、田口公民館を借りて開園。

鶴亀老人クラブ（豊後迫 川北 向田）	九八人
永水西老人クラブ	五七人
永水東老人クラブ	六八人
湯之宮老人クラブ（湯之宮）	八二人
待世老人クラブ（新地 待世）	八〇人
狭名田老人クラブ（堀之内）	一〇二人
田口老人クラブ（田口）	一〇三人
桂内老人クラブ（桂内）	八三人
日之出老人クラブ（霧島 永池）	七四人
計九三七人（内八〇歳以上一八七人）	



霧島保育園

設立。同園は町内最初の保育園として、町内のほぼ中央に位置する田口地区に設立された。当初は定員六〇人を確保するのもむづかしい時期もあったが、時代の移り変りにより、働くお母さんが増え、入所希望者も定員を満たすようになってきた。保育内容も、昭和四十二年当時、県内でも新しい試みとして、鼓笛指導を取り入れるなど、充実した内容の保育がされている。園長刈屋建

昭和三十年（一九五五）三月、境内に木造の園舎（三五坪）を建て、次いで、昭和四十九年に鉄筋二階建ての園舎（二九〇坪）が完成。昭和五十二年（一九七七）三月、社会福祉法人実往福祉会を



大窪保育園

校。保母五人、事務員一人、調理員一人。

大窪保育園

(定員六〇人)

昭和四十一年（一九六六）、財団法人大川育英会の協力を得て町立保育園として開設。当時、町内には霧島保育所がしか所しかなく、入園希望者の全員を収容できなかった。また大窪方面からは田口までは遠く、通園も不便であるとの要望にこたえて開設された、町では二番目の保育園である。園舎は、旧大窪公

営住宅・霧島神宮駅の旧駅舎の古材を利用して建設した。昭和四十三年（一九六八）二月社会福祉法人、大川福祉会として認可を受け、同年四月、経営主体を町立から大川福祉会に移行し

た。昭和五十年（一九七五）園舎の全面改築を行い、鉄筋コンクリート造り平屋（九四坪）暖房付きの園舎が完成（総工費、三四六三万円）、現在、幼年消防クラブも結成され、消防出初め式に参加するなど、地域の防災運動の一端を担っている。

大川福祉会・大窪保育園の組織

役員 理事 一三人 監事 三人

理事長は理事の中から互選とする

職員 園長一 保母六 用務員一 調理員一

歴代理事長

第一代 霧島町長 内村 義幸

第二代 向田 森永 直衛

第三代 湯之宮 藤山 藤夫

第四代 川北 鎌田 満雄

第五代 駅前 本仮屋 実

第六代 大窪 椎原 重義

歴代園長

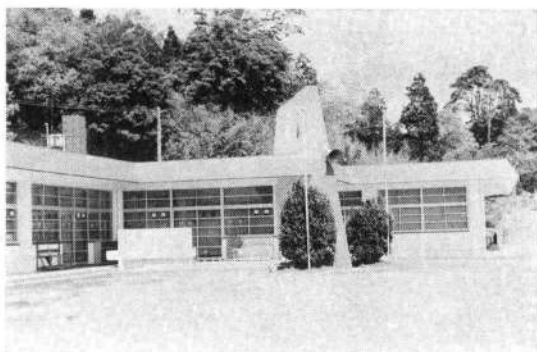
第一代 森永 直衛

第二代 川野 テル

すめら保育園

(霧島Ⅱ定員四六人)

昭和五十一年（一九七六）二月、社会福祉法人すめら福祉会として認可を受け、町内三番目の保育所として同年四月に開



すめら保育園

設。鉄筋コンクリート造りの園舎（九〇坪）で、当初は定員六〇人で発足したが昭和五十五年から四五人に変更現在に至る。地区的には三園の中で最も北に位置し、園児もその周辺の子が多い。最新の保育園であり、豊かな自然に恵まれ、広い園庭で伸び伸びとした保育が行われている。「すめら」とは「皇^{すめ}る」を指し、「一体になる」とか「和合」することを意味し、天孫降臨の里霧島にふさわしい保育園づくりを目指している。

園長中村公紀。保母四人、調理員一人。



憩の家

老人憩の家

昭和三十八年（一九六三）老人福祉法制定の趣旨に基づいて、町と福祉協議会は霧島神宮の境内にあった旧保管林事務所の建物を、老人の憩安の場として利用させてほしい旨を神宮側に要請した。神宮では浴場一棟を併設してこの施設を提供していただいたので、町営給湯事業による温泉を無料で給湯した。テレビ・ラジオ・碁・将棋、湯茶、図書などを備え、温泉付きで

当時としては全国的にも珍しい老人憩いの場として昭和三十八年九月にオープンした。その後、同四十六年十一月に町内田口に総工費一八九〇万円をかけて「霧島町老人憩の家」として

開所した。大広間・休憩室・事務室・温泉浴場・厨房などが完備され、文字どおり町内老人の憩いの場として活用されている。また広場にはゲートボールのコートもあり、健康づくりの一役をになっている。平成二年には老人の生きがい対策として竹細工を主体にした作業棟も併設された。

軽費老人ホーム 設置主体 社会福祉法人霧島会
霧 島 荘 所在地 霧島町田口字白土二七三七



軽費老人ホーム霧島荘

設置年月日 昭和六十二年七月一日

建物―鉄筋コンクリート二階 定員 五〇人

ホームの目的―家庭環境、住宅事情などの理由で、自宅で生活することが困難な人が、低額な料金で明るい生活を送ることが目的である。

入園資格―六〇歳以上で、日常のことは自分でできる健康状態であること。但し夫婦の場合はどちらか一方が、六〇歳以上になればよい。

慰 霊 塔 明治十四年（一八八一）から西南の役の

従軍者中の生存者が発起人となり、慰霊のための招魂祭を行っていたが、明治四十年から村と兵社会の共催で実施するようになり、毎年十月十六日に行われていた。

東襲山村時代であったので、慰霊塔は重久にあった。

昭和二十五年に分村したが、同二十八年、講和条約発効と同時に本町にも慰霊塔建設の要望が起こり、町は同三十年遺族会、その他の協力を得て霧島中学校校庭の一隅に、慰霊塔を建設した。しかし場所、規模が適正でなかったとの理由で、改築の要望が高まり、同四十年遺族会が主となり、町の補助や各方面からの協賛を得て現在の

場所に建設した。同四十五年ごろになると、年ごとに遺族も少なくなり、戦没者に対する住民意識を継承する意味で、広く一般の参加が望ましいとの趣旨により、霧島町慰霊奉賛会が発足した。これまで、町と遺族会で行っていた祭祀^しの斎行、慰霊塔の維持管理は慰霊奉賛会で実施することにし、現在に至っている。

第七節 上水道および温泉事業

一 上水道

本町の上水道は中央地区と、永水地区に分かれて創設され、それぞれ拡張工事が実施されて今日に至っている。地区別の沿革、水道料金の変遷は次ページ表のとおり。

すなわち、平成元年（一九八九）現在、給水人口が永水地区六〇八人、北永野田地区八九人となっている。

上水道創設以前は、井戸水、わき水、川水を生活用水として利用しており、創設に当たっては、「水を買って飲む必要はない」との反対意見も、多数あったようである。また創設工事実施には多数の労力奉仕が行われた。

本町の上水道は平成元年現在、中央、永水の両地区で水源九か所、送水管一万五五〇〇[㍎]、配水管一〇万一千五〇[㍎]、送水ポンプ六基、最大配水量二四五〇立方[㍎]、給水人口四九五六人、普及率八七[㍎]となっている。町簡

第三章 社 会

中央地区の変革「霧島・大田小学校（床浪・春山地区を除く）校区」

創設拡張 変更別	認可年次	竣工年次	事業費 (千円)	計画給水 人口(人)	日最大 給水量	備 考
創 設	昭30. 10. 25	昭33. 3	33, 530	6, 000	m ³ /日 720	上 水 道
第 1 次 拡 張	40. 3. 31	40. 11	5, 930	7, 000	1, 050	同
第 2 次 拡 張	45. 1. 10	46. 3	43, 558	7, 000	1, 847	同
第 3 次 拡 張	52. 5. 31	53. 3	236, 246	9, 300	3, 352	同 東部地区編入
事業計画変更	56. 6. 24	57. 3	145, 567	5, 300	2, 082	同 大和(リゾート)分離
経 営 変 更	59. 3. 29			4, 800	1, 863	簡易水道に経営変 更, 尾谷地区編入
簡易水道事業	61	63	131, 000	4, 800	1, 863	送水管 1, 963m 配水管 11, 280m

注 1989（平成元年）現在簡易水事として経営されて給水人口 4, 259人

永水地区の変革「永水小学校（床浪・春山地区を含む）校区」

地 区 名	創設年次	竣工年次	事業費 (千円)	計画給水人口 (人)	日最大 給水量	備 考
入水・笹之段 地 区	昭34. 8. 15 36. 2. 27	昭35. 3 36. 6	3, 590 3, 071	510 同	m ³ /日 61 同	簡易水道 (日向灘沖地震 災害復旧工事)
牧神・萩之段 地 区	35. 6. 20	36. 3	2, 558	240	36	同
永 水 地 区	54. 6. 5	55. 3	135, 000	740 永水地区 580 牧神地区 160	191	同 入水・笹之段地 区, 牧神・萩之 段地区を統合 永野田・床浪・ 上春山地区拡張
北永野田地区	55. 6. 20	56. 3	30, 200	95	24	飲料供給施設

水道使用料金の経緯

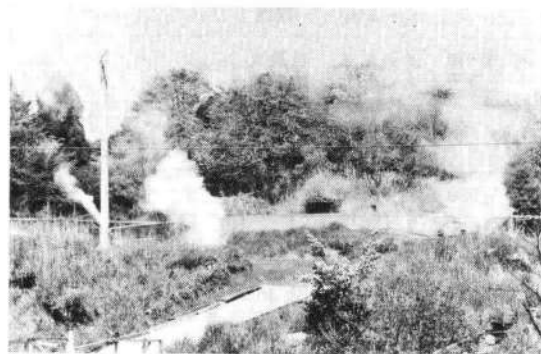
(単位: 円)

年 次	昭和31	43	44	51	54	56	57	58	平成 1
基本料金 10m ³ 1月当	220	280	360	500	700	800	900	1, 050	1, 150
超過料金 m ³ 当	20	30	40	55	60	70	80	90	100

易水道のほかに自己水源による専用水道が霧島神宮、大和（霧島高千穂）リゾート、霧島温泉労災病院など五か所ほどあるようだ。

二 温 泉

景勝地に恵まれた霧島町は、霧島神宮をはじめ多くの名所古跡があり、観光的には有利な条件をもっているが、通過観光地で宿泊は牧園町の丸尾、林田が主であった。訪れる観光客の滞在型観光地への脱却を図るために霧島神宮一帯を温泉郷とする計画



町営給湯源泉（湯之野）

が出され、霧島町唯一の泉源地である湯之野から温泉引湯の検討が進められた。

泉源地の湯之野温泉は、以前、株を有するものだけの共有で、湯守をおいて近くの住民が仕事の疲れをいやすひなびた湯治場であったが、昭和の初期に吉松武志氏が株をまとめて地獄一帯の土地を占有し、松のといを利用して「蓬泉館」に湯を引き温泉旅館を開設した。これに少しおかれて菱刈町本城出身の小倉岩松氏が地獄の東方霧島川西岸でボーリングして、霧島神宮前の駐在所付近に給湯し「宮の前温泉」を始めたが数年にして閉鎖された。湯之野の泉源について年代を追って略記する。

昭和三十五年
（一九六〇）
当時鹿児島大学の地質学者、露木教授による湯之野地区の調査

昭和三十六年
（一九六一）
町営国民宿舎「みやま荘」の開設、温泉は吉松氏所有の地獄から分湯。同年六月、昭和水道土木鹿児島出張所ボーリング部が湯之野のボーリングに着手、七月十七日、一四七呎の深さで湧出、温度九八度、一日湧出量三〇〇リットル、これが霧島町営温泉給湯事業のはじまりである。

昭和三十七年
（一九六二）
第二次ボーリングに着手、十月十三日成功、同年霧島神宮一帯に給湯工事に着手する。

昭和三十八年
(一九六三)

昭和四十六年
(一九七一)

十月二十九日霧島にとって、画期的な大事業「霧島神宮温泉郷創り」への第一歩をふみだす。霧島温泉労災病院の建設当時(昭和三十七年)は地獄から分湯を受けていたが、この年に源泉井を掘削、現在二本の源泉井を有し、機能回復医療などに温泉活用。

昭和五十五年
(一九八〇)

田口字扇山地区に大和ハウス工業株式会社が霧島高千穂リゾートランドを開発。湯之野から引湯し、現在日量約八〇〇^{リットル}で、霧島ロイヤルホテル、高千穂カントリークラブ、別荘約三〇〇戸に給湯している。

平成元年現在
(一九八九)

日量三〇〇〇^{リットル}、二二一戸(官公署四、旅館ホテル一九、共同浴場二七、病院その他五、別荘八六、一般家庭九〇)に給湯。給湯方法は、魚骨方式で一日契約七^{リットル}によって使用料金を定めている。以上のほか、地獄から直接引湯している吉松氏の蓬泉館、公園ホテル、領家氏の霧島高原ニュータウンがあり、野上地区の開発地、霧島台へも分湯されている。横岳地区の「四季の里」は牧園町丸尾から引湯し別荘用に利用されている。給湯区域・使用料金・供給施設・温泉特別会計の経費は、下表のとおりである。

△給湯区域▽

霧島ハイッ周辺、霧島神宮一帯、新梅北(大霧荘周辺)、祓谷(あさぎり荘周辺)、遠見松(杉安

病院周辺)、伊田・田口地区・霧島神宮駅一帯、大窪・川北地区、扇山「霧島高千穂リゾートランド」(専用線)使用料金(月額)
(単位:トン、円)

料 金	給湯量
七、三〇二、三〇二、四八〇、六六七、四〇〇、五、九〇三、五八四、四八〇	三 五 一〇 二〇 五〇 一〇〇 二〇〇 三〇〇

供給施設(源泉井九本)

源泉井名	掘削年次	備 考
第一号	昭和三六年	
二	三七	休 止
三	三九	休 止
四	四四	休 止
五	四四	休 止
六	四六	休 止
七	四八	休 止
八	五五	休 止
九	六一	高千穂リゾート専用

(註) 木製混合槽五槽、木製減圧槽九槽、コンクリート配湯槽六槽、沢水の導水管(鋼管)二七三〇m、送湯管(ビニールパイプ)四八〇〇m、配湯管(ビニールパイプ)一二四〇〇m
温泉特別会計の経緯
(単位:千円)

年 度	昭和四〇	五〇	六〇	平成一
決 算 額	一〇、七五	三六、四二	六五、六二	八五、五八

第八節 住宅

終戦で、外地からの引き揚げ者や、復員軍人などの帰郷により住宅事情もこれまでと違ってきた。また、一つには核家族化が進み、二世・三世大家族が減りはじめ、住宅の需給のアンバランスが生じてきた。昭和二十六年（一九五一）に公営住宅法が施行されたので、町も昭和二十七年から継続的に町営住宅の建設を進めてきた。

さらに高齢化社会を迎え二世・三世代居住を推進するためのモデル住宅として、平成元年から三か年計画で川北に、サンビレッジ住宅団地（四八戸、内二四戸は県営）を建設した。また隣接国分市の内陸工業団地の発展に伴い、若者の国分市への転出をとめるための過疎対策として永水団地（八戸）も建設された。現在一三八戸の公営住宅がある。

一方、民間住宅として主なもの、労災病院の職員住宅団地が待世に建設されているほかロイヤルホテルの従業員住宅がある。このように公営住宅をはじめ民間住宅



別荘分譲地風景

団地などの建設により、住宅難の解消に努めてきた。

その他の別荘、住宅・分譲マンションなどについては、次のとおりである。昭和五十年代に入ると、猪子石一带の旧陸

軍演習地跡（戦後開拓入植地）に大和興産株式会社による大型開発が進められ、別荘地分譲（現在四〇〇戸が建設）が行われた。このほかに霧島ニュータウン、霧島台地四季の里など、民間資本による別荘分譲が進み、一部定住者も増えて人口の増加に一役をになっている。なお、平成二年には大和興産株式会社による分譲高級マンションヴァンベル霧島（一四階建て）が建設された。

公営住宅の現状は次表のとおり。

公営住宅の状況

(単位：戸)

団 地 名	町 営 住 宅			構 造 別	建 設 年 度	県 営 住 宅	
	一種	二種	三種			戸数	建設年度
待 世		8		木 造	昭和27～44		
大 窪	14	22		簡易耐火平屋	40～44		
永 水		8		木 造	59		
園 田	10			簡易耐火平屋	46		
神 宮 前		11		木 造			
東 中 前	4	3		木 造 ¹ 簡易耐火平屋 ⁶	27～44		
田 口		4		簡易耐火平屋	43		
中 原	8			簡易耐火平屋	46		
サンビレッジ	8	16		木 造	平成1～3		24 木造 (平成1～3年)
計	44	70					24

第九節 民俗芸能

一 年中行事とくらし

年中行事は、いうまでもなく元旦から大みそかまでの習慣的行事を指すが、それは各家々のものもあれば、集落単位のものなどさまざまである。ここでは、町の先輩たちが「若い人たちにどうしても伝えたい」とまとめた霧島の「昔のくらし」を中心に、月日を追って採り上げてある。その間に「椎原日記」からも引用したりしている。すでに現在行われていないものもあるが、終戦後に始まった行事も多く、ともに記載した。

一 月 若水汲み 元日の夜の明けかかったころ

に、湧水・井戸水・川水などを桶(タンゴと呼んだ)に汲み、その中に餅を入れ、餅の背が上になると日年(ひとし)・腹が上になると雨年(あめとし)といって占った。新年に新しい水を汲み、生気を貯えようとする意であり、この水は必ず男が汲んだ。雑煮には餅・昆布・里芋・おや

し（豆もやし）、野菜などを入れた。

初もうで 元旦の午前〇時から新しい年の無事を願う善男善女が、霧島神宮その他の末社や、また仏徒は龍泉寺にお参りすることを、初もうでと呼ぶ。現在、霧島神宮には正月の三日間で一〇〇万人近い初もうで客が押しかけている。

二日山 山仕事をしている人はもちろんのこと、農家の人も二日の朝は山に行き、仕事始めという意味の習わしがあった。

二日風呂 昔は温泉以外はみな沸し湯であり、元日だけは風呂釜も休ませるという意味で、二日の朝は早めに風呂を沸かして、二日山から帰ってきた人たちをねぎらった。今でも銭湯は二日の朝は早くから営業している。

七日節（なんかんせつ） 今の七草祝いの事で七草がゆ（なんかづし）を作って食べた。七歳になった子どもは年上の人に連れられて、重箱を持って近所や親類の家を七軒まわり、七草がゆを少しづつもらって帰る。祝儀をくれる家もあり、子どもの健やかな成長を祈った。

合同七草祝 戦後の昭和二十八年（一九五三）、生活の

簡素化を目標に、行政と婦人会の共催で合同七草祝をするようになった。これにより各家庭で人々を招いて七草祝をする家は少なくなった。

十二日（かわいまし） といって奉公人（下男・下女・子守など）の一年の交替日になっていた。替わる人も替わらない人も、この日は雇い主・父兄・本人がそろって一年間の計算を済ませ、次の年の契約を決める日でありこの日だけは、下男・下女も晴れて休みの日であったが今は昔の語り草になっている。

成人式 昭和二十四年（一九四九）、「成人の日」が制定されたことを機に、満二〇歳になると、成人としての位置づけと、自覚を高めるために、町教育委員会の主催で成人式が行われている。一月十五日の成人の日を繰り上げて同月五日が定例になっている。

消防出初め式 昭和十二年（一九三七）本町に消防団が生まれ、更に国分地区消防組合北消防署霧島分遣所が設置されて、合同で新しい年の仕事始めの式典として消防出初め式が一月に行われている。

もち（望） 一月十五日で、小正月ともいう。餅をついて、榎の枝に餅を短冊型や賽の目型に切ったものを作

り、戸主の寝床の上には大枝を飾り、仏前・神前・軒先・墓などに供える。おかまさあ（大きな釜様）大きな平釜）、土間や庭先の釜屋にあった粃積山などには米餅・栗餅、合わせて一二個を飾った。

山神祭（やまかんまつい） 一月十六日、山の神を祭る日である。農家・林業関係者が行い、集落行事として行うところもあった。毎月十六日が山神祭であるが林業関係者は正月・五月・九月は仕事を休んで盛大に行った。現在待世の一班・二班では、年一回山神講（やまかんこ）として輪番に座を決めて行っている。

十二夜待（じゅんにやまつ） 十二日婦人の親睦・娯楽の行事で旧暦十二日の夜に座元に集まり、簡単な会食をして、三味・大鼓に合わせて歌や踊りを楽しんだ。申し合わせにより回数は年に一回かそれ以上のところもあったが、現在に行わない集落が多くなった。

二十三夜待（にじゅさんにやまつ） 陸軍に入隊している人の無事を祈るために、近所や親類の人たちが集まって、お茶や酒を飲みながらにぎやかに過ごした。正月だけでなく、毎月行っていた。

二十六夜待（にじゅうろっちゃまつ） 海軍に入隊した

人のためのもので、内容は二十三夜待と同じ。

二 月 送り正月 二月一日、主婦は正月は忙しくて、外出も思うようにできなかったから、この二月一日に里帰りをする風習があった。

神宮二月祭り 霧島神宮の御田植の神事で、町内外から善男善女の参拝客でにぎわった。

三 月 三月節句（ひなまつり） 古くは旧暦三月三日、今は新暦四月三日に、女の子の成長を願う行事である。ひな人形を飾り、蒸しようなん、コレ菓子（餅）を家ごとに作って祝った。昔は、帖佐人形がよく飾られたという。またヨモギ餅をつき、牛や馬に食べさせた。これは牛・馬が年をとる日であるといわれたからである。牛・馬は三月以降に生まれるからだといえられていたが、今この風習はない。

陸軍記念日 三月十日、日露戦争の時、奉天で陸軍が大勝利をした日。学校では記念行事をしたが家庭では何もしなかった。

彼岸講 彼岸には団子や餅をつくって神仏に供えた。彼岸講は安産を願う婦人の集会で、木原（国分市）の石体神社（おしやっさあ）別名、血石神様（ちし、かんさあ）

に代表者二、三人が参拝し、お札をもらって帰り、ほかの人は当番の家に集まり、料理を作って待つ。代表者が帰るとお札を分け、後は皆で会食、歓談し三味・太鼓でにぎやかに歌い踊った。この時のお札は産室の柱などにはって安産を祈った。また、隼人の石体神社に、お参りする人もいた。この時はこぶし大の丸石をもらって帰り、産後のお礼参りをした時に返す風習があった。今でも娘の安産を願ってお参りが絶えない。

飛星様（とっぼしさあ） わらつとに、家族の数だけの小餅を入れて門口にさげて、家内安全を祈る風習があったが、この風習はもうとつくになくなった。

青年祭 昭和五十九年から町青年団主催により、地域づくりのイベントとして始めたもので演劇・音楽などを通じて「村おこし」への呼びかけをしている。毎年三月に実施している。

四 月

コラを立てない日 四月三日、「コラ」を立てる」というのは大きな平釜に何も入れないで火をたくこと。茶・麦・豆などを炒る時にする。昔鹿児島神宮が火事になった日と伝えられている。

観音祭 四月八日、観音様は牛馬の神様として農家が

崇拜していた。えびのの六観音、また最寄り六観音、あるいは神社などに参拝した。昔はよく絵馬を奉納して代わりの絵馬を持ち帰った。この観音祭りについては、「椎原日記」に次のように記されている。

明治三十二年四月八日酉天気吉し

観音祭にて内へ居り本田与太郎殿（重久の人、獣医）松田相之助、藤崎新太郎、山之上金四郎悻観音祭として入来交尾持持参にて大祝致し

明治三十四年三月四日午曇天

昼頃より宮田仲左衛門殿所へ観音祝に行馳走に預り

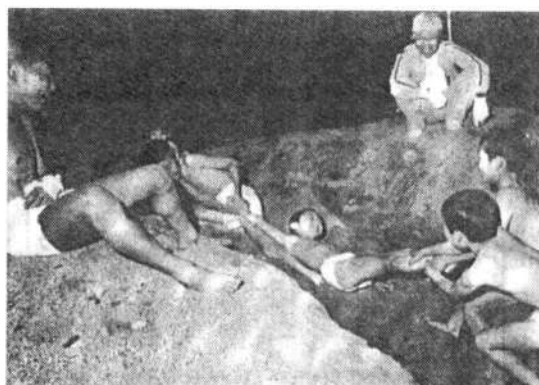
明治三十四年四月八日卯天気吉し

内の長次郎六観音参拝に遣し、自分内に居り馬子のため観音祭に付交尾料請取致し……とある。

釈迦誕生日 四月八日、お寺参りをする。今も盛んに行われている。

五 月

五月節句（端午の節句）五月五日、男の子の節句として、邪気を除くために菖蒲（しやうぶ）や蓬（よもぎ）を軒にさし、家ごとに粽（ちまき）や柏餅（かしわもち）を作って食べた。また男の子のいる家では鯉（こい）を立（たて）て男子としての成長を祈った。男の子たちは「立（たて）」（檻）と呼ばれる行事をした。これに参加するのは八歳から一五歳までで子ども頭（おしら）。



おら 苅

の指揮により、放牧の二歳馬を捕えて檻に入れる行事を真似たものであり、各集落ごとに行われ、昭和十二、三年（一九三七）ごろまで続けられ、男の子たちの勇壮な遊び行事であったので詳しく説明してみたい。

苅（檻） 五月節句に子どもたちが行いうら苅の行事は鹿兒島独特のもので、県下各地で行われていた。牧場に放牧されていた二歳馬を捕えて苅に入れ、それからは軍馬や農耕馬として訓練する。

この若馬を捕えることを遊戯化して、子どもの行事としたものである。町内では

各集落ごとに行うので、集落によって違いがあるが、待世では大体

次のようであった。

当日は頭の指示によって一定の場所に集合する。障子紙大の紙に「春山御馬追」（春山に藩の牧場があったことによるものであろう）と書いた幟を先頭に、ホラ貝を吹き鳴らしながら苅のある場所に向かう。大正時代は大田小学校の上の丘にあり、ホラ貝は現在歴史民俗資料館に保存されている。苅には瓢箪型の隣接した大小二つの円形の穴を掘っており、大きい方は直径五呎くらい、小さい方は三呎くらいであった。合図とともに捕え役（主として子ども頭）は大きい穴に入り、子どもたちをグルグル追い回し、すきを見て捕えて、小さい穴に引き込もうとする。子どもはバタバタして必死に抵抗し、他の子どもたちは助けようとして捕え役を足でけったり、手足を引っ張ったりする。小さい穴に引き込まれた者は抵抗することはできない。

全部捕え終わると一回終わる。これを何回か繰り返すので体に泥土がいつぱい着く。大体半分くらい済んだころ休憩があり、拝参した粽を食べる。全部終わったら幟を先頭にして、集合した場所に戻って解散する。

こどもの日 新暦五月五日を「こどもの日」として制

定し、男の子、女の子を問わず子どもたちの健やかな成長を祈る国の祝日となった。男の子のいる家では鯉幟を立てる家が多い。

おちゃんせ市 町の活性化と観光霧島のイメージアップを目標に昭和五十九年（一九八四）から商工会青年部が主催して、霧島神宮大鳥居横の広場で開かれる青空市である。毎年五月三、四日の二日にわたって行われるが、町内外からの客でにぎわっている。

苗代作り 苗床ともいう。稲の種子を水田に撒くこと。この時「**籾**」を作り苗代の水口に泥を盛り上げて、ワラツトの中に籾を入れて供え、苗の生育を祈った。籾とは、玄米を水に浸し臼で搗いて粉にし、それを片手で握り固めて団子状にしたものをいう。家の新築や、茅葺きの葺き替えの時などにも籾を撒いた。

海軍記念日 五月二十七日、日露戦争の時日本海軍が大勝した日である。学校ではいろいろな記念行事をした。

母の日 母に感謝する日、五月第二日曜日、子どもたちが母に贈り物をしたり、食事に招いたりして、これまでの、また日ごろの労をねぎらう日として微笑ましい行

事が定着している。

田植えさのぼり 農家が田植えを済ませて、田の神を送る祭りが起源で、田植えじまいの祝い行事である。近隣同士が集まって、飲み食べながら歌や踊りで楽しく過ごす。今でもさのぼりを集落の行事として続けているところがある。

六月

父の日 六月の第二日曜日は、父に感謝する日として定着している。母の日と同

様に父に贈り物をするなど新しい風習が定着しつつある。

六月灯 各神

社で日を定めて行う。子どもたちが、自分で描いた絵を張った灯籠を奉納する行事で、霧島神宮をはじめ、ほ



霧島神宮六月灯

とんどの神社で行われる。旧暦六月、今では新暦七月になった。

この行事は、島津久光公が上山新照院に観音堂を建立した時に、たくさん灯籠をつけたのはじまりといわれる。

最近では、自治公民館などの子ども会行事として、六月灯を行うところもある。また、保育園などでも同じように、納涼行事として行うところがある。

七 月

七夕祭 旧暦七月七日に行われていたが、現在は新暦八月七日に行うところが多い。七夕祭りの前夜を「眠り放し」（ねぶいはなし）といって、眠いのをがまんして一晩中、粟を入れたゼンざいを作って、遅くまで談笑しながら過ごすものであった。七夕飾りは主として子どもたちが作る。

七夕祭りは、中国五節句の中の一つの行事で織女と牽牛が年に一回、天の川を越えて会う夜にあやかって、いろいろの願いごとを短冊に書き、朝早く起きて青竹の枝に下げ家ごとに立てていた。

墓掃除（墓こしったえ） 七夕の朝は、家族全員で墓の掃除をした。竹で作った花筒の竹も、この日新しいも

のと取り替える風習があった。さらに物干しの竹も七夕の日に作るものであった。

八 月

盆 墓参りをして祖先の霊を慰める行事で、正月とともに大きな行事である。出稼ぎ中の人や、遠方に住む人もこの日は帰って墓参をした。また仏教の家では、お精霊（おしょうさあ）迎えの行事も行われた。

八月一日から八月七日までにあの世に旅立って、八月十三日の夜の十二時にそれぞれの精霊棚に帰って来るといわれ、精霊を迎えるために墓の盆ちょうちに明かりを入れ、家ではお茶を供え、雨戸を少し開けて床について。そして八月十五日の夜の十二時にあの世に帰られるまで、そうめん・煮^{しほ}・団子・飯・汁などを供えた。仏教の家では、今でもこの風習が残っているところが多い。

おふけさあ（無縁仏） のために汁かけ飯などを供えてもてなしをする風習があった。

精進落し 仏教の家ではお盆三日間は、魚肉類を断って精進していたので、八月十六日の日を、精進落しと呼んで肉・魚を食べ始める日とした。しかし、この風習も

今は少しづつ薄らいでいる。隼人町の浜之市では、この日「ハンギリダシ」と呼んで、エッナ漁（ボラの子）を皆で囲み、精進落しをしている。かつては多くの人々が出かけていたが、今では行く人も少ない。

スーター流し 盆の十五日・十六日の晩に、大窪と豊後迫の子どもたちの行っていたスーター流しという行事を紹介しておく。集落の子ども頭の指揮で一週間前から、麦わらや青竹・こえ松（くされた松の芯）・馬のシッター（馬にのせる鞍のワラで作ったもの）の古いものを集める作業を始めた。とくにこえ松採りは大変な作業であった。またスーターを流す川の清掃もした。舟はシッターと麦わらでふちを回し、青竹を割って敷きつめ、引き緒も青竹で三層ぐらいのものを二本つけた。

この舟の中にこえ松を入れて石油をかけ火を燃やし、それを川に流して、大きな声で「スーター・スーター」と呼びながら川下まで下り、一回それを引き揚げて、今度は子ども会全員で引き緒を握って県道を川上にヤーヤーと言っている。

三回繰り返して、最後は引き緒を切って舟だけを、「スータースーター!! コンドギイのイトマー」と川下

まで送りつけ、舟はそのままに流し放しにする。一種の精進流しであったのだろう。この行事を覚えている人も少なくなった。

霧島夏祭 昭和六十年（一九八五）から霧島町商工青年部によって、町民に納涼と憩いの場を提供し、併せて村おこしのイベントにするため開催され、夜店の並ぶ夏の夜の風物詩として、定着しつつある。平成元年から青年団の主催に変わり、八月十五日を恒例に実施されている。

十五夜 月見の行事である。一五歳以下の子どもたちは何日も前から、子ども頭の指揮でカヅラを採り、わらをもらい集め、十五夜の晩は、大人や青年たちの加勢を得て綱を作り、それで綱引きをし、その後で相撲を取った。しかし、今ではこのようにして綱を作る集落は少なくなつた。昔は集落総出で綱引き行事に参加していたが、現在は子ども会だけの行事になりつつある。綱にロープを使用する集落も多い。昔は夕方になると庭先に白をおき、その上に箕をのせ、その中に一升瓶や徳利に萩・すすき・おみなえしなどをさし、焼酎・団子・からいも・里芋などを供えて、風流な月見を味わった。

婦人ナイター運動会 婦人の健康づくりと仲間づくり

を目的に、昭和五十四年（一九七九）から開催された。

夏の夜、二時間余りにわたり快い汗を流しながら、婦人会活動へのバネとしている。毎年、お盆すぎの八月十九日か二十日ごろが恒例になっている。

戦没者慰霊祭 慰霊塔が建立されたのは昭和三十年（一九五五）である。戦没者の慰霊行事は八月は慰霊法要、十月は慰霊祭として行われる、町と遺族会の共催行事である。

九 月

敬老会 町と婦人会の共催で、昭和二十

八年（一九五三）から七〇歳以上の老人を対象に、九月十五日の敬老の日開催されている。婦人会による芸能発表や記念品を贈呈し、七七歳の喜寿や結婚五〇年の夫婦には金婚式の祝い行事も同時に行われている。

十 月

ほぜ（方祭） 豊作を祝い神に感謝する

祭りである。甘酒・芋こんにやくを作り、近隣や親戚の人が行き来して飲み食した。明治二十九年（一八九六）県道が開通してから霧島神宮のほぜ祭りに参拝する人が多くなり、多くの人が徒歩で往来して夜

通しにぎわった。また馬車で往来する人も見られた。

今では車社会になり、徒歩や馬車の往来もなく、霧島神宮のほぜ祭りは新暦十一月二十三日を恒例の日としている。町の各団体も協賛で参加し、そばを打って参拝者にふるまったり、踊り・弓道試合の奉納など町外からの参拝者も多くなっている。家庭で、甘酒などを造る人も少なくなってきた。

日待（お日待講） 講の部で述べるので省略する。

神祭り（氏神祭り） 日は各家庭・一族によって違う

が大体このころ、主に神道の家で行う。年一回氏神を祭り家内安全を祈願する。神官を頼んで祝詞をあげ、御幣を取り替える。赤飯・そばなどを供える。

「椎原日記」に次の記載がある。

明治三十二年十一月五日

氏神祭にて貴島甚蔵殿頼み祭り方として入来

十一 月

庭上り（にわあがい） 稲こぎがすんで

稲刈を土間や縁側などに積み、自家用の

稲は天井に上げる。このような仕事全部済んだ時に、庭上りの祝いをする。水田の多い家は、一月・二月・三月になることもあった。餅をついて神仏に供え、仕事を

一日休んで嫁や雇い人を里に帰したりした。

再び「椎原日記」を紹介する。

明治三十六年三月九日・稲こぎ成就にて庭上り致し

縄^{なわ}講^{こう}（なわねこ） 講の部で述べるため省略する。

澱粉取（かねとい） 「かね」とは甘藷の澱粉のこと

である。甘藷を洗っておろしですり、水を注ぎ袋で漉

し、その汁を樽に入れて水分を蒸発させて粉を取る、こ

れで団子を作ったり、ほかのものと混ぜて料理に使う。

これは主に女の仕事である。普通の家庭で甘藷を呷二俵

ぐらい使った。

文化祭 霧島町文化協会の主催で、昭和四十三年（一

九六八）から開催されている。文化協会員による芸能発

表や、絵画・書道・俳句・短歌・さつま狂句、その他編

み物・クラフトなどの作品展示もされて、年ごとに内容

も充実してきた。

十二月 義臣伝 十四日、赤穂浪士が主君の仇を討った記念の日。学校の行事として夜、

上級生を学校に集め、義士の伝記を読んだり、話をして聞かせ、それが終わってから栗なっとう（餅栗を入れたぜんざい）を飲み、その後霧島神宮などに夜行軍をし、

ときには翌朝帰ってくることもあった。

福祉餅つき大会 町と福祉協議会の主催により、婦人

会・子ども会・青年団などの協力を得て紅白の餅をつ

き、各地区婦人会が老人給食対象者に届けている。

正月の準備 二十四、五日から後にする。大掃除、い

らさ垣の修理、うらじろ・ゆずりはなどを飾り、門や庭

に白砂を撒く、神仏の前に飾り餅を供える。

年の晩 元旦を迎える準備を済ませた十二月三十一日

の晩を「年の晩」と呼び、年越そばを打ちそれを食べて

年をとるといふ風習があった。昔の子どもたちは朝起き

てみると、枕元に新しい下駄と足袋を親が買ってきてく

れていたものである。

二 民俗芸能

剣舞保存会

この剣舞の起源は遠くいつごろの時代に始まったか詳しくはわからない。田口新

地区に古くから踊り伝えられたものだといわれている。

古老の話によると一般に公開されたことは少なく、近年

の記録によると、大正天皇の御大典記念祝賀、昭和三年

の昭和天皇の御大典祝賀、同七年の日豊本線開通記念行事に、新地地区の人たちによって披露されている。この剣舞を民俗芸能として子孫に継承するため昭和五十四年十一月に、剣舞保存会が結成された。これを機会に、町内の祝賀行事や文化祭などにも公開されるようになった。

歌詞は「桜田門外の変」と「楠公父子」の二編であり、その内容は次のとおりである。

桜田門外の変

頃は万延元年の 三月三日の曙に

雪は巴と降り繁る 見渡す向は銀世界

桜田御門の堀端で 血の雨降らせし水戸浪士

して又その日の出立は 黒の装束綾たすき

一身包む赤合羽 愛宕の山に入り残る

〱列も正しきあの乗物

正しく井伊家門直弼公

御登城ならん

幸い あれなる物陰に

暫しかくれ待受致さん

忠勇花子の合言葉

目指すは籠の中の鳥

近従の諸士を切り払い

〱あいや

何者なれば狼藉いたす

勿体なくも我こそは

彦根の城主にして

井伊家門直弼公の

御登城なるぞ

名乗り 名乗り召され

〱あいや

名乗り閉すは無益の

事とは思えども

冥土の土産に名乗りて

聞かさん 我こそは

水戸の浪士にして

人に恨みはなけれども

国家の議論 合わざる故

して置かれぬ 今日の有様

早々主君の おん友

致すがよし 覚悟召され

難なく切り込む一刀

首は前にと落ちにけり

実に末代 勇士の誉

楠公父子

月にきらめく日本刀

そもそも楠木正成は

国の為に身を捨てて

数多の城士を敵として

数多の兵士を引きつれて

身をはめ命も打捨てて

涙ながらに敵さして

今度が最後のおきまへり

わが子の正行呼びよせて

正行ようきけ今度が別れ

敵をみちに切り倒し

お前にゆづりを渡すなり

抜いて渡す刀を渡す

正行刀を受取りて

父の仇をむくえんと

夜る昼る父の墓参り

されば仇年 霜月に

おやく 仇を報いたり

実に正行 名も高じ

俵 踊 り

△由来▽霧島神宮に田の神舞があるが、

これは田植えの神事であり、収穫の踊り

がなかったので都城市や県内各地にある俵踊りに倣い、

昭和四十五年から霧島神宮の豊年祭（ほぜ祭り）に、氏

子青年団が主体になって奉納を始めた。踊り手は二〇人

くらいであるが、後継者難で現在は霧島地区子ども会と

有志で継承している。



俵 踊 り

△衣装▽手甲、

脚絆、前かけ、

前に御幣二本を

下げ、俵を持っ

て演じる。

△設備▽特に必

要なし。

△芸能▽両側に

分かれ踊りなが

ら入場し、輪に

なったところ

で、倉入れ・倉

出し・俵投げを

し、豊作の感謝を表現する。

ハ音楽V鐘、太鼓、三味線

霧島の歌

これまでに霧島をテーマに作詞、作曲されたものは次のようなものがあり、特に

鹿児島オハラ節の「花は霧島、煙草は国分」の歌詞は、ミヤマキリシマを歌ったものである。昭和四十三年に町民の夢と目標を歌い込んだ町民歌。さらにふるさと賛歌の霧島音頭を公募、広く町民に愛され歌い継がれている（グラビア参照）。

鹿児島オハラ節

花はきりしま 煙草はこくぶ

もえてあがるはオハラハー さくらじま

霧島小唄

年月不詳（昭和十年ごろ）

作詩 西山 喜久雄

作曲 岩元 寛

一 春よ春々 霧島山の 峰にやかすみのおす衣

裾の三里は山桜 天の逆鉾 逆鉾さ

春の霧島 なつかしや

二 夏よ夏々 霧島山の つつじや真盛りどの山も

香る新緑夏知らず 天の逆鉾 逆鉾さ

夏の霧島 なつかしや

三 秋よ秋々 霧島山の すすきなよな誰まねく

夕日火の山紅葉燃ゆ 天の逆鉾 逆鉾さ

秋の霧島 なつかしや

四 冬よ冬々 霧島山の 峰にやつつらの雪の花

麓みやまの湯の香り 天の逆鉾 逆鉾さ

冬の霧島 なつかしや

注 この歌は田口の橋本みえ子さんが鹿児島市の十字屋に依頼し編曲、レコードにしたものである。

霧島高原音頭

昭和四十七年

作詞 逆瀬川 正文

作曲 桐原 早平

一 ハアー たかまが原から霧島へ

神がおちやつて土こねて ヨイシヨ

日本の国がつくられた ソレつくられた

ドンテンオジャンセ霧島へ

オジャンセ ヨーコソ オヤットサア

二 ハアー みどりの風にみねみねの

みやま霧島 じつとさく ヨイシヨ

楽しロマンの花も咲く ソレ花もさく

（以下同じ）

三 ハアー 霧島キャンプの テントをいでて

仰げば星がすぐそこに ヨイシヨ

あすはあの峯胸はずむ ソレ胸はずむ

（以下同じ）

四

ハアー 見るもやさしい霧島の

姿ばかりじゃ よりつけぬ ヨイシヨ

おこりや火をふくしんもえが しんもえが

(以下同じ)

五

星の数ほどある池が

ふたりめぐればどの池も ヨイシヨ

よいお似合の水かがみ 水かがみ

(以下同じ)

六

もみじばやしをふりかえり

山を下れば谷ごしに ヨイシヨ

別れがづらいと鹿がなく 鹿がなく

(以下同じ)

七

山のつかれを湯におとし

さつまおごじょのどじまん ヨイシヨ

たのしくきて夜がふける 夜がふける

(以下同じ)

注 この歌は、昭和四十一年七月、全国ユース、ヤリ

ー(ユースホテルを利用して旅行する人たちの全

国大会)が霧島で開かれたのを機会に当時の町観

光課長であった逆瀬川正文氏が作詞し、霧島中学

校教諭桐原早平氏が作曲したものである。

三 霧島の方言とことわざ

霧島のことばは、一般に言う鹿児島県の方言と共通しているが、学校教育の中で標準語に矯正されて、死語になつていゝるものも多い。また、同じ意味で敬語の使い分けなどもあるが、ここでは一般的に使われていたものを並べてみた。ことわざは、霧島老人クラブの「霧島の昔のくらし」(昭和五十七年刊)から収録した。

霧島の方言

相手にしない

あぶない

商い

あがりませんか

あげましょうか

あちらこちら、ほうぼう

ある限り全部

兄

遊び友達

遊び道具

うてあわん

あつね「あ」にアクセント

あつね「ね」にアクセント

あがいやはんか

あげもんそかい

いっぺこっぺ

あいたけねたけ

あによ

あすっどし

あすっどっ

新しい	にけ	憶病者	やつせんぼ・ひつかぶい
家の裏の方	せどや	おとな	おせ
いらっしやいませんか	おぢやはんか	思つていたとおひ	あんのじゅ
いく先さき	いっこつさつこ	教える	いっかすい
行きづまり	ふんづまい	大きな声	うごえ
いくじなし	やつせんぼ	恐ろしい	いっわざえ
いいかげん	てげてげ・ざつべらっ	大損	うっぼがす
いろり	ゆうい	おれの家	おいげえ
いろりの正面の座	よこざ	驚く	たまがる
いろりで鍋などかけるかぎ	ぢぜかぎ	牝牛	おなめ牛
急いで	せしこつ	男の下着	バッチ
置き忘れていた	うってつおった	お前	わい・おはん
うるさい	せかあし	夫	とのじょ
うそを言う	だまかす	金持ち	ぶけんしや
うら返し	さかしんめ	簡単	めやし
牛	べぶ	神主	ほいさあ
遠足	えんこ	片づける	こぼめる
えこひいき	しんそん	感心な	きどつな
おたまじゃくし	げしっのこ	かわいい	むぜ
雄牛	こつて	髪を伸ばしてかまわない人	やんかぶい

かまきり	おながめ	下女	めろ
かきまわす	まぜくい	下男	でかん
肩に担ぐ	かたぐつ	げっぷ	どへ
かわいそう	ぐらしい	けちな人	こましつごろ
がま蛙	こんぜぼつ	けむたい	けび
蛙	どんこびつ・びつじゅ	これだけのこと	こしこんこつ
かびが生えた	こしがねった	こっぱみじん	ちんがらつ
かわいらしい娘	よかおご	ゴムまり	ぎったまい
兄弟	きよで	ご苦労様	おやとさあ
きまりが悪い	げんね	小切り	こだくい
きな臭い	すもいくせ	小男	こじっくい
灸 <small>きゅう</small>	えつ	小言	こまごつ
気のきいた人	たましきつ	こらしめる	せっかん
きたない・不潔	みとんね	さかずき	ちよつ
気がすむまで	おてつき	作業衣	こだなし
くくる	きびる	さびしい	とじんね
くすぐったい	こすわい	叫ぶ	おらつ
狂った人	きつげ	昨日より二日前	さつおつて
繰り言	ぐぜこつ	さかさま	さかしんめ
暗闇	くあすん	心配するな	ちかあねが

叱られる
修繕

冗談

しまった

しゃもじ

しつこく

親せき

吸う

好きなように「気ままに」

隅っこ

すぐに

ずるい

すべて

すっかり

ずれ下がる

ずる賢い人

酔

精いっぱい

是非とも

精を出す

がらるっ

こそくい

はらぐれ

ちよっしもた

めしっげ

やんきも

しんぢ

すあぶい

きこんに

すんくじら

いっき

えいじ

ずるっ ごっそい

すったい

ずんだるい

ずっねわろ

あまん

せっぺんこつ

さいがも

はめっくい

背中

それでも

そのまま引き返す

損をする

大黒さん

たくさん

だらしない

楽しみ

大変なこと

短気者

長男

ちょっと

塵だめ

中止

ついに

つまずいて倒れた

疲れた

つまらないこと

てきばきと仕事をする

てこずった

へっ

そいどん

つんげしひっかえし

うっぼがす

でふつどん

そがらし・あばてんね

だっもね

たのすん

でしなこつ

きもいっすん

すよ

いつとつ

はあつだめ・ほいつぼ

うっちゃめ

ごろいと

はんとけた

だえた

えしれんこつ

てばしけ

あっぱった

突飛なこと	とっげんねこつ	貧乏人	ひ	んだころ
とんでもないことを	かかあんねこつ	ひもじい	ひだい	
どうしてもこうしても	どしてんこしてん	びったり	がつつい	
とりえはない	とつどこやねか	普段・いつも	かねっ	
なまけもの	ふゆしつごろ	拭き掃除	ふっやつめ	
何度も・たびたび	はたれっ	不屈き者	おどもん	
生意気な奴	けすいば	不自由	せんば	
何も持たない	すでぶい	ふんぞり返って	そねばいかえっ	
難儀	みごえ	不潔	きっしやね	
泣きながら怒る	なっぐれ	便所	せっちん	
泣き虫	なけべし	放りっぱなし	ほたいちあかし	
なおさら	いっだんな	ほんの短い時間	いっとつ	
内心	ねしゅ	ほほ	ふたん・ふがまつ	
盗む	おつとい	来年	でせん	
ねたむ	しょのん	利口な人・手に負えない人	てんがあもん	
腹一杯喰いすぎ	じつどえた	料理する	こしたゆっ	
はじまらない	とつまらん	ろくなことはしない	どつなこちゃせん	
腹づもり・計画	さんだん	まな板	きいばん	
久しぶり	さしかぶい	まさか	いかなこて	
引っ張る	そびっ	耳たぶ	みんぢやば	

向う脛

無知な

もがく・じたばた

勿体ない

夕立

予想しないこと

小さいことまでする

余程のこと

余計に・なおさら

ことわざ

俚諺にはいろいろあるが、ここでは気象に関する言い伝え、言い習わしや、日常生活や農・山仕事に関する例え話、戒め、人の心理を突いたものなどを採録した。こうした俚諺も次第に遠いものに感じられる。老人クラブ編の「昔のくらし」から―。

○こつかぜ（東風）ん後は雨

○高千穂の上に黒雲がかかれば雨になる

○夕焼けが黄色になって消えた時は風になる

○北ん方に（北の方に）こつて牛（雄牛）が寝いしこ

（寝るだけ）青空があれば天気が持てる

○大浪んの池ん方が曇れば雨になる

○星が高く見えると天気がよくなり、低く見えると悪くなる

なる

○ブト（蟻子）が多い時は雨が近い

○アツガエ（あかぎれ）がいてときや（痛い時は）雨が近い

近い

○西に黒雲がかべをした時は雨

○猫が顔をこする時は雨

○朝露が無い時は雨

○風草の節の数だけ台風がくる

○朝焼けがした時は雨になる

○蜂の巣が高い年は風が吹かない

○稲の穂がまがって出る年は大風が吹かない

○山からもどいの（山仕事から帰った時の）からいも、

だいが（誰が）食わんち（食わないと）ゆたか（言ったか）

○山仕事ははげしく体を使うので腹が減る。山

から帰った時はからいもがかねてよりうまい。食わないという人はいない

いという人はいない

○しごちゃ（仕事は）小皿でめしや（飯は）どんぶい

（どんぶり）

○仕事はあまりしないで飯だけはたくさん食う

○似合た鍋にや似合た蓋Ⅱ割れ鍋にとじ蓋、似た者夫婦
似た者同士

○たかつの（高木の）づくし（熟柿）見たばつかい（見
たばかり）

○柿の葉ん上（葉の上）豆をのせ（乗せ）がなっときや
（なる時は）豆を植えてん（植えても）よか

○人をみんなら（見るなら）どす（同志、友達）見れ

○わけとつの（若い時の）難儀はこてでん（買つてで
も）せ（せよ）Ⅱ若い時の難儀は自分から進んでせよ、
金で買つてでもせよ、そうすることが将来のために役
立つ

○こましごろ男んな（けちんぼ男には）青菜を見すんな
Ⅱ青菜の味噌汁を煮る時は鍋いっぱい盛り上げて入れ
て煮るが、煮えるにつれて少なくなる。けちんぼ男に
見せると、多過ぎると小言をいうにちがいないから、
見せない方がよい

○ひっぱげ粟（生え方が悪く、ところどころに生えてい
る粟）見てかまげ（^{かます}呎）うて（つくれ）Ⅱ粟は密生し
ていると生長が悪く、収量も少ない。ところどころ生
えている粟は収量も多いから、こんな粟を見たら呎の

準備をせよ

○粟植えはどゆが（土用が）三日かかれば霜がうつこ
ろさん（霜でいためられない）Ⅱ粟植えの時期を教えた
もの

○もん（^{もみ}粃）のかっさ（実を取った後のくず）は娘にく
れ、粟ん（粟の）かっさは嫁にくれⅡもみのカッサは
たたけばまだもみが取れるが、粟のカッサはたたいて
も実は出ない。嫁よりも娘の方がかわいいということ
○ふのわり（運の悪い）粟は米粒（米粒を）かれださん
（出合うことができない）Ⅱ粟飯をたく時は米粒より
粟粒の方が数が多いから、運の悪い粟粒は米粒に出合
うことができない

○ソマ（^{そば}蕎麦）は打っちゃ植え（畑を打ち返してすぐ植
える）をすいよっか（するよりも）ひんね（昼寝）を
せⅡ蕎麦は土地に水分が多過ぎるとよく生えないか
ら、畑を打ち返してからしばらくして土地が乾いてか
ら植えた方がよい

○ソマ植け（蕎麦植えに）行っときや（行く時は）水く
んと（水汲み）といっきよな（行き会うな）Ⅱ蕎麦植
えには水分が多過ぎるとよくないことを言ったもの

○ソマは二百十日は地の中ニ蕎麦は二百十日には生えていない方がよいということ

○ソマは七五日目の朝飯に間に合うニ蕎麦は生長が早く、蒔いてから七五日目には食べることができ

○コムてん（小さくても）米ニ団子（米の粉の団子）

団子にもいろいろあるが、なかでも米の粉でつく

た団子は形は小さくても栄養価が高

く腹持ちもよい。人も体が大きいば

かりが能ではないという意

四 昔の運搬方法

手に持って 軽いもの—ふろしき包
肩に担って み・重箱。

山おこ 長さ一八〇センチぐらいの棒の

両端をとがらせて、稲や草、薪などを

束ねたものに突きさして肩にかついで

運んだ。山おこはカシ・シイ・スギ・

ヒノキなどで作った。

いねさし 長さ一一〇センチぐらいの棒



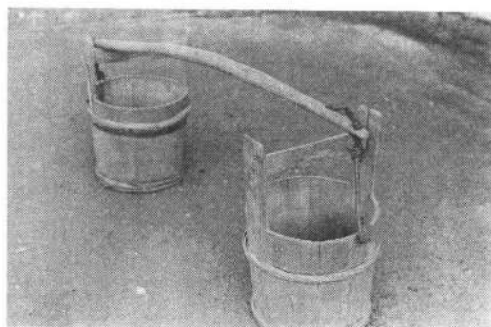
婦人が山おこで稲をかついで運ぶ

の両端に肥料桶（こえたんこ）籠などにひもをかけて肩にかつぐ。

いねかつ

長さ一一〇センチぐらいの棒の両端にひもで
かぎをつけて、かぎに水汲桶（たんこ）、

竹籠などかけて肩にかついで運んだ。昭和初期までは霧
島でも行われていた。



水汲たんこ

背中に負って

大きなふろしきに包んで背中に負う。

竹籠に入れて負う。赤ちゃんを帯で負う。ざっつかれ（小さな荷物をふろしきに包んで右肩か



か れ こ

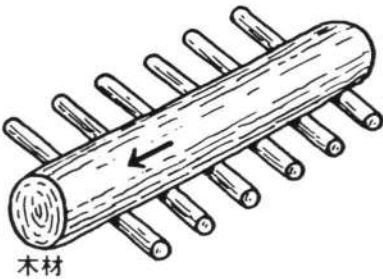
ら斜めに左わき下を通して前で結ぶ。

かれこ

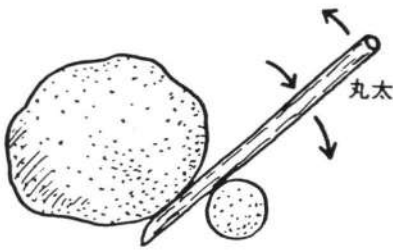
かれこにのせて背中で背負う。穀・麦・米などの穀物、薪、草、材木・堆肥などを運んだ。霧島は坂道が多かったのでよく利用された。

馬を使って

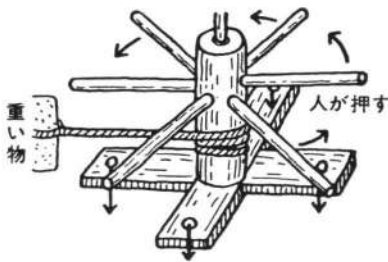
馬にうせる（背負わせ



こ ろ



て こ



ろ くろ

人力で動かす ころ・てこ・ろくろ（かぐらさん）など利用した。

る） 稲・麦・大豆・草、薪、堆肥などを運ばせた。

馬に引かせる 荷馬車や、木材などを引かせた。

牛を使って

地ずい、そい（櫓）、牛車（だしごろ車）

大きな材木などを牛に地面を引きずらせながら運搬したり、櫓を使って引かせたり、牛車を引かせたりした。牛車は、一般の農家では一番よく利用された。昭和四十年代までは使われたが今は見られなくなった。

第一〇節 自然保護

自然保護

霧島連山は、日本で最初に指定された国立公園であり、全国に広くその名を知られている。霧島連山が世界に誇るモミ・ツガ・アカマツの巨木と照葉樹林は、霧島独特の自然林を形成している。その他の広葉樹など多くの種類の樹木が茂り、シカ・イノシシをはじめ野生動物も生息し、火口湖、温泉、溪流、滝など、その自然の調和には目を見張るものがある。四季折々に見せる自然の表情、雄大な景観、まさに自然の宝庫である。霧島町民はもちろんのこと、人類にとって、かけがえない貴重な財産である。私たちはこのすばらしい霧島の自然を次の世代へ引き継ぐ遺産として、大切に大切に保護していくことは責務であることを自覚しなくてはならない。

「霧島の自然を守る会」は昭和六十三年牧園町を中心に結成された。その後、隼人町・吉松町・栗野町・えびの市・都城市・小林市などでも霧島の自然を守る活

動が続けられている。本町は霧島の自然を守るための重要な位置にあるので、行政と一体となり、霧島の自然保護にさらに努力する必要がある。

環境美化活動

高度経済成長による大型レジャー時代を迎え、本町を訪れる観光客は年間一三〇万人に達している。車社会の中で観光地では散乱ゴミが新たな問題になっている。本町でも、青年団主催による空き缶・瓶類、散乱ゴミの回収奉仕作業（町内各種団体、こども会・老人クラブ・婦人会、観光協会、衛生普及会、商工会、商店街通りなど）の美化活動が進められ、役場職員互助会も、年二回の空き缶回収奉仕作業に取り組んでいる。

町内一斉ふるさと美化活動 毎年一回、全町民参加の美化活動が展開されている。各自治公民館ごとにこども会をはじめ青壮年・婦人会など全員が参加している。

霧島川愛護同好会 昭和五十一年に結成された。目的はごみの投棄防止のための立て看板の設置、河川愛護の啓発、稚魚の放流など。なお、これとは別に駅前自治公民館では、毎年一回、駅前を流れる狩川（二級河川）の清掃美化活動を実施、三年目からホテルがこの川に帰っ

てきた。このように環境美化活動も徐々にではあるが、
町民の意識を変えつつある。

第四章 教育・文化

第一節 教育制度の変遷

一 教育委員会

戦後、地方自治の本旨に沿って、地方制度に諸般の改革が行われたが、昭和二十二年（一九四七）地方自治法をはじめ一連の法改正によって、県も市町村も独立の自治体として、教育の物的・人的運営の面についても、すべて地方公共団体が責任を負うこととされた。つまり、国はもっぱら地方団体の教育事務の執行について指導、助言、援助などを行うこととされたのである。このような戦後の動きの中で、わが国の教育水準を高め、教育について公正な民意を反映し、教育の自主性と、教育行政の地方分権化を図るため誕生したのが教育委員会制度で

ある。

戦前の教育行政は、極端な中央集権と官僚支配下におかれていた。ところが新憲法は、地方制度とその運営については、地方自治の運営に沿い法律で定めることとしたから、教育制度の面でも、戦前のやり方は改めなければならなかった。こうしたことから昭和二十三年七月「教育委員会法」が公布されたのである。都道府県においては同年十月五日、公選による教育委員の選挙が行われ、同十一月一日、都道府県教育委員会が設置された。

続いて市町村においては同二十七年十一月から市町村教育委員会が設置された。

教育委員会法はその後運用の實際に当たって、実情に即しない面があったので、全面改正が図られ、昭和三十一年六月、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が公布された。

改正の主な点は、①教育委員の選任方法は公選制から、議会の承認を得て首長が任命する、②教育長は教育委員の中から、県教育委員会の承認を得て、市町村教育委員会が任命する、③長（知事と市町村長）と教育委員会との権限に調整を加えた、④小中学校教職員の任命権を、市町村教育委員会から県教育委員会に移した、⑤文部大臣や都道府県教育委員の積極的な指導的地位を明らかにしたこと、などである。

教育委員会は、地方公共団体における教育に関する事務のうち、長の権限とされている二、三の例外を除き、すべて教育委員会が執行することになった。

地方教育行政法では教育委員会の職務権限を次のとおり示している。

- 教育委員会の所管に属する学校その他の教育機関の設置、管理、及び廃止に関すること
- 教育財産に関すること
- 教育委員会の所管に属する学校その他の教育機関の職員の任免、その他の人事に関すること
- 学齢生徒及び学齢児童の就学ならびに、生徒児童及び幼児の入学、転学、及び退学に関すること
- 学校の組織、編成、教育課程、学習指導、及び職業指導

に関すること

- 教科書その他の教材の取扱いに関すること
- 校舎その他の施設及び教具その他の設備に関すること
- 校長教員その他教員関係職員の研修に関すること
- 校長教員その他教育関係職員ならびに生徒、児童、幼児の保健、安全、厚生及び福利に関すること
- 学校その他の教育機関の環境衛生に関すること
- 学校給食に関すること
- 青少年教育、婦人教育及び公民館の事業、その他の社会教育に関すること
- 体育（スポーツを含む）に関すること
- 文化財の保護に関すること
- ユネスコ活動に関すること
- 教育に係る法人に関すること
- 教育に係る調査及び指定統計その他の統計に関すること
- 所掌事務に係る広報に関すること
- 前各号にかかげるもののほか、当該地方公共団体の区域内における教育に関すること

霧島町においては、前記の法に基づいて昭和二十七年十月五日、第一回の選挙が行われた。この時は立候補者数と委員定数が同数であったので、無投票で次の人々が選ばれた。

椎原 誠治 下脇 盛 佐多 豊

第四章 教育・文化

歴代教育委員

	昭和30. 10	31. 10	32. 10	33. 10	34. 10	35. 10
委員長 副委員長 委員 同 同 教育長	椎原 誠治 木野田 喜右衛門 下脇 盛 上松瀬 栄二 岡元 兼志 淵脇 清香	宮田 安彦 桂 久春 小里 貞利 真名子 政治 椎原 多喜 宮田 安彦	宮田 安彦 桂 久春 小里 貞利 真名子 政治 後庵長 太郎 宮田 安彦	宮田 安彦 桂 久春 小里 貞利 真名子 政治 後庵長 太郎 宮田 安彦	桂 久春 後庵長 太郎 真名子 政治 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 桂 久春 後庵長 太郎 木野田 喜右衛門 宮田 安彦

	昭和36. 10	37. 10	38. 10	39. 10	40. 10	41. 10
委員長 副委員長 委員 同 同 教育長	椎原 誠治 桂 久春 帖佐 軍吉 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 桂 久春 帖佐 軍吉 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 桂 久春 鳥丸正 兵衛 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 桂 久春 鳥丸正 兵衛 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 鳥丸正 兵衛 竹下 栄吉 木野田 喜右衛門 宮田 安彦	椎原 誠治 鳥丸正 兵衛 木野田 喜右衛門 竹下 栄吉 宮田 安彦

	昭和42. 10	43. 10	44. 10	45. 10	46. 10	47. 10
委員長 副委員長 委員 同 同 教育長	椎原 誠治 鳥丸正 兵衛 木野田 喜右衛門 竹下 栄吉 宮田 安彦	椎原 誠治 鳥丸正 兵衛 馬場 実義 竹下 栄吉 有村 真信	椎原 誠治 鳥丸正 兵衛 馬場 実義 竹下 栄吉 有村 真信	鳥丸正 兵衛 馬場 実義 後藤 実 宮田 安彦 有村 真信	鳥丸正 兵衛 馬場 実義 高林 義雄 後藤 実 園田 義美	鳥丸正 兵衛 高林 義雄 馬場 実義 後藤 実 園田 義美

	昭和48. 10	49. 10	50. 10	51. 10	52. 10	53. 10
委員長 副委員長 委員 同 同 教育長	鳥丸正 兵衛 高林 義雄 後藤 実 馬場 実義 園田 義美	鳥丸正 兵衛 高林 義雄 後藤 実 馬場 実義 園田 義美	鳥丸正 兵衛 高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 園田 義美	鳥丸正 兵衛 高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 鮫島 功	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 坂元 貢 鮫島 功	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 坂元 貢 鮫島 功

	昭和54. 10	55. 10	56. 10	57. 10	58. 10	59. 10
委員長 副委員長 委員 同 同 教育長	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 坂元 貢 鮫島 功	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 坂元 貢 鮫島 功	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 吉永 辰雄 有田 春男	高林 義雄 松元 熊義 馬場 実義 吉永 辰雄 有田 春男	高林 義雄 松元 熊義 吉永 辰雄 小浜 公志 有田 春男	高林 義雄 松元 熊義 吉永 辰雄 小浜 公志 有田 春男

	昭和60. 10	61. 4	62. 4	63. 4	平成 1. 4	2. 4
委員長 副委員長 委員 同 教 育 長	松元 熊義 小浜 公志 東芦谷政美 鶴木 幸子 有田 春男	東芦谷政美 小浜 公志 桂 巖 鶴木 幸子 有田 春男	東芦谷政美 小浜 公志 桂 巖 鶴木 幸子 南 一雄	入来 岩男 小浜 公志 桂 巖 鶴木 幸子 南 一雄	入来 岩男 小浜 公志 小浜 崎 鶴木 幸子 南 一雄	入来 岩男 小浜 公志 小浜 崎 鶴木 幸子 南 一雄

	平成 3. 4
委員長 副委員長 委員 同 教 育 長	入来 岩男 小浜 公志 小浜 崎 鶴木 幸子 鶴木 隆男

木野田喜右衛門 鳥丸正兵衛（議会選出）

昭和二十七年（一九五二）十一月一日から霧島町教育委員会が発足し、教育委員長に椎原誠治氏が選ばれ、教育長に、淵脇清香氏が任命された。同三十一年六月、前述の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が公布され、委員任命制となり、議会選出の委員は廃止された。

二 戦後の学校教育

終戦を迎え連合国軍総司令部（GHQ）は昭和二十年（一九四五）十月に教育民主化を指令、わが国の教育界はかつてない混乱期を迎えた。これまでの軍国主義的内容は一切排除された。特に教育現場は対応に苦慮した。例えば、これまで使用した全教科書の削除すべき箇所（軍国主義的な単語や文章・天皇・日の丸など）は子供に墨を塗らせたり、また剣道防具などもすべて廃棄された。

昭和二十一年に改訂された教科書は、古紙を四つ折りにした印刷物が配布され、家に持ち帰り糸でつづって教

科書として使用したところもあった。昭和二十一年に米
国教育使節団の調査が行われ、わが国の教育の改革すべ
き点が指摘された。これにより学校教育は、根底から新
しい教育理念に基づく方向づけがなされた。その沿革
は、次に示すとおりである。

沿革

○昭和二十一年五月三日、新憲法公布

○昭和二十二年、教育基本法、学校教育

法が公布され、教育の機会均等、男女共学などさん新
な点が盛り込まれた。学制も六・三・三制の新学制が
施行され学校教育もかつてない変革をもたらした。こ
れまでの国民学校を小学校と改称、六年生まで収容
し、従来の高等科は三年制の新生中学校に収容、小、
中学校の九年間を義務教育とした。高等学校三か年、
四年制大学に改められた。

○昭和二十二年五月二日、新学制により、霧島第二中学
校（現在の霧島中学校）を大田小学校内に創立し、永
水・霧島各小学校に分教場を設けた。

○昭和二十三年三月、霧島村立青年学校を廃止

○昭和二十三年四月、永水教場は霧島第一中学校（東襲
山中学校、後に現在の国分中学校に統合）に所属移

管、永水分校となる。

○昭和二十四年四月一日から霧島教場は霧島分校とな
る。

○昭和二十四年十一月一日、霧島第二中学校を霧島中学
校と改称

○昭和二十五年二月、霧島中学校新校舎第一期工事現在
位置に落成、大田小学校から移転した。

○昭和二十七年、教育委員会が設置された。

○昭和三十七年四月一日、霧島分校は霧島東中学校とし
て独立

○昭和四十二年四月一日、永水中学校を霧島中学校に統
合

○昭和四十六年四月一日、町立大田幼稚園創設（大田小
学校に併設、大田小校長、園長を兼任）

○昭和四十七年三月三十日、町立幼稚園園舎竣工

○同三月三十一日、町立学校給食センター調理場竣工

○同四月十日、小中学校、幼稚園に完全給食開始

○昭和五十二年 「霧島の教育」 第一号発刊

○昭和五十三年 霧島町立小中学校区審議会発足

○昭和六十年 霧島中学校と霧島東中学校統合

年齢・性別		女					子				
		6	7	8	9	10	11	12	13	14	
身 長	全 国	116.0	121.8	127.4	133.1	139.5	146.3	151.5	154.7	156.4	
	県	115.2	120.9	126.5	132.1	138.7	145.2	150.7	154.2	156.0	
	町	115.0	121.1	126.7	131.3	138.9	145.0	150.0	154.3	155.9	
	大田小	114.6	120.8	127.0	132.5	138.7	145.9				
	霧島小	◎116.4	◎122.0	◎128.6	129.7	◎141.3	◎146.5				
	永水小	113.8	119.3	124.7	128.8	135.9	137.5				
霧島中							150.0	◎154.3	155.9		
体 重	全 国	21.1	23.6	26.6	29.9	34.0	38.9	43.9	47.5	50.2	
	県	20.7	23.1	26.0	29.2	33.4	38.1	43.1	47.0	49.8	
	町	21.6	23.9	26.8	28.7	34.3	38.7	43.9	46.3	49.4	
	大田小	20.7	◎23.9	◎26.5	◎29.8	◎34.0	◎38.8				
	霧島小	◎22.5	◎24.1	◎28.3	27.1	◎36.0	◎39.5				
	永水小	◎21.8	21.7	◎26.2	26.2	33.1	35.3				
霧島中							43.9	46.3	49.4		
胸 囲	全 国	56.7	58.8	61.3	64.0	67.3	71.2	75.5	78.0	79.9	
	県	56.1	58.2	60.5	63.0	66.4	70.3	74.7	77.5	79.6	
	町	57.6	58.7	61.1	62.9	68.7	70.5	75.5	77.7	80.2	
	大田小	55.2	58.2	60.4	◎63.5	◎67.2	69.4				
	霧島小	◎58.7	◎59.5	◎63.5	62.3	◎71.5	◎73.1				
	永水小	◎59.0	58.0	◎61.5	60.3	◎68.5	◎71.8				
霧島中							◎75.5	◎77.7	◎80.2		
座 高	全 国	64.9	67.5	70.0	72.6	75.6	79.0	81.9	83.6	84.6	
	県	64.4	67.0	69.6	72.2	75.4	78.7	81.6	83.5	84.5	
	町	◎64.6	67.5	69.8	71.9	75.4	78.9	81.8	84.1	84.2	
	大田小	64.4	67.0	69.5	72.2	75.2	78.4				
	霧島小	◎65.1	◎67.6	◎71.5	71.7	◎76.1	◎79.3				
	永水小	63.8	66.6	68.8	70.3	74.6	74.1				
霧島中							◎81.8	◎84.1	84.2		

(注) ◎ 全国平均を上回るもの、○ 県平均を上回るもの。

第四章 教育・文化

児童・生徒の体位（平成2年度）

年齢・性別		男					子			
		6	7	8	9	10	11	12	13	14
身長	全 国	116.8	122.5	128.1	133.2	138.6	144.4	151.4	158.8	164.5
	県	115.7	121.5	127.0	132.2	137.3	143.0	149.9	157.5	163.5
	町	116.3	122.0	127.7	132.8	138.0	144.8	150.7	157.5	162.6
	大田小	○116.1	◎122.7	○127.2	◎132.5	○138.2	◎145.9			
	霧島小	◎117.1	121.1	○127.6	◎133.5	137.5	◎145.7			
	永水小	◎117.8	121.2	◎133.2	132.0	137.1	140.5			
長	霧島中							○150.7	157.5	162.6
	全 国	21.5	24.0	27.2	30.3	33.9	38.0	43.5	49.0	54.2
	県	21.1	23.6	26.5	29.5	32.8	36.6	41.7	47.5	52.7
	町	20.9	23.5	27.2	30.2	34.2	38.5	41.3	46.9	51.3
	大田小	20.9	24.0	26.7	◎30.5	◎34.8	◎39.6			
	霧島小	21.1	23.0	27.0	○29.6	○33.7	◎38.1			
重	永水小	20.5	22.8	◎32.3	○29.8	31.8	32.5			
	霧島中							41.3	46.9	51.3
	全 国	58.0	60.1	62.7	65.2	67.9	70.6	73.9	77.2	80.6
	県	57.5	59.7	62.1	64.4	66.8	69.4	72.6	76.2	79.6
	町	57.2	59.2	63.2	65.4	67.7	69.8	74.3	76.8	78.6
	大田小	◎56.5	58.9	○62.4	◎65.3	○67.8	70.3			
胸囲	霧島小	◎58.5	59.6	◎63.9	◎65.3	◎68.2	70.2			
	永水小	53.4	59.0	◎68.2	◎65.8	66.4	67.5			
	霧島中							◎74.3	○76.8	78.6
	全 国	65.3	67.9	70.4	72.6	74.9	77.4	80.7	84.3	87.5
	県	64.7	67.4	69.9	72.2	74.4	76.8	80.1	83.8	87.0
	町	65.7	67.7	70.6	72.7	75.0	78.3	79.9	83.7	86.0
座高	大田小	○65.3	○67.7	○70.4	○72.4	◎75.1	◎78.4			
	霧島小	◎66.1	○67.7	◎70.3	◎73.5	○74.7	◎78.7			
	永水小	◎66.3	○67.5	◎74.0	○72.4	74.6	75.9			
	霧島中							79.9	83.7	86.0

注 ◎ 全国平均を上回るもの、○ 県平均を上回るもの。

○同 六十二年 町内小中学校にパーソナルコンピュータ購入（中学校一〇台、小学校各三台）

○平成元年 AET事業（外国青年招致事業）として英国青年ハーカリーチャード氏を採用する。

学校給食センター わが国の学校給食は、古くは明治二十二年（一八八九）経済的に恵まれない児童

を対象に慈善救済的な昼食供与を行ったのがはじまりと

いわれている。

学校給食と位置づけて、給食が始まったのは、

戦後の経済的な困窮と食糧不足から、児童生徒を救済するために、ユニセフ物資放出の粉ミルクによる、補食給食からだった。昭和三十五



学校給食センター

年に大田小学校、同三十六年に永水小学校、同三十七年

に霧島小学校とそれぞれに、調理場を整備して、完全給

食を開始、同四十七年町立給食センターが竣工、町内の

小中学、幼稚園児に完全給食を始めた。工事費は建物だ

けで五六万三〇〇〇円で、施工者は溜工務店であった。

学校給食は児童生徒の健全な発達を助長し、栄養に関

する正しい知識を学ぶ実践の場を与えた。また町民の食

生活改善の波及効果に結びつくことを考えると、戦後の

教育には画期的な制度であった。

児童生徒の体位に関する資料を別掲する。

三 小・中学校、幼稚園

1 大田小学校（大田小学校保管同校沿革史による）

明治三年（一八七〇）八月、東襲山村、大窪字桑原の旧射的場跡に、田口・川北・大窪三村の設立による練字館を建てる。国分の人窪田真二氏を雇い土族の子弟二十余人に読書、習字を教えた。教員俸給は年米四石、これは土族戸数に分割負担させた。

明治四年（一八七一）十月、田口、大窪間に紛議を生

じ廃館。

明治五年（一八七二）、田口・大窪・川北三村の有志協議し、前館を田口の梅北に移し村校と名づけて授業を再開、教員六人、生徒五十余人、時計、机・腰掛けを初めて使用した。教科は読書、習字の外に石盤を与えて筆算の練習をさせた。

明治八年（一八七五）二月、再び紛議を生じ廃校、家屋も売却してしまった。明治十一年（一八七八）二月まで学校の設立なし。同年、田口・大窪に各一校を設置し、この状態が、明治二十九年（一八九六）五月まで約一九年間続く。

大田小学校の前身である田口小学校は明治十一年二月、字山之上四一番戸中島佐兵衛の家屋を借り、農工商の別なく三十余人の子弟を集め、読書・習字の教授をする。名づけて学校という。椎原喜之丞・宮田彦作・入来弥兵衛の諸氏一週間交替で教授、教室は茅葺きの民屋、学校に規則はなく厳格に行われたのは罰則のみであった。

明治十一年（一八七九）四月、正則になり同村字原口に開設、敷地八一坪、南面茅葺きで東端に教員住宅

兼教員室を設けた。校名を田口小学とい

い、生徒数は百余人、教員島田弥九郎氏

（俸給三元）・塩川十助氏（同三元）。生

徒を二組に分け、読書・算術・作文・習字・体操の諸科を教授・その後教員の異動あり。津曲武助・細山田八郎太・塩川竜助の諸氏が教員となる。

明治十五年（一八八二）生徒数一一二人、修業年限四年（下等八級から五級）

明治十六年（一八八三）田口小学校と改称

明治二十二年（一八八九）四月、塩川弥九郎、校長に就任、同年十二月改築着工

明治二十三年（一九〇〇）四月竣工、長さ一〇間、幅四間（一八

尺、七・二尺）の平家一棟、長さ四間、幅四尺の便所一棟、工費二九三元一六錢七厘、内八四四七一錢五厘は区民の寄付、一二〇円一錢三厘は学校林の売却、残額は他村からの義捐と、旧戸長役場学校家屋の代金を充当。修業年限三年、在籍六六人

明治二十四年
(一八九一)

四月、学校卒業生のため別科（小学四年程度）を置く。

明治二十五年
(一八九二)

田口尋常小学校と改称

明治二十九年
(一八九六)

日清戦争勝利の結果、日本の責任はますます重大となり、教育もまた改善の必要に迫られてきた。同年四月郡書記伊藤世傑氏学事視察として先進地を視察、前年から当局者区間有志間に熱心に唱えられていた田口・大窪両校を廃し、新たに大田尋常小学校を設置することを要請した。ここにおいていよいよ両校統合の機運が熟し、同年五月新校舎着工、七月五日竣工

明治二十九年
(一八九六)

田口・大窪両校統合（七月七日）して大田尋常小校と称す。訓導米田氏・三島氏、准訓導川越氏・雇塩川虎岐氏・宮田彦市の諸氏熱心に職務に勉勵し、区民の信頼を集めた。

明治三十年
(一九一七)

校舎大修繕の必要に迫られ、有志・常務・学務委員の集会を開き次の決議をした。

明治三十一年
(一九一八)

- (1) 校舎大修繕の経費を一〇〇円とする。
- (2) 右の費用は校区民の負担とする。
- (3) 右負担は赤貧者を除き各戸二六銭あてとする。

明治三十四年
(一九〇一)

一月、郷田ナヲ氏裁縫教員として着任、女生徒のため初めて裁縫科を置いた。在籍生徒一八六人、このほか補修科二年级（三四人）があった。

明治三十四年
(一九〇一)

三月、大田・霧島・永水の三校合同して卒業式を挙行した。

明治三十七年
(一九〇四)

三月、高等科設置が認可された。附設の補修科を廃止し、大田尋常高等小学校と改称、七月十日開校式を挙行、佐藤郡長、米田郡視学臨席、校区民も五百余人出席し盛大に行われた。

大正六年
(一九一七)

学級数七、生徒数尋常科二五四人、高等科五五人、計三〇九人、職員数八人
同年十二月、校舎増築、工費二九四〇円
実業補修学校併設

大正十五年
(一九二六) 青年訓練所併設

昭和二年
(一九二七) 実業補修学校、青年訓練所を合併、中等
公民学校設置

昭和十年
(一九三五) 東襲山地を霧島村と改称

昭和十五年
(一九四〇) 紀元二六〇〇年記念としてピアノ購入

昭和十六年
(一九四一) 四月、大田国民学校と改称

昭和十六年
(一九四一) 九月、女子師範学校主催バレエ大会に優
勝

昭和十六年
(一九四一) 十月、国分高等女学校主催バレエ大会に
優勝

昭和二十二年
(一九四七) 四月、学制改革により高等科廃止、大田
小学校と改称

昭和二十五年
(一九五〇) 学校林県コンクール一等入選

昭和三十一年
(一九五六) 鉄筋校舎一期工事四教室竣工

昭和三十二年
(一九五七) 鉄筋校舎二期工事六教室竣工、落成式を
兼ねて、創立六十周年記念式挙行

昭和三十三年
(一九五八) 学校衛生統計調査、文部大臣表彰

昭和三十五年
(一九六〇) 鉄筋校舎三期工事完成四教室、給食施設
完全給食開始

昭和三十九年
(一九六四) 全日本よい歯の学校として表彰

昭和三十九年
(一九六四) 学校給食優良校表彰(県教委)

昭和四十一年
(一九六六) 昭和三十九年度から学校保健優良校とし
て三年連続表彰、学校保健モデル校の指
定

昭和四十一年
(一九六六) プール落成(総工費五一〇万円)、校内
諸設備、運動具など、すべて整備され
る。

昭和四十二年
(一九六七) 特殊学級を開設し「仲よし学級」と呼称
する。校内水泳大会を初めて開催する。

昭和四十四年
(一九六九) 剣道スポーツ少年団結成する。

昭和四十五年
(一九七〇) 校長住宅竣工

昭和四十六年
(一九七一) 教育機器として各教室にテレビ設置。大
田幼稚園が併設される。プールシャワー

設置

昭和四十七年
(一九七二)

大田幼稚園舎完成、移転する。プール更衣室。フェンス完成。十二月保健室火災

(薬品棚、床一部焼ける)

昭和四十八年
(一九七三)

アナライザー設置。PTA新聞発行。砂場・校庭水飲み場設置

昭和五十年
(一九七五)

父親参観日の設定

昭和五十一年
(一九七六)

根性の山運動コース完成

昭和五十三年
(一九七八)

校舎窓サッシ化完了

昭和五十六年
(一九八一)

根性の山のつつじ植栽

昭和五十七年
(一九八二)

大田少年消防クラブを結成。根性の山にアス

レチック施設を設置

昭和五十九年
(一九八四)

南日本花だんコンクール優秀賞(六十年度・

六十一年度)

昭和六十年
(一九八五)

屋内運動場落成



大田小学校 (旧)



大田小学校 (新)

昭和六十一年
(一九八六)

南日本花だんコンクール最優秀賞(六十一年度・六十三年度)

昭和六十二年
(一九八七)

宿泊学習を実施(一泊二日・五年生)、特殊学級を閉鎖する(児童減のため)

昭和六十三年
(一九八八)

東側便所を水洗化に改修

平成元年
(一九八九)

パソコン導入(計三台)

歴代校長

代	氏名	期	間
一	米田嘉十郎	明二九、七	明三三、六
二	川畑虎熊	三二、八	三四、三
三	西川平吉	三四、四	四〇、三
四	池田武熊	四〇、四	四二、三
五	川畑虎熊	四二、四	大一一〇、四
六	峰森利親	大一一〇、四	一二、三
七	石原忠吉	一二、四	一四、三
八	木佐木忠志	一四、三	一五、三
九	米増竜吉	一五、四	昭四、三
一〇	瀬戸口平治	昭四、四	六、五
一一	赤塚義也	六、九	一一、八
一二	森山肇	一一、八	一六、九
一三	鮫島利道	一六、六	一八、三
一四	池田一誠	一八、三	二一、三
一五	穂満盛蔵	二一、三	二二、三
一六	田中重男	二二、四	二八、三
一七	井上三三	二八、四	三八、三
一八	永吉利良	三八、四	四三、三
一九	寺師武雄	四三、四	四四、三
二〇	若松友保	四四、四	四九、三
二一	米元正二	四九、四	五二、三
二二	児玉節男	五二、四	五四、三
二三	富吉時治	五四、四	五九、三
二四	古川美年生	五九、四	六一、三

代	氏名	期	間
二五	宮永宣夫	六一、四	平元、一二
二六	淵脇郁夫	平二、一	

大田小学校校歌

作詞 馬場徹
作曲 鈴木直易

一、峰にわきたつ 雲はえて

きょうもさやかな 陽がのぼる

われら大田の 子どもらが

理想をかたる この庭に

希望の鐘が なりわたる

二、かおるつつじの 花かげに

平和をしるす 愛の旗

われら大田の 子どもらが

正しく学び 伸びるとき

文化日本の 朝がくる

三、霧島川の せせらぎに

うたもたのしい みどり風

われら大田の 子どもらが

スクラム組んで 行く道は

さえぎる風も 雲もなし

2 霧島小学校（霧島小学校保管「同校沿革史」による）

明治十年（一八七七）ころから、他県郡から移住者が多く、戸数七四戸を数えるに至り、二、三の有志の發議により児童教育の急務を説いた。一同これに賛同、学校を設立することになった。たまたま鹿児島の人、医師村田為三が当地に居住していたので、吉松孫三と共に校舎建設の任に当たった。当時霧島に山下坊という庵寺があったので、これを借り受け、明治十二年（一九七九）開校・霧島小学と名づけた。下等八級から一級まであり、村田為三を月俸三円で助訓とし、吉松孫三を月俸二円五〇錢で助手とした。児童数男三九人、女八人、計四七人であった。

同年四月教材購入のため区民から一一円三一錢の献金を集め、これをもって、大黒板二個、新撰大字引一部・小学読本一部・小学授業法章記一部・習字手本一部・国史略一部・小学読本字引一部、掛け図一部その他を購入したが、教授は依然として寺子屋ふうであった。職員俸給は区民の負担であった。明治十四年（一八八一）霧島官有地内に二七円六九錢をもって新校舎建築、明治十五年（一八八二）に村田助訓導辞任、吉松助手を助訓とし、桑原武熊を助手とした。

し、桑原武熊を助手とした。

明治十六年（一八八三）、教育会の変更により六級から一級に至る修業年限三年の初等科を置く。この年初めて年末調査表・年末統計表をつくる。在籍、男二七人、女一人、計三八人。明治十八年（一八八五）、吉松・桑原両氏辞任し、当校出身の浜田喜左衛門氏を授業生として採用、月俸三円、永田義彦氏を助手として採用、在籍男女計二七人。明治二十年（一八八七）霧島簡易科小学校と改称、浜田・永田氏辞任、村内重久から江藤十助氏を授業生として採用した。

明治二十二年
（一八八九）

在籍男三三人、女七人、計四〇人

校舎の位置が悪く、狭かったので、桂内泉水に、長さ六間、幅三間半の校舎を新築した。経費は区民の負担と霧島神宮、

役場の寄付による。この年に初めて体操科を置く。在籍四五人（男三八、女七）、授業生細山田源治氏辞任、荒田熊十郎氏赴任

明治二十四年
（一九〇一）

在籍五〇人

明治二十五年
(一八九二)

霧島尋常小学校と改称。修業年限三年

明治二十六年
(一八九三)

増築、経費六四円八六銭。荒田氏辞任。

加治木より金沢彦太郎氏着任。十一月辞任、永瀬栄助氏赴任。在籍男女計四五人、初めて尋常科四学年を置く。

明治二十七年
(一八九四)

在籍五〇人、永瀬氏辞任、川越治氏着任、島田親志氏六月着任、二十八年辞任

明治三十一年
(一九〇八)

川越氏辞任し、塩川良虎氏・宮田彦一氏着任

明治三十二年
(一九〇九)

宮田氏辞任、細山田良虎氏着任。在籍男女計五八人

明治三十四年
(一九一〇)

在籍男四一人、女二七人、計六八人。校長厚地市助氏着任。校舎を戸崎原(現在地)に移転改築の工事を起こし明治三十五年(一九〇二)竣工、在籍男四三人、女三一人、計七四人

明治三十四年
(一九一〇)

七月十九日、元の校地にあった菅原道真公を祭った天神様の遷宮式を挙行した。

明治四十年
(一九〇七)

鹿児島県知事から、設備優良にして就学および出席の成績良好であるとして金六

明治四十一年
(一九〇八)

校舎増築、十二月十五日落成式を挙行

昭和三年
(一九二八)

十二月、校舎増築

昭和十三年
(一九三八)

高等科設置、七学級三〇四人、校舎増築

昭和十六年
(一九四一)

国民学校と改称

昭和二十二年
(一九四七)

小学校と改称、学制改革により高等科廃止

昭和二十六年
(一九五一)

ピアノ購入、中古品七万三〇〇〇円

昭和二十八年
(一九五三)

敷地拡張、校舎増改築、裏門設置、校門建設

昭和三十四年
(一九五九)

講堂建築、四〇〇万円。上水道完成

昭和三十七年
(一九六二)

給食開始

昭和三十九年
(一九六四)

県家庭科教育研究協力校として公開

昭和四十年
(一九六五)

県・郡PTA研究指定校として公開。ピアノ購入。十二月校長住宅新築落成

昭和四十二年
(一九六七) 鉄筋特別教室(四教室) 竣工

昭和四十四年
(一九六九) 社会奉仕優良団体としてMBC表彰

昭和四十五年
(一九七〇) プール竣工(横一^{メートル}二^{メートル}・縦二〇^{メートル})。木造
校舎一教室増築

昭和四十六年
(一九七一) プールシャワー・更衣室完成

昭和四十七年
(一九七二) 校旗制定(和田義満氏寄贈)

昭和四十八年
(一九七三) 教育機器室設置(アナライザー・テレビ)

昭和四十九年
(一九七四) 創立九十五周年式典、記念碑建立。プールの延長工事完了(二五^{メートル})

昭和五十三年
(一九七八) 桂文庫発足

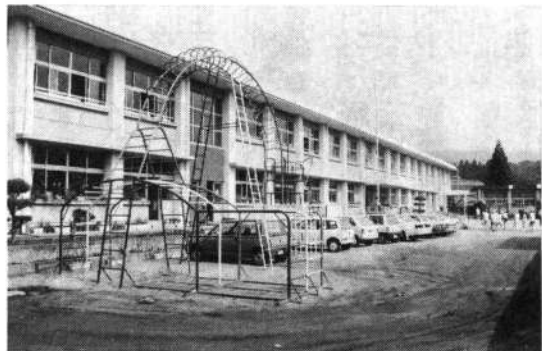
昭和五十七年
(一九八二) 三月新校舎竣工、落成式

昭和六十一年
(一九八六) 特別教室東側窓サッシ化

平成二年
(一九九〇) 講堂解体、新屋体建築始まる(床面積九五〇平方^{メートル})

歴代校長

代	氏名	期	間
一	川越 武助		
二	塩川 弥九郎		
三	米田 嘉十郎		
四	厚地 市助		
五	宇都 為治		
六	大津 与一		
		明三、四、一、大、一〇、三、三、一	大、一〇、四、一、一、一、五、一
		一、一、七、一、一、一、三、三、三、一	



霧島小学校

代	氏名	期	間
七	徳重仁四郎	一三、四、一	一五、三、三一
八	松下 武人	一五、四、一	昭四、一、九
九	長福太次兵衛	昭五、四、一	六、八、三一
一〇	岩元小四郎	六、九、一	八、三、三一
一一	井上 実善	八、四、一	一五、三、三一
一二	久木元延治	一五、四、一	一七、三、三一
一三	田中 重夫	一七、四、一	一八、三、三一
一四	徳重 時雄	一八、四、一	二、三、三一
一五	古市 英二	二一、四、一	二六、三、三一
一六	小宮路栄次	二六、四、一	三〇、三、三一
一七	富田 武夫	三〇、四、一	三二、三、三一
一八	上森 正明	三二、四、一	三五、三、三一
一九	竹永 泰次	三五、四、一	三九、三、三一
二〇	鬼塚 俊男	三九、四、一	四一、三、三一
二一	篠原 正治	四一、四、一	四六、三、三一
二二	肥後 精一	四六、四、一	四八、三、三一
二三	石堂 五郎	四八、四、一	四九、三、三一
二四	石川 勇男	四九、四、一	五三、三、三一
二五	西 孝	五三、四、一	五六、三、三一
二六	藤崎 義隆	五六、四、一	五七、三、三一
二七	奥 鎮男	五七、四、一	五九、一、一
二八	内村 国男	五九、二、一	六〇、三、三一
二九	樋渡 行雄	六〇、四、一	六二、三、三一
三〇	三原 明良	六二、四、一	六二、三、三一
三一	泊口 宏	平二、四、一	現 三、三一

霧島小学校校歌

作詞 田代米一
作曲 桐原早平

一、朝日に映えて 高千穂は

雄々しく生きよと 教えてる

理想をかかげ 伸びてゆく

ああ われら 幸あれと

幸あれ きりしま小学校

二、流れも清き 霧島川

正しく生きよと ささやくよ

希望も高く 努めゆく

ああ われら 栄あれと

栄あれ きりしま小学校

三、はるかに望む 桜島

明るく生きよと よびかける

誠を胸に 進みゆく

ああ われら 伸びてゆく

伸びゆけ きりしま小学校

3 永水小学校（永水小学校保管「同校沿革史」による）

永水小学校の開校については、第三編第五章の「近代社会と霧島村の発展」の項で述べたとおり、入水簡易科小学校と永野田簡易科小学校が合併して生まれた学校である。沿革を書くに当たって、まず、入水と永野田の各小学校の沿革を別々にまとめてみた。明治二十四年（一八九一）四月十八日、校舎落成式と同時に現在の永水小学校は発足した。詳しい沿革は次のとおりである。

明治二十年 入水学問所設置、明治十年（一八七七）（一八六九）

西南役が起り、中止。校舎は一五坪の茅葺きで生徒数一五人内外。庭訓大学、珠算を学んだ。手習師匠、獅子作右衛門、扶持米一石八斗。明治二十九年獅子氏辞任。園田次郎氏就任

入水分校 明治九年（一八七六）から入水分校と称し、読書、習字、算術を教授した。

明治二十一年 入水小学をおこした。修業年限四年で八級から一級までの読書、算術、作文、習

字を教授した。教員扶持米四石八斗が役場から支給された。

明治十七年（一八八四）

入水小学校初等科となる。修業年限三年、六級から一級まで、腰掛けを設備して、初めて学級の教授を行った。読書、作文、習字、算術を教えた。当時の教授川越一二

明治二十年（一八八七）

入水簡易科小学校となる。

明治三十年（一八七〇）

永野田地方学問所、校舎六坪の茅葺きで手習所と称した。生徒数約一〇人、朝夕庭訓大学、珠算等を教授した。手習師匠貴島休右衛門氏が教員の任に当たり扶持米一石八斗を支給された。

明治二十一年（一八七九）

永野田下等小学となる。

明治十七年（一八八四）

永野田小学校となった。修業年限三年、六級から一級までであった。

明治二十年（一八八七）

永野田簡易科小学校となる。修業年限三年、一年生から三年生まで。二十三年授業生本田藤左衛門辞職

明治二十四年
(一八九一)

入水簡易科小学校と永野田簡易科小学校が合併して、当区内中央、笹之段に二四坪の瓦屋を建築して、永水簡易科小学校と称した。教員は授業生肥後一藏、月俸四円を支給された。

当校の合併発足に際して、明治二十三年当時の村長島田親恵、校長塩川弥九郎らが、入水・永野田両校の実績をあげるため、両区域の人民に対して合併を勧めたところ、教育の必要性をさった人民たちはたちまちこれに同意して位置を笹之段にきめ、それぞれ応分の出費をして前述の規模の校舎が二十四年四月十八日落成した。当時の就学生徒数三八人、正規の学科目を教授した。ここで学校の面目が一新された。当時の戸数一二一戸、校舎建築費二一九円五〇銭であった。小学校令が実施され、永水尋常小学となる。

明治二十五年
(一八九二)

明治二十五年
(一八九二)

十二月、明治天皇・昭憲皇太后兩陛下の御真影を奉戴する。

明治二十七年
(一八九四)

准訓厚地市助、雇厚地雄之助の教員二人

明治二十九年
(一八九六)

四学年制となる。

明治三十年
(一八九七)

初めて学林を設けた。

明治三十一年
(一八九八)

裁縫の教授を始めた。

明治三十二年
(一八九九)

十二月、校舎増築

明治三十四年
(一九〇一)

四月、小学校六学年となる。校舎を増築し、現在の場所に移転(新校舎前)。複式参学級、教員数二人となる。大正元年(一九一二)九月に学級整理され二学級に。教員数四人が三人となる。

大正十二年
(一九二三)

校舎大修繕、体操具改造

大正十四年
(一九二五)

運動場拡張

昭和十一年
(一九三六)

講堂兼校舎を新築する。教室五〇坪、奉迎所一〇坪、土間七坪半、総工事費三〇

〇〇円。敷地本田重吉氏の寄贈。同年八月奉安殿を建設、同年十月校門付近の石垣を設置

昭和十一年
(一九三七)
高等科を設置し永水尋常高等小学校となる。

昭和十六年
(一九四一)
永水国民学校となる。

昭和二十一年
(一九四六)
永水小学校となる。電灯が設置された。

昭和二十二年
(一九四七)
六・三制の実施により高等科が廃止された。

昭和二十三年
(一九四八)
永水小学校後援会が解消され、永水校区父母と先生の会、PTAが生まれる。

昭和二十八年
(一九五三)
ピアノ購入

昭和二十九年
(一九五四)
電話開通

昭和三十二年
(一九五七)
簡易水道が設置される。

昭和三十三年
(一九五八)
鉄筋校舎落成、本工事二二三坪、一二一

〇万円、付帯工事三二・五坪、一七〇万円、国庫補助、起債、重久奨学会からの

補助による。

昭和三十六年
(一九六一)
給食施設完備し完全給食が始まる。

昭和三十六年
(一九六一)
校長住宅が建築された。

昭和四十年
(一九六五)
準僻地の指定を受ける。

昭和四十三年
(一九六八)
永水中学校閉校に伴い、校長兼務を解かれる。

昭和四十五年
(一九七〇)
プール竣工

昭和四十六年
(一九七一)
グランドピアノ購入

昭和四十七年
(一九七二)
プール用シャワー完成、校庭水飲み場設置、デスクオルガン八台購入、カラーテレビ20型購入。

昭和五十二年
(一九七八)
プール二五坪に延長改修

昭和五十六年
(一九八一)
校舎の木枠窓からアルミサッシ窓に改修

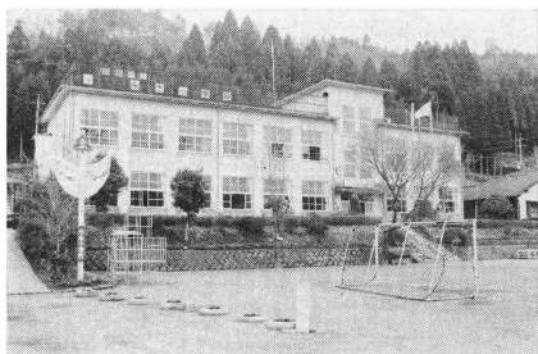
昭和五十八年
(一九八三)
県、山坂達者実践推進校、県ボランティア福祉少年団指定校

昭和六十二年
(一九八七)

体育館落成、旧講堂改装工事完了(郷土
室・音楽室)

昭和六十三年
(一九八八)

プール用水の取水ボーリング(四月完
了)



永水小学校

永水小学校校歌

作詞 馬場とおる
作曲 武田恵喜秀

一 緑の岡につつまれて

高千穂近く呼ぶところ

自治の花咲く学び舎は

明るい我等の永水校

若い希望が満ちている

二 てかこの流れ輝いて

ああ夢もえる窓ひろき

からだきたえて知恵を汲む

楽しい我等の永水校

強いいのちがはずんでいる

三 仲よく六とせはげみ合い

豊かに香る文の花

明日の郷土をになわんと

伸びるよ我等の永水校

高い理想が光っている

歴代校長

代	氏名	期
一	若松 直熊	明二五～明二六
二	厚地 市助	二六～三四
三	池田 兼良	三四～三五
四	池田権兵衛	三五～四三
五	瀬戸口善吉	四三～四五
六	高山虎之助	四五～大 二
七	住吉 喜八	大 二～九
八	淵脇 定吉	九～昭 九
九	原口 邦雄	昭 九～一二
一〇	榎園 義徳	一二～一七
一一	上田 芳夫	一七～二〇
一二	川野 竹尾	二〇～二二
一三	池之上 照	二二～三二
一四	淵脇 安吉	三二～三八
一五	竹内 茂	三八～四四
一六	肥田 博	四四～四八
一七	横山 主雄	四八～五一
一八	岩川 勉	五一～五四
一九	鈴木 武平	五四～五七
二〇	二見 忍	五七～六〇
二一	光 勉	六〇～六三
二二	松山 輝久	六一～平 三
二三	鎌田 浩敬	平 三～現在

4 統合前の霧島中学校

昭和二十年（一九四五）の終戦を契機として、わが国は民主的・平和的な国家を建設し、世界平和と人類福祉に貢献しようとする決意を、日本国憲法に明示し、この理想の実現は教育の力によるべきことを教育基本法を通じて宣言した。

この具体策として、昭和二十二年（一九四七）学校教育法が公布され、六・三・三・四の新学制が決定された。これによって小学校六年、中学校三年が義務教育となり、全国の市町村は昭和二十二年五月から中学校を開設することになった。しかし準備期間が短く国の財政措置が全く行われなかったため全国的に大きな混乱を引き起こした。

本町においては、重久に霧島第一中学（後東襲山中学校と改称、国分中学校に統合される）、田口に霧島第二中学校（現在の霧島中）を設置し、霧小・永水小に教場を置くことになった。校舎建築まで、とりあえず大田小学校の四教室を借用して、五月二日に開校式を行った。終戦後の混乱の中で住民は衣食住に苦しみ、教育を顧みる余裕もなく、職員もそろわず、学校運営は困難を極めた。

本町はずっと以前から校舎建築は校区民の負担とする慣

例であつたので、校区（大田・永水・霧島の三小学校区）で建設対策委員会をつくり、委員は各集落ごとに二〇戸に一人の割で選出し、委員長に真田信雄氏が就任した。

その後の経過を文部省編「六三制教育の礎」（昭和二十五年（一九五〇）一月）から引用することにする。

新制中学校の設置は町村自治体の難問題であつた。殊に校区負担によつて学校を建設し、これを町に寄附するといふ教育行政を続けてきた本町では更に問題を深刻にした。

委員会の回数を重ねるにつれ、世論は区々に分れ、感情を交え、不祥事の発生も憂慮された。この時委員長の真田信雄氏は中学校建設は自分に課せられた使命であるとの信念を持ち、家業の酒造業を使用人に任せてこの仕事に打ち込んだ。この熱意に動かされ委員会結成後一年にして学校建設の不動の方針が決定した。

校地の選定も困難を極めたが現在地に決定・耕地（田八反五畝）を失う農家の換地として、各部落の耕地面積と校地面積とを按分して各部落から耕地を供出し、これを遠隔地から交換分合を行うという苦心をし、学校敷地附近にまゝとめて換地を与えるという面倒なことをした。当時食糧事情からして極めて困難な仕事であつた。昭和二十三年（一九四八）一月初式式を行ない校区民の奉仕により整地に着手した。県下のトップを切つて文部省標準規格の校舎建築を目標に資金計画を立てた。一戸平均一千万の均等割と村

民税の三倍（一戸平均にすると二三五〇円）寄附金、不足分は学校林の売却と国有林の払下による差益金によることとし、総額四百万円と校区民の労力奉仕を見込んだ。校舎は二棟十教室、職員住宅二棟、合計三六四坪を建てることを計画し、町内土建組合、製材業者、青年団・婦人会等から積極的な協力があつた。校区民の労力奉仕も連日続けられ、工事は驚異進捗で、昭和二十三年、三月・四月・八月と次々上棟式をすませた。この間、寄附金や学校林売却の未収等のため資金の行詰りに苦んだりが、全委員の熱意によつて昭和二十五年（一九五〇）一月には副知事・県教育長など出席のもとに盛大落成式が行われた。更に第二期工事期成同盟が結成された。この工事では職員室・図書室一棟・家庭科教室一棟などが計画され、国庫補助も有利に認められて昭和二十六年（一九五二）十一月に全部が竣工した。

△沿革▽

昭和二十二年
（一九四七）

四月、初代校長、小坂秋義就任

昭和二十二年
（一九四七）

五月、開校式、大田小学校に本校を、霧島小学校・永水小学校にそれぞれ教場を置く。

昭和二十三年
（一九四八）

四月、永水分教場は、霧島第一中学校分校として所屬替え

昭和二十四年
(一九四九) 十一月、校名を霧島中学校と改称

昭和二十五年
(一九五〇) 一月、第一期工事成

昭和二十五年
(一九五〇) 二代校長、浜田清則氏着任

昭和二十五年
(一九五〇) 郡体に女子排球優勝。少年消防クラブ結成、施設優良校として文部大臣表彰

昭和二十六年
(一九五一) 第二期工落成、ピアノ購入

昭和二十七年
(一九五二) 郡主催図工研究会を本校で開催。電話開通

昭和二十八年
(一九五三) 保健優良校として表彰(県教育委員会)。

学校図書館コンクールで優良校として表彰(県教育委員会・県学校図書館協議会主催)

昭和二十九年
(一九五四) 保健優良校として表彰(県教育委員)、保健モデル校の指定を受ける。

昭和三十年
(一九五五) 工作室・作業室落成。文部省指定産業教育研究会を本校で開催

昭和三十一年
(一九五六) 少年消防クラブ全国表彰

昭和三十二年
(一九五七) 三代校長池田昇氏着任

昭和三十四年
(一九五九) ミルク給食開始

昭和三十五年
(一九六〇) 男子バレー部郡体で優勝

昭和三十六年
(一九六一) 部分林約三町歩契約し、計六町五反歩となる。

昭和三十七年
(一九六二) 屋内運動場一期工竣工

昭和三十八年
(一九六三) 完全給食開始

昭和三十九年
(一九六四) 四代校長西田義隆氏着任。屋内運動場二期工竣工

昭和四十一年
(一九六六) 調理室の改修工事

昭和四十二年
(一九六七) 二十周年記念事業として、霧島神宮駅構内山つゝじ植栽作業実施

昭和四十二年
(一九六七) 三月、体育館建設三期工事着工。五月、体育館落成と創立二十周年祝賀行事を挙行する。

昭和四十三年
(一九六八) 永水中と合併。九月、鉄筋校舎起工

代	氏名	期	間
一	小坂 秋義	昭二二、四、三	昭二五、三、三一
二	浜田 清則	二五、四、一	三二、三、三一
三	池田 昇	三二、四、一	三九、三、三一
四	西田 義隆	三九、四、一	四五、三、三一
五	園田 義美	四五、四、一	四三、三、三一
六	馬場 清美	四三、四、一	四五、三、三一
七	相良 三郎	四七、三、三	五〇、三、三一
八	上山 登	五〇、三、三	五二、一、一〇
九	塚田 景純	五二、一、二	五五、三、三一
一〇	高田 重利	五五、四、一	五九、三、三一
一一	春田 尚利	五九、四、一	六〇、三、三一

歴代校長

昭和五十七年
(一九八二)

新体育館完成。LL英語教育機導入

昭和五十二年
(一九七七)

新校舎落成(昭和五十一年着工)と創立三十周年を記念して祝賀式挙行。三月、

プール完成

昭和四十七年
(一九七二)

国体炬火リレー参加

昭和四十三年
(一九六八)

四月、鉄筋校舎三階建て落成。特殊学級用印刷機・OHP導入



霧島中学校

霧島地区の生徒の通学の便利を図るため、スクールバスの運行を開始した(霧島町スクールバス使用規則を制定)。また両地区

5 統合後の霧島中学校

昭和六十年(一九八五)学校統合により霧島町立霧島中学校として発足する。一年生(八四人)、二年生(七〇人)、三年生(一〇二人)、計二五六人。内普通学級七、特殊学級一、教職員二一人で開校式を挙行する。

昭和六十年
(一九八五)

三月、新学期から霧島東中学校と統合が決定

から通学する生徒のうち、自転車通学が認められた者については自転車購入費の一部について補助金を交付した（統合に伴う自転車通学者に対する自転車購入費補助金交付規程を制定）。

△沿革△

昭和六十年
(一九八五)

町体育中心校に指定。五月、夏服指定、七月、A棟校舎改修工事、九月、完了

(サッシ窓の更新)、校内水泳大会八つの新記録生まれる。九月、第一回体育大会挙行。十一月、町音楽祭に三年生参加、地区英語暗唱大会出場

昭和六十一年
(一九八六)

スクールバス車庫工事完了。第一回卒業生男子五八人、女子四五人、卒業記念樹くろがねもちを配布。県中学校剣道大会に優勝（参加校一〇一校）、九月、校歌制定、入選高城俊男、佳作芦田かおる。十一月、校歌制定発表会。作曲鹿児島市立清水中教諭山路勝、作詞高城俊夫

昭和六十二年
(一九八七)

第二体育館ガラス更新施工。五月、全校生徒・PTA共同でつつじ植栽作業。十

月、校舎（管理棟）警備保障装置開始。十一月、パソコン一基設置（町費）

昭和六十三年
(一九八八)

五月、県巡回劇場、白鳥バレー団公演

平成元年
(一九八九)

県中学校・長距離走大会出場

一年女子 八〇〇点 第一位

一年男子 一五〇〇点 第一位

二年男子 二〇〇〇点 第一位

九月一日から町AET、ハーカリーチャード氏、毎週火・水の二日、本校英語助手として来校

歴代校長

代	氏名	期 間
一	春田 尚利	昭六〇、四、一～昭六二、三、三一
二	川田 郁雄	六二、四、一～平二、三、三一
三	前村 秀徳	二、四、一～ 現 在

霧島中学校校歌

作詞 高城 俊夫
作曲 山路 勝

一、秀麗匂う 高千穂を

仰ぐひとみも はつらつと

自主向学の 道をゆく

われらが 霧島中学の

希望よ雲と 湧き上がれ

二、霧島川の せせらぎに

心豊かに 身をきたえ

誠実一路 励みゆく

われらが 霧島中学の

抱負よ花と 咲き香れ

三、手を取り結び 愛校の

美風を継ぎて 今ここに

明日の力を 育てゆく

われらが 霧島中学の

歴史よ永久に 光あれ

児童数・学級数の変遷

大田小学校

年度	学級数	児童数
明治32	6	237
37	7	301
41	7	373
大正 2	7	391
12	10	453
昭和 2	13	538
7	14	585
15	15	760
20	16	859
25	17	698
30	17	735
35	18	835
40	18	742
45	15(1)	541
50	12(1)	390
55	11(1)	342
60	10(1)	302
平成 2	9	286

霧島小学校

年度	学級数	児童数
明治32	1	58
36	—	116
40	—	91
大正 4	—	122
9	—	172
昭和 8	6	242
10	6	241
14	8	278
20	8	336
24	7	309
30	7	273
35	10	364
40	10	293
45	7	225
50	6	144
55	6	145
60	6	129
平成 2	6	117

永水小学校

年度	学級数	児童数
明治 2	1	14~15
24	1	38
41	3	57
大正 2	2	92
10	3	120
昭和 1	2	92
10	4	144
15	6	144
20	6	149
25	6	121
30	6	148
35	6	205
40	6	156
45	6	97
50	6	58
55	5	60
60	4	51
平成 2	5	56

霧島中学校

年度	学級数	児童数
昭和22	8	328
25	9	389
30	9	409
35	8	381
40	12	457
45	12	472
50	9	326
55	6	242
60	7	254

統合後の霧島中

年度	学級数	児童数
昭和61	6	247
62	6	238
63	6	233
平成 1	7	226
2	8	238

(注) 昭和20年までは
高等科を含む
()内はなか
よし学級

(注) 昭和20年までは
高等科を含む

6 霧島東中学校

昭和二十二年（一九四七）霧島第二中学校霧島教場として認可され、霧島小学校内に設置、五月二日、大田小学校において開校式を挙行した。二学級・職員数四人、教場主任和田次男氏。

昭和二十四年（一九四九）校名改称により霧島中学校霧島教場となる。翌年霧島中学校霧島分校として認可。

昭和二十五年五月五日、現在位置に新校舎落成移転。この校舎建築は、霧島中学校の項で述べたとおり、校区民の負担であったから建設委員の苦労は並大抵ではなかった。

委員は各集落から一、二人を選出し、委員長は吉松武志氏、後に佐田豊氏が就任した。建設費は一戸平均八〇〇円程度の予定で着工したが、上棟の夜、強風のために倒壊したためさらに各戸一〇〇〇円程度の負担となり、当時の経済事情からして容易なことではなかった。整地その他の労力奉仕は一戸平均三〇日にも及んだ。トラックもあまりなかったので材木なども肩で運搬した。学校敷地の換地などを含めて委員の苦労はひととおりではなかった。その間に町の補助も得られ、校区民・委員一丸

となった熱意によって、ついに校舎が完成するに至ったのである。

昭和二十八年（一九五三）
学校専用簡易水道完成

昭和三十三年（一九五八）
霧島神宮と部分林の契約をし、学校林を設置、生徒および父兄の奉仕によって植樹した。

昭和三十五年（一九六〇）
二月、理科室・図書室・宿直室落成

昭和三十七年（一九六二）
霧島東中学校として独立し、校長は霧島中学校長の兼務となる。

昭和三十八年（一九六三）
技術科教室完成

昭和三十九年（一九六四）
ピアノ購入。学級増のため一教室完成

昭和四十年（一九六五）
県PTA研究公開

昭和四十二年（一九六七）
校長住宅新築

昭和四十九年（一九七四）
教頭住宅新築、体育倉庫・男子更衣室建築

昭和五十年（一九七五）
新校舎落成

昭和五十一年
(一九七六)
体育館落成、運動場整地および危険校舎
撤去

昭和五十二年
(一九七七)
体育館二期工事完成

昭和五十五年
(一九八〇)
校庭照明施設設置(四基)

昭和五十八年
(一九八三)
霧島中の統合が議会で可決される。
統合反対のための登校拒否(二七日間)

十一月解決

昭和六十年
(一九八五)
三月、統合反対の登校拒否(二三日間)。
三月末日をもって解決し四月一日付けで

歴代校長

代	氏名	期	間
四	竹永 泰次	昭三七、四、一	昭三九、三、三一
五	鬼塚 俊夫	三九、四、一	四一、三、三一
六	篠原 正治	四一、四、一	四二、三、三一
七	大山 栄	四二、四、一	四五、三、三一
八	小田原康夫	四五、四、一	五〇、三、三一
九	川村 秀俊	五〇、四、一	五三、三、三一
一〇	本 勇三	五三、四、一	五四、三、三一
一一	花房 薫	五四、四、一	五八、三、三一
一二	川崎 昭人	五八、四、一	六〇、三、三一
(初代から三代まで霧島小学校長兼任)			

霧島東中

児童数・学級数の変遷

年 度	学級数	児童数
昭和22	2	50
25	3	111
30	3	116
35	3	91
40	3	111
45	3	115
50	3	82
55	3	57
59	3	51

霧島中学校と統合のために霧島東中学校
の幕を閉じる。

7 永水中学校

昭和二十二年(一九四七)六・三制学制により霧島村
立第二中学校(現在の霧島中学校)の永水教場として発
足、永水小学校講堂を教室として使用。学級数一、生徒
数二十七人、教員二人。

昭和二十三年(一九四八)霧島第一中学校(後東襲山中)の永水分
校となる。永水小学校講堂に一教室、笹

之段公会堂を一教室として使用した。学

級数二、生徒数六四人、教員四人

昭和二十四年(一九四九)現在地に校舎落成、工費一五万円。学
級数二、生徒数七九人、教員四人

昭和二十五年
(一九五〇)

霧島・東襲山両村分村のため、霧島中学校（旧霧島第二中学校）の永水分校となる。消防クラブが生まれる。

昭和二十八年
(一九五三)

各教室の廊下側の障子をガラスに改修

昭和二十九年
(一九五四)

電話架設、家庭科室・調理室の改修。郡指定分校経営研究会公開

昭和三十一年
(一九五七)

上水道完成

昭和三十三年
(一九五八)

特別教室（小学校古校舎）移転完了。校門新築、国旗掲揚台新築

昭和三十五年
(一九六〇)

永水分校校歌制定さる。作詞・淵脇護、作曲・桐原草平

昭和三十六年
(一九六一)

小学校とともに完全給食実施

昭和三十八年
(一九六三)

技術科教室が新築される。

昭和四十年
(一九六五)

永水分校を廃止、永水中学校として独立、準僻地の指定を受ける。八月、便所

移転改築および体育倉庫を新設

昭和四十一年
(一九六六)

運動場の金網さくの新設（PTA奉仕）

昭和四十三年
(一九六八)

永水中学校廃止に関する議案上程され霧島中学校に統合されることに議決され、

永水中学校は分教場・分校時代を含めて二一年間の幕を閉じた。

歴代校長は、永水小学校長が兼任した。

8 霧島町立幼稚園

ゆたかな人間形成の発達を助長し、心身共に健全な子



霧島町立幼稚園

供を育てることを目標に設立された、町内では唯一の幼稚園である。

△沿革▽

昭和四十六年 大田小学校内に、町立大田幼稚園として（一九七一）設置（園長は大田小学校長兼務）。

昭和四十七年 霧島町立幼稚園と改称、新園舎竣工、現在地に移転する。完全給食が始まる。（一九七二）

育英奨学資金制度 霧島町における育英奨学資金制度は、霧島町育英会と財団法人大川育英会の二つの

育英制度がある。霧島町育英会は、昭和三十三年から運営を始めた。霧島町育英会の資金の状況は、表1に示すとおりで昭和五十一年には岩崎奨学会基金から寄付を受け、利息運用を含めて健全な運営をしている。

霧島町育英会の昭和三十三年度から平成三年までの、貸付け金額及び貸付け者の移り変わりは表2のとおりである。

財団法人 大川育英会 昭和三十八年から育英事業を始めた。これまでの貸付け者は二十一人である。大川

育英会奨学規程は次のとおりである。

（単位：円）

表 1 育英資金の状況（霧島町育英会）

年 度	収 入	支 出	繰 越 額
昭和33	133,530	24,000	109,530
34	124,041	65,000	59,041
35	177,041	84,000	86,041
45	577,524	384,535	192,989
50	1,030,284	990,390	337,299
51	岩崎奨学会基金（貸付信託証券）から5,000,000円寄付を受け、利息運用をはじめる。		
55	3,314,042	687,260	2,323,782
60	1,777,581	1,318,850	458,731
63	奨学資金貸付基金運用始まる。		

	基金額	寄付金等	貸付額	返納額	需用費等	利 息	年 度 末 基金残額	年度末 貸付額
昭63	11,079,066		1,236,000	631,000	32,010	2,827,187	13,269,243	4,541,000
平 2	13,201,090	1,000,000	828,000	805,000		570,907	14,748,997	4,688,000

表 2 貸付け金額及び貸付け者の移り変わり（霧島町育英会）

（単位：円、人）

年 度	金 額	貸付け者	年 度	金 額	貸付け者
昭和33	1,000円	2	51	4,000	9
34	々	5	52	々	9
35	々	2	53	々	5
36	々	5	54	々	3
37	々	7	55	5,000	4
38	々	6	56	々	0
39	々	5	57	6,000	3
40	々	7	58	7,000	5
41	1,500	4	59	8,000	4
42	々	6	60	9,000	2
43	々	5	61	々	4
44	々	10	62	々	11
45	々	6	63	々	2
46	2,000	6	平成 1	々	3
47	2,500	4	2	々	6
48	3,000	5	3	々	6
49	々	3			
50	4,000	12			

財団法人大川育英会奨学規程

第一章 総則

（通則）

第一条 財団法人大川育英会寄附行為第三十条の規程に基き、この規程を定める。

（奨学生の資格）

第二条 本会の奨学生となるものは、日本国民であつて、高等学校または大学に在学し、学業、人物ともに優秀、かつ、健康であつて、学資の支弁が困難と認められるものでなければならない。

（奨学生の種類）

第三条 奨学年の種類は、次に掲げるものとする

一、高等学校奨学生

二、大学奨学生

（奨学金の貸与期間および金額）

第四条 奨学金を貸与する期間は、正規の最短期間とする。

2 前項の期間中に貸与する学資金の額は次のとおりとする。

一、高等学校奨学生 月額一、〇〇〇円

二、大学奨学生 月額二、五〇〇円（その後改正されて高校生一五、〇〇〇円、大学生二〇、〇〇〇円となる）

第二章 奨学生の採用と奨学金の交付

(奨学生願書および奨学生推薦書の提出)

第五条 奨学生志願者は、連帯保証人と連署した本会あての奨学生願書に、在学学校長の推薦書および在学証明書添えて本会に提出するものとする。

2 連帯保証人は、本人が未成年の場合はその保護者成年者の場合は父母兄弟またはこれに代る者でなければならない。

(奨学生採用)

第六条 奨学生の採用は、理事二名および学識経験者三名をもって構成する奨学生選考委員会の選考を経て、理事長が決定し、その結果を在学学校長を経由して本人に通知する。

(奨学金の交付)

第七条 学資金は、一箇月分あて交付することを常例とし、特別の事情あるときは、二箇月分以上を合せて交付することができる。

2 学資の交付は直接本人に送金して行なうものとする。

(学資金受領書の提出)

第八条 学資金の交付を受けた奨学生は、そのつど、ただちに学資金受領書を提出しなければならない。

(学業成績および生活状況の報告)

第九条 奨学生は、毎学年末学業成績表および生活状況報告書を理事長あて提出しなければならない。

(異動届出)

第十条 奨学生は、次の各号の一に該当する場合は、連

帯保証人と連署のうえ、直ちに届け出なければならない。

一、休学し、復学し、転学し、または退学したとき。

二、停学その他の処分を受けたとき。

三、引き続き三箇月以上欠席したとき。

四、連帯保証人を変更したとき。

五、本人または連帯保証人の氏名、住所その他の重要

事項に変更があったとき。

2 奨学生であった者が、学資金の返還完了前に前四号または第五号に該当するときは、前項に準じて届け出なければならない。

(学資金の休止)

第十一条 奨学生が休学し、または長期にわたって欠席したときは奨学金の交付を休止する。

2 奨学生の学業または品行などの状況により補導上必要があると認めたときは、奨学金の交付を停止することがある。

(奨学金の復活)

第十二条 前条の規定に学資金の交付を休止または停止された者が、その事由が止んで在学学校長を経て願ひ出たときは、奨学金の交付を復活することがある。

(奨学金の廃止)

第十三条 奨学生が次の各号の一に該当すると認めるときは、在学学校長の意見を徴して奨学金の交付を廃止する

ことがある。

一、傷い疾病などのために成業の見込みがなくなったとき。

二、学業成績、または操業が不良となったとき。

三、奨学金を必要としない理由が生じたとき。

四、前各号のほか、奨学生として適当でない事実があったとき。

五、在学学校で処分を受け学籍を失ったとき。

六、その他第二条に規定する奨学生としての資格を失ったとき。

(奨学金の辞退)

第十四条 奨学生は、いつでも在学学校長を経て奨学金の辞退を申し出ることができる。

(奨学金借用証書の提出)

第十五条 奨学生は、次の各号の一に該当する場合は在学中貸与を受けた奨学金の全額について、奨学金借用証書を作成し、連帯保証人と連署のうえ、直ちに提出しなければならない。

一、卒業し、もしくは修了しまたは奨学金貸与期間が満了したとき。

二、第十三条の規定により学資金貸与期間が満了したとき。

三、退学したとき。

四、奨学金を辞退したとき。

(奨学金の利息)

第十六条 奨学金の貸与は、無利息とする。

第三章 奨学金の返還と返還猶予

(奨学金の返還)

第十七条 奨学生が第十五条の各号の一に該当するとき、貸与の終了した日の翌月から起算して六箇月を経過した後、二十年内に貸与された奨学金の全額を返還しなければならない。

2 前項の奨学金の返還は年賦、月賦またはその他の一年以内の割賦の方法によらなければならない。ただし、奨学生であった者の都合により、いつでも繰上げ返還することができる。

3 前二項の規定にかかわらず、学資金の貸与を受けた者が、次の各号の一に該当する場合は、貸与した奨学金の全部または一部につき、繰り上げ償還させることができる。

一、奨学金を貸与の目的以外に使用したとき。

二、いつわりの申請その他不正の手段によって貸与を受けたとき。

三、返還金の支払を怠ったとき。

(奨学金の返還猶予)

第十八条 奨学生であった者が、次の各号の一に該当する場合、願出によって学資金の返還を猶予することができる。

一、災害により損害をこうむったため返還が困難となったとき。

二、傷病により返還が困難となったとき。

三、高校、大学、大学院またはこれらと同程度の学校に在学するとき。

四、医学実地修練に従事するとき。

五、外国にあつて学校に在学し、また研究に従事するとき。

六、その他、真にやむを得ない事由によつて、返還が著しく困難となったとき。

2 返還猶予の期間は、前項第三号または第四号に該当するとき、その事由の継続中とする。その他の各号の一に該当するときは、一年以内とし、さらに事由が継続するときは、願書により重ねて一年ずつ延長することができ。ただし、第五号または六号に該当するときは、通じて五年を限度とする。

(返還猶予の願出)

第十九条 奨学金の返還猶予を受けようとする者は、その事由に応じてそれぞれ証明することのできる書類を添付し、連帯保証人と連署のうえ、奨学金返還猶予願を提出しなければならない。

(返還猶予の決定)

第二十条 奨学金の返還猶予の提出があつたときは、理事長において審査決定し、その結果を本人に通知する。

(奨学生であつた者の願出)

(死亡の届出)

第二十一条 奨学生が死亡したときは、相続人または連帯保証人は、死亡診断書を添え、在学中の学校長を経てたちに死亡届を提出しなければならない。

2 奨学生であつた者が奨学金返還前に死亡したときは、相続人または連帯保証人は、死亡診断書を添えてたちに死亡届を提出しなければならない。

第四章 学資金の返還免除

(奨学金の返還免除)

第二十二条 奨学生または奨学生であつた者が死亡し、または不具廃疾のため精神もしくは身体の機能に著しい障害を生じて労働能力を喪失し、その学資金の返還未済額の全部または一部について返還不能になったとき、その他特に必要があるときは、その全部または一部の返還を免除することがある。

(返還免除の願出)

第二十三条 学資金の返還免除を受けようとするときは、本人または相続人は、連帯保証人と連署のうえ、次の各号の書類を添付し、学資金返還免除願を提出しなければならない。

一、死亡によるときは戸籍抄本、不具廃疾によるときは、その事実および程度を証する医師または歯科

医師の診断書

二、返還不能の事実を証する書類

(返還、免除願出の期限)

第二十四条 学資金返還免除額は、返還不能の事由が生じた時から一年以内に提出しなければならない。ただし特別な事情があると認められるときは、更に一年以内その期限を延長することができる。

(返還免除の決定)

第二十五条 学資金返還免除の提出があつたときは、理事長において審査決定し、その結果を本人、相続人または連帯保証人に通知する。

第五章 補則

(実施細則)

第二十六条 この規程の実施について必要な事項は、別にこれを定める。

附 則

この規程は昭和三十八年四月一日から実施する。

第二節 社会教育

一 戦後の社会教育

昭和二十四年（一九四九）六月に社会教育法が公布され、市町村教育行政は、学校教育と社会教育を並行して進めることとなった。これによって、初めて組織的な社会教育活動が開始され、社会教育主事の設置や社会教育施設の建設など、大きく採り上げられるようになった。

本町社会教育の沿革を簡単にまとめると、次のようになる。

昭和二十五年
（一九五〇） 社会教育委員会設置

昭和二十七年
（一九五二） 教育委員会設置、社会教育係をおく。各校区に青年学級開設

昭和二十九年
（一九五四） 第一回青年学級体育大会

昭和三十二年
（一九五七） 社会教育主事を置く。第一回町民体育大会

昭和三十四年
(一九五九)
青少年問題協議会発足(委員一五人)。子ども会結成

昭和三十六年
(一九六一)
婦人学級開設(文部省指定)

昭和三十八年
(一九六三)
新生活運動開始

昭和四十一年
(一九六六)
第一回霧島町総合社会教育大会。老人大学開設。斎藤茂吉歌碑の建立

昭和四十二年
(一九六七)
文化財保護委員会設置(同五十三年文化財保護審議会に改名)。郷土誌発刊。心に火をたく献本運動推進委員決まる。

昭和四十三年
(一九六八)
大窪スポーツ少年団結成(町内第一号)。高校生活会発足。町民憲章・町民歌制定

昭和四十四年
(一九六九)
第一回スポーツ少年大会

昭和四十五年
(一九七〇)
自治公民館活動と組織づくり

昭和四十六年
(一九七一)
中央公民館開館

昭和四十七年
(一九七二)
社会体育係を置く。町文化協会発足。第一回町民文化祭

昭和四十八年
(一九七三)
社会教育指導員設置

昭和五十一年
(一九七六)
体育指導員制度。屋久町子ども会との交流会始まる。

昭和五十二年
(一九七七)
社会教育課の設置、派遣社会教育主事制度開始

昭和五十四年
(一九七九)
歴史民俗資料館開館。永水地域公民館開館。子ども会空かん募金始まる。

昭和五十五年
(一九八〇)
田口地域公民館開始。サンライフ運動始まる。霧島国際音楽祭(第一回)

昭和五十六年
(一九八一)
あすの霧島をつくる町民会議

昭和五十八年
(一九八三)
献本運動開始

昭和五十九年
(一九八四)
全国レクリエーション大会開催(ホステリング)。ちびっ子天国(三月第一回)

昭和六十一年
(一九八六)
青少年ボランティア指導委員会。コグマ1からいも交流(八月)

昭和六十二年
(一九八七)
からいも交流(三月)

平成元年
(一九八九)
全国優良公民館表彰を受ける。霧島をテーマにした八号洋画展(第一回)

平成三年 生涯学習推進大会（これまでの社会教育（一九九一）大会を改称―二月）

社会教育委員会

委員は、社会教育法に基づいて教育委員会が委嘱し、社会教育に関する

諸計画を立案したり、教育委員会の諮問に応じて意見を述べるなどの職務がある。生涯学習時代を迎え、社会教育委員の果たす役割は大きくなってきた。

本町では、昭和二十五年九月、条例化して現在一人の委員が委嘱されている。任期は二年。

公民館運営審議会

委員は、学校長、各種団体、公民館学級生の各代表者からなり、教育委員会が委嘱する。公民館運営審議会は、館長の諮問に応じ、公民館における各種の事業の企画実施に当たって調査審議するもので、現在一〇人の委員が委嘱され任期は二年である。昭和五十四年設置。

文化財保護審議会

昭和四十二年文化財保護委員会の設置によって、これまであまり顧みられなかった文化財へ、町民の関心が向けられるようになった。文化財の保存および活用に関して教育委員会の諮問に答え、町民の財産である有形無形の歴史文化を後世に引き

継ぐために努力するものである。

昭和五十三年（一九七八）、条例の改正により文化財保護審議会と改称した。現在、国指定重要文化財一件、県指定無形民俗文化財一件、町指定文化財六件である。

青少年教育

青少年教育は、いつの時代においても社会教育第一の重点施策として取り組まれてきたが、平成元年を機に、二一世紀を担う人づくりは急務となっている。



インリーダー・チャレンジキャンプ

本町では、社会教育委員会設置後の昭和二十七年（一九五二）に社会教育係が置かれ、各校区ごとの青年学級が開設されて活発な学習活動が始まった。昭和二十九年（一九

五四）には、第一回青年学級体育大会も行われた。昭和三十四年（一九五九）一月青少年問題協議会発足、同年五月子ども会結成、昭和四十三年（一九六八）九月には、他市町村に先駆けて高校生会も発足している。「心に火をたく献本運動」や、「町民登山の日」を決めて心身共に健やかな人づくりへの運動が活発となったのもこのころからである。現在では、自然に親しむインリーダー・チャレンジキャンプや登山レクリエーション、史跡めぐり歩こう会などのほか、子ども会創作大会や高齢者との交流活動などをおして創造的で自ら考え表現し、行動できる人間の育成を目指して事業がなされている。

婦人教育

婦人の生活は、戦後の社会変動によってほんろうされ続てきた。平均出生児数の減少や平均寿命の伸長によって、三〇年から四〇年の長い中高年齢期をおくらなければならない。また最後の一〇年くらいは、女性の独身期ともいわれている。

本町においては、昭和二十五年（一九五〇）婦人学級開設、新時代に取り残されない婦人自身の学習はもとより、家庭教育のあり方や生活改善・食生活の見直しなど、多くの課題が山積した時代である。各小学校区ごと

に学校を拠点とした婦人教育がなされていたが、昭和四十六年（一九七一）四月中央公民館完成とともに、計画的学習活動が展開されるようになった。

生涯にわたっての生きがいづくりとして、趣味学級や教養講座が開設され、集団の中での相互学習は、婦人の意欲をわき立たせて効果をあげている。町婦人会役員研修を兼ねて開設されてきた婦人学級は、指導者育成の役割も果たしている。二一世紀を担う青少年の育成が、主として家庭教育にあることを考え、母親セミナーの充実など積極的な婦人教育への取り組みが重点施策としてあげられている。

高齢者教育

わが国の人口構造は、医療技術の進歩、伸長による自由時間の増大などに支えられて、急速な高齢化社会を迎えている。本町も平成二年度の六五歳以上の人口対比は一九^三強に達している。高齢化の問題は、高齢者自身の問題であると同時に、町民すべての将来にかかわる重要な課題の一つである。

これまで高齢化対策は、福祉・医療を中心とした高齢者の庇護^{ひご}におかれていたが、これと並行して高齢者自身

平成二年度霧島町社会教育の重点事項

△町政の方針▽△町教委教育方針▽

〔社会教育の努力点〕

（おもな具体施策）

意欲あふれる人づから

豊かなふるさと

明るく住みよい町

- 生涯学習の視点に立つ教育の推進
- 学校教育・社会教育・家庭教育の連携
- 特色ある郷土教育の推進

●郷土に根ざした社会教育の推進

生涯学習の推進

- (1) 各世代における学習機会の拡充
……青少年教育の充実
- (2) 指導体制の整備と学習方法の改善
……各種研修会への積極的参加
- (3) 公民館教室・講座の充実
……受講者の拡大と新教室の開発
- (4) 住民総ぐるみによる地域づくりの推進
……自主的な社会教育活動の促進と県民運動の周知・実践
- (5) 社会参加活動の奨励・促進
……各団体間の連携による活動の推進
- (6) 社会教育施設の整備・充実
……公民館の整備と経営研究

芸術・文化活動の振興

- (1) 文化団体・グループの育成と文化活動の促進
……文化協会を中心とする組織の強化
- (2) 文化財・民俗資料等の保存
……情報の収集・整理
- (3) 文化財保護思想の普及と文化財の活用
……啓発活動の充実
- (4) 霧島国際音楽祭への積極的参加
……青少年への働きかけと支援体制の充実

社会体育・レクリエーションの振興

- (1) ファミリースポーツの奨励普及
……スポーツ教室開設による普及
- (2) 各種大会（地区大会）の運営研究
……各種大会の円滑な運営
- (3) レクリエーションの奨励・普及
……レクリエーション大会の実施

- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ○ 幼児学級・実年学級・中央婦人学級の開設 ○ 家庭教育学級の開設（霧島小・永水小） ○ 青年教室・高齢者教室の開設 ○ 読書教室・自然教室・英会話教室の開設 ○ インターリーダー研修会・インリーダークャンピングの実施 ○ 地区公民館長研修会の実施 ○ 青年の国内研修の実施 ○ 国際交流フェスティバルへの支援・参加 ○ 青少年ボランティア活動の推進 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 文化協会の自主的活動の促進 ○ 霧島国際音楽祭の後援と友の会の育成 ○ 霧島をテーマにした8号洋画展への支援 ○ 文化財のスライド・ビデオ製作 ○ 郷土芸能発表への助成 ○ 国際（文化）交流促進 ○ 文化広報紙の発行 ○ 郷土誌改訂版編集 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 婦人・親子を対象にしたスポーツ教室 ○ グランドゴルフ・ミニバレーボールの普及 ○ 一山坂達者霧島連山路破証の作成 ○ 主催行事の運営工夫と参加者の促進 ○ 第6回ファミリースポーツ大会の実施 |
|---|--|--|

個性豊かでたくましい青少年育成のための地域ぐるみ推進体制の確立

地域ぐるみ推進体制のために

- 校外生活指導連絡会・青少年問題協議会の開催：青少年健全育成啓発チラシの全戸配布
- 青少年育成カレンダーの作成全戸への配布（二、一五〇戸）
- 「家庭教育学級」の開設
- 「町PTA研究大会」十一月二十四日
- 「生活指導連絡会」二月

乳幼児期の子供をもつ母親の資質向上のために

- 乳幼児をもつ母親を対象に「幼児学級」の開設
- 公民館における「親子読書教室」（幼稚園）の開設
- 幼児と母親を対象に「幼児リトミック教室」を開設年間一〇回
- 幼児をもつ父親を対象に「父親学級年間六回

異年齢集団の活動を通じた健全な子ども会活動の活性化のため

- 二二単位子ども会の活動充実：自治公民館活動との連携
- インリーダーチャレンジキャンプの実施
- 空き缶募金活動の実施
- ふるさと美化活動への参加
- 屋久町子ども会交歓会（隔年おき実施二泊三日ホームステイ）
- 史跡めぐり歩こう会・子ども会大会の実施（一月）・自然教室・霧島連山踏破確認証

高校生社会参加とボランティア活動推進のために

- 高校生クラブ（一〇地区）活動の充実と未設置地区の解消
- 高校生ボランティア活動（駅清掃作業・福祉もちつき・地区行事への参加）の促進
- 町民体育祭・地区運動会での役員としての活用
- ふるさと美化活動への参加

青年団活動の活性化と地域づくりへの積極的参加のために

- 定例会の充実（毎週第三火曜日）
- 青年教室の充実（年一〇〇回）：交流の実施（三〇名前後）
- 「夏祭り」「おじゃんせ市」「文化祭」など行事への主体的取組み・地域づくりへの積極的参加
- 「クリリンアップ霧島」（道路清掃）のボランティア活動の実施
- 「青年祭」の実施「福祉もちつき」「老人とのふれあい」などへの積極的参加

各種団体指導者の資質向上のために

- 青年団指導者研修・子ども会育成者の研修
- スボーッ少年大会
- 高校生育成者大会
- 県・郡での各種研修会への積極的参加

生涯学習時代における婦人の地域
社会参加活動の推進体制の確立

婦人の資質向上と家庭
生活充実のために

婦人団体活動の充実と
活動の活性化のために

社会参加活動と推進関
係機関団体の連携のた
めに

- 中央婦人学級の開催（毎月一回）
- 婦人のための公民館各種学級・講座への参加促進
- 婦人スポーツ・レクリエーション教室の開催
- 各種研修会・講演会等への積極的参加……研修報告の重視
- 母親セミナー・単位婦人会学習会の実施
- 広報紙「ふれあい」全戸配布による婦人会活動の呼びかけ強化
- 仲間づくりレクリエーションの充実（ゲーム・歌等）

- 婦人会リーダー研修会（単位婦人会以上 五月・校区役員以上 二月）
- 資金作業（空き瓶・ボロ回収 七月・文化祭不要品 十一月）
- 福祉もちつき大会（一二月）
- 早朝交通安全を含む街頭補導と声かけ運動（毎月一〇日）
- 独居老人への声かけ運動
- ごみゼロ運動の推進
- 寝たきりの方へのオムツ配布
- 単位婦人会（二一単位四五〇人）活動の充実
- 雑巾の配布（各学校外）
- 県・郡婦連諸行事への積極的参加
- 婦人ナイター運動会の実施（八月）……自主的運営・各関係機関との連携

- 町主催各種行事への共催、協力（敬老会・七草・成人式・駅伝・町体育祭等）
- 青年祭・清掃活動・夏祭り等への協力
- 自治公民館・地区公民館活動への積極的参加
- 青少年育成のための諸行事への参加
- 他の婦人団体との連携（農協婦人部等）
- 災害発生時における救済活動

教養を高め、生きがいを求める学習機会の
拡充と地域づくりに積極的な参加の促進

教養を高め、教育力を
身につけた親になるた
めに

高齢者の学習要求にこ
たえ生きがいと社会参
加を促進するために

ぬくもりと連帯感に満
ちた地域づくりの中核
となるために

各種団体指導者の養成
と資質向上のために

- 妊婦・乳幼児をもつ母親のための「乳幼児学級」の開設
- 保育園・幼稚園児の父母を対象に「幼児教育講座」の開設
- 単位PTA活動の充実のための助言指導 町PTA研究大会
- 町生活指導研究大会充実のための積極的な援助と指導
- 子ども会育成の研修会(年三回)
- 「家庭教育学級」(霧島小・永水小)の開設
- 「父親学級」(永水小)の開設
- 「高校生父母の会」の活動充実と「高校生育成者大会」(七月)の実施
- 一六ミリ映写機操作技術講習会・パソコン研修講座の開設

- 老人クラブ育成、充実のための助言・指導……高齢者教室「みやま長寿大学」
- 高齢者と子どもとのふれあい事業の充実
- 文化財や公共施設の清掃委託とボランティアの促進
- 町青年団主催町民一斉奉仕作業への参加促進
- 高齢者人材バンクの登録推進と活用

- モデル地区公民館の指定と活動の充実(霧島地区公民館)
- 自治公民館研修会の実施……農村振興運動・駐在員会との連携
- 地区公民館制度の活性化
- 成人男子グループの育成……「六峰会」「みずは会」
- 自治公民館行事(奉仕・団体育成・ボランティア)の指導・助言
- 人権意識の高揚と同和教育への理解を深めるための啓発活動
- 保健衛生課との連携による「健康教室」「体力づくり事業」の推進

- 県・郡主催各種研修会への積極的な参加の促進
- 各種初級・中級指導者研修会や有志指導者認定講習会への派遣・参加奨励
- 各種団体のリーダー研修会の実施
- 自治公民館長・地区公民館長の先進地研修の実施

の社会参加を促し、生きがい対策としての高齢者教育の必要性が求められている。高齢者の生活意識・価値観・能力・健康などの格差も十分配慮して、次のような高齢者教育に取り組んでいる（平成元～二年度）

- (イ) 高齢者教室「みやま長寿大学」開設
- (ロ) 実年学級・夢おこし学級その他の公民館教室への参加
- (ハ) 田口唱歌教室（異なる世代間の交流も含めて）
- (ニ) 高齢者・子どもふれあい事業（農作業体験など）
- (ホ) 青年団主催の町民奉仕作業への参加（空き缶拾い）
- (ヘ) 文化財・公共施設の清掃委託（ボランティアの促進）
- (ト) ゲートボール大会の開催（健康保持増進）

家庭教育

家庭教育は、戦後の混乱の中で、ともすれば目標を見失い、民主主義のはき違え

なども含めてしばらくはとまどいの時代が続いた。昭和四十年代の高度経済成長期は、本町からも多くの出稼ぎ者を生み、父親不在の中で家庭教育の危機は深刻となった。観光立町の本町は、サービス産業の発展に伴って働く婦人が増え、両親不在の子供の問題が大きく採り上げられるようになったのも、このころからであった。昭和三十九年（一九六四）大田小学校に家庭教育学級開設、



英会話学習（家庭教育学級 大田小）

具体施策は前掲のとおりである。

視聴覚教育

社会教育・学校教育の学習効果を高めるとともに、教育の機会を広げるという目的のもとに、視聴覚ライブラリーの設置が法律化され、本町においても昭和五十三年（一九七八）十月、視聴覚ライブラリー設置条例が施行された。機材および教材の整備と、視聴覚教育指導者の養成として初級講習会、一

同四十年霧島小学校、同四十一年に永水小学校と力が入れられた（文部省の補助事業で、年間経費三万円）。現在では町の単独事業として継続されている。

平成二年度の社会教育の重点事項と、おもな

第四章 教育・文化

16ミリフィルム利用状況

(平成元年度)

	利用本数	利用回数	利用延人数	人口比率
学校教育	27	31	2,087	
社会教育	63	66	1,198	
合計	90	97	3,285	55

8ミリフィルム・ビデオその他利用状況

	利用本数	利用回数	利用延人数	人口比率
学校教育	6	6	839	
社会教育	9	14	364	
合計	15	20	1,203	20

(単位：本，回，人，%)

教材整備状況

(平成元年度)

分室 教材名	東 部 ブ ロ ッ ク					
	国 分	霧 島	隼 人	福 山	保有数	基準数
16ミリ映画フィルム (本)	112	39	83	27	261	515
8ミリ映画フィルム (本)	1	14	15	6	36	155
スライド教材 (組)	7	7	14	15	43	345
録音教材 (本)	2		1		3	450
録画教材 (本)	8	11	6	7	32	102
同 (貸与品、寄贈品)	22	8	15	8	53	
O. H. P. シート (組)	1	3	11	4	19	180
紙芝居 (組)				4	4	90
組写真 (組)						30
教材セット (点)						23
コンセプトフィルム (本)	3	2	9	29	43	
ビデオディスク (組)	7				7	
掛図 (本)						
パソコンソフト (本)				1	1	
レコード					0	100

機材整備状況

(平成元年度)

機 材	分 室	ブ ロ ッ ク	東 部 ブ ロ ッ ク			
			国 分	霧 島	隼 人	福 山
映 写 機	{ 16ミリ 8ミリ		4 1	1 1	3 1	2
撮 影 機	{ 16ミリ 8ミリ		1	1		
テ レ ビ 受 像 機			1	1	4	1
ス ラ イ ド 映 写 機			3	2	3	1
コ ン セ プ ト 映 写 機					1	1
ス ラ イ ド 作 成 具			1		1	1
O H P 投 影 機			1	2	2	
シ ー ト 作 成 機			1		1	1
実 物 投 影 機						
ラ ジ オ 受 信 機						
録 音 機			2	1	1	1
レ コ ー ド 演 奏 機			1		1	
V. T. R.			2	1	3	2
テレビ (ビデオ) カメラ			2	1	3	2
V. D プ レ ヤ ー			1			
フ ィ ル ム ク リ ナ ー						
写 真 機				2		1
ス ク リ ー ン			4	2	6	1
照 明 機						
現 像 引 伸 機						
暗 幕						
編 集 機	{ 16ミリ 8ミリ		1	3	2	
フ ィ ル ム 巻 取 機					1	
修 理 用 工 具						
ロ ッ カ ー	{ 機材用 教材用 カード		4	1	2	1
複 写 機						
フ ィ ル ム 接 合 機			1	1		
映 写 台			1		2	
パ ソ コ ン						
ア ン プ						
自 動 車						
フ ィ ル ム 検 索 機						

六ミリ映写機取り扱い講習会が行われている。資格者は、機材やフィルムなどが貸し出され、地域の集会や団体の学習に利用されている。

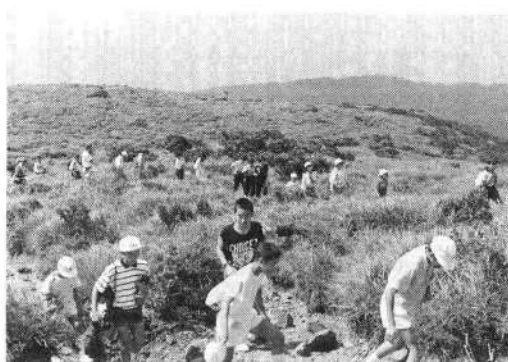
社会体育

戦後の混乱と経済の荒廃からようやく立ち直りかけた昭和三十年ごろから、スポーツを通して町民の融和を図り、明るい郷土づくりを進めようと、社会体育の振興が強調された。

本町でも昭和三十一年（一九五六）四月、スポーツの



ふるさとめぐり歩こう会



ふれあいレクリエーション大会

振興計画の立案、大会の開催、技術指導と助言、各スポーツ団体の連絡調整を目的として、霧島町体育協会が発足した。同三十二年に第一回町民体育祭が開催され、同三十三年には町内一周駅伝も始められた。同四十七年（一九七二）に、社会体育係が置かれて、町民の交流の場と体力づくりへの仕掛け人としての大きな役割が課せられた。同五十一年に、スポーツの知識や実技の指導助言を目的に、体育指導委員制度も確立し（現在七人委

嘱）、各種のスポーツ団体が誕生している。

以上のような経過のもとに、社会体育は地域に浸透し、各自治公民館ごとの運動会の開催など地域づくりに大きな役割を果たしている。しかし、高齢化社会を迎えた今、日常生活に密着した体力の維持向上のための社会体育が、真剣に求められている。

平成二年度に実施された事業は、次の表のとおりである。

△社会体育▽
 ≪ねらい≫

△方 向▽

〔具 体 的 事 業 概 要〕

スポーツレクリエーション活動の生活化・地域化を
 進め町民の体力づくりと健康増進を図る

町民の総参加とスポー
 ツ・レクリエーション
 活動の生活化・地域化
 のために

社会体育関係団体の育
 成と体育協会の自主的
 な運営を図るために

スポーツ・レクリエー
 ション指導者育成のた
 めに

社会体育施設の利用の
 ために

情報提供サービスとし
 ての広報活動の充実の
 ために

○地区対抗各種競技大会の見直しと改善(年間スポーツ対象の設置)
 ・ゲートボール大会(五月) ・卓球大会(五月)
 ・第三回霧島町民体育祭(十月) ・ソフトボール大会(八月)
 ・第六回霧島町ふれあい登山レクリエーション大会(七月)
 ・町民フアミリー走ろう会(二月)
 ・軽スポーツ教室の実施と充実(親子インディアカ・チェックボールの二教室)
 ○ふるさとめぐり歩こう会(十二月)
 ○町内各地区別運動会・キャンプ
 ○スポーツクラブ同好会への指導援助
 ○ストレッッチ体操のすすめ……チランジ配布と随時指導
 ※各種行事の会場設置の工夫と案内板作成

○体育協会理事会・総会の開催
 ・体育協会専門部主催の大会の開催
 ・ゲートボール春・秋季大会
 ・女子バレーボール大会
 ・連盟ナイターソフトボール大会
 ・町弓道大会
 ○スポーツ少年団の育成(二団) 少女バレー、サッカー、ソフト、剣道、空手
 ○町スポーツ少年団交歓大会の実施
 ※始良地区体育大会並びに地区市町村対抗駅伝競走大会に向けての選手強化及び結団式の実施
 ※小学校水泳・陸上記録会への援助

○体育指導委員会の充実
 ・各種研修会の開催
 ・体育部長研修会
 ・体育協会理事研修会
 ・女子体育指導委員研修会
 ・県体育指導委員研修会
 ・県地区主催研修会への積極的参加
 ・スポーツ少年団指導者研修会
 ・高齢者スポーツ指導者研修会
 ・社会体育有志指導者資格講習会

○町営総合運動場の整備
 ・グラウンドの整備
 ・バックネットの修理
 ・ナイター修理
 ・危険防止
 ○スポーツ障害保険・一日障害保険加入

○社会体育通信「健康」(毎月)の全戸配布
 ○健康づくり年間行事予定表の作成と全戸配布
 ○ニュースポーツ普及をめざした視聴覚自作教材の作成と映写会の実施
 ○町広報「きりしま」への計画的投稿と担当者会との連携
 ○カウンター利用による写真・ニュース等の掲示

○社会体育通信「健康」(毎月)の全戸配布
 ○健康づくり年間行事予定表の作成と全戸配布
 ○ニュースポーツ普及をめざした視聴覚自作教材の作成と映写会の実施
 ○町広報「きりしま」への計画的投稿と担当者会との連携
 ○カウンター利用による写真・ニュース等の掲示

公民館活動

本町の公民館活動は、昭和四十六年（一九七二）に中央公民館が建設されるまで

は、学校や個人住宅を利用しながら、映画会、講演会、料理実習など限られた範囲の講座がもたれていたが、社会教育施設の整備に伴い学習活動の意欲も高まってきた。中央から遠い地域の人たちのために、永水（昭和五十三年）、田口（昭和五十四年）両地区に、地域公民館が



夢おこし学級

建設されたこと

により、全町民に広く生涯学習参加への施設が整い、本格的な公民館活動が軌道に乗りはじめた。

ハ学級・講座の開設

中央公民館・地域公民館の学級講座は、地域

住民の希望を取り入れながら募集し、原則として応募数一〇人以上を公民館学級として開設、年一〇回分の講師謝金を町で二年間負担する。その後は、自主学級として公民館施設を利用しながらグループで運営している。初めは募集しても学級生が集まらず、電話その他の方法で声かけしてどうにか学級を編成するという時期もあったが、最近では、住民の生涯学習への意欲が高まり、皮工芸・水墨画・絵画グループなど増え、町文化協会員の増加にもつながっている。さらに霧島をテーマにした八号洋画展の企画開催、夢おこし学級など、生涯学習の成果に結びついているものもある。平成元年度は手話・園芸・薬草と健康・コーラス・クラフト・幼児リトミック・詩舞・実年学級・読書教室（七教室）・少年少女合唱隊・親子英会話、ほかに自主講座（二二）が開設されている。このような社会教育施設の整備に伴う学習意欲の高まりの成果として、平成元年度に全国優良公民館として文部大臣表彰も受けた。

読書活動

青少年育成の一環として、「心に火をたく献本運動」が始められたのは昭和四十二年（一九六七）であったが、町民の読書活動にまで広



読書教室（緑陰読書風景）

がらないうちに立ち消えとなっていました。昭和五十八年（一九八三）、子供読書教室と大田小・大田幼稚園親子読書教室四教室を中央公民館に開設し、幼児期からの読書会が始められた。集まって読むことよりも、粘土や色紙、人形劇などをおして、物語の世界に遊ぶことに重点がおかれた。昭和五十九年から霧島小に親子読書教室と子供読書教室、昭和六十年

室、昭和六十年永水小全児童による読書教室が発足した。平成元年現在、七教室が活発な読書活動が続いている。平成二年に県内優良読書グループとして大田小の親子読書教室が表彰を受

けた。読書教室の母親の有志によって誕生したのが人形劇団「あざみ」で、独特な文化活動として注目されている。

昭和五十八年（一九八三）から再び献本運動を展開、平成元年までの六年間に三八八一冊が寄せられている。図書室も年ごとに充実し、蔵書冊数八一四八冊（うち児童図書四一七〇冊）、個人貸し出し、年間冊数一万四五九三冊と県内でも上位を占めている。

なお、読書教室生の発表の場とちびっ子たちのためのお話の広場として、「ちびっ子天国」が開催されている（五十八年から）。

自治公民館活動 終戦前から、小組合とか部落会と呼ばれていた地域の集落は、昭和四十

年代になって自治公民館という名称に変わった。高度経済成長は、物の豊かさと安定した経済生活はもたらしたが、反面、青少年の非行や地域の連帯感の欠如など問題は山積した。失われつつある心の豊かさを取り戻そうと、自治公民館活動が重視された。

昭和五十四年、県の重点施策の一つとして、サンライフ運動が提唱され、自治公民館や地区公民館を対象に地

は四一の自治公民館があり、その規模は戸数一〇戸程度から一五〇戸ぐらいまでさまざまである。しかし、公民館長は行政の駐在員を兼ねているので、一方で自治公民館としての活動機能の薄れた地域もあり、大きな課題となっている。駅前自治公民館が連帯感づくりに成功したのは全員参加を考えた組織づくりが大きな要因になっていると思われる。さらに青年部から公民館活動の運営に

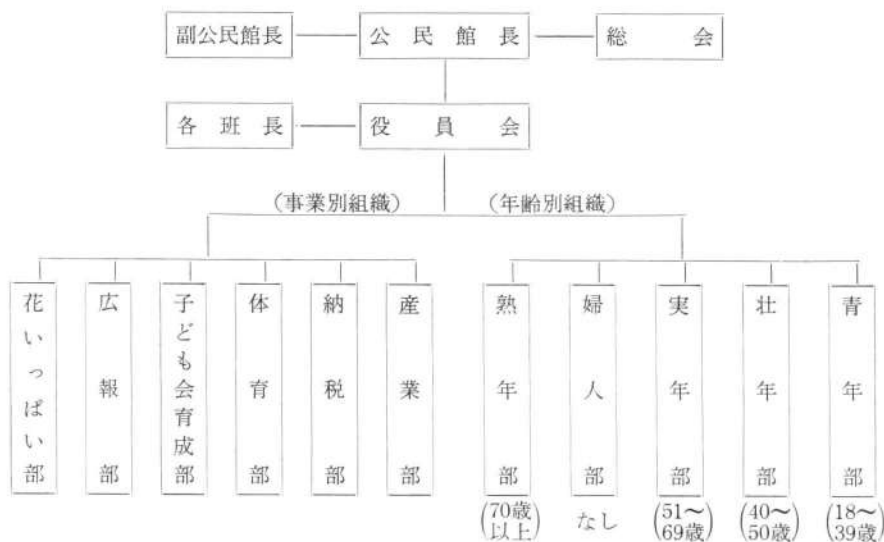


駅前自治公民館

域連帯感づくり活動が始まった。本町では、駅前自治公民館がモデル指定を受けて組織づくりから始め、サライフ十周年には知事の特別表彰を受けるなどの成果をあげた。

現在、本町に

駅前自治公民館組織機構



参加していることも後継者の養成につながっているのではないだろうか。

地区公民館活動

前述のように、戸数の少ない自治公民館では十分な活動ができないので、町内を一一地区に分けて地区公民館と呼称する組織ができた。しかし、まだ十分な活動までには至っていない。

国際交流事業

鹿児島県では、「南の起点づくり」を目標に、外国青少年、婦人などとの交流や各種海外派遣事業などが進められている。特に、歴史的にも文化的にも深いつながりをもつ中国や韓国、東南アジア諸国などへの積極的な働きかけは、目覚ましいものがある。

本町では、九州青年の船への参加が昭和五十一年（一九七六）から毎年一人の研修生をおくり、現在までに八人の青年が参加してきた。文化面では、昭和五十一年に始まった霧島国際音楽祭の開催地として広く知られるようになっていく（六三六ページ参照）。

昭和六十一年度は、青年教室生と青年団員合同の海外研修会を実施、二二人が韓国を訪問して、韓国青年との

交歓会をもった。また「コグマーからいも交流」（八月）、「からいも交流」（同六十二年三月）も始められ、平成二年度までに一六人の外国青年が本町を訪れ、生活を共にしながら多くの団体と交流の機会をもち、住民が国際的な感覚を身につける場ともなっている。

△からいも交流▽ 在日留学生を県下の農・漁・商家に招いて、家族の一員として労働を共にしながら、地域の歴史や文化、生活を理解してもらおうという目的で始められた。昭和五十七年（一九八二）三月から南方圏交流センターの主催事業で毎年実施されている。

この名称の由来は、南方から中国を経て、鹿児島地にかからいもが伝えられ、郷土の食文化に大きく貢献してきた。からいもの歴史は、我々に異文化交流の尊さ、すばらしさを教えてくれる。今、その源点にかえって「第二のからいも」は何かを考え、実践活動をおして国際化時代の人づくり、地域づくりを目指そうと、この名が付けられた。

本町では、昭和六十二年（一九八七）三月、マレーシア、香港、カナダの各出身の大学留学生を受け入れた。

受け入れ家庭との交流を中心に、地域の青年、児童生

徒、婦人会、老人会、ライオンズクラブなどとの交流も活発に行われ、国際色豊かな地域づくりに寄与している。平成二年度までに、六か国・一人の留学生が、本町を訪れている。

ハコグマーからいも交流Ⅴ 「コグマー」は、韓国語で「からいも」のことであるところから、韓国の大学生（韓国中央大学日本語学科）を招いて、からいも交流と同じ目的、方法で行う交流である。

本町では、昭和六十一年八月二日から一二日間の日程で第一回が実施された。三人の韓国大学生は、地域の生活、文化、歴史などを学び、また地域の人々は、「薩摩焼」や「高麗菓子」（これがし）などのように我々の生活の一部ともなっているものをおして、歴史的・文化的つながりを掘り起こす機会をもったのである。これまでに、五人（二回）の韓国青年を本町に招き、小学校での楽しい交歓会や地域の高齢者クラブとの交流などが行われてきた。今後、さらに交流を深める中で我が町をよく知り、歴史や文化、自然などを次の世代へ引き継いでいかなければならない。

△国際交流フェスティバルⅤ この事業は、国際交流村



国際交流フェスティバル

ことを目的としている。

第一回は、平成元年八月四日から三日間の日程で行われた（一二か国の三四人が、町内の二七家族に宿泊）。平成二年は二八人が本町を訪れ、小さな町の大きな交流は、着実に根を下ろしつつある。

第一回国際交流フェスティバル日程

一日目 八月四日（金）

整備事業、国際交流のまち推進プロジェクトなどに取り組んでいる本町において、霧島国際音楽祭の時期に在県留学生、音楽祭参加者などと町民との交流行事を開催することにより、地域の活性化を図る

対面式（中央公民館）。霧島国際音楽祭ファ

ミリコンサート鑑賞

二日目 八月五日（土）

中岳―新燃岳へ登山。バーベキューパーティ

ー（緑の村）。六月灯（霧島神宮）

三日目 八月六日（日）

国際交流会議（中央公民館）。閉会式（中央

公民館）

〈海外青年招致事業〉（AET事業） 平成元年八月一

日から二年間の計画で、英国青年ハーカー・リチャード氏を採用した。霧島中学校での学習のほか、一般町民とのふれあいの場として次の教室が開設されている。

親子英会話教室 一五二人（二年間）

町役場職員の英会話教室 毎週月曜、金曜の一六時から一

七時観光関係従業者への英会話教室毎月二回

〈霧島国際音楽祭〉 世界的ヴァイオリニスト、ゲルハ

ルト・ボッセ教授の提唱によって、昭和五十五年夏、国

際音楽祭・講習会として第一回が開催された。第一回は

霧島高原ユースホステルで行われたが、第二回から霧島

町・牧園町の後援を得て両町で行われるようになった。

さらに第三回からオペラ部門の設置により、主催の母体

を霧島国際音楽祭実行委員会（朝比奈隆委員長）に移し、

音楽祭の充実が図られた。第六回（昭和六十年）から、

母体は財団法人ジェスク音楽文化振興会（野村良雄理事

長）に移り、昭和六十二年の第八回から鹿児島との共

催によって、その目的とする音楽文化の振興、音楽の青

少年への普及、音楽をととしての国際交流を一層実りあ

るものにしようと努力されている。なお、昭和六十一年

（第七回）から霧島町・牧園町・鹿児島市に友の会発

足、霧島の恵まれた大自然の中で奏でられる感動の音楽

祭を育て、文化性豊かな観光地づくりと、町民の情操の

かん養を目的としている。友の会費は年間五〇〇〇円

で、全部の演奏を無料で聴くことができる。平成二年度

は友の会員一〇二人であった。

文化活動

霧島をテーマにした八号洋画展 霧島連

山は火口湖、赤松林、すすき野、溪流・

滝など四季折々のすばらしい景観に恵まれている。この

自然や風俗を、多くの人々に描いてもらい、芸術に接す

る機会をつくり、文化性豊かな観光地づくりを目的とし

て始められた。趣味として絵を描いている人たちも、気

軽に参加できるように八号に限定したユニークな公募展



霧島をテーマとした8号洋画展会場



洋画展会場風景

である。

第一回 平成元年十月、場所、みどりの村。応募出品
点数三〇七点。入場者数二五〇四人。

第二回 平成二年十月、場所、みどりの村。応募出品
点数五二七点。入場者数二四七七人。

第三回 平成三年十月、場所、みどりの村。応募出品
点数四九三点。入場者数二七四一人。

この洋画展は、「霧島をテーマにした八号洋画展実行

委員会」で企画されたものである。

入賞区分 霧島大賞 五万円、霧島町長賞 三万円、

観光協会長賞 二万円、その他の賞 七

点、奨励賞 一二点。

△霧島国際音楽祭▽ 昭和五十五年にはじまり、平成二
年度で一一回を数え、本町の文化活動の中核として定着
している（国際交流事業参照）。

△音楽愛好会「風」▽ 霧島町・牧園町の若者たちの

呼びかけにより、音楽愛好グループ
が、昭和六十三年に結成した。鹿児島
市などから演奏家を招いて星空コンサ
ートや、夕焼コンサートなどを開催し
たり、霧島国際音楽祭との交流演奏会
など、霧島の自然とけあった音の世
界を楽しもうと、輪を広げている。

△霧島少年少女合唱隊▽ 町内小学校
三年生以上の児童を対象に、社会教育
指導員長野彰氏の指導のもと平成元年
に結成された。町内行事への出演や他
町との交流会、霧島国際音楽祭への参

加など幅広く活躍している。

二 社会教育関係団体

文化協会

本町の文化協会は、昭和四十九年（一九七四）十一月加盟団体一〇グループ（会員数二二〇人）で設立され、町社会教育課と共催で第一



霧島少年少女合唱隊

回文化祭を開催した。文化祭はその後昭和五十八年（一九八三）からは、文化協会独自の中心事業として現在に至っている。

中央公民館や地区公民館を拠点として、多くの教室が開設されているが、二か年修了後は、文化協会へ入会し、自主活動が続けている。文化協会加盟団体は次の二八団体である。

霧島町書道会

しづ柿会霧島支部

藤間流藤峰会

華聖会

絵画教室

あみもの同好会

柿木あみもの教室

白土焼

池坊生花グループ

史談会

詩吟クラブ

民謡クラブ

田口民謡クラブ

新村ピアノ教室

霧島短歌会

霧島俳句会

えびす料理グループ

霧島茶道会

和華奈会

人形劇団「あざみ」

大正琴同好会

水墨画同好会

春日流寿宗会

クラフト手芸同好会

田口唱歌グループ

創作手芸MIKIDOL

霧島民謡同好会

着付教室グループ碧

文化協会は、文化祭主催のほかに、始良地区芸術祭へ

の参加や霧島国際音楽祭友の会の会員募集、霧島をテーマにした八号洋画展の後援など、本町の文化振興に積極的に参加している。

体育協会

昭和三十一年（一九五六）四月、霧島町体育協会が発足して、各種のスポーツ同好会が生まれて体協に加入、社会体育行事と連動して、本町のスポーツは年ごとに活発になってきた。体協は社会体育行事と連動して各種のスポーツ競技大会にも積極



文化祭風景



文化祭の作品展示会場

的に参加している。現在体協の加入団体は次のとおりである。

バレーボール協会 卓球部 ゲート
 ボール協会 庭球部 弓道部 野球部
 ソフトボール連盟 陸上部 剣道部
 蹴球部

P T A 連 絡 協 議 会 霧島町の大正末期から昭和初期にかけて、学

校と在学児童家庭とを結ぶものに「父兄会」と呼ばれる組織があった。これは、運動場の整備や学校林の下払いなどの奉仕作業がおもな活動で、学校教

育の援助団体であった。また、特筆すべき行事として、各集落ごとに集落担当の先生の指導で学芸会が催されていた。学芸会は、公会堂や青年舎が会場となり、集落内の父母と学校の先生とが歓談する唯一の場となっていた。現在の P T A の要素を多分に持っていたようである。

戦後、第一次アメリカ教育使節団（昭和二十一年）の勧奨によって、従来の学校後援会に代わって新しく「P T A」が誕生した。昭和二十二年（一九四七）、文部省は

アメリカ民間情報教育局（CIE）の協力によって「父母と先生の会——教育民主化の手引」を、翌年には「父母と先生の会参考規約」を作成配布してPTAの普及を図った。

本町では、これまでの「父兄会」をそのまま「PTA」として名称替えし、活動内容も奉仕作業と財政援助が主体であった。以前と変わったことは、授業参観が行われるようになったことである。しかし、昭和二〇年代の参観日は、ほとんどの保護者が無関心で、一人二人の出席がある程度であった。各学校単位のPTAは、昭和二十五年（一九五〇）八月、霧島町PTA連絡協議会を結成し、研修の場を広げた活動内容を盛りこんだ。同三十九年（一九六四）、大田小学校に家庭教育学級が開設されたのを皮切りに、PTA活動も充実したものとなっていた。平成元年には県PTA連絡協議会主催の「県PTA活動研究公開」が、霧島中学校で開催され、「町PTA活動研究大会」も、平成二年度で一〇回目を終えている。現在のPTA会員数は次のとおりである。

町PTA連絡協議会会員数 六八五人

内訳 大田小学校PTA 二八六

永水小学校PTA 五六人
霧島小学校PTA 一一七人
霧島中学校PTA 一二六人

高校生クラブ

昭和四十八年（一九七三）子供たちの指導者育成のためのジュニアリーダークラブが結成された。構成メンバーは、地域の青年のリーダーをはじめ大学生、高校生などであった。青少年の健全育成を目標に、地域活動を通じて、組織的な社会参加とボランティア精神の養成のための地道な努力が続けられた。

特に高校生については、本町に高校がないためにほとんどが町外の一五校を超える高校に分散通学していたために、その実態把握も難しく通学時間帯や部活動もまちまちで、共通の連帯感が育ちにくい環境にあった。しかしながらジュニアリーダークラブに参加した高校生を中核に、高校生クラブ結成の機運が高まり、県下では他の市町村に先がけて、昭和四十三年霧島町高校生会として結成された。

さらに高校生父母の会も生まれて、高校生の非行防止や親子で共通の対話の場をもったり、通学の起点である

第四章 教育・文化

平成二年度現在（高校一年～三年生まで）在学、学校別、地区別生徒数

計	地区別																			高校別		
	甲陵高校	鹿児島理容学校(専)	鹿兒島東高校	都城西高校	鹿兒島高校	鹿兒島実業高校	鹿兒島純心高校	鹿兒島高校	城西高校	宮之城農業高校	鹿屋農業高校	都城高校	加治木女子高	鹿兒島工專	牧園高校	加治木工業高校	加治木工業高校	隼人工業高校	国分実業高校	国分高校		
一〇												一				一	四	四		霧島地区		
二四						一				一	一	二	二	一			二	三	四	七	伊野地区	
一九		一		一		一	一							一			二	二	五	五	田口地区	
一九					二								二					一	五	九	待世地区	
一七							一						一		一			一	四	九	中央地区	
一〇								一				二	二							四	一	湯之宮地区
二四				一					三			二				一	三	三	四	七	大川地区	
八			一									三								一	三	向田地区
二〇	一		一										一	二	一		二		一〇	二	永水地区	
一五一	一	一	二	二	二	一	三	一	三	一	一	一	九	三	一	一	一〇	四	一	四	三	計

霧島神宮駅の自転車置場の清掃や霧島神宮の美化活動、また年に一回の中央公民館周辺の草刈り作業の奉仕作業を親子で実施したりして社会参加への努力が続けられている。平成二年度の生徒数、通学学校別は前表のとおりである。

子ども会 連絡協議会 戦後の日本の経済復興が軌道に乗りはじめた、昭和三十年前半から家庭での共稼

ぎなども増えはじめ、青少年の非行化が社会問題として台頭してきた。町では関係機関と連絡を取り、いち早く青少年育成問題と取り組んできたが、その経過は次のとおりである。

昭和三十四年（一九五九）青少年問題協議会の発足と同時に各集落単位の子ども会が結成された。

昭和三十六年（一九六一）町内各学校長会で「モデル子ども会」をつくることを、青少年問題協議会に諮ったところ、同協議会で決議された七集落（永池・田口・駅前・北永野田・大窪・豊後迫・入水）が指定された。

昭和三十七年五月の子ども会総会において、育成者も含めた「町子ども連絡協議会」が結成され、組織的な活動が始まった。昭和四十二年からの町主催の「歩こう会

平成二年度 霧島町子ども連絡協議会事業

月	町行事	日	県・地区
四	一六 町子連総会 二一 インリーダー研修会	二三	地区子連理事会
五		二二	地区子連総会・研修会
六		一三	県子連総会・育成者大会
七	二二 インリーダーチャレン 二四 ジャンプ研修会 二九 ふるさと美化活動 育成会長会 空き缶募金箱の作成・配布	一六 二一 二二 二三	地区子連理事会 地区中・高校生ボランティア研修会 青少年ふるさとセミナー
八		六	地区子ども会大会
九		六	地区子連・市町子連と 県子連との合同研修会
一〇	育成会長会		
一一	二二 霧島神宮ほぜ祭		
一二	二六 ふるさとめぐり歩こう 会 （独居老人宅慰問・清掃 （福祉もちつきの日）		
一	二七 子ども会大会 鬼火たきの実施 空き缶募金箱の回収	二〇 三〇	青少年ふるさとのつどい 地区子連理事会

への参加・ふるさと美化活動・インリーダー研修会・ジュニアリーダー研修会など、育成者も含めて青少年育成に真剣に取り組んできた。

昭和五十一年から尾久町との交歓行事も始まり、交互に子どもたちのホームステイが続けられている。昭和五十一年から始めた「空きかん募金運動」（空き缶を各家庭に配り、年末に集める募金活動）は大きな成果を挙げ、同六十三年には社会福祉法人中央共同募金会の表彰を受けた。

昭和五十四年、霧島町ジュニアリーダークラブに対し、全国子ども会連合会長の表彰状が贈られた。

平成二年度の霧島町子ども連絡協議会の事業計画は前表のとおりである。

その他の団体

△スポーツ少年団▽ 昭和四十三年に大窪スポーツ少年団が初めて結成され

た。その後、町内各地に生まれて現在次のような団体が活動している。一〇団体、団員（一九九人）、指導者（三十六人）

空手道クラブ・霧島剣道クラブ・みやま剣道クラブ・

永水サッカークラブ・霧島神宮ソフトクラブ

大田サッカークラブ・大田少女サッカークラブ
永水少女バレークラブ・霧島少女バレークラブ

戦後の婦人会

戦時中の婦人会活動は、戦争遂行のための国の主導によって、本来の目標は大きくゆがめられ、命令に従うだけの集団活動でしかなかった。出征兵士を送り、英霊を迎え、慰問袋の発送、駐屯隊への食糧調達などと家庭を顧みる間もないほどに多忙なものであった。敗戦によって、これまでの婦人会は活動目標や存在価値を失い、組織が崩壊したところが多かった。本町においても、敗戦と同時に婦人会活動は消滅して、主婦にとっては食糧難を乗り切るための必死の毎日が続いた。

戦後の混乱期も過ぎようとしていた昭和二十五年（一九五〇）、大田校区婦人会が発足、大田校区婦人学級が開設されて戦後の婦人活動の第一歩となった。

昭和二十六年（一九五一）に霧島町婦人会も新しい規約に基づく、活動目標、事業を次のとおり定めて、活動をはじめた。

第三条（目的）この会は会員の教養を高め、会員相互の協力と親睦を図り、以て婦人会の健全な発達と郷土発展

に寄与することを目的とする。

第四条（事業）この会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 一 婦人会の運営上必要な情報の交換・調査研究・外部団体との連絡協調に関すること。
- 二 会員の資質向上のための、講習会・諸学級の開設ならびにそのあつせんをすること。
- 三 地域社会に対する奉仕活動に関すること。
- 四 青少年の育成指導に関すること。
- 五 その他目的達成に必要なこと。

婦人会活動の主なものを列記すると、次のようである。

昭和二十六年（一九五二）戦後の耐乏生活を反映して結婚式の簡素化に取り組む。要旨は、次のとおり。結婚式は両親・兄弟・おじ・おばまでとする。料理は、吸い物を含めて五品以内、新郎・新婦は平服を原則とし、頭飾りはやめる。披露宴は新郎・新婦の同窓生・友人の代表者のみとし、祝金は一〇〇円以内、料理は吸い物を含めて三品以内とする。嫁入り道具は鏡台・針箱各一、柳行李一の程度を越えないこと、結婚式に要する予算額の一割を貯金して新生活のスタートを切ること。



文化祭がらくた市

質向上の三点を強調、具体的には予算生活設計、台所の改善、栄養改善などを採り上げて活動を強力に推進した。

昭和二十六年（一九五二）九月十五日、第一回敬老の日制定に伴い婦人会も町と共催で参加する。

昭和二十八年（一九五三）町婦人会の主催による第一回合同七草祝が開催された。

昭和二十七年（一九五二）講和記念として、貯蓄による「村おこし」をスロ―ガンに各校区ごとに婦人貯蓄組合が発足する。当時の椎原多喜婦人会長は、生活改善、家庭経済の自立、指導者の資



婦人ナイター運動会

昭和三十五年（一九六〇）指定婦人学級が八か所に開設された。永池・祓谷・伊田・堀之内・向田・笹之段・永野田で生け花・料理・編物、手芸などが内容であった。昭和三十六年（一九六一）六月、入水婦人学級に文部省委嘱指定学級が開設された。学習は、家庭生活・社会生活・生産消費生活に関するもの。時間は四〇時間以上。昭和四十年、猪子石婦人学級、昭和四十一年度、霧島校区婦人学

級が委嘱された。同年から昭和四十八年まで、町の社会教育大会で青年と婦人の体験や意見発表などを通じて婦人の社会参加が目立つようになった。

昭和五十一年（一九七六）婦

人会と青年団、子供会で福祉餅つき大会をして、高齢独居者と九〇歳以上の高齢者、重度心身障害者などに配られている。また婦人ナイター運動会が始まったのもこの年であり、現在も継続されている。このころから寝たきり高齢者へのオムツを贈る活動も始まったが、現在は紙オムツの時代になり、これをポロ回収事業として、リサイクル活動につなげて婦人会の活動資金の一部に充てている。

昭和五十四年には世界の不幸な子供への募金活動に参加したり、昭和五十六年からは、愛の声かけ運動として八〇歳以上の高齢者の誕生日に、はがきで声かけをする運動も始めた。また、昭和三十年代から、結核予防婦人会・成人病予防婦人会の組織にも加入し家庭の健康管理の担い手として、あるいは、家庭教育セミナーを開催して青少年育成の場を設けて活動してきた。このように婦人会は常に社会福祉事業と直結し、地域になくはない婦人としての役割をしっかりと踏まえながら、現在に至っている。

歴代婦人会長名

椎原 多喜	昭和二十五〇	永田のり子	同四十八年度
中村 正野	同 二十八年度	鶴田 節子	同四十九年度
中村 文子	同 二十九年度	逆瀬川昌子	同 五十〇
有村フミ子	同 三十一年度	吉松 博子	同五十二年度
中村 文子	同 三十二年	武藤 初子	同五十三年度
中神チクエ	同 三十四年度	森田 昌子	同 五十四〇
吉永千鶴子	同 三十五年度	近藤 律子	同 五十六年度
西田ナミエ	同 三十六年度	同 五十七〇	
福岡 秀子	同 三十七年度	六十二年度	
同 三十八〇		新村 久子	同 六十二〇
池田 梅子	同 四十五年度	平成二年度	
同 四十六年度		木野田恵美子	平成三年度
木野田恵美子	同 四十七年度		

青年 団

郷中のあらゆる方面に活動していた二才^{にせ}中は、明治三十二年（一八九九）ころか

ら青年会と呼ぶようになり、年齢も一五歳から三五歳ぐらいまでとなった。大正時代になって、名称を青年団と改め、地域・校区・村・郡・県と統一した組織ができた（三九六ページ「近代の社会教育」参照）。

昭和二年（一九二七）には、各校区ごとに処女会も組

織され、修養会を開いたり、炊事講習会・漬物講習会・洗濯講習会など生活改善にも取り組まれていた。毎月一回、月夜を利用して学校に集合し、研修会を開いたことなどが、昭和九年発行された『東襲山郷土史』に記されている。太平洋戦争ばっ発により青年たちも、戦地や軍需工場へと配属され、国民挙げて戦時態勢がとられた。

終戦後の青年団は、これまでと違い、加入も脱退も自由な民主団体として組織された。終戦後一〇年間ぐらいは、戦場から、あるいは都会地から帰郷した青年男女の数が多く、青年団活動も活発な時代である。各地域ごとに青年団が組織され、最も多い時は団員数が二〇〇人を超えた。同二十六年には、婦人会と合同で結婚の簡素化運動に取り組み、「貯蓄で村づくり」をモットーに貯蓄推進活動を進めたのもこのころで、同三十年まで続けられている。昭和十七年、教育委員会・社会教育委員会設置とともに、各校区ごとに青年学級が開設され、研修や村づくり運動などの推進母体として、青年団の力が大きく評価された。霧島村第一回青年学級体育大会が、同二十九年十月に開催され、前年、募集によってでき上がっ

た村青年団歌が高らかに合唱されたと伝えられている。平成二年、労働大臣に就任された小里貞利氏は、昭和二十八年に青年団長を務め、同二十九年から三十年まで、鹿児島県青年団協議会の会長に就任し、青年団員のリーダーとして活躍されたことは、県内に広く知られている。

しかし、昭和四十年代に入ると、青年の生活状況の变化（町外通勤者や都会での就労者の増加）や、青年団の役員を引き受ける人が少なくなるなどで、団活動が振るわなくなり、同四十二年、町青年団はついに姿を消してしまった。青年団がなくなつてからは、結婚した人たちが青年同志会という会をつくつて動いていたが、これらの人たちが社会教育係（当時社会教育課はなかった）と協力して、同四十六年前半は準備を進め、後半、町青年団復活に成功した。団員募集のため各家庭を訪問して歩いたり、町内病院の看護婦さんへの呼びかけなどを熱心に続け、同四十八年には、青年団活動の起爆剤として第一回夏まつり（盆踊り大会）が開催された。この夏まつりは、町青年団が衰退の時期にも中断されることなく、八月の最大のイベントとして現在に至っている。



青年祭の準備

また、同年には、子供たちの指導、育成に当たるジュニアリーダークラブが、大学生・高校生を含めてつくられたが、この結成に奔走したのも青年同志会の人たちであった。このようにして活発となつていった青年団も、後継者不足によって再び挫折したのである（同五十三年）。昭和五十五年、始良郡内の栗野町青年団のバレーボールが、県代表として全国青年大会に出場したが、これが

導火線となつて霧島町青年バレーボール同好会のメンバーが動き始めた。前記のジュニアリーダークラブで活動していた青年たちが主軸になつたのである。好きなことを自由にする会にしよう、名称も



子どもたちに牛乳パック利用のハガキ作り指導

化、広報各部の役員を二人ずつにするということも決められた。この年は、行事の面でも大きく発展した年で、「実行委員制度」を取り入れ、団員一人ひとりが企画から参加して、団員主役の行事が催されるようになった。この実行委員制度は、町青年団の大きな特色となっている。もう一つの特徴は文化活動である。

昭和五十九年三月開催された地区青協主催の青年祭で、中国残留孤児問題をテーマにした演劇「時のわすれも

「青年同好会」として、同五十六年四月再出発することとなった。会員数四一人（男子二六人、女子一五人）で、レクリエーションやあそびの行事のほか、清掃活動（このうち全町行事となる）や花園造りなど奉仕活動も積極的に進められた。青年同好会発足三年目の同五十八年三月、同好会の名称では活動の幅が狭く解釈されるとして、他町村と同じ青年団に改名することを決議し、名実共に青年団として再建された。この総会で、体育、文

の」が最優秀賞を受賞、これが契機になって文化活動・学習活動が活発となった。従来のスポーツとレク志向型の青年団活動から、文化活動活発化の方向へと変わったのである。同五十九年度には、アフリカ難民問題を採用上げた「家族の中のアフリカ」、同六十年度は、現在の青年の生活問題を扱った「明日をみつめて」で、常に今日の問題をテーマにした創作劇に取り組んできた（同六十三年度「ひとみ」、平成元年度「歩いて行こう」、同二

年度「かくれんぼ」。このころから、外部の研修行事に積極的に参加し、広く学ぶ研修活動が強められた。「広げよう仲間はぐくもう友情」をスローガンに、キャッチフレーズ「パワーアップ青年団」を決め、第一回青年祭も開催された。

同六十年度は、「たかが青年団されど青年団」のスローガンのもとに、機関紙「たかちほ」を月一回全戸配布。議会、婦人会、老人クラブなどとの語る会も開催。

国際青年年を記念する行事として、町教委社会教育課の協力を得て青年教室を開設、この教室生で「一日二〇〇円節約して海外旅行をしよう」と企画、翌六十一年九月に四泊五日の韓国研修旅行を行った（参加者二人）。

毎年、演劇を通じての仲間づくりのほか、町民のために、東京の劇団を招いてすぐれた演劇鑑賞の場をつくったり、同六十三年には、九州青年祭も本町緑の村で開かれた。現在会員三二人で、会員不足の問題はかかえながらも、鹿児島県を代表する青年団活動として多方面から注目されている。

歴代町青年団長

後藤 昭 昭和二十六～

二十七年

小里 貞利	同	二十八年	下登 千吉	同	四十六
上村 明	同	二十九			
		三十年	松元 孝一	同	五十一
本田 行	同	三十一	中村 辰郎	同	五十五
川野 勇	同	三十二			五十七
本田 行	同	三十三	七夕 功	同	五十八
小川 了	同	三十四			五十九
小園 雅二	同	三十五	福元 博己	同	六十
竹下 春夫	同	三十六	永田 孝信	同	六十一
		三十七			六十二
柳 務幸	同	三十八	福丸 和広	同	六十三
中馬 昭二	同	三十九			平成元
松元 保	同	四十	上小園拓也	同	二

三 社会教育施設

本町における社会教育に関する諸施設についてまとめると、次のようになる。

中央公民館

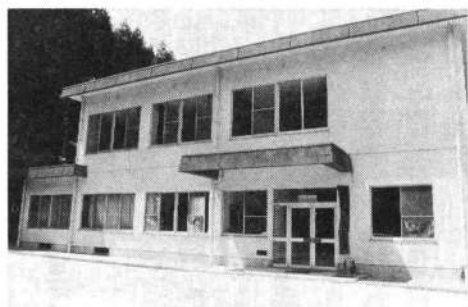
中央公民館の館長は、昭和五十八年まで中央地区公民館長に委嘱していたが、翌年以降は社会教育課長の兼務となった。開館日は、月・



中央公民館



田口地域公民館



永水地域公民館

区公民館長に連絡する。

町立歴史 民俗資料館

昭和五十四年（一九七九）の開館から三年間は、一人の常勤者がおかれていたが、その後、社会教育課の兼務となっている。入館料は、高校生以上一〇〇円、小中学生五〇円（二〇人以上は二割引）である。

資料館収蔵品数（寄託品を含む）は次のとおり。

石器類九点、古文書類四四点、古書九八点、武具類四点、生活用具二六五点、衣類二五点、勲章類一九点、

水・金曜日の八時三〇分から一七時まで、火・木・土曜日は八時三〇分から二〇時までとなっている。昭和六十三年度から三人の夜間管理指導員を委嘱して、一七時から二〇時まで夜間の管理に当たっている（祝祭日・月曜日を除く）。冷暖房使用料金は、一時間七〇〇円である。

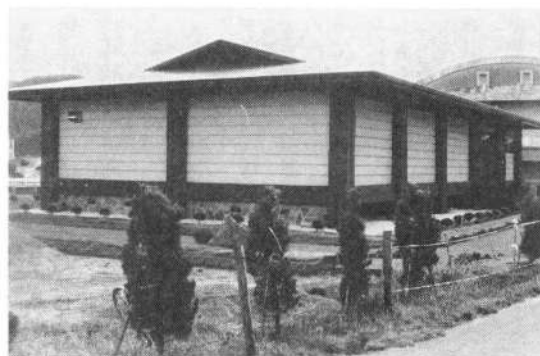
△田口地区および永水地区公民館▽両地区公民館共町の条例公民館である。原則として当該地区公民館長に管理を依頼しているが、使用する時は社会教育課または地

第四章 教育・文化

社会教育施設の概要

(単位：㎡，千円)

施設の名称	設置年度	敷地面積	建物面積	構 造	総工事費	所 在 地	電 話
霧島町中央公民館	昭和46	4,497	742	鉄筋2階		霧島町田口 148-3	(0995) 57-0316
永水地域公民館	53	6,413	432	鉄骨2階	35,900	霧島町永水 3821	(0995) 57-2361
田口地域公民館	54	1,280	485	鉄骨2階	40,500	霧島町田口 850	(0995) 57-1259
霧島町立 歴史民俗資料館	54	1,968	285.7	鉄筋平屋	37,060	霧島町田口 148-1	
霧島町営 総合運動場	49	13,589				霧島町田口 3071	
町営総合運動場 夜間照明施設	52		被照明面 積 3,180	照明柱 5基	23,450	〃	
簡易夜間照明施設 (旧東中)	54	3,500		照明柱 4基			
同 (永水)	56			照明柱 2基			
霧島町弓道場	55		36.43	鉄骨 スレート		霧島町田口 148-3	

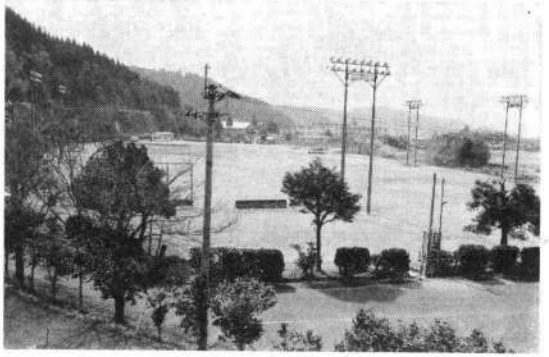


歴史民俗資料館

農具類四二点、書画写真一八点、合計五六四点。

**霧島町営
総合運動場** 総合運動場を利用する場合は、原則として一週間前に許可を受けてなければなら

ない。使用料は、町民および学校、町内民主団体の主催するスポーツ行事については無料である。ただし、ナイター照明料は有料である。



霧島町営総合運動場

霧島町弓道場

弓道場の使用料は、町内居住者は無料である。町外は大学生、社会人は一〇〇円、中高生は五〇円である。

第五章 観 光

第一節 霧島屋久国立公園

一 概 況

「瓊々杵尊^{にぎはひみこと}、天孫降臨の際、天の浮橋より霧の海を見下し給うた。すると島の如く見えるところがあつた。そこで天のにぎ矛でかき探り、そこにお降りになった」という神話に始まる私たちの郷土霧島。確かな文献に乏しく、古い歴史は不明確であるが、神話にまつわる国誕生の地として、古い時代から人びとに知られてきた。戦後歴史の再検討とともに、神話や肇国物語^{ちやうこくものがたり}は否定され、いつしか忘れられてきた現在では、そのまま信じる者はいないだろうけれども、我々郷土人にとっては、その信び

よう性は別として、心の故郷として、神話伝説に、ある郷愁を感じ続けてきたのである。

霧島は、わが国最南端の高峰であり、洋上はるか見渡せる位置にあることから考えて、有史以前、南方民族が北上移住してきた時の目標になったであろうことは推量される。そして、まず、その周辺、いわゆる薩摩、大隅の地に定着し、ここを拠点として、原住狩猟民族を圧迫し、あるいは同化し、さらに中央へと広がっていったことであろう。神話は神話として考えても、原始時代、南方民族が移住してきた時の上陸地は薩摩、大隅と考えるのもよいだろう。

国立公園霧島は、東西二二結、南北一八結、面積は約二万一千五百〇〇^〇に及び、鹿児島県牧園町・栗野町・吉松町・霧島町、宮崎県はえびの市・高原町・小林市・都城市などの一部にわたる地域である。主峰高千穂峯を中心

として二三座の典型的な群状火山と、俗に四十八池といわれる大小無数の湖沼があり、コニーデ型、ホマーテ型、トロイデ型と、いろいろな火山がそびえ立つ中に、満々と蒼色あおの水をたたえる湖沼の美が、さらに神秘さを加え、緑林・アカマツ林の中から白い湯煙りたなびく情景など、その恵まれた景観、自然美は世界でもまれであるという。

霧島が国立公園の指定を受けたのは昭和九年（一九三四）で、阿蘇・雲仙と共に、わが国で一番最初のことである。その恵まれた自然の景観だけでなく、ミヤマキリシマ・カイドウ・イワカガミなどの高山植物から珍しい昆虫類・鳥類など貴重な学術資料も豊富である。

国民の余暇の増大やレジャーブームの波に乗って、霧島地区周辺にも多くの旅館・ホテルなどの宿泊施設も整備され、本町にも年間約一五〇万人前後の旅行者が訪れているが、その約二割の三〇万人ほどが宿泊または休憩にこれらの施設を利用している。また、経済の好調な兆しの中でリゾートブームの波に乗り、町内数か所には分譲別荘地もでき、急速なテンポでリゾート化が進んでいる。

さらに、観光の発展に道路整備は不可欠なものであるが、昭和三十三年、道路公団による有料道路が開設、続いて三十六年、南北両霧島を結ぶ霧島スカイラインが完工し、霧島からえびのを経て小林へと通じるようになってから、霧島の観光が一気に活気づいた。有料道路として二十余年の間親しまれてきた霧島スカイラインも昭和五十九年十二月、利用者の強い要望にこたえる形で無料化され、現在は県道となっている。

この治道周辺は、春から夏にかけては新緑やミヤマキリシマの花、秋は鮮やかな紅葉、冬は白銀の世界と四季それぞれの景色が楽しめる場所でもある。次に、観光面からみた霧島の自然や施設等を紹介する。

二 主要山岳

御 鉢

（標高一四〇八メートル）

旧名火常峰、火口のようにすが飯びつのようなかっこうをしているので御鉢と呼びはじめたのだろうか。通常は高千穂河原から登る。山体は美しい円錐状をなし、高千穂峯の寄生火山である。円錐丘の外側は急

な斜面で、ここをまっすぐ登る。中腹以上は草木がなく、赤褐色の火山礫と軽石とが硬く固まっている。頂上には直径約五〇〇呎、深さ一〇〇呎に及ぶ大噴火口があり、いまもかすかに白いガスが立ち昇るのが見られる。

内壁は整然と熔岩の層が見られ、成層火山であることがわかる。古くから新燃岳と交互に噴火活動した歴史があり、最近では、大正三年（一九一四）一月にかなり激しい爆発があった。火口の底には水をたたえ、これが太陽の光を反射して五色に輝くさまは壮観である。高千穂に登るにはこの火口壁をたどって行く。幅二、三呎の左右切り立った絶壁で、俗に「馬の背越え」と呼ばれる難所で、風雪の強い日はとても登れない。

高千穂峯 （標高一五七四呎）

霧島東火山群の主峰である。馬の背越えをたどり終わり、高千穂峰へかかる間に一つの浅い谷がある。「千里が谷」とか、別名「天の河原」と呼んでいる。正しくは「背門丘」で、約一四〇〇年前、霧島神宮が建立せられたと伝えられているが詳細は不明である。古くは瀬多尾権現宮（霧島神宮の前身）があった場所で、御鉢の噴火のためふもとの方に遷座されたと伝えら

れている。山型は尖頭円錐形で山貌の秀麗なことは霧島火山群中第一である。山壁に草木はなく、赤褐色の地肌が、朝日・夕日を受けて、一日七色に変化する美しさは抜群である。斜面は急で、火山礫と軽石が固まっている。天孫降臨の神話で名高い山頂に「天の逆矛」が建てられている。この逆矛については諸説があつて明らかでないが、とにかく古いものであることには間違いない。

中 岳 （標高一三四五呎）

御鉢の北西につりがね状をなしている。高千穂河原から西へ登る。頂上に浅い火口があり、傾斜はゆるやかで、ミヤマキリシマの群生地として知られている。霧島火山群の中で最も新しい火山で、登山も容易、特にミヤマキリシマの咲く時期は登山客にぎわう。

新 燃 岳 （標高一四二〇・八呎）

中岳の北西に位置し、ホマーテ型火山である（山の底面積に比べて高さが低い山のこと）。頂上には、ほぼ円形の火口（直径七五〇呎、深さ一八〇呎）を有し、火口底は直径一五〇呎、深さ三〇呎の火口湖となり、紺青の水面はとても美しい。山頂南側に熔岩の突

出があり、遠くからラクダの背のこぶのように見える。中岳と同じくミヤマキリシマの群生地、登山者も多い。昭和三十四年（一九五九）二月十七日、北西部外壁から噴火し、現在でもわずかにガス状の噴煙が見られる。この火山も中岳と同じく、霧島火山群では新しい火山といわれている。

夷 守 岳

（ひなもり 岳 標高一三四四呎）

霧島連山の東方宮崎県内にあり、本町からその姿は見えないが、全山森林に覆われていて、小林方面から見た濃い緑の円錐形の姿は美しい。「真崎の名山」として古くから山容の美しさを知られた山であるが、登るには難渋な山といわれている。『日本書紀』の景行天皇の項に、「筑紫の国を巡行せられたときに、夷守岳にこられた」と記録に残っている。

獅子戸 岳

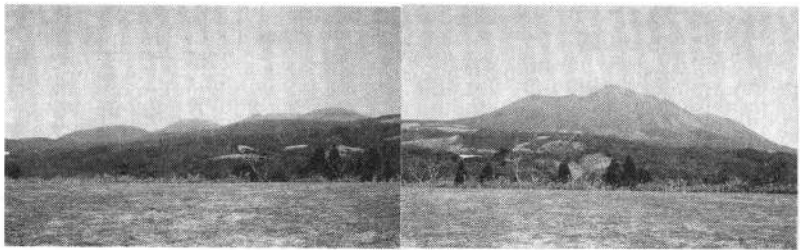
（標高一四二八・四呎）

新燃岳と韓国岳の中間に位置し、灌木が一面に生い茂っている。

韓 国 岳

（標高一七〇〇・三呎）

霧島火山群中の最高峰である。えびの丘と白鳥山と大浪火山のすそ野の寄り合った位置にそびえ



霧 島 連 山

見せられた」という神話説もある。ミヤマキリシマ・ヒカゲノカズラ・イワカガミなどの植物が見られ、登山者

ている。地質学上旧霧島熔岩に属し、霧島火山群中もっとも古い山である。植物の分布はふもとの方から、高木の森林帯・灌木帯・草木帯となり、頂上に近づくにつれて、火山礫が露出している。頂上は直径九〇〇呎のほぼ円型の火口があり、内壁は懸崖絶壁で西側が爆裂火口のため破壊されている。韓国岳からの展望はすばらしい。特に新燃岳を前景に御鉢・高千穂を望む景観は、よく写真にされている。韓国とは「韓国の見岳」の略称といわれ、「皇孫がはるかに韓国を望

も多い。西北に下ったところに、えびの高原がある。

大浪池

(標高一四一一・九呎)

韓国岳の南西に位置し、その東のふもとが霧島町と牧園町の境になっている。頂上にある直径約一詰の火口湖は紺青の水をたたえた大浪池を形成している。山の斜面はなだらかで、霧島―えびの高原スカイラインが七合目まで開通しているので、容易に登山ができる。

硫黄山

(標高一三二〇呎)

これも宮崎県側えびのにあるが、特色のある火山である。韓国岳の西方えびの高原にあり、高さ約五〇呎の台地である。山の半面が黄色の硫黄の華でいろどられ、硫化水素や亜硫酸ガスを盛んに噴出している。硫黄採取製練所があった時代もある。この山は、別名「賽^{さい}の河原」とも呼ばれ、石を積み重ねた大小の塔が見られ、仏教三途^{さんず}の河をしのばせている。

烏帽子岳

(標高九八七・九呎)

霧島神宮から牧園町に通ずる国道二二三号線の右側にあり、国道はこの山の中腹を走っていることになる。山容は烏帽子によく似て円錐形をしていると

ころから名付けられたものであろう。頂上には火口の跡は明らかでないが、湯之野温泉などの地獄にその名残が見られる。霧島連山には多くの山があるが、霧島山群を縦走するコースとしては、大浪池・韓国岳・獅子戸岳・新燃岳・中岳・高千穂峰の山々である。

三湖沼

古くから霧島四十八池といわれ、霧島連山の周辺を含めて、大小さまざまな湖沼が点在している。そのほとんどが火口湖である。

大浪池

(水面標高一二三九呎)

規模の大きさ、四季それぞれに変わる美しい景観、底知れぬ神秘的なたたずまい、どの一つをとっても霧島国立公園中第一位を誇っている。標高一四一二呎の山頂から約二〇〇呎の火口底に、周囲四詰、水深一二呎の火口湖となっている。うっそうとした森林は、芽吹きの新緑から、緑したたる夏、湖面に映える秋の紅葉、厳しい枯れ木立の景観、四季折々にその美しさをもし出している。特に夏は湖面からしみわたる冷気、鳥



大 浪 池

禽のさえすりなど暑さを忘れさせる別世界である。昔からこの池には神竜が棲むといわれ、お浪という娘の投身が蛇身になったという伝説がある。

プ場も開設されてにぎわっている。性空上人が護摩を焚いて修行した跡と伝えられる護摩壇は、この火口壁の中腹に沿った崖の上にある。東霧島神社からの眺望が美しい。

大 幡 池

(水面標高一二三四メートル)

宮崎県側にあり、新燃岳と夷守岳を結んだ線上の大幡山と丸岡山の中間に位置し、周囲は森林に覆われ、この湖の水量は年間を通じて増減することはないといわれている。昔このふもとの農民は大幡池に雨乞いをすれば必ずかなえられたと言い伝えられている。

六 観 音 池

(水面標高一一九八メートル)

えびの高原・白鳥火山の東にある火口湖で御池とも呼ばれている。周囲はそっくり森林に囲まれ、直径五〇〇メートルの湖水の蒼さと空の高さが映えて湖面に落とす湖畔の影は絵のように美しい。昔、性空上人がこの池のほとりで読経苦行を続けていた時、日本武尊の化身が白鳥となって現れたとの因縁により、白鳥権現を建てたといわれる。現在、湖のほとりに、馬頭観音があり、その付近には、樹齢数百年を経たと思われる杉の巨木が数本立っている。

御 池

(水面標高三〇五メートル)

霧島火山湖としては最も東側に位置し、宮崎県側にある低平な山頂の火口湖で、直径一キロ、水深一〇〇メートル、うっそうとした広葉樹林に囲まれ、毎年九月初ころからたくさん渡り鳥が来て冬を過ごしている。湖畔には、淡水魚料理や貸しボートなどもあり、国道二二川号線に沿っているので観光客も多い。夏は湖辺のキャン

不 動 池

(水面標高一二二八[㍉])

えびの高原、硫黄山のすぐ北西にある。えびの高原ターミナルから小林方面へ通ずる道路わきにあり、バスの上からも美しい湖面を見ることができ。直径約一五〇[㍉]ではほぼ円形をしている。

白 紫 池

(水面標高一二七二[㍉])

えびの高原にあって白鳥火山の火口湖である。水深は極めて浅く、深いところでも約五〇[㍉]から一[㍉]くらいで、冬は結氷するので、霧島火口湖中ただ一つの天然スケート場として県内外からのスケート愛好者が押しかけている。

四 滝

千 里 が 滝

千里が滝は落差七五[㍉]で霧島山中の滝で最も高い滝である。滝への経路は霧島

神宮の境内から湯之野に通ずる旧道が残っているが、現在は高千穂河原に行く道路から左に折れ、約二[㍉]のところに左に下りて発電所の取水口から下方に下りると滝に出あう。滝つぼから五〇[㍉]下方に霧島第二発電所があ



千里が滝

り、ここからは天気の良い日は滝の飛瀑に七色の虹の神秘的な輝きが見られ、また秋、断崖の紅葉はすばらしい景観である。

両 滝

新湯から新燃岳に通ずる林道を約四[㍉]登ったところにある。二つの滝が向かい合っていることから、この名で呼ばれている。両滝の周辺地域は、霧島で一番紅葉の美しいところで、紅葉の中を流れ落ちるさまは、まさに一幅の絵である。

千 滝

霧島神宮の西北約一[㍉]ぐらいのところにある。高千穂河原から流れる小川が霧島川に落ちる寸前、浸食作用によって形づくられた高さ五〇[㍉]に及ぶ大絶壁を流れ落ちる。現在この川は伏流水と

なり、ふだん水はない。滝は絶壁の中腹から、伏流地下水が絹糸のように、数十条も落ちて美しい。高千穂河原に雨が多い時は、この川に沿ってこの絶壁を一気に流れ落ち、二層の滝となってその様は壮観である。

第二節 公共観光施設

霧島町観 光案内所

平成二年にオープン。延べ床面積一八〇平方尺、総工費（付帯工事を含む）約三一〇〇万円で、霧島神宮大鳥居西側に建設された。神殿



霧島町観光案内所

造りの木造建築で、展示室・休憩室もあり、年間およそ一五〇万人の観光客が訪れる霧島の観光案内所として、ふさわしい施設であり、今後の活用と役割が期待される。

高千穂河原休 憩所・駐車場

えび野―高千穂河原、霧島神宮―高千穂河原の二つの有料道路の開通により、自家用車・観光バス、登山客が急増し、休憩所・駐車場が必要になった。県観光課では、昭和三十三年（一九五八）三月にバス五〇〇台収容の駐車場と簡易休憩所・水道施設などを二〇〇万円かけて整備した。現在では県道に移管され無料になっている。

町営国民宿 舎みやま荘

昭和三十三年ころから、一般大衆に安易に旅行を楽しんでもらうために、厚生省

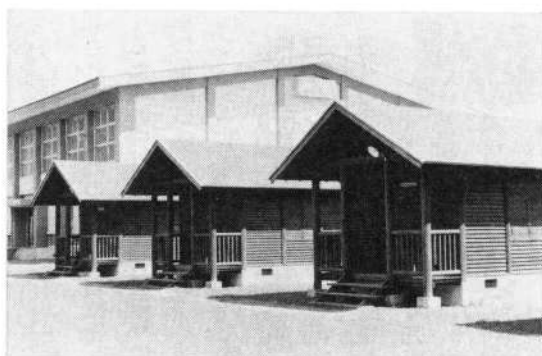
の指導により、市町村営による国民宿舎経営が提唱された。本町でも、同三十四年、湯之野の国有林を厚生省に所管を移し、敷地を借用して建設に着手した。厚生年金還元融資二〇〇〇万円を受け、付帯工事を含めて、二八九三万円を投じて、翌三十五年に完成した。鉄筋コンクリート造り二階建て、建物面積一二五五平方メートル。八畳六室・六畳日本間六室・パンクスタイル六畳六室、四八畳の大広間、食堂八〇平方メートル、男女別浴場・家族風呂一。収容人員七四人、団体客一五〇人 possible の収容能力をもっていた。この経営は、当所は林田産交に経営を委託していたが、三十六年から町の直営に切り替えられた。開設

以来六年間に宿泊延べ人員は五万人に達し、東南アジア、アメリカなど外人客もかなり宿泊している。しかし年を経るごとに宿泊客は減少してきた。霧島神宮温泉郷の宿泊施設の整備とともに、自家用車の普及による日帰りの増加などが原因であろう。五十二年には民営に切り替えられ現在に至っている。

緑の村

（自然環境活用センター）

昭和五十六年にオープン。広さ約三ヘクタールを緑に囲まれた中に、体育館、



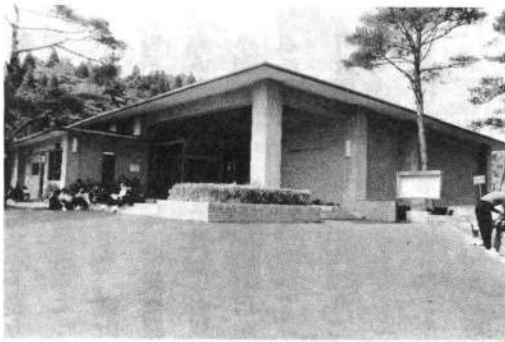
緑の村

テニスコート、緑地広場があり、スポーツ、レクリエーションの施設として町内外の利用者が多い。同六十一年には体育館西側にパンガロー四棟が建てられ、サークル、子ども会活

動の合宿にも利用されている。また温泉も引かれているので、バンガロー利用者に大変喜ばれている。体育館はスポーツ行事のほか、多人数の会合、行事の場として、また平成元年度から開催された「霧島をテーマにした八号洋画展」会場として町外の人にも広く知られるようになった。

高千穂河原ビジターセンター

昭和五十九年四月オープンした高千穂河原ビジターセンターは、県に



高千穂河原ビジターセンター



県営高千穂河原キャンプ場

って建設されたが、オープンと同時に管理運営は町に委託された。霧島の自然や動植物などをわかりやすく紹介するための野鳥類の実物展示や霧島火山の生い立ち、四季の景観の移り変わりなど、パネルや写真により展示されている。年間一〇万人近い入館者がある。

県営高千穂河原キャンプ場

昭和六十二年、県営として、一部がオープン。平成二年（一九九〇）現在で二五基のテントサイトが設置され、鉄筋コンクリート造

りの管理棟も完成。キャンプ場として施設も整備されてきた。最終的には約一〇〇基のテント群が整備される予定で、五〇〇人程度の収容能力を目指している。開村期間は、七月一日から八月三十一日までとなっているが、学校、サークル、子ども会、その他各種団体にぎわっている。

神話の里公園

本町は、南九州唯一の霊峰高千穂峯を中心に

神秘的な山岳を有し、天孫降臨の地・日本発祥の地として神話が語り継がれてい

る。この「神話の里」にふさわしいふるさとづくりを計画、昭和六十三年度から着工した。平成三年七月開園となったが、なお、多くの施設が建設中である。利用については、次のようになっている。

・営業時間 九時～一七時

料 金 表

スーパースライダー		ちびっこゲレンデ	
1回券	200円	1時間	300円
11回券	2,000円	半日	1,000円
グラススキー（セット）		神話館	
半日 大人	2,000円	映像展示室 1回	100円
半日 中学生以下	1,000円	研修室 全日	1,500円
全日 大人	3,000円	半日	1,000円
全日 中学生以下	1,500円	リフト	
コース使用料		1回券	200円
半日 大人	1,000円	11回券	2,000円
半日 中学生以下	500円	全日券	3,500円
全日 大人	1,500円	イベント広場	
全日 中学生以下	800円	野外ステージ	
		全日	3,000円
		半日	1,500円
		広場のみ	無料
※「半日」とは、午前9時から午後1時まで、または午後1時から午後5時までのいずれかをいい、「全日」とは、午前9時から午後5時までをいいます。			

・定休日 毎週月曜日

湯之野温泉

（霧島町湯之野）

古くから霧島山の中腹にあるひなびた温泉で、町内唯一の湯治場であったが、昭和三十八年、町営給湯事業により湯治場はなくなって、現在は町営給湯泉源となっている。

研 修 館

昭和十五年（一九四〇）紀元二千六百年祭に当たって肇国の地として霧島地区が選ばれ、国民心身鍛練の場として、全国各地から浄財を集め、国家の力により霧島研修館として建設された。敷地八八〇〇平方メートル、建坪約八三〇平方メートルの神

殿造りの建物であった。八四畳の大広間、四〇畳の遙拝殿が設けられていた。当時は日中戦争から太平洋戦争に突入しようとする非常事態を迎えていたころであり、「八紘（はつこう）一宇」の国家スローガンをもって、国民教育に当たる中堅指導層を対象とした修養道場であった。

受講者は、下を流れる霧島川の清流で水垢離（みそぎ）をとり、遙拝殿で国運の弥栄（いよさか）を祈っては、講演に耳を傾け、心身の錬磨に励んだ。

終戦を迎えた後は、県の管理に移り、県および各市町

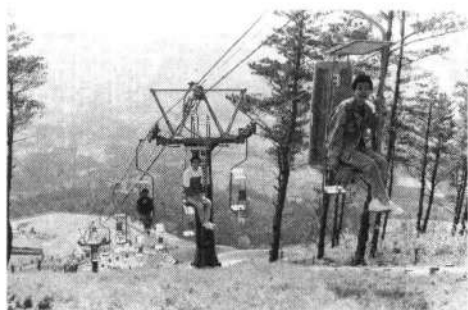
ふるさとづくり事業計画(概要)

(事業費単位…百万円)

事業名	事業概要	事業の内容	実施 団体名	事業費			
				合計	元	二	三
神話の里公園整備事業	国づくり神話の拠点施設	神話資料展示館 九三・三七㎡	霧島町		○	○	○
○ふるさとづくり 特別対策事業	霧島神宮より西へ二km国道 二二三号線沿いの丘陵地に 公園三七haを整備し、神話 館、イベント広場、スポー ツレクリエーション施設、 花木園を整備する。	農畜産物処理加工施設 五〇〇㎡ 体験農園 一五、〇〇〇㎡ 神話の森 一六、〇〇〇㎡ 花木園(憩の園) 三、五〇〇㎡ 駐車場 五、二〇〇㎡ 用地所得 五、二〇〇㎡ 電気工、汚水処理施設、 植栽工etc 小計			○	○	○
○単独事業		天孫降臨スーパースラ イダー(リフト、ケー ブル、管理棟含む) 三九二m 天孫降臨草スキー場 人工二五m×四〇m、 草一五m×六〇〇m 給水施設 五〇〇㎡ 幻想館(プラネタリウム) 五〇〇㎡ 電気工、汚水処理施設 etcクラブハウス外 (二六・九㎡)			○	○	○
○地域づくり 推進事業		イベント広場 五、〇〇〇㎡	霧島町		○	○	○
財 源 内 訳	国際交流村整備事業 ○国県補助事業	天恵の自然を活かしてイ ベント広場を整備し交流の 促進と地域活性化を図る。	合計	二、一〇七	一四二	六七	五九四
				九九	三八	四七	八九五
				一、七三	三三	四四	六六八
				二〇〇	八〇	七四	一〇〇
				四六三	三六	一〇	一二七

村各種団体の会議の場となり、新しい民主主義を学ぶ研修の場として生まれ変わった。

昭和二十五年（一九五〇）ごろから、日本経済の成長により、国民生活が安定してくると観光行政がさげばれ、側面的な推進母体として、国立公園霧島観光協会が設立された。県から研修館の貸与を受けて、管理人をおき、諸会合のほか広く一般観光客宿泊施設として活用されるようになった。昭和三十三年払い下げが認められ町有施設となり、全国的な観光ブームの中で宿泊施設や道



リフト



スーパースライダー



神話館

路環境の整備などが着々と進められていった。特に日本道路公団営による小林―高千穂河原の有料道路の開通により、霧島を訪れる観光客は三〇万―五〇万人に達した。さらに学生や青少年層を対象に、ワンダーフォーゲル、ユースホステルホステラーの制度により町内でも一、二の施設が指定を受け、これを迎え入れるようになった。湯之野に町営の国民宿舎が開設されたのもこのころである。このような時に、南日本観光株式会社から、研修館の払い下げを請願してきた。町としては、ようや

く県から払い下げを受けたものであるため、原則として受け入れることはできなかったが、強い要請に、町議会でも慎重審議の結果、霧島神宮門前町一帯の発展のためには、専門業者による施設面の整備充実と観光の活性化を優先すべきとの結論により承認された。このような経過を経て国・県・町とそれぞれの時代に、必要な目的に利用されてきた研修館は、昭和三十六年四月から、南日本観光株式会社の所有となり、近代的に改装され、霧島山荘として発足したが、現在は所有者が変わり、当時の神殿造りの面影を残して霧島民芸村として観光の一役をになっている。

町内宿泊施設

霧島神宮温泉郷は、神宮参拝者や登山者の宿泊所として発展してきたが、観光道路の開通によって観光客も増え、施設の内容も変わってきている。古くからの旅館と、観光客の増加に伴い建設された大型ホテルとが、調和を保ちながら営業しているのが本町の特色といえる。また、昭和六十年ごろからペンションの数も増え、景勝の地の利をいかした岩風呂なども完備され、若者によく利用されている。次に、町内宿泊施設と収容人員を表にまとめた。

町内宿泊施設と収容能力

ホテル・旅館（霧島神宮温泉郷）

ホテル・旅館名、TEL 市外局番（0995）	洋	和	広 間	収 容 人 員	
				一 般	団 体
蓬泉館 ☎57-0007	22	18	1	40	50
みずほ荘 ☎57-0028		10		30	40
旅館福代 ☎57-0035		5		20	25
ふじさき旅館 ☎57-0113		7	1	20	30
霧島ロイヤルホテル ☎57-2111		132	4		1,000
民営国民宿舎みやま荘 ☎57-0057		16	1	75	75
あかまつ荘 ☎57-1101		16	1	60	100
きりしま大霧荘 ☎57-1141	4	45	4	150	200
きりしま荘 ☎57-0225				30	
霧島公園ホテル ☎57-1171		18	1	60	80
霧島山麓荘 ☎57-1161		30	2	120	130
霧島ハイツ ☎57-1121		49	3	215	250
霧島荘 ☎57-1575		7	1	22	30

ペンション・民宿

ペンション名, TEL 市外局番 (0995)	洋	和	広 間	収 容 人 員	
				一 般	団 体
霧島コテージ ☎57-2933	4	棟 (貸別荘)		15	20
ペンション鹿鳴館 ☎(0992)22-3532	7	1 貸別荘 6	1	16	65
ペンションフェザン ☎57-1227	9	2		30	30
ペンション遊鹿霧 ☎57-2727	8	1		31	31
ペンションあこがれ ☎57-2121	8	3	1	35	35
異 人 館 ☎57-3220	9	3		35	35
Y・H霧島登山口温泉 ☎57-1188		8		32	35
民宿登山口温泉 ☎57-0127		8		32	35
民宿きりしま清水荘 ☎57-0111		5		16	30
民宿高千穂 ☎57-0608	4	4	1	28	28

第三節 国立公園霧島町観光協会

町の観光協会は、昭和二十五年（一九五〇）、国立公園霧島観光協会の名称で存在していた。その当時は研修館の借り受けや霧島神宮駅前に観光案内所を設置するなど、観光協会としての役割をこなしてきたが、分村後は一時、活動が停滞していた。昭和三十三年ごろになると全国的な旅行ブームが起り、本町も観光立村の方向を決定し、村議会も観光特別委員会を設置した。この委員会とは別に地区代表として、霧島地区・駅前地区から五人の代表（吉松行道・浜崎辰夫・鳥丸正兵衛・真名子政春・州崎雅充の五氏）を選出して、商工観光業者に呼びかけ、研修館で設立総会を開催した。

これまでの協賛会を発展的に解散し、新たに「国立公園霧島観光協会」として発足した。当時の会員は、村三役・村議会議員を含めて八五人であった。翌昭和三十三年には町制施行、新たに町役場各課長も特別会員として参加し、会員も増加した。観光立町を目指す観光行政の

側面的な協力機関として大きな役割を果たしている。なお、霧島山ろくの各市町村と連携して、観光の総合的な開発を進める目的で、同三十九年には「霧島地区観光協会連絡協議会」を結成した。参加町村は、牧園・横川・栗野・吉松・溝辺・隼人・国分・霧島の一市七町である。なお、同四十年度の観光協会の予算は四四万八二七七円であった。

その後、昭和四十七年、鹿児島空港の開設、九州高速自動車の延長などにより、県外からの観光客も増加し、ロイヤルホテルをはじめ、各種のペンションなど受け入れ態勢も整備されてきた。また観光協会の事業内容も年ごとに充実し、平成元年度における観光協会の予算および事業並びに会員数は次のとおりである。

平成元年度予算 八八二万四九九九円

平成元年度の主な事業内容

霧島川へのヤマメの稚魚放流 韓国エージェンツ歓迎
レセプション ミス霧島の選出 旅館従業員の英会話教室
観光事業従事者の研修会（史跡研修・講演） 観光誘致宣伝隊の派遣（熊本県・福岡方面） おじゃんせ市 きりしまの四季写真コンテストの開催 香港報道関

係者の歓迎セレモニー ふるさと列車（東京周辺居住者親子との交流）、その他霧島国際音楽祭 霧島をテーマにした八号洋画展 霧島神宮各例祭への協賛など、幅広い活動を展開している。

観光協会員名簿

第一種（ホテル・旅館・民宿関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一 大和ハウス工業㈱	霧島ロイヤルホテル	霧島ロイヤルホテル
二 県農協福祉事業㈱	きりしま大霧荘	霧島山麓荘
三 山下建設㈱	山下 貞光	鹿児島レクリエーションセンター霧島ハイッ
四 勸日本勤労福祉センター	細見 元	あかまつ荘
五 あかまつ荘	浜崎 辰天	霧島公園ホテル
六 有限会社霧島公園ホテル	吉松 博子	ペンションフェザン
七 霧島高原ニュータウン	領家 寿夫	民営国民宿舎みやま荘
八 民営国民宿舎みやま荘	吉元 善吉	蓬泉館
九 蓬泉館	吉松 よしえ	民宿きりしま清水荘
一〇 きりしま 清水荘	池田 明	きりしま荘
一一 日本たばこ共済組合		きりしま荘
一二 登山口荘	上村 哲也	民宿 登山口温泉

第二種（霧島神宮前通り会関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一三 南日本銀行健康保険組合保養所	木村 信祐	霧島荘
一四 みずほ荘	場集田 玲子	みずほ荘
一五 ふくよ旅館	迫田 ハルエ	ふくよ旅館
一六 ふじさき旅館	藤崎 暉夫	ふじさき旅館
一七 民宿 高千穂	湯ノ辰寿々子	民宿 高千穂
一八 ペンション 遊鹿霧	田川 康信	ペンション 遊鹿霧
一九 ペンション あこがれ	米沢 シズエ	ペンション あこがれ
二〇 ペンション 鹿鳴館	満田 博文	ペンション 鹿鳴館

事業所名	代表者名	屋号
一 神宮前茶屋	吉富 久雄	神宮前茶屋
二 すぎやま	杉山 広次	おみやげと食事の店 すぎやま
三 宮前商店	浜崎 道夫	宮前商店
四 味楽	中津 健太郎	神宮御縁そば 味楽
五 崎山商店	崎山 達夫	崎山商店
六 江口家	江口 敬光	江口家
七 松永写真館	松永 浅吉	松永写真館
八 押領司写真館	押領司 シズエ	押領司写真館
九 いろり	平石 昭三	いろり

第三種（交通運輸関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一〇 蛭川商店	蛭川 政義	蛭川商店
一一 神宮前高千穂河原支店	吉富 久雄	高千穂河原吉富商店
一二 有限会社 霧島屋	吉富 久輝	霧島屋

事業所名	代表者名	屋号
一 第一交通株式会社	林 誠秀	第一交通登山口営業所
二 霧島観光タクシー有限公司	浜田 豊	霧島観光タクシー
三 霧島レンタカー		霧島レンタカー

第四種（霧島神宮・農協・その他法人・団体）

事業所名	代表者名	屋号
一 霧島神宮	小久保 光雄	霧島神宮
二 霧島町農業協同組合	新村 俊	霧島町農協
三 高千穂リゾート㈱	田中 正二郎	高千穂カントリー倶楽部
四 大和興産㈱	大和 佑輔	霧島・高千穂リゾートランド現地案内所

第五種（石油販売業関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一 有限会社 西藤石油店	西藤 誠三	西藤石油店
二 有限会社 杉元石油店	武藤 重憲	杉元石油店
三 有限会社 霧島石油	天辰 兼盛	霧島石油
四 有限会社 山崎石油	山崎 恭一	山崎石油

第六種（加工・製造販売業関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一 さつま霧島酒造株式会社 有限会社 高千穂食品工業	栗原 潤吉 古橋 潤一	さつま霧島酒造株式会社 有限会社 高千穂食品工業
二 有限会社 霧島総合観光開発	狩川 公男	有限会社 霧島総合観光開発
三 有限会社 霧島フード株式会社	鳥丸 正勝	霧島フード株式会社

第七種（陶芸関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一 霧生焼窯元	甲斐 幸人	陶苑 きりしま
二 霧島白土焼窯元	成枝 律雄	霧島白土焼
三 田舎のギャラリー 茶房 陶	宮田 明	田舎のギャラリー 茶房 陶

四 霧島陶芸

川越 盛男 霧島陶芸

第八種（霧島神宮駅前通り会関係のもの）

事業所名	代表者名	屋号
一 喜代川食堂	清川 久男	喜代川食堂
二 味鶴寿司	江藤 公生	味鶴寿司
三 上村ストア	上村 幸夫	上村ストア
四 有限会社 吉永商店	吉永 辰雄	有限会社 吉永商店

第九種（第一種から第八種までの会員を除く事業者）

事業所名	代表者名	屋号
一 阿部商店	阿部 純徳	阿部商店
二 浜崎食料品店	浜崎 政義	浜崎食料品店
三 中村米穀店	中村 保	中村米穀店
四 高林商店	高林 義雄	高林商店
五 小川酒店	小川 善武	小川酒店
六 ファミリーレストラン 霧島峠	南郷 益美	ファミリーレストラン 霧島峠
七 霧島製綿所	塩水 房雄	霧島製綿所
八 修行ストア	修行 富重	修行ストア
九 霧島印刷所	洲崎 雅充	霧島印刷所
一〇 木野田観光農園	木野田 光弘	木野田観光農園

第一〇種（この会の目的及び趣旨に賛同する個人（特別会員））

事業所名	代表者名	屋号
一 霧島町	小里 貞利	衆議院議員
二 同	近藤 好夫	霧島町長
三 同	東芦谷 政美	同 助役
四 同	諏訪田 晃	同 収入役
五 同 議会	宮田 揮彦	同 議会議長

第四節 霧島を詠んだ詩歌・紀行文

霧島山の詩歌と紀行文

霧島山は昔から有名な山であり、景観もすぐれているため、多くの文人・有名人が訪れ、すぐれた詩歌・紀行文を残している。

大伴家持

ヒサカタノ アマノトヒラキ タカチホノ

比佐加多能 安麻能刀比良岐 多可智保乃

タケニアモリシ スメロギノ カミノミヨヨリ

多気爾阿毛理之 須壳呂岐能 可未能御代欲利

（以下略）

家持は万葉集に多くの歌を残している歌人であるが、この歌は実地に高千穂を見て歌ったのではなく、古事記、日本書紀の記事を見て歌ったものであろうといわれている（斎藤茂吉）。

藤原俊成

たかちほのくしふる峯ぞあふがるる

天のをづめのはじめと思えば

古今集の歌人。これも実地に見て作ったものではないだ

ろう（斎藤茂吉）。

揖取魚彦

皇神の天降りましける日向なる

高千穂の嶺やまづ霞むらむ

（江戸時代の歌人）

八田知紀

高千穂のすずのしの原うちさやぎ

なびくと見れば^{あはれ}霧ふるなり

高千穂の峯の白雪かつ消えて

たづがね遠く霞むけさかな

大空のみはしとなりて皇神に

仕へまつりし山にやはあらむ

八田知紀は幕末明治の歌人、鹿児島藩士。明治五年宮内

省歌道御用掛。

与謝野鉄幹

大きな霧島山の抱く空に

のこりて白しありあけの月

いただきに天の八重雲降りに降る

なほ高千穂は神の代ならむ

匂へども摘まで来にけり霧島は

草ひと葉も伸しろしめす

与謝野晶子

溪々の湯の霧白しきりしまは

星の生るる境ならまし



与謝野晶子歌碑

夏の夜を朝まで月とともにあり

霧島の山南にひらき

霧島の溪より出づる湯の霧に

曇るけしきのさつま濁かな

与謝野鉄幹・晶子夫妻は昭和四年七月来鹿、県下各地を
回り、歌集「霧島の歌」を刊行し一六三首を収める。

斎藤茂吉

大いなるこのしづけさや高千穂の

峯の続べたるあまつゆふぐれ

高千穂の山のいただきに息づくや

大きな寒きかも天の高山

遠々し薩摩の国に日は入りて

たなびきにけり天のくれなゐ

わだつみの上にただよふおぼほしき

低雲にしも光あるはや

国はらはあやしきまでに光うは



斎藤茂吉歌碑

開聞が岳たち

まちに見ゆ

はるけきや高天の門^{ミカド}

にあはれあはれ

頂あをき温泉

が^な巖

赤松の秀づる山をと

はるとき

松の膚に折々

寄るも

こころして遠きいは

ほの間を行く

山の溪間に霧立ちわたる

水原秋桜子

高千穂の霧来てひびく鶴の声

西遊記 橘 南嶺

天の逆鋒

それより二十丁ものほりて、馬の背越というところにいた。また御鉢めぐりという。このところは、のぼるに、只平らにゆくといえども、左右皆谷にて、剣の刃の上を行くごとく、足のところわずかに馬の背中程なれば馬の背こえとはいふなり。足をこせば栗の如くなる焼いし、左右のたにへなだれ落つ。その行くところの狭きを知るべし。さて左の方は万仞の谷にて、底は雲にて眼及はず。右の谷はふかさ三四丁、あるいは五六丁にて谷にみちて猛火燃えあがる。この馬の背越にかかりて後は、只何となく震動して、地軸只今くだけおれて、此の山微塵に成るように覚ゆ。また腥きいわれぬ気なき来り、あるいは墨の如くなる雲うづまき来り、同行の者さえも一向にかくるることあり。あるいは前後左右に、異形の雲煙あらわれ、鬼神のごとく、仏神のごときもあり。あるいは足下より虹たち上り、横になびきて織りなせる如くなることもあり。又天地ともに金色になることもあり。其の外奇怪ふしぎなかなかいふもおろかなり。静かに是を考えるに、是皆一面の猛火によりて、又陰気も集り来り、その上に雨そそぎ雲霧覆うが故に、水火相激して、震動雷電し、又水火薰蒸によりて、種々の形

霧島川の音と聞ゆる
霧島の神の社にぬかづくと

あかとき闇をいゆく五人

み社の杉の樹立^{こども}にこだまする

暁闇のこほろぎの声

斎藤茂吉は昭和十四年来鹿・霧島・三山陵などを巡り二

百余首の歌を作り、「霧島山」と題して刊行した。

海音寺潮五郎

霧島山は神山なれば谷々に

湧く雲さへも尊とかりけり

若山牧水

有明の月は冴えつつ霧島の

見ゆるなり。又硫黄焰硝の気あるうえ、それに水をそそぎたる故、種々の匂いもいする事なり。

又折々一陣の風吹き来ることあり。此の時は先達教えて急にうつ臥に倒れふさしむ。匍匐にならざれば風のために此の身を取られて、猛火のうちに舞い落つるなり。折ふしは風のために、とらるるものあるゆえに、此の山にては紛失する人多しというなり。

予も殊にこの風を恐れて、少しの風に急にうつ伏しになり、地に取り付きて風にはなたれざるようにせり。しばしにて、又急に風もやみて、天晴ることもあるなり。須臾の変幻定まりあることなし。

南谿は京都の人で医師。豊かな教養人で隨筆集などの著作が多い。行脚僧の姿で全国を旅行した。鹿兒島には天明年間に訪れている。

霧島紀行

坂本竜馬

慶応二年三月十日鹿兒島に至り（中略）此処より又山上にのぼり、あまのさかほこを見んとて、妻と兩人づれにてはるばる上りしに、立花氏（橋）の西遊記程にはなけれども、どうも道ひどく、女の足にはむつかしけれど、とうとう馬の背越までよじのぼり、ここにひとやすみして、又はるばるとのぼり、ついにいただきにのぼり、かの天の逆鉾を見たり。その形は是はたしかに天狗の面なり、両方共に其顔のつくり付けてあるからか（青銅）なり、やれやれと腰をたたいて、遙々のぼりしにかようなる思いもよら

ぬ、げにおかしきかほつきにて天狗の面があり大いに二人が笑いたり。此所に来れば実に高山なれば、目のとどくだけは見えわたり、おしろかりけれども、何分四月まではまだ寒く、風は吹くものからそろそろと下りしなり。なる程霧島山はつつじ一面にはえてつくり立てし如くきれいな

逆鉾は少し動かし見てたれば、よく動くもの、又あまりにも鼻が両方へ高く候まま、兩人が両方より鼻をおさえてエイヤと引ぬき候えば、わずか四五尺許のものにて候間、又々元の通りおさめたり。霧島山より下り、きり島のやしろにまいりしが、是は実に大きな杉の木があり、宮ももの古り、極めてとおとかりし。其所にて一宿夫より霧島の温泉所に至る。

常 峯

新井白石

（原文は漢文）

火井、人之を御池と謂う。既に郷導を失い在る所を知らず。西方烟氣を望みて下る。相距る將に近し。黒煙瀟くが如く、火光炎々朱蛇の走るに似たり。井山背上に在り。周圍五百歩ばかり。深さ測るべからず。其水碧を湛えて白く沸る。烈焰中起声震雷の如し。触れて崖石を撃つ。石勢飛ばんと欲す。衆皆心悸去らんと欲す。去って道井口に懸る。縈回一棧して又外に傾く。下は無際に臨む。目視して脚伸びず。殊に止まるべからず。匍匐して行く。縁を攀ちて下る。井を去って稍遠く、顧みて其隔れるを見る。始めて窮途之嘆を發す。（新井白石は江戸時代中期の学者・政治家）

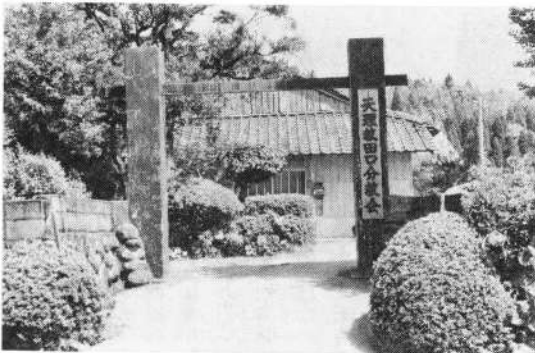
第六章 宗

教（神道については第二編 神話の里 町内の神社参照）

天理教

天保九年（一八三八）十月二十六日「中山みき」が突然神がかりとなって成立した宗教で、「天理てんりおののみこと」

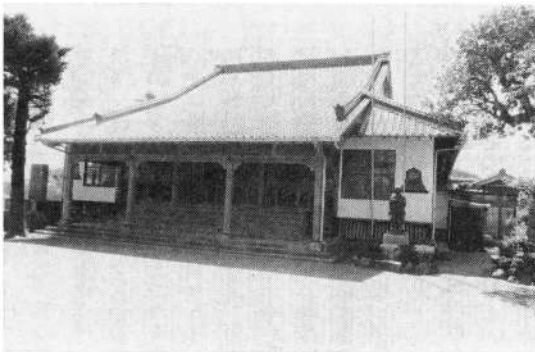
王「尊」を救主としている。今日では、全世界に広まっている。天理教田口分教会は、明治三十四年（一九〇一）三月二十一日創立、現在信者は一〇戸くらいといわれている。



天理教田口分教会

浄土真宗

島津氏の永年にわたる一向宗禁制と、明治初年における廃仏毀釈きせきによって一時仏教は苦境にあったが、この禁令が解けるとともに浄土真宗の信者が増え、浄土真宗本願寺派の寺が鹿児島市に建立された。



龍泉寺

国分に派出所がつかれ、国分の出張所として、明治十八年（一八八五）田口（現在の新村正氏宅前）に説教

所が建てられた。この建物は、後に龍泉寺境内に移され住持の住宅となっている。

田口・堀之内・^{はした}伊田方面には、西目^{にしめ}（日置・川辺方面）からの移住者が多く、これらの人びとの中には、仏教の弾圧を逃れるために移って来た人も多かったため、これらの人たちが中心となって明治四十一年（一九〇八）十一月八日、現在の地に龍泉寺を建てた。信徒は平成二年現在一〇五〇戸、住持は飯屋龍榮氏である。

創価学会

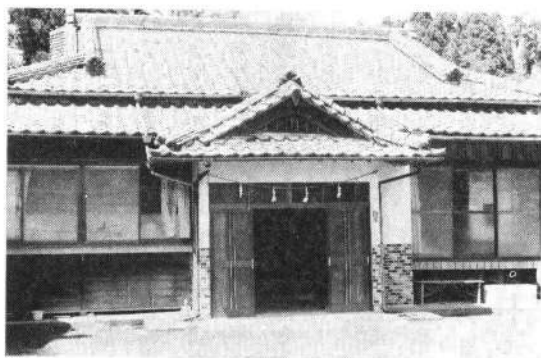
創価学会は、日蓮正宗（総本山静岡富土宮市）の信徒団体である。この日蓮正宗の教義を信奉し、日蓮正宗を外護し、全世界に広め地上から一切の不幸をなくし、平和社会を築きあげようという目的で、昭和五年（一九三〇）十一月に当時の学校教職員を主に「創価教育学会」という名称で発足した。

平成元年現在、国内信徒一〇〇〇万人、海外一一五カ国、一二〇万余人で、人種民族を越えて弘教活動に励んでいる。

町内では、昭和三十三年ごろから広まり、従来の仏教他宗派や神道の人びとから改宗し、現在一三〇戸ぐらいの表面世帯となっている。

大 道 教

教祖中村大茲師が昭和十三年（一九三八）、霧島神宮に参拝の折、天啓を受けて立教し、同二十一年、宗教法人として認可を受けた。主祭神は、瓊々杵尊^{にぎはきのみこと}であり、教義目的は「あらゆる他者との合法たる和合体の実相を説き、あらゆるものとの和合をその根本体として、家庭・社会・国家・世界の平和を図る」とし、信者は全国で五万人、本町では三五戸・約八〇人といわれている。



大道教霧島教会

霧島教会は、全国の信者の神宮参拝時の宿泊、修養と神官との連絡のため、昭和二十五年建立、同三十二年八月、宗教団体として法人認可された。当主は中村修治氏である。

かやかべ

霊峰霧島山ろくの始良郡牧園町・横川町に「かやかべ」と称せられる信仰集団がある。

「かやかべ」は霧島の修験信仰の遺物と思われる信仰集団で、はじめ一向宗が薩藩により長い間禁圧されたために、信徒が地下にもぐり、「かくれ念仏」と呼ばれたが、その信仰集団を「かやかべ」と呼んでいる。

「かやかべ」は牧園中津川の吉永親幸を中心として栄え、有名になった信仰で、口だけで伝えられて、一切筆にできなかったため長い間世間にも伝わらなかった。かやかべの名称は、かやかべの中に像を隠し、ひそかに信者同士集合して信仰をあたためたといわれており、このように隠れ念仏といわれた一向宗信徒であったが、なかには阿弥陀仏を霧島の神におきかえてもよく、阿弥陀即霧島の神を信仰の対象とするものもあった。

「かやかべ」のお伝えでは、霧島の神は阿弥陀仏と同じ居しており、彼らの信仰の道場は、純粹の仏寺を必要としなかった。その信徒は極度に清浄を重んじ、生活の指針として、神棚を大事にし、暦を重視して、護符、特に熊野の護符を重んじている。とりたてて寺や仏像を必要とせず、また教義をはじめ、すべてのことを筆録するこ

とを禁じたことは、一向宗といっても修験道・神道的要素が多いようである。

「かやかべ」の信徒は、霧島の神の信仰に徹しているので、毎年秋旧暦九月十四日に霧島神宮に集団参拝することを習わしとしているが、これは「かやかべ」最大の年中行事でもあり、各信者がそれぞれ三三五五神宮前の旅館に集合してから一緒に打ちそろって参拝しているものである。

「かやかべ」の信者が、日常生活で最も大事なことで守っているのは物忌ものいみである。これは精進といわれて、毎月十一日（蓮如さまの日）、十三日（教祖親幸さまの日）、十六日（御開山上人さまの日）と祖先の日に一切の肉食をつつしみこれらの日には鶏卵すら、なまぐさいものとして食わず、清浄を守り、祈念を強めるために大事なことで、すべての信者がこれを守ってきた。

精進の夜には、信仰の唯一のつどいである「御座」が持たれるが、他の人にさとられないように、夜ひそかに「おや」の家に集まり、お経が読まれたり、念仏を唱えたり、お伝えが語られ、お互いの信仰について話し合い

を行っている。「おや」とは三〇人くらいの単位で、集落を共にするように分けられた「郡」^{こほり}の中心になる家を持っている。

「かやかべ」の信者の数は、昭和三十九年八月の調査によると、三四四戸で、牧園一、横川六のこい（郡）に分かれているが、古くは、四八こい（郡）あった由である。さきの大戦後はおよそ三八〇戸ほどあったといわれており、三十九年八月の調査時の信者数が減少しているのは、社会情勢に応じて、都会へ就職、転出したり、他町村へ転居したためで、霧島町内に転住した人もあり、この人たちも旧暦九月十四日には牧園・横川町の信者に合流して参拝している。

（窪田仲市郎「神話と霧島」を参考に現代表記）

第七章 文化財・史跡・伝説

第一節 文化財

神話で有名な高千穂峯をはじめとして、美しい霧島連山をいただくわが町は、霧島神宮の歴史とともに信仰の地として知られてきた。郷土に残されている文化財は、郷土の風土や文化の特色を具体的に示してくれる貴重な手がかりである。現在の霧島町をはぐくんできた有形無形の文化遺産を失うことなく、次の世代へ引き継いでいかなければならない。

昭和二十五年（一九五〇）、わが国に「文化財保護法」という法律が定められてから、都道府県・市町村でも「文化財保護条例」を定めた。県や町にとって重要なものを、国の指定基準にならってそれぞれの文化財を指定

し、その保護に努めている。

一 国指定重要文化財

建第二二一九号

重要文化財指定書

霧島神宮 三棟

本殿・幣殿・拝殿

本殿 桁行五間 梁間四間 一重 入母屋造 向拝一

間 総銅板葺

幣殿 桁行二間 梁間三間 一重 両下造

拝殿 桁行七間 梁間三間 一重 入母屋造

正面千鳥破風付 向拝一間 総銅板葺

廊下 桁行十間 梁間一間 一重 切妻造 銅板葺

（以下付書）

右を重要文化財に指定する

平成元年五月十九日

文部大臣 西岡武夫 印

霧島神宮の概要

(一) 名称 霧島神宮

(二) 所在地 鹿児島県始良郡霧島町田口二六〇八―五

(三) 重要文化財に指定された物件

- 1 本殿 正徳五年（一七一五）（墨書銘）
- 2 拝殿 安永十年（一七八一）（擬宝珠銘）

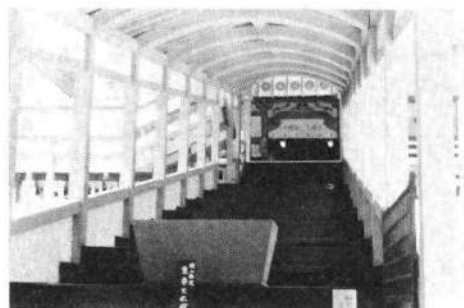
3 勅使殿 一八世紀末の作

(四) 霧島神宮の由来（略）

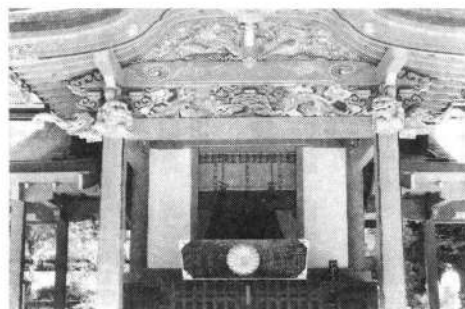
現在の社殿は正徳五年（一七一五）島津吉貴が僧兼
度に命じて造営させたものである。正面五間側面二間
を内陣として、瓊々杵尊以下六尊を安置、極彩色で飾
る。その内陣に前後一間ずつを加え、側面を四間とす
る。背後は宝物を入れる収納庫とし、前方は側面を広
くして前室とする。この前室は県内の神社建築を特徴
づける大切な役割を果たしている。背後中央に扉を設



霧島神宮本殿



霧島神宮登り廊下



霧島神宮拝殿

けることもあって、四方を縁で囲む。向拝柱には竜を巻きつけ瑞雲と共に見事な彫刻である。内陣央扉の両側には阿吽の獅子と牡丹の彫刻をはめ、両側面の壁には、中国の古代物語二十四孝の絵を描く。各柱間上方には墓股・小壁には天女を入れるなどの豪華絢爛たる本殿であり、県内の神社建築において極めて重要な位置を占めている。

拝殿は本殿より少し後れて造営された。横長で後方に正面三間の幣殿が付き本殿とつながる。拝殿は四方に緑を廻し前方に向拝柱を付け、屋根は入母屋造りに正面千鳥破風を構え、千木・勝男木をのせる。内部は広々とした板敷。周囲の部戸を吊りあげると、周囲の樹木につつまれ、自然と一体になる。天井は格天井で、中備の板墓股と柱上の挙鼻とで一段と鮮やかさを供えている。

勅使殿は玄関を飾る風格を示し、入母屋造りの屋根の正面に大きな唐破風を付け、その両側には、正面七間、側面二間の長庁が付く。勅使殿は正方形で板敷、大瓶束と墓股を重ねて格天井を支える。天井の各格には二種類の花文様を交互に入れて飾る。拝殿と勅使殿

の間に登廊を設け、勅使殿から上方に拝殿が見える。地形にうまく合った社殿配置をしている。

(国指定重要文化財指定書及付属文書による)

二 鹿児島県指定無形民俗文化財

第四五号

指定無形民俗文化財証書

名称 霧島神宮のお田植祭り

保護団体(名称) 霧島神宮お田植祭り保存会

(所在地) 始良郡霧島町田口二六〇八番地

の五

鹿児島県文化財保護条例第二十五条の規定に基づき鹿児島県指定無形民俗文化として、平成三年三月二十二日鹿児島県教育委員会により指定されました。

平成三年三月二十二日

鹿児島県教育委員会 教育長 大田 務郎

指定の理由

旧暦二月四日に霧島で奉納される打植祭りで、儀式化され、最後に田の神舞でしめくられる洗練され

た格調高い祭りである。

お田植祭り

毎年旧暦二月四日に行われ、国連の隆昌繁栄と五穀豊穰とを祈る春の祭典である。

お田植祭りは、祭典に引き続き次のような特殊神事が行われる。

中庭の二間四方にしめ縄を張り巡らして、たんぼに見たてた斎場に粃を盛った三方二台、櫛さきの小枝を盛った三方二台を置く。またのある椎か、檜の大枝二本を、青年一〇人ぐらいで左右から持ち、またとまたを掛け合わせて引き裂く。引き裂かれた小枝を斎場内に折り敷き肥料としてまくと、仮面おきなの翁おうな、媼おうなが、仮面を着けた牛を引き出しあやつりながら、おもしろおかしく鋤き耕すしぐさをする。耕し終ると神職四人が天津祝詞を奏する。次に、神職二人が粃を盛った三方各一台ずつを持ってしめ縄の四方から順次入り、種子まきを行う。終ると別の神職二人が櫛の小枝を盛った三方を各一台ずつ持って、同じく四方からこの櫛の小枝を苗に見たてて田植えを行う。これらが終ると田の神が出場、田の神舞でこの祭りはしめくぐられる。これが春の祈年祭である。

霧島神宮御田植祭神舞

旧暦二月四日に御田植祭が行われるが、

この時神宮の社家である児玉、橋元両家の人たちが神舞を奉納するしきたりであり、これは三〇年くらい前から祖先代々引き継がれている。毎年旧二月四日午前十時から祭事が始まり、第一声の太鼓と共に御神牛が「モー」と鳴いて境内を暴れ回り、祭事が終ると同時に御田植の神事が始まる。この時、老農夫婦が四方に張り巡らされたしめ縄の中で神牛に掣すをつけて水田を耕し、神宮の牛で田植えが行われ、この後で霧島神宮独特の田の神舞が、奇面奇衣を身にまとい、昔ながらの方言で約三〇分間舞われる。

△役割▽

先代 現代

神牛 橋元竹盛 橋元忠雄 黒の衣服に牛の面

農夫男 児玉親吉 児玉辰己 緑の袴に紫の上衣、老

顔の面

農夫女 児玉義衛 児玉国良 黄の袴に黄の上衣、老

顔の面

田之神 児玉正良 児玉幸則 頭に菅笠顔に奇面、衣

は奇衣

使用される面 牛の面—宝永三年（一七〇六）七月吉

日 鳥井重行（菱刈町の石工）の銘あり。翁の面—（年代不明）姫おきなの面—明和九年（一七七二）製作と霧島神宮史に記録されている。

田の神舞のことば① この神は霧島神宮の御田ミタの神でございます。今日は旧の二月四日お霧島さあん田植で、こん田の神にも来ち言いやいよなつて今ようようまかい出申した。……神楽

こん田の神さあんお方は、後ん迫ん芋助どんのおごじよんメじよつこわす。こん人が又の大重宝人オモシロウで田の神さあんお霧島さあん田植け行つきやいよなこつなら、コダナシの一枚どまぬつあげんなあちゆつせえ、表はイナマチ、裏はカガイのよなおあんだつしやいもした。こゆ又仕立あつとつなんどちゆうもんな、七日七よさかかつ背ニロコ中なバンフクロなどをぬてつ、裾ノアタラシへんな裾トキごしなんでひん縫ハズカシイつ 恥ハズカシイかしこつごあんどんそこそつと村ササシマつばやせ……神舞

此の田の神様の持ちなされるメシガイはイワレのあるメシガイで、霧島山の奥山の、せせらが谷の湿つ谷シメツタニの、ちんとした小尾筋、立ちちよいもした黒つクロの木キこあし。こ

ゆ木挽ドノどん達の切り倒しゆしやつとんなんどちゆうもんな、太えちゆうまざかゆ持マサカリつせえ、こちらの方からカチツ、カチツ、今度又あちらの方からカチツ、カチツ、カチツ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、如何な如何な迫タシレくんだい思う所へべらベサツ、ほーつ、廻やズグリーつ長さは有いたけ。こゆ今度大工どん達の内ウチがなをくいやつとつなんだ内内。内内又そとがなをくいやつとつなんだ 外そつそつと、うちばやせ……神楽

今かあ先朝早よおき庭ニハん掃ハキ除リどんしたい、草切クサキいけいたつ、馬牛ウマウシどんやしのたい。すいもんな、此の田の神様の持ちなされるメシガイで、上ん粟ノん飯イの処ヘや、払れ除け払れ除け、底ソコん米コメん飯イの処ヘや、突ツっ起し 突ツっ起し、七メシゲ半、又朝寝ナドどんきつかえつ、近所隣リナドいどん行たつ人事ニヤどん、きつかやすわろは、上ん粟ノん飯イの所トコロゆ、払ハキれ寄オモシせ 半メシゲ半、と打ウつばやせ

此の田の神さあんさまを見つたもし、びんたはさつゴ

シ、シロん皮 目はとつが山んツクシロ目、鼻はズドンバブジヨ、口ちやワンロ 胸は鳩胸、尻やチヨボ尻、手あひつかねで足や鴨足、取いどこやこわはん……神楽

田の神舞のことば② 田の神は幾代の神の親なれば、

頭は白うて腰は二重に春田うつ春田うつ夏草苗取る朝より、秋の夕を守る田の神

そもそも神代の昔芦原の中津国に保食神あり、須佐之男命、天照大神の勅を受け、保食神の御許に到り給ふ時に、保食神頭をめぐらして国に向つて則ち、口より飯を出し、海に向つて鰯の広きもの鰯の狭きものを出し、山に向つて鹿の毛の如きものを出し、種々のものを百取の机に供え、御饗け奉仕時に天照大神其の稲をみそなわして、之は蒼生の食うて生くべきものなりと宣いて、天狭名田長田に植え給う。其の秋の垂穂八束穂に打垂れて甚だ以て快し、されば此の田の水口よりゆくが末の末までも隈なく守る我なれば、其の田の稲の穂の長さが一尺八寸ばかり、ブラブラユラユラ、其の稲のことなれば、米



田の神舞

粒の長さが一寸八分ばかりゴロゴロゴロゴロゴロ。この米を飯にたけば、天下万民の命を継ぎ、酒を醸せば泉と湧きて不老不死の薬となり、餅については家の祝のかちんとなる。之を服召す人々は夏の夜にも暑からず冬の夜にも寒からず、此の田の神の皮ふ上の如く、赤ら赤らと色もよし心うれし、心うれし我を知らずや、一丁田までも祝われて耕す春の朝より、納むる秋の夕まで、一粒を万倍と守る我なれば、今日の大神楽天照大神を始めまつり神供を具し御酒を備つ今宵も過ぐる夜中をすくる頃までも、此の田の神をうけせんや、国土の人命を継ぐ田地の元を忘れたかや、さて又之を如何なるものと思うらん、子孫繁昌の子安の樹を一尺二寸に手取つて、中をくぼめて作りたるものなり、朝夕物を食う毎に、豊受之神の恵を思つ世の人、神楽男のる喜びの楽を奏せ、神楽をはやせ。

三 町指定文化財

棒

踊

種別 無形文化財（芸能）

所在地 田口集落・狭名田集落

管理者 田口棒踊保存会 責任者 窪田 勇

狹名田棒踊保存会責任者 児玉盛次

指定日付 昭和四十五年六月二十日

由来 諸説があつて一定し難い

ア 島津藩が士気を鼓舞するため棒術を踊りに仕組んだという説

イ 薩摩独特の示願流じげんりゅうの剣法を舞踊化したものという説

ウ 伊勢神宮の御田植祭の御田植踊りをまねたものという説

昔から御田植祭りや、農耕、祝事、神事の時に奉納されてきた。昔は田口・狹名田のほか伊田・桂内にも伝わっていたが今は次の二集落だけに残っている。

△田口棒踊▽

用具 柄の長さ三〇センチぐらいの鎌かまを持つ者半数、同じく九〇センチぐらいの薙刀なぎなたを持つ者半数。

服装 かすりの単衣を着て、だて帯をしめ、その上に晒さらしの帯を右腰の所で結び三〇センチぐらい垂らす。鉢巻はちまきは鎌を持つ者は前の方をねじり巻きして、両端を両

耳の所に一〇センチほど垂らす。襷たすきをかけ結んだ所に三



棒 踊

色（赤黄白）の布で上方に花をつくり、身長に應じて下げられるだけ下方に垂れる。巻脚絆まききゃはんを巻き草鞋わらじをはく。

踊り手 一五人から三〇人ぐらい。両集落共に後継者の不足に悩んでいる。

△狹名田棒踊▽

用具 全員一六〇（百六十）くらいの棒を持つ
服装その他 前に同じ

棒踊の歌

入場の歌 詣るエーへ 今こそ詣る神の詣出（ものめい）

踊の歌

霧島松は黄金花咲く

焼野のキジは山の背に住む

ヤマタロカニは川の瀬に住む

オセロが山は前は大川

退場の歌

帰るエーへ 今こそ帰る 神の詣出

かけ声

エイエイ、サアサ

のかけ声で勇壮に踊る。

九面 町指定文化財

名称 九面

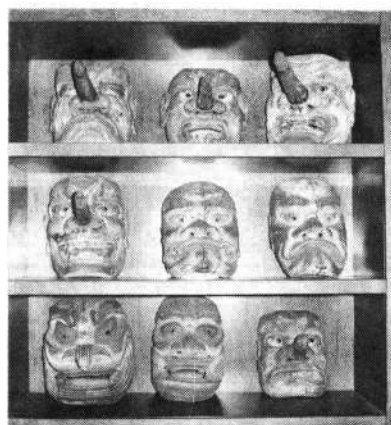
種別 彫刻

所在地 霧島神宮

指定日付 昭和五十三年四月一日

由来 霧島神宮に祈願のため奉納された九つの面である。

主として伎楽面・猿田彦面で、銘は宝永（一七〇六）三年、宝永九年（宝永は八年までしかない）、明和（一七六六）三年、などの古いものがある。銘はすべて制作さ



九面

れた素面の時願文と共に制作者、奉納日付が墨書または彫刻で記されている。奉納後赤白青等で彩色され、色のはげた所に銘が見える。明和三年（一七六六）のものは七月吉日、馬越、海老原源左衛門と刻書してある。馬越は菱刈の地名で、奉納者は当時石工として有名で、各所に石像や木像を残した人といわれている。この特異な九つの面を総称して九面と呼んでいる。

九面信仰 古くから九面は「工面（くめん）」に通じ、工面がよくなるということから商工業者に信仰され、屋号や商品名などに使われている。



場集田七社神社の大イチイガシ



辻堂五輪塔

田の神舞および
神事道具一式 この田の神舞は平成三年三月十五
日、県指定無形民俗文化財に指定さ
れたのでここでは省略する。

辻堂の五輪塔

種別 有形文化財

指定年月日 昭和五十八年十二月二十

日

(このことについては「町内石塔調査参照」)

種別 天然記念物

イチイガシ

所在地 場集田七社神社境内

管理者 宮司 小久保光雄

指定年月日 昭和六十二年三月二十日

由来および内容 樹高約三〇^{メートル}、根回り一四・八^{メートル}、樹
齡不詳、ブナ科の常緑樹で材質は堅く、船の櫓や、農・
工具の柄、やりの柄などに使用される。

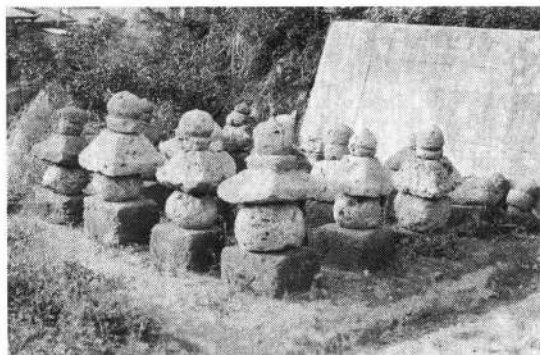
四 その他の文化財

湯之宮の石塔群

所在地 大窪湯之宮

由来 昭和五十八年（一九八三）、治

山対策事業の工事中土中から発掘されたもので、



湯之宮の石塔群

町内石塔調査

室町時代から江戸時代初期にかけて造立されたものとみられ、銘文はない。水輪の数は少なく骨孔を持つものが一個ある。大部分は年代の異なる供養塔であろう。

これについては次の文書があるので記述する。

霧島町内石塔調査報告書（昭和五十七年十二月八日

調査）

南九州古石塔研究会、日本考古学協会員

河野 治雄

目次

- 一 豊後迫石塔群について
 - 二 王子碑について
 - 三 辻堂の五輪塔について
 - 四 稚子石坂の宝篋印塔について
 - 五 総括―所見
- 付 別添資料

一 豊後迫石塔群

1 所在地 霧島町大字大窪豊後迫

2 由緒 三国名勝図会及び霧島町郷土誌によれば戦国時代、豊後の兵が鶴ヶ城に拠つて島津氏と戦つたが城陥り大窪村の王子坂という所で悉く戦死、その坂を豊後坂と呼び、坂と豊後迫との間に豊後塚という小麓がある、という。また、松永氏系図（始良郡蒲生町漆松永守道氏藏）によれば「延元三年（一三三八）三月肝付兼重が橋木城を攻めたとき、兼重に従軍していた松永豊後守政純が討死し、麾下の兵も鶴ヶ城の丑寅（北東）の湿沢地の豊後田及び一里余りの王子坂豊後迫両地で戦死した」とある。おそらくこの石塔群はそれに関係する供養塔群と推測される。

3 現状と所見 現在同地に現存する石塔群は第一回調査の調査報告（昭和五十六年十一月）の如く、何れも高さ

が一層以下七〇〜八〇程程の小型の五輪塔、宝塔群でその数凡そ三〇基程で丘陵状の山腹に半ば埋没した形で、一部は二列にならべられているものである。大部分が五輪塔で、岩質は黒色の凝灰岩で中には骨孔を有するものもある。宝塔は相輪の高さ三〇程程で露盤は低く諸花^{うけぼな}の反^{さか}が著しく九輪の数も二〜三輪しかなく本来の相輪（九輪あるのが正しい）の形から退化しており、時代的にも古いものとは考えにくい。笠の下部に極木を形造り、塔身には首部は見当らない。五輪塔は何れも小型で七〇〜八〇程前後のものが大部分である。中には骨孔を有するものもあり、墓塔として使用されたものもあったと考えられる。

然し、年代を考証する銘文は現在まで発見できていない。今回の調査において地主（所有者）の了解を得られず、埋没せる石塔の正確な調査が出来なかった為に以上のこと以外に不明であった。今後なお正確な調査が必要であろう。なお今回の調査で松永氏系図中、前述せる松永政純の記録中に「田口に侍童討死の地がある」との記事があり、それと関係があるのではないかと推測される石塔（宝篋印塔）を調査したが、豊後迫石塔群とも関係すると考えられるものである（詳細は後述四「稚子石坂の宝篋印塔」を参照）。豊後迫石塔群及び稚子石坂の石塔ともなお正確な調査を必要とするが町の歴史資料として重要なものであると考える。

二 王子碑及びその環境について

- 1 所在地 霧島町永水四九三八徳田盛常氏宅裏山
- 2 由緒 霧島町郷土誌によれば「霧島神宮に関係する貴人の墓」と伝えられているが詳細は不明である。

3 現状 徳田氏宅の裏山にありさきの豊後迫石塔群の南約七〇〜八〇程の地点で国分市入戸に向う旧道に沿う台地上にある。古くから「王子坂」と呼ばれていたのはこの付近から北の豊後迫に向う坂道をさしているのにはあるまいか。昔から東は小林・財部に、西は春山・松永へ、南は入戸・重久に向う旧道の要点と考えられ、明治末期頃まだ街道の茶屋があつたと伝えている（王子碑のある北崖下の人家のある付近）。

現地はこの旧道の崖上にあたる。現在は徳田氏宅の裏の竹林を含む雑木山の一隅にあたり、その部分だけが整地されている。一部神社跡か或は祠堂跡のような部分があり神聖視されている。

「王子碑と呼ばれるものは石祠又は石室（又は石殿）と呼ばれるもの二基と小宝塔一基で、この地の一角に並べられている。少し離れた場所に江戸期の墓碑一基がある。（之は王子碑に関係があるとは思われない、石室二基は、一は高さ八五程、台石の幅五五程程のもので屋根は棟をもった寄棟作りで、その下の祠型^{はしら}は厚さ二五程、幅四〇程、高さ五三程の板石で、その下に幅五五程の台石を設けたものである。祠にあたる板石には平面で座像の随神像（矢大神と考えられる）が半肉彫にされている。

今一のものとは屋根、石室上部の一部がこわれて正確ではないが、右と同様の「寄棟形式の屋根」と考えられる。

祠に当る部分は上方が損失しているもののさきものものと異なり、三〇葺程の奥行をもった祠としておりそこに丸彫状に随神像を彫刻しているのが特徴である。

宝塔は、高さ凡そ一葺の小型で、基礎、塔身（首部がない）、笠（下方に榑木をつくり出す）、相輪から構成されている。相輪は短かく輪も二・三輪しかなく（本来は九輪あるのが正確）時期としては古いものとは考えにくい。

4 考察と所見 右三基のうちどれが「王子碑」といわれるものか明らかでなかった。石造物からいえば小宝塔は、豊後迫に残存する宝塔と類似しており、時代的には大差ない供養塔と考えられるが、構成上からも後世いつの時代にか少し異動があったように感じられる。

石室（石祠・石殿）は明らかに「随神像」であり、古くここに神社、或は祠堂があり、その前、左右に立てられていたものではあるまいか。然し一部は破損してはいるが此種の石造物は珍らしく町においては現在まで唯一つの資料であり貴重なものと考えている。今後は更に「王子碑」と呼ばれるものがどれにあたるのか、或はその由緒について「霧島神宮に關係する貴人」の墓というだけでなく、今少し具体的資料を調査する必要がある。

三 辻堂の五輪塔二基（但し一部欠損）（別添資料3）

1 所在地 霧島町山口辻 森氏宅門脇

2 由緒 全く不明 森氏宅門脇に水車を設備する時地中より掘り出したものと伝えられる石塔（五輪塔）で大小二基がある。

3 現状 (イ)、大なる五輪塔は、空輪、風輪が欠損して無い。火輪、水輪、地輪のみ存在し、現在高さ約一〇〇葺（一〇二葺前後で一見地輪が高く感じられるものであるが）地輪は幅五六葺、高さ三七葺程の横長のものである。

水輪は、中央部の径がおよそ五〇葺ぐらいあり高さ三〇葺前後で扁平である。深さ一二葺程、径二四葺程の骨孔があり、現在も骨粉らしいものが入っている。種子が四方に薬研彫りで施されていることが推定される。字体はやや長めで大きく古式の形式をもっている。然し明確なものは尠（ア弥陀）とゞ（宝生）で卍（不空成就）と思われるものは半分が欠けており、他の一面は欠落して不明であるが、一般的には、（阿闍）と考えられるのでおそらく密教の金剛界四仏を表現したものと推定される。

火輪は一角が崩れているがどしりとしており、軒厚は五・六葺で反はあまりなく、軒先も直線的である。空、風輪は欠損してないが石材は表面がやや荒れている。凝灰岩質で残存する火輪以下の形態から造立された時代は室町時代を下るものでは無からうと推定されるものである。

(ロ) 今一つの小さな五輪塔は、地輪が欠如してないが現在高さはおおよそ七〇葺前後である。岩質は凝灰岩である。

空、風輪はやや形がくずれているが空輪はやや先端がとがった感じである。空、風輪は高さが二〇葎程で柄がある。

火輪は縦長で軒厚はおよそ六葎で軒先の反もなく直線のように見られる。

水輪はやゝたて長の感じで高さ二六葎である。種子はなく骨孔もない。

4 考察及び所見 右二基は、由緒も明確でなく、誰人の供養塔又は墓塔かも不明であり、形態も完形でないが、

共に密教系の塔婆であることは疑いなく、造立時期も室町期を下るものでないことが推定され、霧島町内においても時代的にも古いもので（ただ現在では華林寺跡付近にある性空上人の塔婆は未調査のため比較できない）今後町内の石塔調査の一つの形式基準となると考えられ、重要な石塔資料である。また町内における中世史の究明が十分でない現在、今後中世史を究明してゆく上でも、歴史考古学的に、仏教考古学上からも十分な保護対策がなされるべきものであると考える。

四 稚子石坂の宝篋印塔

1 所在地 霧島町田口チゴ石坂

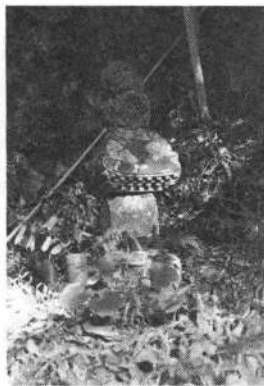
2 由緒 明らかでないが（一）の豊後迫石塔群でも記述したように松永氏系図の中に見られる「田口に侍童討死の地がある」というのと関係があるが如くである。

3 現状 石塔の存在する場所は辻ノ堂の五輪塔の所在する地点から北東へ旧道を神宮へ向う途中の近世の墓地下の山涯に一基立っている。現在は湯源槽設置のため若干移動されたと考えられるが、略々現在地と思われる。

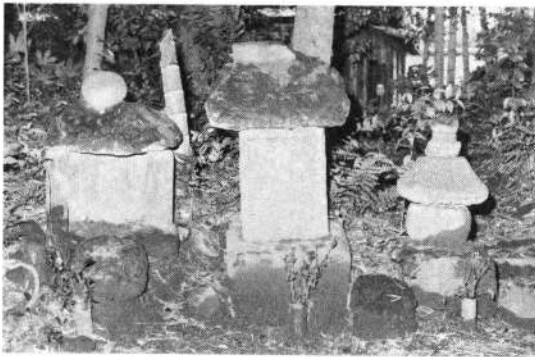
この石塔は相輪を欠き笠部が若干異なるが宝篋印塔と考えてよい。町誌に



豊後迫石塔群



稚子石坂の宝篋印塔



王子碑

始良郡霧島町古石塔所在一覧表

南九州古石塔研究会

No.	種 別	品 名	所在地（地形）	年 代	備考（現状、広さ、指定日など）
1	板 碑	華林寺墓地	始良郡霧島町華林寺墓地	推 定 期 戦 国 期	高さ1m～1m30cmの角塔 3—4本
	月 輪 塔	〃	〃	戦国末～ 江戸初期	数基あり 高さ130cm
	五 輪 塔	〃	〃	江 戸 期	華林寺歴代住職の墓塔
	六地藏塔	〃	〃	〃	その他各種塔婆が残存する が大部分が江戸期に属している
2	五 輪 塔	開 山 塔 （上空上人墓）	華林寺東側台地	文禄2年 10月吉日 （1593）	高さ125cm 火輪欠如 骨孔を有す 「当寺開山性空上人」とある
3	宝篋印塔	チゴ石坂の 供養塔	〃 田口稚子石坂	推 定 期 戦 国 期	高さ70～75cm 相輪欠如
4	五 輪 塔 大小二基	〃の五輪塔 辻堂	田口稚子石坂	不 詳 戦国期以前	巨大空、風輪欠如 現在高100cm～102cm 金剛界四仏を表現
5	宝 塔	豊後迫の石 塔	〃 大窪 ^{ぶんこぞこ} 豊後迫	推 定 期 室 町 期	70cm～80cmの中位の大きさ 20基程現存
	五 輪 塔	〃	〃	〃	小型の五輪塔である 凝灰岩質
6	石殿(祠)	王 子 碑	〃 永水9938 （徳田盛常氏宅地）	〃	二基 1基85cm 1基80cm奥行をもつ
	宝 塔		〃	〃	高さ1m余り 基礎、塔身欠如 首部

調査（内原三郎 河野治雄）

は何の記載もない。現在の高さは七〇〜七五坪で基礎、塔身、笠部から構成されている。基礎は上部の段形はなく反花があり、側面には格狭間はなく中央に位牌型の彫刻を施しそこに「弘法圓童子之霊位」と法名が刻まれている。

「童子」は子供のことであるが一般には十五歳以下の者と考えてよい。塔身は側面に扉形を彫し他面には格狭間を施している。笠部は下部に二段の段形をつくり榿木を設ける。隅飾は退化して小さく軒先に一本の唐草文をつける。上段の段形はなく宝塔の笠のようで宝篋印塔の笠に似つかわしくない姿形である。法名以外に時代を判定する銘文はない。

4 考察と所見 石塔としては異形の宝篋印塔ともいふべきであるが、他に類を見ないことから今後の石塔資料として保存するべきものであろうが伝承を欠くといっても何にもまして、法名が確認されることは極めて重要で、町内の歴史資料としても重視するべきものである。

五 まとめとして

以上今回の調査についてそれぞれの現状を中心として考えてみたが豊後の石塔群の如きは今後の正確な調査が必要であり、(一基ずつ埋没せるものを取り出し、正常な形に整備し銘の有無などを確認しなければ単なる表面の調査でしかない)

辻ノ堂の五輪塔、王子碑、稚子石坂の石塔などももっと何らかの伝承等が残されていないかなどを追求することが

求められよう。調査とはより正確にそのものの実態をとらえることを忘れてはなるまい。

霧島神宮別当寺 霧島神宮より西方約五〇〇坪の位
錫丈院華林寺墓地 置で華林寺跡と霧島川をはさんで

対岸にある。廃仏毀釈令前の華林寺累代の住職の墓地で、昭和五年(一九三〇)の調査によると、文禄二年(一五九三)から文政十年(一八二七)までの、年代の明確なものが九九基一〇四座、年代不明のもの、三一基



華林寺墓地

四九座、無名のもの、三九基三九座、総計一六九基一九二座であったが、洪水などで流され、現在一五〇基ほどの古風な墓碑が残っていて、往時の華林寺の壮大さを物語っている。

霧島を拓^{ひら}き、霧島を守ってきた人々が、ここにも多く眠っている。

性空上人墓碑

霧島神宮の境内旧参道側にあり、慶長年間につくられたものである。墓銘に「性空上人は京師大中大夫橘善根一子にして、天台の宗徒で村上天皇の天曆年間霧島山にこもり修道、御鉢の西麓瀬多尾越に社殿と別当寺を建立、後播州書写山を開きたる地に寂」と刻まれている。

兼慶上人墓碑

霧島神宮の西方約二〇〇㍎の華林寺跡にあり、碑文に「上人は橘氏真言宗の宗徒にして、柏原周防守公貴の第三子なり。島津第十二代吉貴公の命を奉じ、霧島に來り予峯に登りて持念し、性空の遷祀せる即念の社地を求得社殿及別当寺を建立往古の壮麗に復せり。時第百三代後土御門天皇の文明十六年二千百四十四年なり」と記されている。

田の神

これまで霧島町内には、田の神は無いと思われていたが、最近猪子石在住の寺岡慶二、宮ノ内正治両氏によって発見された。

・所在地 霧島神宮旧参道下方、蓬泉館ソーメン流しの斜奥、現況畑の一隅

・土地の所有者、吉松ヨシエ氏（旅館蓬泉館経営）
・由来 吉松氏の祖父の代に、現在の田の神の下方国道との間の田んぼ（約三反歩）を拓いた時に祭った。百余年前。それから永い間、祠だけあって御神体は無かったが、香花や供物はしてきた。いま祭っている田の神像は吉松ヨシエ氏の母が一四、五年前に知人からもらってきたものである。現在、吉松ヨシエ氏が耕作している。

・田の神像 高さ一五センチ、型にセメントを流しこんだものである。右手にしゃもじを持ち、笠を被った標準的な田の神像である。



旧参道下の田の神

・祠 方形の祠で、高さ八〇センチぐらい、台座と笠石は石を刻んだもので、墓石かなにかの古物を利用したものである。左右と後方の壁は小石をセメントで固めたもので三〇センチぐらいである。

第二節 史 跡

一 島田民部左衛門の水路掘削の跡

元禄時代（一六八八～一七〇九）、東山天皇將軍綱吉の時代に島津藩の春山野牧場の守に島田民部左衛門という人がいた。重久の人で当時の農家のくらしをよく知っていた。重久・松永方面は水田はあるが、これは藩主のものであって私有は許されず、門割制度によって強制的に耕作せられ、収穫の大部は上納として取り上げられ、わずかの飯米が残るだけであった。そこで、百姓は食うためには畑作の甘藷・粟・蕎麦などに頼らなければならなかった。しかし重久・松永方面には畑がわずかしかなかった。春山牧場は五〇〇町歩（五〇〇ヘクタール）という広い面積であった。

そこに目をつけた島田民部は藩庁に牧場の移転を再三申し入れたが、いっこうに許可されない。一計を案じた民部は、春山野に水を引いて水田にするという計画を立

て実行に移した。まず、狩川の水をカアヅマイ（狩集）今の農協本所付近）でせき止めてトンネルを掘り、その水を春山に引くという計画である。なお、水が不足する場合は、永池から引くという考えももっていた。民部は、人夫を督励して堤防工事・トンネル工事を急がせた。一方、小鹿野滝に魚道を設けて、アユを霧島川に上らせる計画を立て、石工を集めて工事に着手した。

このことが藩主の耳に入ると、藩主は驚いて島田民部は気が狂ったのではないかと思ひ、さっそく工事の中止を命じ牧場の移転も約束した。そして、この工事に対するお咎めはないばかりか、永年の勤めの褒賞として、役宅から四方に矢を放ち矢の届いた範囲の土地を与えて隠居を申し渡された。民部はその後、楽しく余生を過ごしたという。

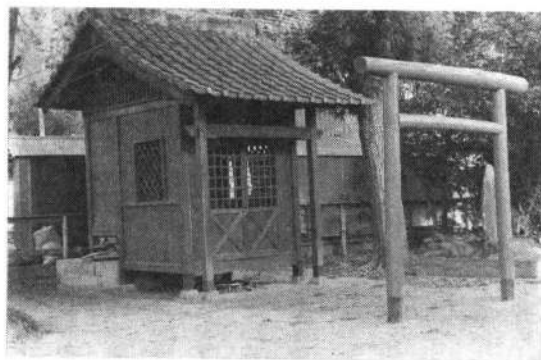
豊後迫の王子坂の県道のそばに何か所か横穴が残っていたのはこの時、水路を通すために掘ったものであったが、昭和三十年代の県道改修の際に取り壊され、今はほとんど残っていない。大窪の霧島スタンドの上方山中にトンネルを掘りかけた跡が少し残っている。このことがあった後で村人が民部に、「おはんな、ほんのこて（ほ

んとくに）春山に水があがると、かんげちよったとや（考えていたのか）」とたずねると、民部は笑って、「わいなんで（お前たちに）粟んめしゅ（粟飯を）食わすともつよ（食わせようと思つてよ）」と答えたという。重久・春山には今も島田姓の家が多いが、民部の墓はどこにも残っていない。

二 待世神社跡

大字田口の待世
（松瀬とも書く）

の現在霧島中学校敷地内にあり、大正四年村人によって建てられた石碑がある。文暦元年（二三四）十二月、霧島山噴火のため瀬多尾越にあった神宮および別当寺が焼失し



待世神社跡

たので、ご神体をこの地に移し仮宮を建てて祭った。その後二五〇年間、この地に鎮座されていたが、後土御門天皇の文明十六年真言宗の僧兼慶が島津忠昌の命を受け、現在の神宮の地に社殿および別当寺を建立して遷宮した。このあとに建てられた待世神社は、明治四十四年、田口の天子神社に合祀された。

三 牧場の跡

天孫降臨の時、天班駒の子孫である良馬を多くつれてきたが、この地に繁殖している在来馬に駿馬しゅんめの多いのを見られ、霧島山校野の校原という所に、神牧をつくって養った。しかし、寒気が厳しく馬の発育が悪かったので、牧を改めて春山原野に移したと伝えられる。その後、佐野の牧場もあったが、天暦年間の霧島大噴火の時、神牧が焼けて、生き残った馬が、田口の待世河原、川北の馬出原に逃げて群居していたのを、重久の馬場宥性院という人が、その馬を田の中に追い集めた。後年この地を馬集田と呼ぶようになった。さらにそこから、馬立原に追い登らせ、御牧守護神に花を奉って祈念した。

それからこの地を花立原と呼ぶようになる。また一方、宥性院は馬を春山野に追いこみ、公儀へ届け出たという。後、島津氏領となった際、元禄十六年東(一七〇三)涉に牧場をうつした。春山野に牧があった時、オオカミが出て放馬を食い殺すので、大根占の百姓平蔵に、入水で一週間、オオカミ退治の祈禱とうをしてもらったという伝えもある。

第三節 伝説・民話

霧島山は今でこそ観光地として、交通の便もよく、山の奥までくまなく訪ね歩くこともできるのであるが、昔は深山幽谷、うっそうと茂る原始林。山また山は八重に重なり雲高くそびえる峰には靈気さえ感じられ、人に近寄り難く思わせたことであろう。それが神話とつけ合せて、いろいろの伝説が伝えられてきた。その中から次の話を記してみよう。

一 神仙境

霧島山中に神仙境があるとは古くからの言い伝えである。奇異のことは一度ならず、山中で異相の老翁に会ったり、あるいは深山幽谷で不思議な歌舞音曲が聞こえるので近寄って見ると、異様の風態をした人々が歌舞をしているのを見届けたというし、また山中で妙齡の麗人がたたずんでいるのを見たともいい、山頂雲間近く鶏の鳴

き声を聞いた者もあった。あるいは深山の内に掃除の跡があり、清浄で点塵がないので里人の知らない集落でもありはしないかと訪ねてみるが、別に変わった所がない。または橘柚の果実の熟した一軒家を見つけて、あまりよく茂っているので翌日訪ねて行つて見ると影も形もない。呼んで答えるものはただこだまのみであったという。これらはすべて神仙の所為であるといえよう。

千里ヶ滝の下の所に大きな岩穴があり、人が住まったらしい形跡はあるが、その人物を見ることはできなかったという。

二 仙人

橘南谿（霧島山に関する詩歌の項参照）は諸国巡歴の途中霧島に遊び、名山霧島の眺めに感動した。ちょうど春三月霞に包まれる季節であった。その時霧島の山中に仙人が居ることを耳にした。仙人は雲居うんこ官蔵かんざうといい、年は二〇〇歳を超えているだろうという。この仙人はもとは武士で平瀬甚兵衛といった。出世できないことに不満を持ち、世を捨てて山に隠れた。数十年にしておいの得

納武左衛門が、霧島の山中に居ることを風の便りに聞いて会いに行った。やっと探し当てた甚兵衛は、絵に描いた仙人のように髪やひげは伸びるまま、身には木の葉の着物を着ていた。「おじ上どうか帰って来てください」というと、仙人は「いやいや帰ることなどもってのほか、わしは仙術の修行も成就し、名も雲居官蔵と改めた仙人であるぞ、仙人は人間に出会うことは修行の妨げ、二度と来るな」と言っておき消すように姿は消えた。

土地の人は飛行自在で数々の仙術を使う仙人を尊敬していた。橋南谿も仙人に会いたいと思ったが、その影も姿も見いだすことはできなかった。しかし、南谿は医者であったので長寿の秘けつとして次のように教えている。「もし長生を得んと欲せば、深山に入り、飲食を絶ち思慮を止め、淫事を断じ、衣服を除きて、性命を奪う時は、下凡の人といえども二三百歳の寿を保つべし」。

三 霧島の七不思議

霧島神宮を中心とした地域に、いろいろな不思議な現象が起こるといわれる。村人はこれを七不思議といつて

いる。

蒔かずの種 霧島の山中や、竹やぶなどに、自然の陸稲が生えることがあるという。これを蒔^まかず種子という。これは天孫降臨の時、高天原からもってきた種子が残っていて、山の中で自然に育ったものだと言ひ伝えられている。

文字岩 霧島神宮から西の方に二結ほど離れた山の中にある。大きさ一〇立方呎ぐらいの岩で、真ん中から割れて一〇センチぐらいの透き間ができている。のぞくと梵字が彫られているのが見える。人間の力では動かせない。どうして文字が刻まれたのか、不思議という。

亀石 神宮の旧参道、坂の真ん中にカメにそっくりの自然石と、近くにカブトによく似た自然石がある。村人は亀石坂と呼んでいる。

風穴 旧参道にあり、岩穴からいつも風が吹きでているのが不思議である。ごく微弱な気流である。岩の上に石像の観音が安置されていたという。現在は風はでえないが霧島山中ではこれに似た現象はあちこちにみられる。

御手洗川 みでしがわ 霧島神宮の西方二五〇^〇ばばかり下の岩穴か



両 度 川

らわき出る小川で、十一月から四月ごろまでは、ほとんどかたえているが、五月ごろから非常な勢いで大量の水がわき出る。この時は魚も一緒にわいてくるといわれる。水の質は清明で、天孫降臨の際、高天原から持ってきた真名井の水が混じっていると伝えられている。

両度川 霧島神宮の西方三〇〇坪の所に、毎年六月ごろから流れ出し、八、九月ごろかれる。はじめ一〇日も

流れたかと思う

と、全く乾いて

しまう。数日た

つとまた流れ出

す、というので

ある。川は短く

小さいものであ

るが、水は極め

て清く量も多

い。下流は滝に

なって霧島川に

落ち込む。毎年

同じ時期にきま

って二度流れるというので両度川という名がつけられたという。

夜中の神楽 かぐら 神楽とは神前で行う音楽のことである。

霧島神宮が昔、いまの社殿に遷宮の時、深夜に社殿の奥で神楽が高く鳴りひびいた。その時は神官・僧侶のほか一般の人まで聞いた。今でも時々深夜に、かすかに神楽のような物音がするという。真偽のほどはわからないものの、久しい間、七不思議の一つに数えられている。

四 白鳥山と日本武尊 やまとたけるのみこと

宮崎県えびの高原ふもとに白鳥神社がある。旧記によると、昔、釈性空この山に来て修行すること久し。ある時、一人の老翁が現れ、性空に言うには「我は日本武尊なり。白鳥と化してこの山に来て住むこと久し」と。そこで性空は山の中腹に靈廟を建てこれを祭った。これを白鳥山というようになった。日本武尊が東西に賊を討って偉功を残したから、伊勢の能褒野 のほの で亡くなられた。天皇は大いに悲しまれて、家来に命じて能褒野に葬られた。

尊は魂は白鳥になって大和の国に飛び去った。陵墓を開いてみると棺の中は衣のみが残っていた。大和の琴弾原に白鳥がとまっていたので、そこに陵墓を造った。また白鳥は河内の国に飛んでいったので、そこにまた陵墓を造った。ところが白鳥は三たび飛び立って行方がわからなくなってしまった。性空上人の修練中に白鳥に化した日本武尊は、ここに来て久しい、と言ったのである。この話はいささかとつびであるが、いかにも神話の国らしい伝説である。

五 竜の鱗

霧島東神社に残る話である。昔この社の別当寺に東光坊というのがあった。そこに白色大小の竜の鱗うろこがあったという。イチヨウの葉ぐらいの大きさである。それは御池の渚なぎさへ浮かび上がったものだという。村上天皇の御代に、性空上人がこの池のほとりで修行をしていると、池から神竜が現れて、上人に宝珠を献じた。その珠を銅器に入れて大切にしまっておいた。すると霧島噴火の時、珠はひとりでに池に飛び込んでしまった。

それから何百年、御池には竜がいるといううわさが高まった。ある日肝っ玉の太い若者たちが竜がいるかどうかを確かめに裸に帯をしめ、刀をさして池に入った。池の中はどまできると、大きな松の幹が浮かんでいたの、泳ぎつかれからだを松の幹によせて休み、ふと水底を見ると大きな鏡のようなものが光っていた。「竜の目玉だ」一人がさげんだ。皆ほうほうのいで逃げ帰った。松の幹とばかり思ったのは、竜の胴であったという。

六 五色の蛇

霧島の山ろく、霞が岡に五色の蛇がいたといわれ、大きな岩のすき間に住んでいて、「六所権現のお使い」と言い伝えられた。霧島の山で修行する行者は、この蛇を見かけると、大きな功德になるといわれた。

七 狭名田の跡

日本最初の水田の跡と言いい伝えられている。島津斉彬

のころ、この地に田の神が建立されたが、大正四年、村人たちは、「狭名田の跡」という碑を建てた。昭和四年、霧島神宮の神田として永く保存されることになったが、同二十一年の農地法により没収、現在は民有地になっている。碑文は次のとおりである。

皇孫日子穗々手見尊生座時に神吾田庶葺津比売地を卜定め狭名田と号け其の田の稲を以て天の甜酒を醸し淳田の稲を以て飯となし、新嘗し給いし所なりと伝う。

大正四年四月 (大久保中将選文揮毫)

この狭名田の跡は大字田口にあり、付近一帯を狭名田の長田ながのという。神代の昔、ここに初めて稲をまき、彦火火出見尊がお生まれになった時、その新穀をとり祝ったという。また、母乳が足りなかったので、甘酒を造って育てられたともいわれている。この初めて水稻をまいた長田の伝説として次のようなものがある。天照大神がある時、豊受の神の徳を聞き、天熊人を遣わし給うた。

天熊人が行ってみると豊受神はすでに死んでいた。そして、豊受神の体は化して牛馬となっていた。頭の上には粟を生じ、眉の上には蚕を生じ、眼中には稗ひえを生じ、腹中には稲を生じ、陰部には大豆・小豆・麦を生じてい



狭名田の長田の跡

し、稲を水田の種とした。そして、天邑君を定め、稲の種を初めて天の狭名田の長田に植えさせられたところ、たいへんみのりが良かったという。これが、この狭名田であるというのである。この話は、素戔鳴尊すさのひりこが出雲へ下る途中、大宜都姫と出会い、大宜都姫が鼻や口やおしりから出した食物をごちそうしようとしたのを怒り、姫を殺したところ、姫の頭から蚕、目から稲、耳から粟、鼻

た。天熊人は、ことごとくこれを持ち去り大神にささげた。大神はたいそう喜んで「この美しい薗おのみのりを見なさい。食べて生活するのにいいぞ」と仰せられた。そこで粟・稗・麦・豆を陸田の種と

から小豆、ももから麦、おしりから大豆が出たのでこれをとって、天照大神にさし上げたという神話とよく似ている。

八 天逆矛 あまのさかぼこ

高千穂峯の山頂にある。その由来については、『諸山岳輯録』には、「皇孫天降のとき、霧海を見下し給うに浮きたる島の如く見ゆるものあるを、天瓊矛をもつてかき採り、そこに天降あり。その矛を逆さまに樹て給う。

是を天逆矛と号す。」とあり、また、「三国名勝図会」に

は、「此の矛は大己貴命おのむすひの天孫瓊々杵尊に授け給ひし広矛なり。瓊々杵尊の高千穂に天降りするや、誓ひつ前導して行く行く叱す。故に稜威道わけ道わけとあり、後世天子の行幸の如し。既にして邦内服従し天下無事なり。

よって此の矛を山上に樹て万世の下に鎮標す。戒厳してまた干戈を用いること無きを示すが如し。天の逆矛、逆は、いやさか昇るというが如く逆矛の儀にてなお幸矛といわん如し。『天皇即位之日執柄之臣振茂矛』侍立君前。』その霊矛は、震火のため焼き折らる。是れ、何れ

の年なるを詳らかにすることなし。いまの矛峯（高千穂）には、その残幹を旧に仍って樹つ。其の長さ六尺、周り一尺ばかり、矛刃に近きところ、長鼻大眼の画像を左右に起こし成す。鑢と幹と共に銅貨に似たれど何金なるか定め難し。其の状、古奇にして実に神代の遺宝なり。」とだいたい詳しく書いてあるが、『大日本地名辞典』には、「此の矛は仏家の独鈷杵の類にして往時社僧が、神代の霊矛といつわり建てしこと論なし。」と、神代伝来説を一しゅうしている説もないではない。そこへいくと、『西遊記』などには「神代の旧物なりや、その程は知らずといえども、実に三百年、五百年くらいの近きものとは見えず、天下の奇品なり。もし銘なども有るやと精しく見しかど見えず。」と、すいぶん穩健である。また、次のような話もある。天明初年（一七八〇年代）のこと、鹿児島の人、池田正右衛門という者があった。模造の矛を作つて、これを本当の矛の傍に建てた。すると、その年から不思議が起こつた。山は噴煙につつまれて恐ろしい地鳴りがする。続いて商人は得体の知れない病氣になって死んでしまい、その子は氣が狂い、刀を抜いて父の位はいをずたずたに切ってしまったので、あまりの恐ろしさに

家人は人を派して山上の模造品を取り除いたという。

九 関の坂

昔から夕暮の関があったから、このように呼ばれるといわれていたが、「三国名勝図会」の記事によると、夕暮の関は松永にあったと記されている。もちろん、関の坂にも、ある時代に関所があったろうことは想像される。霧島―国分間の道が、関の坂道、小鹿野の上を通る道、かずら坂道、いずれもある時期に本道となっているし、小林に通ずる主要道路あるいは間道の一つとして関所があったろうことは考えられる。また関の坂の入戸の川上に関の地藏尊が立っていたのを廃仏の時、首をはねて滝下に落としてしまって、首無地藏があったという。

一〇 天狗堂

霧島東神社の社務所を名づけていわれたという。昔、性空上人がここに来て修行を励んでいたと、当山の守護神「大津坊」という天狗てんぐが現れて一挺の斧を与えた。そ

れが今でも社宝の一つとなって蔵され、「天狗の斧」といっているそうである。今の社務所が新築された当座は、よく真夜中に天井などで大きな音がしたそうである。これは、きっと天狗のしわざに違いないと、だれいふことなく天狗堂と名がついたという。近ごろではそういうことはない。社務所の傍らに天狗をお祭りしているという小さな祠が立っている。

一一 不思議の井

天狗の祠の傍らにある。清冷な泉であった。昔、性空上人が加持水とした由緒ある水だそうだ。この水は、もし女人の影を映すると必ずばったりとわかなくなってしまうたそうである。けれどもくみとって大病人に飲ませると効験神のごとくであったという。

一二 豊後迫

大字大窪にある。戦国時代、豊後国（現大分県）大友氏の軍が三州の地に攻め入り、松永の湍瀬山ふせやまにこもって

襲山城を攻めた。言い伝えによると、この豊後勢の勢ぞろいした地を豊後迫といい、豊後勢苦戦の地を豊後田、豊後勢の大將の墓を豊後塚というようになったという。

この豊後兵は、襲山城を東方王子原から攻めるため小鹿野を回って大窪へ出て勢ぞろいをしたという。

一三 大浪池おきなみのいけ

深い深い林の、めったに日も入らない神々しささえも感じさせる林の奥に一つの池があった。蒼い水あおがなみなみと漂って底知れぬ池の岸辺には、丈なすアシの葉が茂りあっている。木の間を漏れるわずかな光が、じめじめした池の辺に幾百年ものあいだ生い茂っているコケ類を不気味に照らしていた。

今は昔、この池のふもとの村に庄屋があった。村一番の金持ちで、何一つ不足はなかったが、ただ一つこの年になるまで子宝のないのが寂しい限りであった。そこで年寄った夫婦は相談してお山の神様へお願をかけた。とりわけ老妻はどうかして子供がほしい。せめて女の子でもよいと、夜ごとに人の寝静まったころただ一人、昼で

さえ恐ろしい林の奥へ願をかけに行った。雨の夜も、風の夜半も、一度だって怠らず、一心を貫いた。とうとう満願の日はきた。

まもなく、妻はみごもり、やがて美しい女の子を産んだ。夫婦は目の中に入れても痛くないほど、蝶もようや花よとかわいがって育てた。その名もやさしくお浪とつけた。お浪は、きりょうも心も清らかに美しく、だれよりも人にかわいがられ、日毎にその美しさを増していった。お浪のそなえるおかし難い気品に、村の人々は女神様の生まれがわりだとさえ語り合った。しとやかなお浪の動作は、まるで姫君のようであった。

ちょうどお浪の十八の春がきた。美しい氣立ての優しいこの娘には、諸々方々から結婚の申し込みがあった。庄屋夫婦は、大騒ぎしてたくさんの申し込み者の中から、最も立派なおむこさんを選ぶことに心を砕いた。ところが肝心のお浪はどうしたとか、結婚の話を両親から聞かされるごとに、ただ寂しくほほえむばかりであった。すべての縁談はとりつくしまもなかった。すなおだったお浪がどうしてこのように、……庄屋夫婦の嘆きは一つおりではなかった。両親の心づかいを見るにつけ、お浪

も泣くよりほかに手にほどこす術もなかった。お浪はとうとう寂しい沈んだ乙女となってしまった。明けても暮れても、奥の一室にとじこもったまま泣いてばかりであった。老夫婦がどんなになぐさめても……。

そして、とうとう娘は病氣になってしまった。庄屋夫婦は狂気のようになって医者よ薬よとさわいだけれども、効果はなかった。美しかったはおの肉は落ちて見られかなくなつた。老夫婦はどうしてよいかわからず、ただ娘のそばにおどおどしていた。

ある夜、それは霧島の森林に月がこうこうと照っている夜更けであった。

「山の奥へ行ってみたい」

と、病人は言い出した。かわいい娘の願い……。どんなことでも聞き入れぬことのなかった庄屋も、この真夜中に山奥へなんて、どうしてもそんなことを言うのか、思いとどまるように言い聞かせた。けれどもお浪はどうしても聞き入れなかった。しばらくして黒い影が二つ山を登った。青白い月光を浴びながら二人はどこまでも登って行った。かすかな足音が、極度に物寂しい林の奥をさまよった後、とうとう池のほとりに来た。

と、突如お浪の瞳は輝いた。父親の手を振り切るが早い、ザンブとばかり池の中に飛びこんだ。あわれ、後にはかすかに小波が残るばかり……。青黒い水は何事もなかったかのようにもとの静寂にもどった。ハッと我に帰った庄屋は娘のいないのに気がついた。今、たった今、目の前に起こったことは、それは娘のしたことであったのか。庄屋は気が狂った。

「お浪ー、お浪ー」

悲痛な叫び声が林にこだまするのみであった。庄屋は夜の明けるまで、太陽の上がるまで池のほとりを狂い歩いた。そして、叫び通した。が、お浪はもう二度とその美しい姿を見せなかった。

お浪はこの池に棲む竜王の化身であった。庄屋夫婦の熱心な願いに感じて、しばらくの間庄屋の娘となっていたのであった。それから、この池を「お浪の池」と呼んだ。それがいつのまにか「大浪の池」となってしまったのである。〔伝説の鹿兒島〕を現代表記にして引用。

第八章 郷土を興した人々（敬称略）

椎原喜之丞

（待世）略歴は第三編第五章第五節一参照。

（一）田口小学教員 明治十一年（一八七八）二月、田口

山之上四一番戸、中島佐兵衛の家屋を借り農工商の区別なく子第三十余人を集め読書、習字の教授をなす。名付けて学校という。椎原喜之丞・宮田彦作・入来嘉兵衛の諸氏一週間交代にて教授をなす（「田口小学沿革史」）。

（二）農業の改良振興 大農家の主人として農業の振興に努め、また種牡馬を飼育し仔馬の生産に寄与した。

（三）小鹿野魚道開設に努力（第五章第三節五参照）。

（四）学務委員（明治十二年ころから同二十九年ころまで）、村会議員（明治二十三年から三十年まで）。

（五）記録を遺した。

「鎮西鎮台第二分営にて之を造る」（第五章第一節

三参照）。

「萬日記帳」六冊（第五章第五節一参照）。

その他の記録を残しており、これらは郷土史研究の貴重な資料となっている。

宮田彦市（待世）

（一）明治六年（一八七三）～昭和二十五年（一九五〇）。

（二）大窪小学准訓導 明治二十八年（「大窪小学沿革史」）。

（三）大田小学校准訓導 明治二十九年七月から同三十五年十月まで（「大田小学校沿革史」）。

（四）村会議員、学務委員 大正十年ころから昭和五年ころまで。

入来嘉兵衛（豊後迫）（第五章第一節四参照）

（一） 西南役に従軍。

（二） 田口小学教員（椎原喜之丞の項参照）。

（三） 村会議員 明治二十三年から同三十四年まで。

川畑虎熊（新地）

明治二十七年（一八九四）、鹿児島尋常師範学校卒業。

明治三十二年（一八九九）から大田小学校長約二年。その後約八年間台湾で教職に従事。

明治四十二年（一九〇九）から大正十年（一九二一）まで大田小学校長（「大田小学校沿革史」）。

校長在任中から子弟の教育はもちろん、社会教育、産業振興など地区発展のためあらゆる努力を尽くした。

（一） 村当局と協力して毎年農産物、農具（主に薬製品）の品評会開催。

（二） 遺跡の顕彰 待世神社の跡・狭名田の跡の石碑建立。

（三） 小鹿野魚道開設。

退職後大正十四年から昭和十二年まで村会議員、その

間の事績次のとおり。

一 横岳開田 大正十二年、窪田甚太郎・吉松武志らと

協力して横岳水利組合を設立、地区民の説得、補助金の獲得などあらゆる困難を克服して、昭和十三年約四〇畝の開田を成し遂げた。

二 霧島神宮駅・北永野田駅の誘致 国分都城間の鉄道

開設に当たっては関係町村において路線誘致の争いが起こったが川畑氏らの努力により霧島財部線に決定、町内に二つの駅が設置された。

三 村名改称 昭和九年、霧島山がわが国最初の国立公

園に指定されたのを機に、川畑氏らの首唱の下に村名改称の議が起り、霧島山周辺の町村の反対を押し切って昭和十年、東襲山村を霧島村と改めることに決定した。

四 道案内 氏は若いころから霧島山を愛し、登山回数

は数知れず、地形・道路・生物など知り尽くしていたので秩父宮・高松宮・伏見宮、その他皇族方の登山の案内役を務め、その自筆の記録は巻き物として大切に保存されている。

吉松武志 (霧島)

一 温泉開発 神宮付近に温泉がないことを嘆いて湯之野の泉源から湯を引こうと考えたが、そのころは導管がなかったため、松の丸太を二つ割りにしてくり抜き、上下二枚を合わせて導管を作り、湯を通す方法を考案して成功した。珍しい工法であったから方々から視察人が来た。これによって昭和五年、浴場を開き多くの人が温泉の恩恵に浴した。今の蓬泉館の前身である。

二 郡会議員、村会議員（大正六年から昭和十七年まで）、産業組合長。

三 小鹿野魚道開設、横岳開田（川畑虎熊の項参照）。

窪田甚太郎 (田口)

一 小鹿野魚道開設、横岳開田（川畑虎熊の項参照）。

二 村会議員（大正六年から昭和四年まで）。

本田矢太郎 (入水)

入水地区の開田に貢献 明治十二年、二六歳のころか

ら明治三十二年、四三歳のころまで独力で入水地区の開田に努め約三・五畝の水田を開いた。

木野田喜右衛門 (入水)

池田矢八

大正末期から昭和初期にかけては農村不況のために離農する者も多かった。これを打開しようと、高冷地園芸作物に着目し、当時の村農業技手池田矢八の指導を受け、刈脇定雄・小川武熊・馬場新二・刈脇定吉らと協力して、結球白菜・美濃早稲大根の栽培を普及し、水稻収入に劣らない高収入をあげるようになった。後に入水園芸組合を結成し、スイカ・キャベツなどを栽培し県下名声を高めた。

木野田国盛 (入水)

職業軍人であったが、復員後、入水原に約一畝の柿園きを造成し、昭和五十五年から観光農園として柿狩りをはじめ多くの客を集めている。なお、柿園の中にミヨウガを植え、航空便で東京に出荷してキロ当たり八〇〇〇円の収入をあげたこともあった。

川畑茂一郎（新地）

明治二十八年ころ遠く静岡まで出かけ、茶の栽培、製法を学び、良品種の種子を持ち帰り、川北馬揃原まざはらに二畝余の茶園を造成、本町茶業振興の先駆をなした。

上松瀬栄二（堀之内）

大正七年、田口に製茶工場を設立。

木野田八郎左衛門（北永野田）

昭和十二年ごろ北永野田駅前にあった茶工場を買収して北永野田に移し、茶業振興に尽くした。

○、島津氏の牧場（入水牧内）が閉鎖されてから馬の飼育も衰えていった。その後、川北・田口方面に熱心な人たちがいて再び畜産が盛んになった。宮内三次郎（川北）は一七〇頭、椎原八郎左衛門（待世）・川畑茂一郎（新地）らはそれぞれ七〇頭ぐらいの馬を飼育していた。

明治三十一年、細山田重安（重久）・川畑茂一郎（新地）・新村権之丞の三人は遠く関東・東北地方の産馬地

を視察して帰り、その後自費で優良種馬を購入し産馬振興に尽くした。

吉村熊助

明治四十年（一九〇七）〜昭和五十二年（一九七七）。

田口野辺田に生まれ、小学校卒業後家計を助けるため、町内の農家に年期奉公をしていたが、昭和十三年に製茶業を始め、同三十四年、田口梅北の現在地に工場を移し、幾多の難関を経て同四十六年、吉村工業株式会社を設立、社長となり、製材・土木・建材など手広く事業を経営するようになった。

叙勲受章者名

椎原誠治（待世） 昭和五十一年春、職域功労（医療・福祉）により紺綬褒章、同五十九年春、勲五等瑞宝章を受く。

竹田岳夫（梅北） 昭和五十四年春、自治功労により勲五等瑞宝章を受く。

刈脇定雄（入水） 昭和五十七年春、自治功労により勲六等单光旭日章を受く。

岡元兼志（霧島）昭和六十年春、自治功勞により勲五等双光旭日章を受く。

松元熊義（祓谷）昭和六十年春、職域功勞（警察）により勲六等单光旭日章を受く。

新村 正（田口）昭和六十一年春、自治功勞により勲六等单光旭日章を受く。

内村義幸（伊田）昭和六十一年秋、自治功勞により勲五等双光旭日章を受く。

新村 俊（川北）昭和六十二年春、消防功勞により藍綬褒章を受く。

竹下 忍（狭名田）昭和六十二年春、職域功勞（畜産振興）により勲五等瑞宝章を受く。

小田原康夫（遠見松）平成元年三月、死亡叙勲により正六位勲五等瑞宝章を受く。

中馬親盛（湯之宮）平成二年春、自治功勞により勲五等瑞宝章を受く。

小里貞利（梅北）

昭和五年（一九三〇）八月十七日生まれる。

同二十五年 梅之木に茶工場を設立。

同三十二年四月 霧島町教育委員。

同三十四年 県議会議員当選。以後連続六回当選。この間、同五十年、県議会議長に就任した。同五十四年 衆議員議員当選、以後連続五回当選、この間、同五十九年に運輸政務次官に就任、平成二年（一九九〇）には自民党政務局長、同年、自民党鹿児島連会長となり労働大臣に就任した。